昭和53年度

後城遺跡発掘調査報告書

秋田地所㈲
秋田市教育委員会

序

秋田市寺内後城地域は、かつてから郷土史家の間で湊安東氏ゆかりの地とも言われております。

地形的にも日本海を見下す高台にあり、土崎および秋田市街地にも近距離にあるため、住宅地としては最適な場所でもあります。

ところが私共が宅地造成を計画した段階で、秋田市教育委員会より、当地は遺物包蔵地であるから遺跡の試掘調査が必要であるという申し出があり、昭和52年12月に秋田城跡発掘調査事務所によって分布調査の運びとなったわけであります。

その結果、造成予定地のほぼ全域にわたって大量の陶磁器あるいは柱跡などが発見されたことから、この度の発掘調査の実施となった次第です。造成工事を中断して実施された約9ヶ月間の発掘調査によって井戸、住居、建物跡等貴重な文化遺産が数多く発見されました。聞くところによると豊富な出土物と建物跡等は東北地方のみならず、全国的にも貴重な遺跡ということであります。

市民への快適な宅地供給を使命としております私共が、千数百年前から育まれてきた往時の集落跡に近代的な区画で構成された宅地を造成することができるのも何かの因縁でありましょう。

このように貴重なかつ大規模な遺跡を、私共独自の予算で調査し、数多くの遺物の発掘そして記録保存の一端を担うことができ、いまその結果を冊子としてまとめ上げることができましたことは、文化財を愛する一市民として大きな喜びであります。

ここに後城遺跡発掘調査報告書を刊行し、秋田の郷土史研究の発展を希望するとともに、発掘調査にご協力頂いた秋田市教育委員会、秋田城跡発掘調査事務所並びに関係各位に対しまして深く敬意を表し感謝申しあげる次第であります。

昭和56年3月

有限会社 秋田地所

社長 長岐幸一

序

近年の急速な市街化地域拡大とともに、宅地造成等工事による遺跡破壊が各所で行われている。

この度発掘調査を実施した後城遺跡は、中世から港町として栄えた土崎の南方に位置し、さらに秋田市街にも近距離にあり、宅地としては一等地と言えるであろう。

市では、地元不動産会社より宅地造成計画が提示された段階で当地を遺跡と認識し、緊急調査に備うべく分布調査、および試掘調査を開始した。その結果、造成予定地一帯にわたって遺構、遺物の存在が確認されたのである。

今回の調査は、民間企業が原因者となる緊急調査としては県内で二例目に数えられるものであるが、不動産会社の全面的な協力が得られ、順調に調査を完了することができたことは本当に幸いであった。

発掘調査の結果、秋田城と関連の深い8世紀から9世紀の集落跡と、全国的にも調査例が少ない中世の集落跡、そして多量の陶磁器類が発見されたのである。これらの発掘資料は土崎という港町の性格、あるいは流通経済史を思考する上でも、文献史料の少ない秋田の中世史研究に貴重な一石を投じたと言っても過言ではないであろう。

開発が急速に進行し、破壊される遺跡が多い中で業者との協力のもとにこれだけの成果が得られたことは、「開発」と「埋蔵文化財」という常に直面する問題に対して大きな前進であり、今後ともさらに一層の協力体制が確立されることを願ってやまない。

ここに報告書をまとめるとともに今後の調査研究にご活用頂くことを希望し、本遺跡の調査を快くご承諾頂き、全面的にご協力頂いた不動産会社秋田地所並びに関係各位に対して深く感謝の意を表すものである。

昭和56年3月

秋田市教育委員会

教育長　佐藤博之

例　　言

1. 本書は昭和52年12月、同53年４月～12月まで行われた秋田市寺内字後城に所在する後城遺跡における宅地造成に伴う緊急発掘調査の報告書である。
2. 本調査は有限会社秋田地所が主体者となり、事務局および発掘調査は秋田市教育委員会、秋田城跡発掘調査事務所が担当した。
3. 出土遺物の実測および製図は、秋田城跡発掘調査事務所の職員が行った。

   また、本書の写真図版は、発掘調査状況は各地区の担当職員が、出土遺物は小松、西鳥羽が撮影した。
4. 出土遺物の石質鑑定は秋田県立博物館渡辺晟、嵯峨二郎、磯村朝次郎、陶磁器は同館長奈良修介、秋田考古学協会代表理事故小野正人、駒沢大学教授倉田芳郎、石川県立郷土資料館吉岡康暢、一宮市史編算室岩野見司、秋田考古学協会々員福島彬人、木製品の材質鑑定は林業経済学会々員長岐喜代治の各氏にご指導、ご助言を得た。記して感謝の意を表したい。
5. 本書の執筆は下記の職員が担当した。

   小　松　正　夫　　第Ⅱ章、第Ⅲ章の第５節（Ｅ地区出土瓦）、第Ⅳ章の第４節

   日　野　　久　　第Ⅰ章の第２節、第Ⅲ章の第４節（遺物）、第Ⅳ章の第３節

   石郷岡　誠　一　　第Ⅰ章の第１節、第Ⅲ章の第２・３節、第Ⅳ章の第１・２節

   西　谷　　隆　　第Ⅲ章の第４節（遺構）

   安　田　忠　市　　第Ⅲ章の第１節・第５節（遺物及び住居跡以外の遺構）

   西鳥羽　礼　子　　第Ⅲ章の第５節（住居跡）
6. なお本書の編集は小松が行った。

調査事項

遺跡名	後城遺跡
遺跡所在地	秋田市寺内字後城
調査期間	昭和53年４月17日～昭和53年12月２日
調査面積	17,443 m^2
調査主体者	有限会社秋田地所
調査機関	秋田市教育委員会、秋田城跡発掘調査事務所
調査員	小松　正夫、石郷岡誠一、日野　　久、西谷　　隆、安田　忠市
調査参加者	五十嵐芳郎、佐藤　　求、伊藤　　傳、小松　義巳、浜田　　勉、佐々木　均、石郷岡孝喜、須田　正人、酒井　淳志、金　　重樹、武藤　浩之、佐藤　俊行、三浦　昭彦、神田　浩二、石坂　信子、門間　里美（県立金足農高社会科クラブ）、武藤　祐浩、小玉　正範、加藤　正巳（県立秋田高校）、土田　弘資、長沢　安春、田村　隆晴、古井　金寿、長沢　ヒデ、長沢トヨ子、桑原フヂエ、桑原　里子、桑原　京子、大倉ヨシエ、富樫アヤ子、佐藤　京子、古城市太郎、星野守之助、池田重兵衛、田村　忠一、桑原　平昌、桑原　一寿、桑原　民生、桑原フヂエ、中野　清江、小玉美恵子、桑原　利江、熊谷　キエ、土田　サダ
遺物整理協力者	柏谷　光子、田中　　勲、吉川　　剛、佐藤　　明、加藤　ツエ石塚　信子、石沢あさみ

目　　次

第Ⅰ章　遺跡の概要 …… 1

第１節　遺跡の位置と地形 …… 1

第２節　後城遺跡の歴史的環境 …… 1

第Ⅱ章　調査の概要 …… 3

第１節　調査に至る経過 …… 3

第２節　調査の方法 …… 4

第３節　調査経過 …… 5

第Ⅲ章　検出遺構と出土遺物 …… 8

第１節　昭和52年度分布調査 …… 8

第２節　Ａ地区 …… 11

第３節　Ｂ地区 …… 18

第４節　Ｃ地区 …… 49

第５節　Ｅ地区 …… 103

第Ⅳ章　総　括 …… 153

第１節　Ａ地区の調査について …… 153

第２節　Ｂ地区の調査について …… 154

第３節　Ａ、Ｂ、Ｃ地区出土の陶磁器について …… 155

第４節　Ｅ地区の調査について …… 158

挿　　図　　目　　次

第 1 図　秋田市街図
第 2 図　遺跡地形図及び調査地域図
第 3 図　後城遺跡昭和52・53年度発掘調査地域図 …… 6
第 4 図　昭和52年度分布調査グリット検出遺構図 …… 8
第 5 図　昭和52年度分布調査出土遺物 …… 9
第 6 図　昭和52年度分布調査出土古銭 …… 10
第 7 図　A地区検出遺構図 …… 12
第 8 図　土壙墓 …… 14
第 9 図　土壙墓 …… 15
第 10 図　A地区出土遺物 …… 16
第 11 図　A地区出土遺物 …… 17
第 12 図　A地区出土遺物 …… 17
第 13 図　各層位出土古銭 …… 18
第 14 図　土壙墓落ち込み内出土古銭 …… 18
第 15 図　SX043円形竪穴状遺構 …… 19
第 16 図　SX043円形竪穴状遺構出土、犬骨 …… 20
第 17 図　SX043円形竪穴状遺構出土、犬骨 …… 20
第 18 図　SX043円形竪穴状遺構出土遺物 …… 21
第 19 図　SX043円形竪穴状遺構出土遺物 …… 21
第 20 図　SX043円形竪穴状遺構出土遺物 …… 22
第 21 図　SX043円形竪穴状遺構出土遺物 …… 23
第 22 図　SX043円形竪穴状遺構出土遺物 …… 25
第 23 図　SX043円形竪穴状遺構出土遺物 …… 26
第 24 図　SX043円形竪穴状遺構出土遺物 …… 28
第 25 図　SX043円形竪穴状遺構出土遺物 …… 28
第 26 図　SX043円形竪穴状遺構出土遺物 …… 29
第 27 図　SX043円形竪穴状遺構出土遺物 …… 29
第 28 図　SX043円形竪穴状遺構出土遺物 …… 30
第 29 図　SX043円形竪穴状遺構出土遺物 …… 31
第 30 図　SX043円形竪穴状遺構出土遺物 …… 32
第 31 図　SX043円形竪穴状遺構出土遺物 …… 33
第 32 図　SX043円形竪穴状遺構出土遺物 …… 34
第 33 図　SX043円形竪穴状遺構出土遺物 …… 35
第 34 図　SX043円形竪穴状遺構出土遺物 …… 36
第 35 図　SX043円形竪穴状遺構出土遺物 …… 37
第 36 図　SX043円形竪穴状遺構出土遺物 …… 38
第 37 図　SX043円形竪穴状遺構出土遺物 …… 39
第 38 図　SX043円形竪穴状遺構出土遺物 …… 40
第 39 図　SX043円形竪穴状遺構出土遺物 …… 41
第 40 図　SX043円形竪穴状遺構出土遺物 …… 42
第 41 図　SX043円形竪穴状遺構出土遺物 …… 43
第 42 図　SX043円形竪穴状遺構出土遺物 …… 44
第 43 図　SX043円形竪穴状遺構出土遺物 …… 45
第 44 図　SX043円形竪穴状遺構出土遺物 …… 46
第 45 図　SX043円形竪穴状遺構出土遺物 …… 46
第 46 図　SX043円形竪穴状遺構出土遺物 …… 47
第 47 図　SX043円形竪穴状遺構出土遺物 …… 48
第 48 図　第1・第2遺構面検出遺構 …… 50
第 49 図　第3遺構面検出遺構 …… 51
第 50 図　最下層遺構面検出遺構 …… 52
第 51 図　C地区土層断面図（折り込み）…… 53・54
第 52 図　SE051・053 井戸跡 …… 55
第 53 図　SE052井戸跡 …… 56
第 54 図　SE052井戸跡側面図 …… 57
第 55 図　SE054井戸跡 …… 57
第 56 図　SE055井戸跡 …… 58
第 57 図　SE056井戸跡 …… 58
第 58 図　SE057井戸跡 …… 59
第 59 図　SE058井戸跡 …… 60
第 60 図　SI059 竪穴状遺構 …… 61

第 61 図　SX061方形枠組遺構 …… 61
第 62 図　SX063焼土遺構 …… 61
第 63 図　SK066土壙 …… 62
第 64 図　SE084井戸跡 …… 62
第 65 図　SE085井戸跡 …… 63
第 66 図　SE086井戸跡 …… 63
第 67 図　SE087井戸跡 …… 64
第 68 図　SE088井戸跡 …… 64
第 69 図　SE089井戸跡 …… 65
第 70 図　SB110掘立柱建物跡 …… 67
第 71 図　SI111竪穴状遺構 …… 67
第 72 図　SE112井戸跡 …… 68
第 73 図　SE113井戸跡 …… 68
第 74 図　SE114・115井戸跡 …… 68
第 75 図　SE114・115井戸跡土層断面図 …… 69
第 76 図　SE116井戸跡 …… 69
第 77 図　SE117井戸跡 …… 69
第 78 図　C地区出土青磁皿 …… 71
第 79 図　C地区出土青磁、蓮弁文碗 …… 72
第 80 図　C地区出土青磁碗・皿 …… 74
第 81 図　C地区出土青磁碗 …… 75
第 82 図　C地区出土青磁碗・盤 …… 76
第 83 図　C地区出土白磁・染付 …… 78
第 84 図　C地区出土瀬戸・美濃鉄釉小皿
天目茶碗等 …… 79
第 85 図　C地区出土瀬戸・美濃灰釉皿・埦 …… 80
第 86 図　C地区出土瀬戸・美濃灰釉卸し皿 …… 82
第 87 図　C地区出土瀬戸・美濃灰釉瓶・壺類 … 83
第 88 図　C地区出土瀬戸・美濃灰釉盤
及びその他の陶器 …… 85
第 89 図　C地区出土珠洲系陶器甕 …… 86
第 90 図　C地区出土珠洲系陶器甕 …… 87
第 91 図　C地区出土珠洲系陶器甕 …… 88
第 92 図　C地区出土珠洲系陶器甕 …… 89
第 93 図　C地区出土珠洲系陶器壺A …… 90
第 94 図　C地区出土珠洲系陶器壺A・B …… 92
第 95 図　C地区出土珠洲系陶器片口鉢 …… 93
第 96 図　C地区出土珠洲系陶器鉢 …… 94
第 97 図　C地区出土越前陶、瓦質土器 …… 95
第 98 図　C地区出土石製品 …… 96
第 99 図　C地区出土土製品 …… 97
第 100図　C地区出土鉄製品、刀子、刀、鎌 …… 98
第 101図　C地区出土鉄製品、斧、鉄鏃、釘 …… 99
第 102図　C地区出土鉄、銅製品 …… 100
第 103図　C地区出土古銭 …… 101
第 104図　C地区出土古銭 …… 102
第 105図　E地区発見遺構全体図（折り込み）103・104
第 106図　SI160・167・168住居跡 …… 106
第 107図　SI160住居跡出土遺物 …… 106
第 108図　SI161住居跡 …… 107
第 109図　SI161住居跡出土遺物 …… 107
第 110図　SI162・171 住居跡 …… 108
第 111図　SI162住居跡出土遺物 …… 109
第 112図　SI163住居跡 …… 109
第 113図　SI163住居跡カマド …… 110
第 114図　SI163住居跡出土遺物 …… 110
第 115図　SI164住居跡 …… 111
第 116図　SI164住居跡カマド …… 111
第 117図　SI164住居跡出土遺物 …… 112
第 118図　SI165・170住居跡 …… 113
第 119図　SI170住居跡カマド …… 113
第 120図　SI165住居跡出土遺物 …… 114
第 121図　SI166住居跡 …… 114
第 122図　SI166住居跡出土遺物 …… 115
第 123図　SI167住居跡出土遺物 …… 115
第 124図　SI169住居跡 …… 116

第125図　SI169住居跡カマド …… 116
第126図　SI169住居跡出土遺物 …… 116
第127図　SI170住居跡出土遺物 …… 117
第128図　SI171住居跡出土遺物 …… 117
第129図　SI172住居跡 …… 117
第130図　SI172住居跡出土遺物 …… 118
第131図　SI173住居跡 …… 119
第132図　SI173住居跡出土遺物 …… 119
第133図　SI174住居跡 …… 119
第134図　SI174住居跡出土遺物 …… 119
第135図　SI175住居跡 …… 120
第136図　SI175住居跡出土遺物 …… 120
第137図　SI176・177住居跡 …… 121
第138図　SI176住居跡カマド …… 121
第139図　SI176住居跡出土遺物 …… 122
第140図　SI178住居跡 …… 122
第141図　SI178住居跡出土遺物 …… 123
第142図　SI179住居跡 …… 125
第143図　SI179住居跡出土遺物 …… 126
第144図　SI180住居跡 …… 127
第145図　SI180住居跡出土遺物 …… 127
第146図　SI181住居跡 …… 128
第147図　SI181住居跡出土遺物 …… 129
第148図　SI182住居跡 …… 130
第149図　SI182住居跡出土遺物 …… 131
第150図　SI183住居跡 …… 132
第151図　SI184住居跡出土遺物 …… 132
第152図　SI184住居跡 …… 133
第153図　SI185住居跡 …… 133
第154図　SI186住居跡 …… 134
第155図　SI187住居跡 …… 134
第156図　SI187住居跡出土遺物 …… 135
第157図　SI187住居跡出土遺物 …… 136
第158図　SI188住居跡 …… 137
第159図　SI189住居跡 …… 137
第160図　SI190・191住居跡 …… 138
第161図　SI190住居跡出土遺物 …… 138
第162図　SB192掘立柱建物跡 …… 139
第163図　SD193・195溝状遺構出土遺物 …… 139
第164図　SK197・198・199　土壙 …… 140
第165図　SK200土壙 …… 140
第166図　SK201土壙 …… 140
第167図　第2層出土遺物 …… 141
第168図　第2層出土遺物 …… 142
第169図　第3層出土遺物 …… 143
第170図　第3層出土遺物 …… 144
第171図　茶褐色砂質土出土遺物 …… 145
第172図　茶褐色砂質土出土遺物 …… 146
第173図　茶褐色砂質土出土遺物 …… 147
第174図　茶褐色砂質土出土遺物 …… 148
第175図　赤褐色砂質土出土遺物 …… 149
第176図　赤褐色砂質土出土遺物 …… 149
第177図　出土地点不明遺物 …… 150
第178図　住居跡出土瓦 …… 151
第179図　住居跡出土瓦 …… 152

表　目　次

表－1　A地区出土古銭
表－2　B地区SX043円形竪穴状遺構出土古銭
表－3　B地区SX043円形竪穴状遺構出土図示木製品一覧表

表 － 4　B地区SX043円形竪穴状
遺構出土図示木製品一覧表
表 － 5　B地区SX043円形竪穴状
遺構出土図示木製品一覧表
表 － 6　B地区SX043円形竪穴状
遺構出土図示木製品一覧表
表 － 7　B地区SX043円形竪穴状
遺構出土図示木製品一覧表
表 － 8　B地区SX043円形竪穴状
遺構出土図示木製品一覧表
表 － 9　B地区SX043円形竪穴状
遺構出土図示木製品一覧表
表 － 10　B地区SX043円形竪穴状
遺構出土図示木製品一覧表
表 － 11　B地区SX043円形竪穴状
遺構出土図示木製品一覧表
表 － 12　B地区SX043円形竪穴状
遺構出土図示木製品一覧表
表 － 13　B地区SX043円形竪穴状
遺構出土図示木製品一覧表
表 － 14　B地区SX043円形竪穴状
遺構出土図示木製品一覧表
表 － 15　B地区SX043円形竪穴状
遺構出土図示木製品一覧表
表 － 16　C地区出土遺物、遺構及び層位
表 － 17　C地区出土遺物、遺構及び層位
表 － 18　C地区出土遺物、遺構及び層位
表 － 19　C地区出土遺物、遺構及び層位
表 － 20　C地区出土遺物、遺構及び層位
表 — 21　C地区出土遺物、遺構及び層位
表 － 22　C地区出土古銭
表 － 23　C地区出土古銭
表 － 24　C地区出土古銭
表 － 25　E地区住居跡一覧表

図　版　目　次

図版　1　遺跡近景　昭和52年度分布調査状況
図版　2　A地区全景　ST009、SD037
図版　3　SD040、SD040
図版　4　ST001、ST006、ST007
ST014・015・016、ST006
古銭出土状況　笄出土状況
図版　5　B地区SX043全景
SX043遺物出土状況
図版　6　SX043犬骨出土状況
図版　7　SX043漆器出土状況
図版　8　SX043下駄出土状況
図版　9　SX043木製品出土状況
図版　10　第1遺構面全景　第2遺構面全景
図版　11　第3遺構面全景　第4遺構面全景
図版　12　SE051井戸跡　SE052井戸跡
図版　13　SE053井戸跡
SE051・053・054井戸跡
図版　14　SE054井戸跡　SE055井戸跡
図版　15　SE055井戸跡掘り方　SE056井戸跡
図版　16　SE057井戸跡　SE058井戸跡
図版　17　SE058井戸跡井筒　SE084井戸跡
図版　18　SE085井戸跡　SE087井戸跡
図版　19　SE088井戸跡　SE089井戸跡
図版　20　SE086井戸跡　SE113井戸跡
図版　21　SE115井戸跡　SE116井戸跡
図版　22　SI059竪穴状遺構　SI111竪穴状遺構
図版　23　SB110掘立柱建物跡　SX108落ち込
み出土炭化米　SX062小鍛冶遺構

図版　24　SK066土壙　SK091土壙　SK094土壙
SK137土壙　SX083落ち込み出
土珠洲系擂鉢　SE052井戸跡出土宝
篋印塔塔身部

図版　25　上層遺構全景　下層遺構全景

図版　26　上層遺構全景南　下層遺構全景南

図版　27　下層遺構全景北　発掘調査風景

図版　28　SI160・167・168住居跡
SI161住居跡

図版　29　SI162・171住居跡　SI163住居跡

図版　30　SI164住居跡　SI165・170住居跡

図版　31　SI165・170・176・177住居跡
SI166住居跡

図版　32　SI174住居跡　SI175住居跡

図版　33　SI178住居跡　SI179住居跡
SI179住居跡

図版　34　SI181住居跡　SI183住居跡

図版　35　SI184住居跡　SI182・185住居跡

図版　36　SI187住居跡　SI187住居跡

図版　37　SI187住居跡西壁炭化材　SI187住
居跡南西隅壁炭化材　SI187住居跡
炭化材（手斧痕）

図版　38　SI188住居跡　SI162住居跡カマド
SI165住居跡カマド

図版　39　SI167住居跡カマド　SI169住居跡カマド
SI169住居跡カマド

図版　40　SD193・194溝状遺構　SD193溝状
遺構　SD193・194溝状遺構

図版　41　SB192掘立柱建物跡　遺物出土状況
遺物出土状況

図版　42　A地区出土遺物

図版　43　A地区出土古銭
B地区SX043出土遺物

図版　44　B地区SX043出土遺物

図版　45　B地区SX043出土遺物

図版　46　B地区SX043出土遺物

図版　47　B地区SX043出土遺物

図版　48　B地区SX043出土遺物

図版　49　B地区SX043出土遺物

図版　50　B地区SX043出土遺物

図版　51　B地区SX043出土遺物

図版　52　B地区SX043出土遺物

図版　53　B地区SX043出土遺物

図版　54　B地区SX043出土遺物

図版　55　B地区SX043出土遺物

図版　56　B地区SX043出土遺物

図版　57　B地区SX043出土遺物

図版　58　B地区SX043出土遺物

図版　59　B地区SX043出土遺物

図版　60　B地区SX043出土遺物

図版　61　B地区SX043出土遺物

図版　62　B地区SX043出土遺物

図版　63　B地区SX043出土遺物

図版　64　B地区SX043出土遺物

図版　65　B地区SX043出土遺物

図版　66　B地区SX043出土遺物

図版　67　C地区出土青磁皿・碗

図版　68　C地区出土青磁碗

図版　69　C地区出土青磁碗

図版　70　C地区出土青磁盤、白磁皿・碗

図版　71　C地区出土染付、瀬戸・美濃皿
天目茶垸（鉄釉）

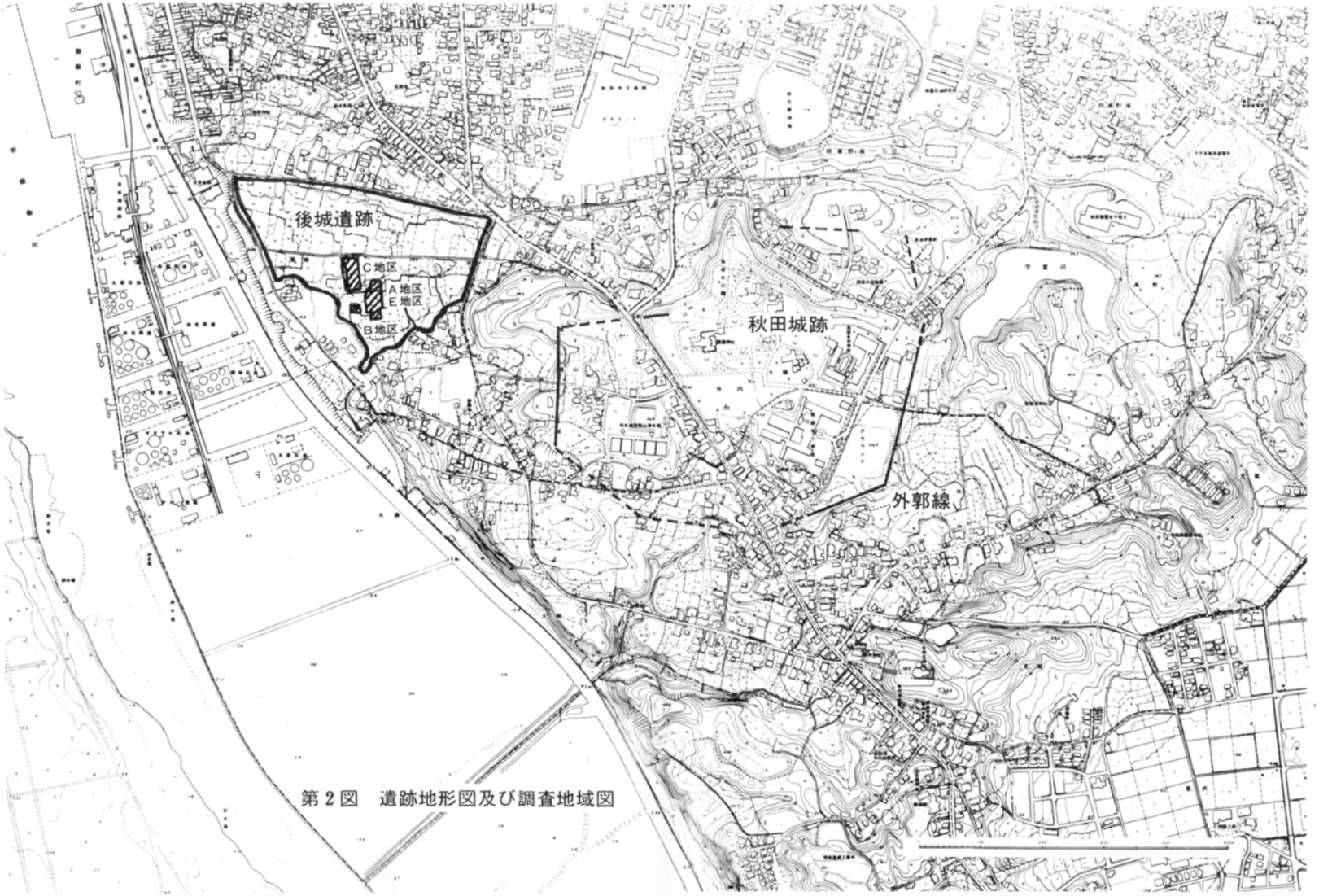
図版　72　C地区出土瀬戸・美濃、垸・皿
天目茶垸、その他の陶器
山茶垸

図版　73　C地区出土瀬戸・美濃、皿・垸（灰釉）

図版　74　C地区出土瀬戸・美濃卸し皿
瓶子・皿耳壺・鉢（灰釉）
図版　75　C地区出土瀬戸・美濃小仏花瓶
・盤（灰釉）　珠洲系陶器甕
その他の施釉陶器
図版　76　C地区出土珠洲系陶器甕
図版　77　C地区出土珠洲系陶器甕・壺
図版　78　C地区出土珠洲系陶器壺・片口鉢
図版　79　C地区出土珠洲系陶器片口鉢
越前陶　瓦質土器
図版　80　C地区出土石製品
図版　81　C地区出土土製品、鉄製品
図版　82　C地区出土鉄製品
図版　83　C地区出土鉄・銅製品
図版　84　C地区出土古銭
図版　85　E地区出土遺物
図版　86　E地区出土遺物
図版　87　E地区出土遺物
図版　88　E地区出土遺物
図版　89　E地区出土遺物
図版　90　E地区出土遺物
図版　91　E地区出土遺物
図版　92　E地区出土遺物
図版　93　E地区出土遺物
図版　94　E地区出土遺物
図版　95　E地区出土遺物
図版　96　E地区出土遺物
図版　97　E地区出土遺物
図版　98　E地区出土遺物
図版　99　E地区出土遺物
図版　100　E地区出土遺物
図版　101　昭和52年度分布調査出土遺物

秋田市
秋田港
秋田城跡
後城遺跡
後城
上飯島
下飯島
飯島
飯田
下谷地
上谷地
太平
五百刈沢
深川
下家
道
駅前町内
泉田
緑丘町
街道
穀丁
長野中町
土崎港相染町
四ッ谷団地
四ッ谷
笹岡
南沢
外旭川
沖神田
二ッ森
上通り
神田新町
水口
登木
大畑
新川
泉
沼
八橋
戌川原
川尻
雄物川
ゴルフ場
自衛隊演習場
秋田空港
新屋
千秋学園
雄物新橋
栗田神社
新町後
関町後
新屋
浜田
十条製紙工場
工芸学校
牛島西四丁目
大住
大野
福島
仁井
上丁
新
1000 m
0
1000
2000
3000

第1図　秋田市街図



第２図　遺跡地形図及び調査地域図

第1章　遺跡の概要

第1節　遺跡の位置と地形

後城遺跡は秋田市寺内字後城に位置する。秋田市街地から旧国道7号線を北上すると約3㎞程で秋田市寺内地内に入る。寺内には、国指定史跡、「秋田城」の所在する標高約50ｍ程の高清水丘陵がある。後城遺跡は丘陵の北西部裾野にあり、秋田城の中心部からは約500ｍ離れている。比高差は約30ｍ程である。また、遺跡に最も近い秋田市営交通バス停留所「寿光園入口」から西方に約150ｍ入った所である。

遺跡一体は、現在宅地と化しているが調査当時は一面畑地であり、標高は最高のところで約20ｍである。西方は約200ｍ程で崖になり、崖下は現在の国道7号線が走っている。日本海までは直線で約1.7㎞で遺跡は、この日本海から吹きあげられた飛砂が堆積している。

遺跡一体の地形は、北は男鹿市脇本付近から南は本荘市松ケ崎付近まで海沿いに約45㎞にわたり分布する秋田砂丘の一部に入る。

秋田砂丘は、大きく雄物川の北と南で北部砂丘、南部砂丘にわけられ、内陸部から第1列砂丘、第2列砂丘、第3列砂丘に分類できる。後城遺跡一体は、北部第3列砂丘に入ると思われる。海岸丘陵を飛砂で覆った見掛砂丘である。地層は、飛砂層下位に、下部は礫や砂にとみ、上部は砂、シルト、粘土からなる淡水成層である潟西層（寺内層）があり、上部を火山灰質の土壌が覆っている。その上に縄文時代晩期頃の古砂丘砂が覆っている。さらに上部には、土師器、須恵器を含む腐植土層がのり、その上を新砂丘砂が覆っている。砂丘は、縄文時代晩期以後3回にわたって形成されたもので現在は3回目の形成期である。

後城遺跡は、上部の新砂丘砂上面から中～近世初期の遺構、さらに新砂丘砂下部から古代の集落跡を発見した。これらのことから新砂丘砂の形成時期がある程度推定できる。ちなみに新砂丘砂は約4ｍ程推積している。

『土地分類基本調査、地形、表層地質、土じょう』秋田、国土調査、経済企画庁、1966．3月
草薙祥子『秋田砂丘の砂丘地形と遺跡について』
『秋田考古学第32号』秋田考古学協会、1975．3月

第2節　後城遺跡の歴史的環境

史跡秋田城跡の北西に位置する後城遺跡は秋田県遺跡地名表には昭和52年段階では未記載の遺跡であった。しかし、秋田城跡西外郭線から300ｍ程の地区であり、秋田城に関連する古代の遺構、遺物の存在が充分に予想される地域であった。又、中世初期から文献史料にみえる湊、秋田湊、羽州

湊は現在の土崎港をさし、後城地区はこの土崎港の南に隣接している。室町時代以降、秋田郡（現在の県中央部から北部）方面に地域的な封建制を確立した安東（秋田）氏はこの土崎を拠点とした大名である。安東氏の土崎の居城は湊城と呼ばれ、応永初年頃（14世紀末）には津軽十三湊の本流から分離して、秋田土崎湊に本拠を築き、湊安東氏が成立したといわれる。しかし、初期の湊安東氏の居城が現在の土崎神明社の地にある湊城であったか不明であり、後城の地名から、この地区付近に初期湊安東氏の居城を求める考えもある。（『土崎港町史』昭和54年発行、秋田市役所土崎出張所編）。又、港湾としての湊は現在の穀保町（後城地区の北に隣接する地域）付近から次第に北へと雄物川の土砂の流入によって移動していったものといわれている。（同上『土崎港町史』）。そうであれば後城遺跡から北にほど遠くない地域に古い湊が存在していたことになり、この後城地区にも湊に関連した町並等があったことが考えられる。これに関しては江戸後期の秋田を歴遊し、地誌、紀行文を記述した菅江真澄の『水の面影』に興味深い内容がみえる。真澄は文化九年の春から、秋田城跡のある寺内に滞留し、寺内付近を実地踏査し、里人に尋ね聞き「また、としたかき里の老人が聞きときき、伝えと伝ふる古物語を栞とたのみて、それをしるべの糸口とたどり」記録したと述べている。栞とした古物語とは、当時、彼が滞留した鎌田正家の父正安の編んだ『寺内村旧跡考』であり、この書は明和年間（1765年頃）、正安の父正苗がまとめておいたものとその後書に記されているといわれる（『菅江真澄随筆集』内田武志編、平凡社東洋文庫）。『水の面影』の内容とは以下の部分である。

「焼山というあり。又、乾の方に、普門大悲寺という天台ありし、そは前にも云いし寺にて、今臨済宗にて久保田にうつりぬ。畑中の径に入れば、城という処あり。ここは古は、前城町、後城町とて肆ありさ。慶長、元和のころならむ、其肆舎なごりなう久保田にひきうつされて、今はみなそこに住みて、後城町を城町と改め、前城町を馬口労町と名附たり。」

「土崎の浦の米庫町近く来る。鴟が澤という字あり。……略。元亀、天正のむかしまでは、此辺は船屋、問磨、軒をならべてありつる跡にて、其問屋が澤てふ事を、急語云ひしを訛りもて、鳶が澤といへるにこそあらめ。」

「……此處の砂原に陶の破れたるが、石ごとくぞありける。これをみれば高麗的陶皿、瓮、坏、祝瓶のたぐひ、居瓦、轉甕（祝瓶のたぐひ也）やうなるものも出づ。此瓶どもの外は楢形、絲文、松葉文あり、又、半田、織部ようのもの、瓦の破れたるも多し。居瓶やうの陶の内の波がた、渦がたは、いかなるよしにかとおもふに上代の雷盤にして……。」

以上の記述は後城地区及びその周辺の様子とみられ、久保田（現秋田市街）の町割りの際に移転した藩政以前の町並、寺院が存在したことが述べられ、付近から須恵器、瓦、中世陶器、青磁、白磁などの出土が記されている。これら出土品については故小野正人氏が昭和52年の予備調査で出土した遺物と共に『菅江真澄と秋田』の「真澄とヤキモノ」（昭和53年、菅江真澄百五十年祭実行委員会編）の中で述べている。氏は真澄の文章と予備調査の出土遺物を対比し、真澄の陶磁器の分類

を再考し、高麗的陶皿とは青磁、白磁、居瓶、轉瓶とは須恵器、珠洲大甕、半田とは珠洲焼や須恵器系のもの、織部とは瀬戸、美濃の類とし、雄物川の川岸の高い崖上の砂原の地、この後城地区に安東氏と関連した天正頃までの聚落を想定された。氏のいわれる珠洲大甕、珠洲焼については、珠洲そのものであるか問題があるところだが、中世陶磁器と真澄の文献の対比により本遺跡の性格を知る重要な手掛りを示している。

寺院については、更に『水の面影』の中で後城付近に妙覚寺という天台宗から禅林になった寺のことが述べられており、この寺も大悲寺と共に久保田町割の際、寺院を城下に集中させた寺町に移転している。寺の城下集中は文献によると元和６年（1620年)頃に既に寺町の名称が知られるので、この頃を中心になされたものとされている（『秋田県史、第２巻、近世編』）。史料にみえる寺町での大悲寺名の初見は寛永６年４月10日条にみえる（『梅津政景日記』）。

又、後城町、前城町の移転も、前城町の移転後の名称といわれる馬口労町が前述の『梅津政景日記』元和４年５月16日条にみえ、既にこの時期には移転が終っていたものと考えられる。寛文３年（1663年)の町割図（『久保田町外町町割図』）にも城町、馬口労町の名が明確に記されている。やはり寺院と同様に元和年間を中心に移転がなされたものであろう。

真澄の後城周辺の寺院､町並の記述は以上の史料からも傍証されるものと考えられる｡これら寺院、町並が、元和、慶長以前、元亀、天正以前の年代とすれば、当然、小野正人氏のいわれるように安東（秋田）氏の時代のものであり、その初源は中世に遡る時期に求められる。予備調査出土の中世陶磁類は、この事を裏付けるものであろう。

このように後城地区には古代、及び、中世～近世初頭の遺構、遺物が存在することが明確となった。

なお、中世の遺跡としては、同じ秋田市内では後城遺跡から旧雄物川沿い３㎞程上流の自然堤防上に聚落跡である下タ野遺跡が確認されている。

第Ⅱ章　調査の概要

第１節　調査に至る経過

後城遺跡の発掘調査は、昭和52年地元不動産会社㈱秋田地所によって後城地域の宅地造成に係る開発申請が提出されたことに起因する。

同年10月市都市計画課から教育委員会への回議（宅地造成に伴う事前協議）に基づき、秋田城跡発掘調査事務所が現地踏査を実施した。踏査は、休耕畑を一部試掘するなど開発計画に予定されてる17.443㎡にわたって行った。その結果、土師器、須恵器、陶磁器片が各所で確認されたため開発業者側と協議を重ね、同年11月21日～12月10日まで秋田城跡調査研究の一環として分布、試掘調

査を実施することにした。試掘調査は２ｍ×２ｍグリッドを設定し遺構、遺物の確認を主目的に実施した。その結果、遺跡は造成計画地内のほぼ全域にわたって古代、中世から近世初期の遺構、遺物の包蔵地であることが判明した。そこで試掘調査の成果を業者側に提出し、遺跡の重要性を提示すると同時に同年53年１月20日付けで文化庁長官に遺跡発見届を提出した。

その後、市当局と業者側は数回にわたって具体的な前後策を協議し「土地開発（宅地造成）地区内における後城遺跡の発掘に関する覚書」を取り交わす業者側の積極的な協力が得られ、同年４月17日から本格的な発掘調査を実施することが決定した。また調査が実施された後も双方の打合せが行われ調査日程、期間、整理等についても協議がなされた。

第２節　調査の方法

後城遺跡は、未調査地であるため時期、性格についてはまったく不明であった。また遺物についてもほとんど認識されていなかったため、調査に際しては遺跡の時期、性格の追求を目的に準備を進めた。また遺跡は史跡秋田城跡に隣接し、同砂丘上に位置するなど地形、地質的にも類似する。このようなことから調査方法は基本的には、現在秋田城発掘調査事務所が実施している方法に基づいた。

＜試掘調査＞

発掘調査は宅地造成が行われる範囲で実施することとし、本調査に先立って分布調査および試掘調査を行った。

調査期間は昭和52年11月18日から12月10日までである。測量原点は調査区のほぼ中央部に設置し、それを基準に遺跡全体に４ｍ×４ｍの方眼をかけた。また全域をＡ～Ｆの６地区に分割し遺構、遺物整理の便宜をはかった。なお原点は秋田城測量基準点№８よりトラバースで移動し、秋田城全体の遺構図と関連性を持たせた。計測値はＸ＝－586.596、Ｙ＝＋162.730、標高は21.134ｍである。

試掘調査は、分布調査の結果に基づいて最も多く遺物が採集された地域について実施した。発掘区は４ｍグリッドの西南杭から北、東に２ｍづつの４㎡とし、遺構についてはプランの確認のみに留め、掘り下げは本調査で実施することとした。なお各グリッドの名称は東南杭をもってあてた。実測図は、遺構平面図を各グリッド杭を基準に、土層断面は北壁、東壁を図化した。

＜本 調 査＞

本調査は上述の試掘調査結果に基づいて昭和53年４月17日から12月まで実施した。

発掘調査は６地区の中で遺構、遺物が多く検出されたＢ、Ｃ地区および遺跡の最も高所でしかも平坦面であるＡ地区について実施した。グリッド設定については昨年の原点を用い同じく４ｍ×４ｍとした。調査は２ｍ×２ｍグリッドを掘り下げ遺構の確認に従って順次拡張した。その結果上述の３地区については結果的に全面発掘となった。

調査に際しては、遺跡全体が１～５ｍの飛砂に覆われていること、また業者間の工事契約等の関

係から迅速化を予儀なくされ、遺構に影響を及ぼさない段階においてのブルドーザー、バックホー等の重機使用も積極的に行った。しかし遺跡が広範囲なことと、深い飛砂、そして工事と併行しての調査ということもあって造成範囲全域の発掘は不可能であった。しかしながら古代、中世の遺構の存在する北側（A地区の北東）、東側（A地区の東）については厚い飛砂が幸いし、遺構が破壊されることなく造成されたことはせめてもの救いであった。

第3節　調査経過

後城遺跡の発掘調査は、宅地造成に計画されている17,443㎡を対象として実施した。

後城地内の造成計画が打ち出された段階の後城遺跡は、遺跡の範囲、遺物の分布状況等ほとんど一般的には認識されていなかった。そこで昭和52年度は、遺跡の範囲確認および時代、性格把握を目的とした分布調査、試掘調査を実施し、翌53年度に本調査を実施することとした。

1. 試掘調査

昭和52年11月18日にグリッド設定のための測量を実施。翌19日から12月10日まで試掘調査。その結果A、B、C、F地区に遺構、遺物が集中することが判明した。C地区周辺は北側に緩い傾斜を示し、包含層は深い部分で2m以上に達する。また遺構は重複して確認され、浅い部分では表土（耕作土）下約50㎝で検出されている。各地区における主な検出遺構は、A地区で土壙、B地区で井戸状落ち込み、C地区で掘り方、F地区で住居跡カマド、ピット等であるが、F地区のカマド跡を除いてはいずれも遺構プランの確認に留め、拡張、掘り下げは本調査に譲った。出土遺物は、F地区では土師器、須恵器、A、B、C地区では陶磁器類がそれぞれ主であった。

なお後城遺跡一帯は、日本海から吹き上げられた飛砂上に形成され、遺構面および包含層はすべて砂層あるいは砂質土から成っていることが判明した。

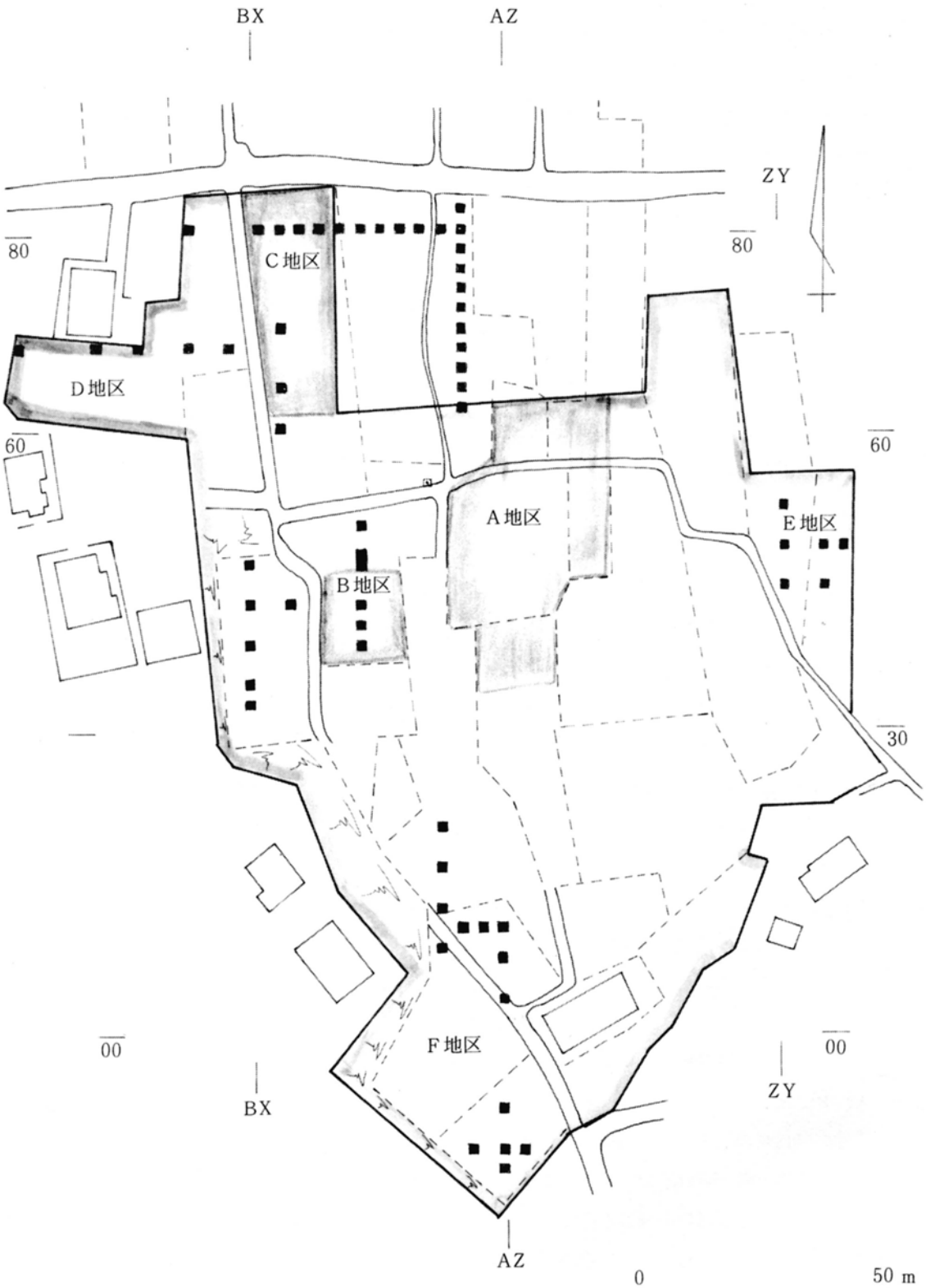
2. 本調査

本調査は昭和53年4月17日から12月上旬の約9ケ月間実施した。

調査区は、上述の試掘調査結果をもとに最も顕著に遺構、遺物が確認されたA、B、C地区を選定した。なお調査にあたっては一地区ごとに完掘する方法を原則としたが、併行して行われた造成工事との関係から必然的に二地区同時の調査あるいは断続的な調査を予儀なくされた。従って後述する各地区の経過内容には詳細な月日の記述を省略することにする。

＜A、E地区＞

A地区では耕作土を除去した段階で土壙と溝が検出された。土壙内からは古銭、骨等が出土することから墓壙と考えられるに至った。これらの遺構は不純物の少ない白色の砂層に営れており、このことからこの砂層は地山飛砂と考えられた。ところが調査区内西側に確認されていた赤褐色砂の土師器、須恵器の包含層を東方に追跡したところ当初地山砂と考えていた飛砂層下に入り込むことが判明した。そこで同層を東方に3m程追跡したところ飛砂は厚さ1mにも達し、なおかつ東に傾



第3図　　後城遺跡昭和52・53年度発掘調査地域図

斜しながら継続することが判明した。ブルドーザー、バックホーによる飛砂除去作業。その結果、東へ約20ｍの地点で飛砂の厚さが３ｍにも達したため、除去作業を一時止め精査を行った。全体を覆っている赤褐色砂の遺物包含層を掘り下げたところ、被火災住居一軒を含めた４軒の竪穴住居跡と東西に延びる溝状遺構が検出された。しかもその溝状遺構の底面には柱穴と考えられるピットが検出され、柵列状を呈することが推測された。また遺構群はさらに北に広がる様相を呈したので上述したように重機による除去作業、精査を実施したところ８世紀後半を中心とする27軒の竪穴住居跡群が検出された。住居跡の位置、有無の確認はきわめて容易である。すなわち、住居が廃棄された後の凹みに、白色の飛砂が数10㎝の厚さで堆積しているのである。従って赤褐色砂層面を露出させることによって住居跡の部分だけ白色砂（飛砂）が残存することになる。ただし住居壁の確認は壁の掘り込み面と同色の包含層が覆っているため比較的困難である。９月20日、Ａ地区終了。

＜**Ｂ 地 区**＞

Ｂ地区で検出されていた落ち込みは、試掘調査の段階では井戸跡と考えられたが、調査の結果径約10ｍ、深さ約 5.5 ｍの鍋底状の落ち込みであった。作業は、昨年の試掘調査の土層図に基づいて耕作土、盛土を予めブルドーザーで除去、円形プランのほぼ中央に十字にセクションベルトを残し掘り下げた。埋土からは犬、馬骨を始め曲物、下駄、箸等多数の木製品が廃棄された状態で出土した。周壁は飛砂からなり、底面と考えられる部分にはこぶし大から人頭大の河原石が敷き詰められた状態で検出された。遺構の性格については明確ではないが、水溜め用の施設をゴミ捨て場として利用したのか、あるいは単なるゴミ捨て場として掘られた土壙であろうか。７月21日、Ｂ地区終了。

＜**Ｃ 地 区**＞

Ｃ地区は遺跡内の北方、最も低位の畑地である。検出された遺構は井戸跡、土壙、鍛冶跡１、掘立柱建物跡１、溝である。これらの遺構は数時期にわたって重複し、その包含層は約１ｍにも達する。中でも井戸跡は他の遺構と比較して重複が顕著で２～３回の造り替えが判明している。井戸の構築状況は、ほとんどが円形の掘り方に方形の井側を組み、内部に曲物を設置したものである。しかし、木質部の腐植が激しく大部分は取り上げが不可能であった。Ｃ地区のほぼ中央部最下層で検出された２間×５間以上の東西棟掘立柱建物跡周辺からは焼米が多量に検出されている。この他に径10㎝～50㎝程の掘り方が無数に検出されたが、建物の規模、重複時期を復原することは不可能であった。

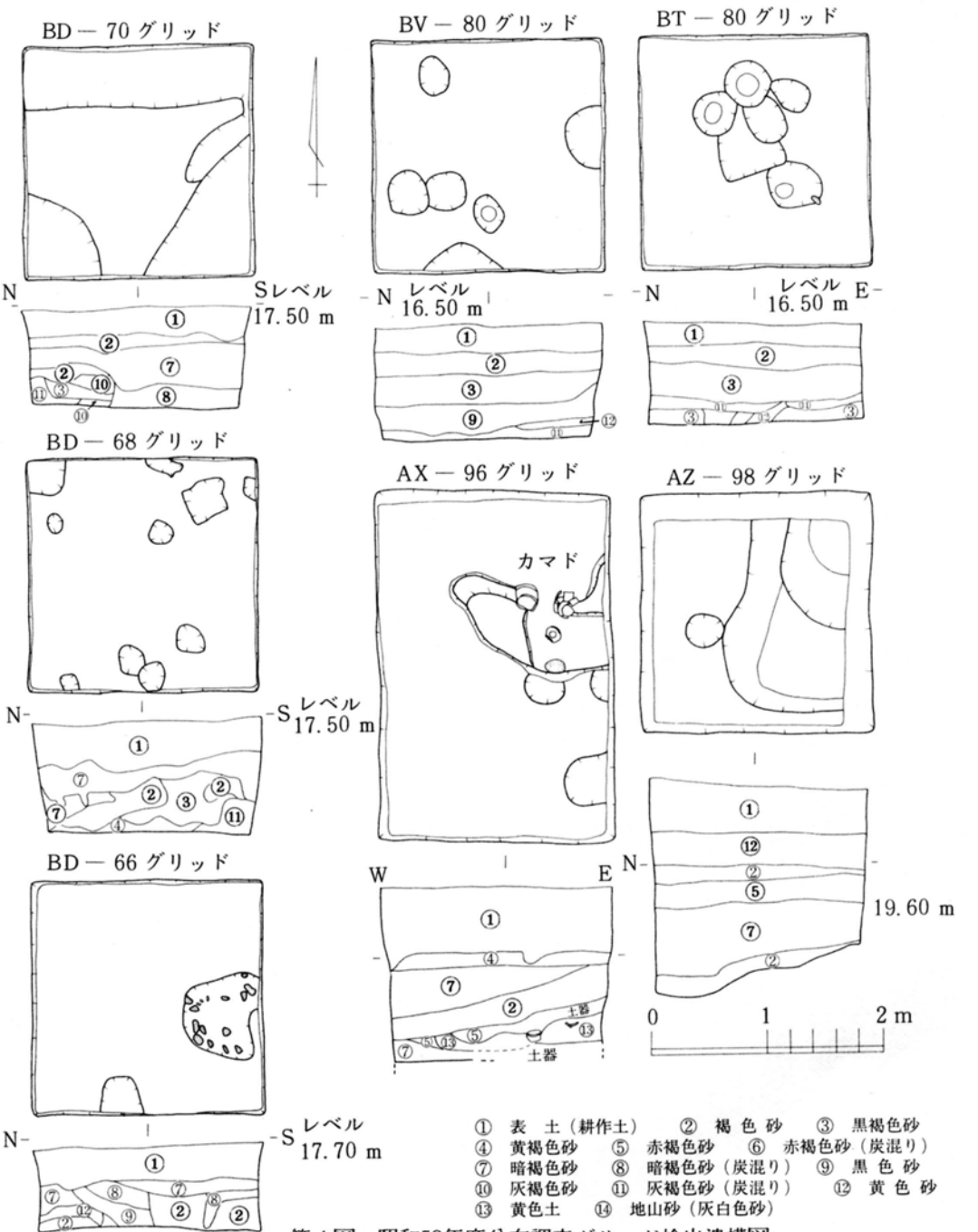
このように数期におよび遺構の重複があったため、図面取、写真撮影に時間が経過し、12月２日Ｃ地区の調査を終了した。

なお埋め戻し等は、すべての調査の終了後造成工事の進行状況に応じて行われた。

第Ⅲ章　検出遺構と出土遺物

第1節　昭和52年度分布調査

検出遺構（第4図、図版1）

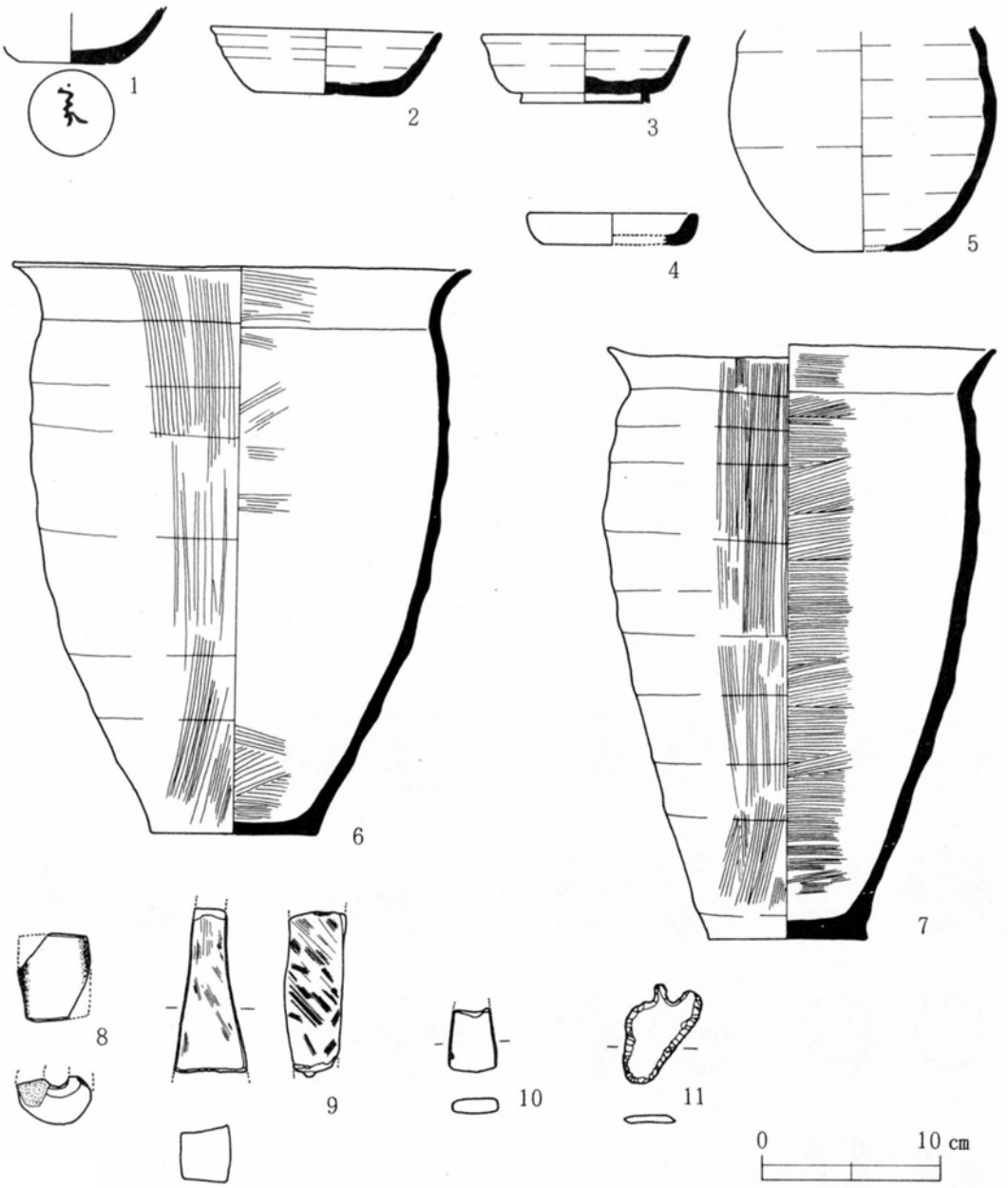


第4図　昭和52年度分布調査グリッド検出遺構図

分布調査は２ｍ×２ｍグリッドを試掘し、遺構はプランの確認に留めることを原則とした。

BT・BV－80、BD－68で重複する柱穴を確認した。遺構確認面は表土から60㎝～70㎝である。

最南端地区のAX－96では南向きのカマドを検出した。遺構確認面は表土から約１ｍ程である。グリッド東壁には付近の民家の排水管が埋設されており、拡張は不可能であった。カマド両袖には、補強材として土師器甕が埋め込まれていた。また燃焼部には河原石を置き、さらに土器底部を上乗

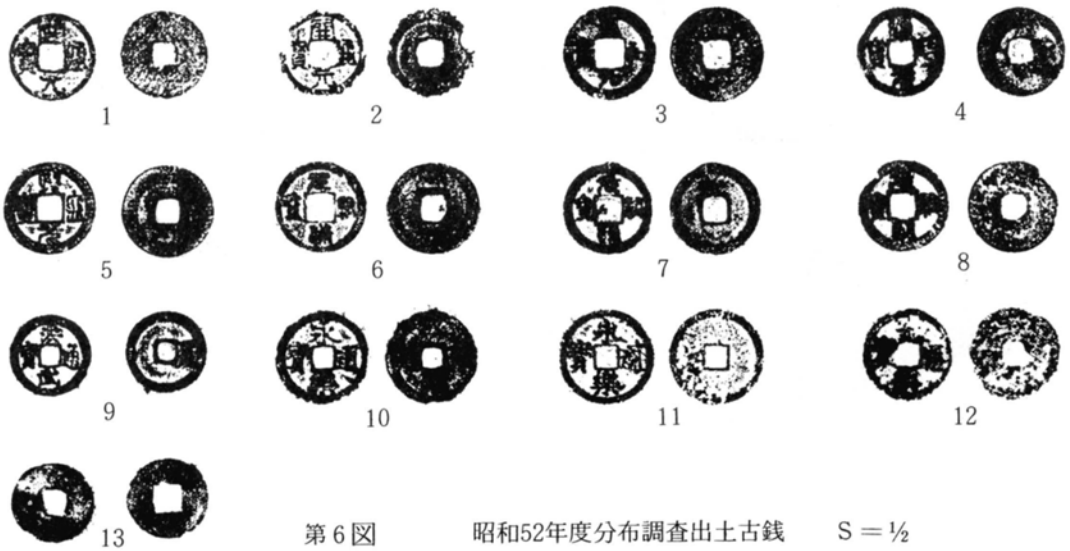


第５図　昭和52年度分布調査出土遺物

せし、支脚としている。

出土遺物（第5図、図版101）

1～3、5～7、10、11はF地区で、1、2、5～7はAX－96グリット、3、10はAZ－98グリット、11はBC－96グリット出土である。1は褐色砂出土の赤褐色土器坏で、底部切り離しは回転糸切り、無調整。「家」と判読される墨書が認められる。2は褐色砂出土の須恵器坏で、底部切り離しは回転ヘラ切り、無調整。青灰色を呈し、焼成良好である。5は住居跡に付設されているカマド内から出土した小型の土師器甕である。 底部より内湾して立ちあがり、ロクロ整形されている。色調は赤橙色を呈し、胎土に砂粒が多量に混入し、焼成は弱い。全体的にかなり磨滅が著しい。6はカマド東袖、7はカマド西袖に補強として用いられていた土師器甕である。6は底部より内湾気味に立ち上がり、体部は膨らみをみせ、頸部はゆるく「く」の字状に外反する。外面が口縁部より縦位方向にカキ目、内面は口縁部より横位方向にカキ目を施す。口縁部内外面はカキ目を施した後に軽く横ナデを行う。胎土に砂粒を多量に含み、焼成は良好である。全体に磨滅が著しい。7は頸部が「く」の字状を呈し、外面が口縁部より縦位方向カキ目、内面は口縁部より横位方向及び斜位方向にカキ目を施す。胎土、焼成共に良好で、器肉が厚く、安定感がある。3は須恵器台付坏。底部切り離しは回転ヘラ切り、高台を貼り付けた後に周縁部にナデを行う。青灰色を呈し、焼成良好である。10は小型の磨製石斧で、頭部が欠損。石質は緑泥片岩と考えられる。11は縦型の石匙で、石質は頁岩である。4、8はE地区で、4はAG－44グリッド、8はAI－48グリッド出土である。4は土師器皿の破片である。胎土に小石粒、砂粒を含み、焼成はやや弱い。8は土錘である。9はC地区北東部BF－80グリッド出土の砥石である。4面に使用痕が認められ、1面には刻線状の擦痕が著しい。石質は酸性凝灰岩である。



第6図　　昭和52年度分布調査出土古銭　　S＝½

第2節　A地区検出遺構と出土遺物

A地区飛砂層面から発見した遺構には主に、土壙墓、土壙、溝状遺構などがある。出土遺物は、表土、溝、土壙墓などから、土師器、陶磁器類、土製品、鉄製品、銅製品、石製品などが出土した。

検出遺構　（第7図）

1. 土壙墓（第8、9図、図版2、4）

ST 001　東西約1.2m、南北約1.24mの方形を呈する。深さは約18cmと浅い。底部は平坦で、覆土中には炭化した材が非常に多く含まれる。また焼土が混入し、壁際には厚く堆積している。土壙墓中には骨片が多量に入っている。

ST 002　東西93cm、南北約1m、深さ約16cmのほぼ円形を呈する。壁は底部からゆるく立ち上がる。覆土中には細かい骨片が認められ、焼土炭化材が混入する。また副葬品として二枚の「元祐通宝」が出土している。

ST 003　東西58cm、南北70cm、深さ52cmのほぼ円形を呈する。壁は底部からU字状をなしている。覆土中には、焼土、炭化材が混入し、特に炭化材が多量に含まれている。

ST 004　長径56cm、短径38cm、深さ約16cmの楕円形を呈する。壁は底部からゆるい傾斜をもって立ちあがる。

ST 005　長径70cm、短径48cm、深さ約14cmの楕円形を呈する。壁は底部からゆるい傾斜をもって立ち上がる。覆土中には焼土、炭化物が混入し、また骨片が認められる。

ST 006　長径1.16m、短径90cm、深さ約7cmの楕円形を呈する。非常に浅く、覆土中には底部についた状態で多量の礫が入っている。これらの礫には、焼けているもの、黒く炭化してススが付着し、真黒になっているものなどがある。また覆土中には焼土、骨片が多量に認められる。

ST 007　東西約82cm、南北約84cm、深さ約20cmの隅丸方形を呈する。壁は底部からゆるく立ち上がる。覆土中には、焼土、炭化材が多量に含まれている。また骨片が認められ、中には頭骨もみられる。

ST 008　東西約94cm、南北約82cmのほぼ円形を呈する。深さは約18cmと浅く、壁は底部から斜めに立ち上がり、上部で段がつきゆるくのびている。覆土中には焼土、炭化材を多量に含み、骨片が多量に認められる。また副葬品として「祥符通宝」、「元祐通宝」各一枚が出土している。

ST 009　長径約1.56m、短径約1mの楕円形を呈する。覆土には特に礫を多量に含み、焼土、炭化材が混入している。骨片も比較的多く認められ、「歯」もみられる。SD037と重複関係にあり、溝確認面では埋土が似かよっているため判別できないが、溝底部を掘り込んでいることから溝よりも新しいと思われる。副葬品として「皇宋通宝」が一枚出土している。

ST 010　長径約2.7m、短径は巾の広いところで約1.18mを計る。形状は一端がふくらむ長円形状を呈する。深さは約22cmで底部から壁にかけては船底状を呈する。骨片が認められる。

ST 011　長径約98cm、短径約60cmの楕円形を呈する。深さは約28cmで底部から壁にかけてはU字

第７図　Ａ地区検出　遺構図

状に立ちあがっている。覆土は上部に炭化物層があり、褐色、茶褐色砂が入っている。また焼土が混入している。

ST 012　長径約90cm、短径約56cmのほぼ楕円形を呈する。深さは約26cmで覆土は炭化物、焼土が混入した層が主で、褐色、黄色砂が入っている。

ST 013　東西約72cm、南北約64cmのほぼ円形を呈する。深さは約22cmで底部から壁にかけてU字状を呈する。覆土は黄褐色、炭化物層、茶褐色砂であり、焼土が混入している。骨片が多量に認められ、副葬品として「元豊通宝」が一枚出土した。

ST 014　長径約1.14m、短径約38cmの長楕円形を呈する。深さは約24cmで覆土中には炭化物が多量に含まれ、焼土も混入している。骨片が少量認められる。

ST 015　長径約1.5m、短径約92cmの楕円形を呈する。深さは約10cmと比較的浅い。覆土は黄褐色砂、褐色砂であり、炭化物が多量に含まれる。骨片が多量に認められる。副葬品として六文銭があり、「熙寧元宝」、「元祐通宝」、「元符通宝」、「洪武通宝」二枚、「紹聖元宝」が出土している。ST 016を切ってつくられている。

ST 016　ST 015に切られており、大きさは不明であるが、ほぼ楕円形を呈すと思われる。覆土は黄色砂、炭化物層があり、炭化物層は炭化物が充満しており、中には骨片が多量に認められる。

ST 017　長径約86cm、短径約44cmの長円形を呈する。覆土には炭化物、焼土が多量に入っており、また骨片が多く認められる。

ST 018　長径約1.48m、短径約88cmの楕円形を呈する。SD038と重複し、溝を切っていることからSD038より新しいと思われる。土壙墓内には土葬人骨一体が認められ、遺存部位は頭骨、顎骨、大たい骨の一部である。頭位は西南方向である。

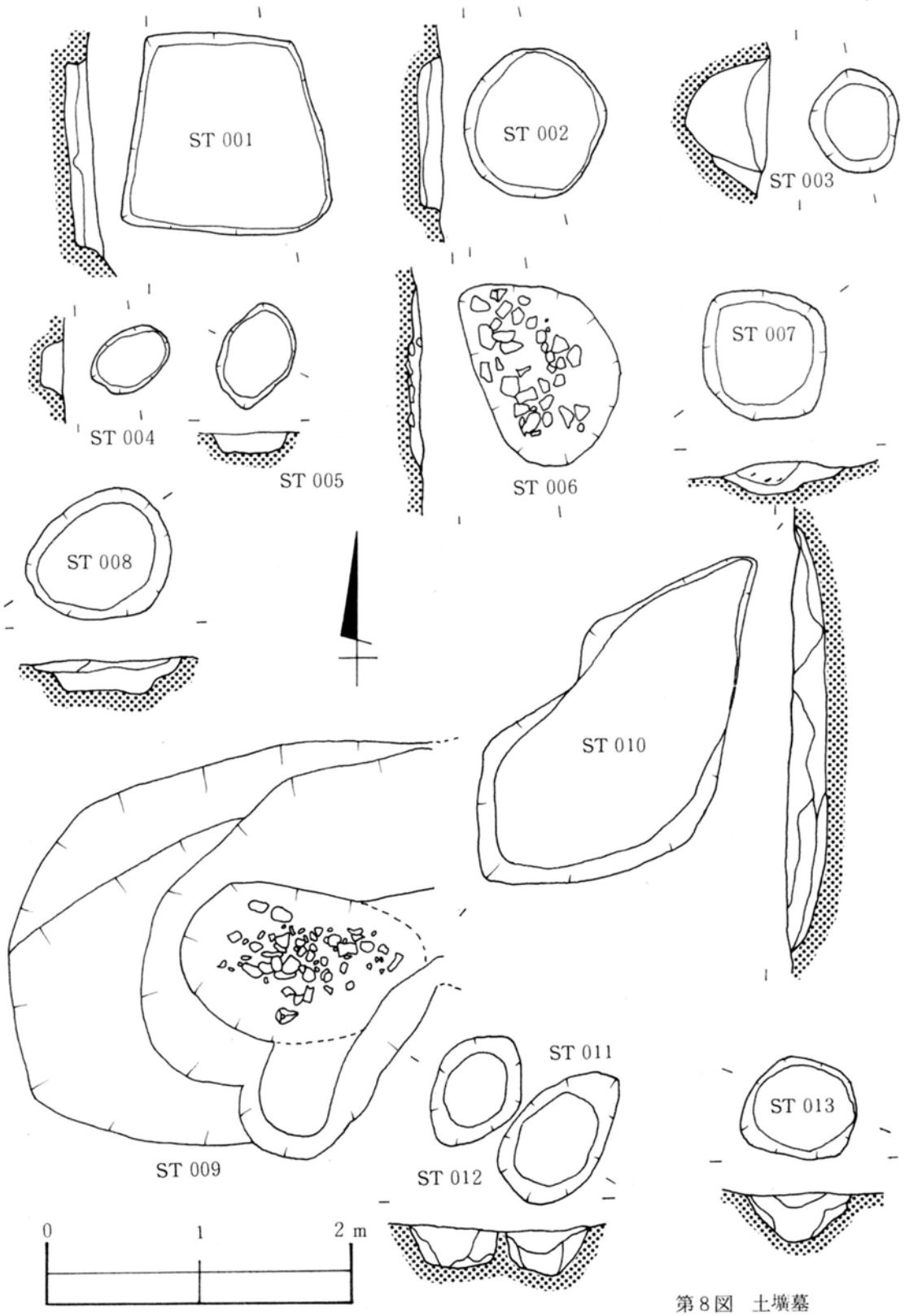
ST 019　東西約1.4m、南北約1.3mの不整円形を呈する。深さは約24cmで底部は鍋底状をなす。覆土中には炭化材、焼土を多く含み、小礫が混入している。骨片が多量に認められ、頭骨などがある。

ST 020　東西約1m、南北約88cmの不整円形を呈する。深さは約16cmと比較的浅く底部はほぼ平坦で、壁はほとんど垂直に立ちあがる。覆土中には炭化物、焼土が混入している。骨片が少量認められる。

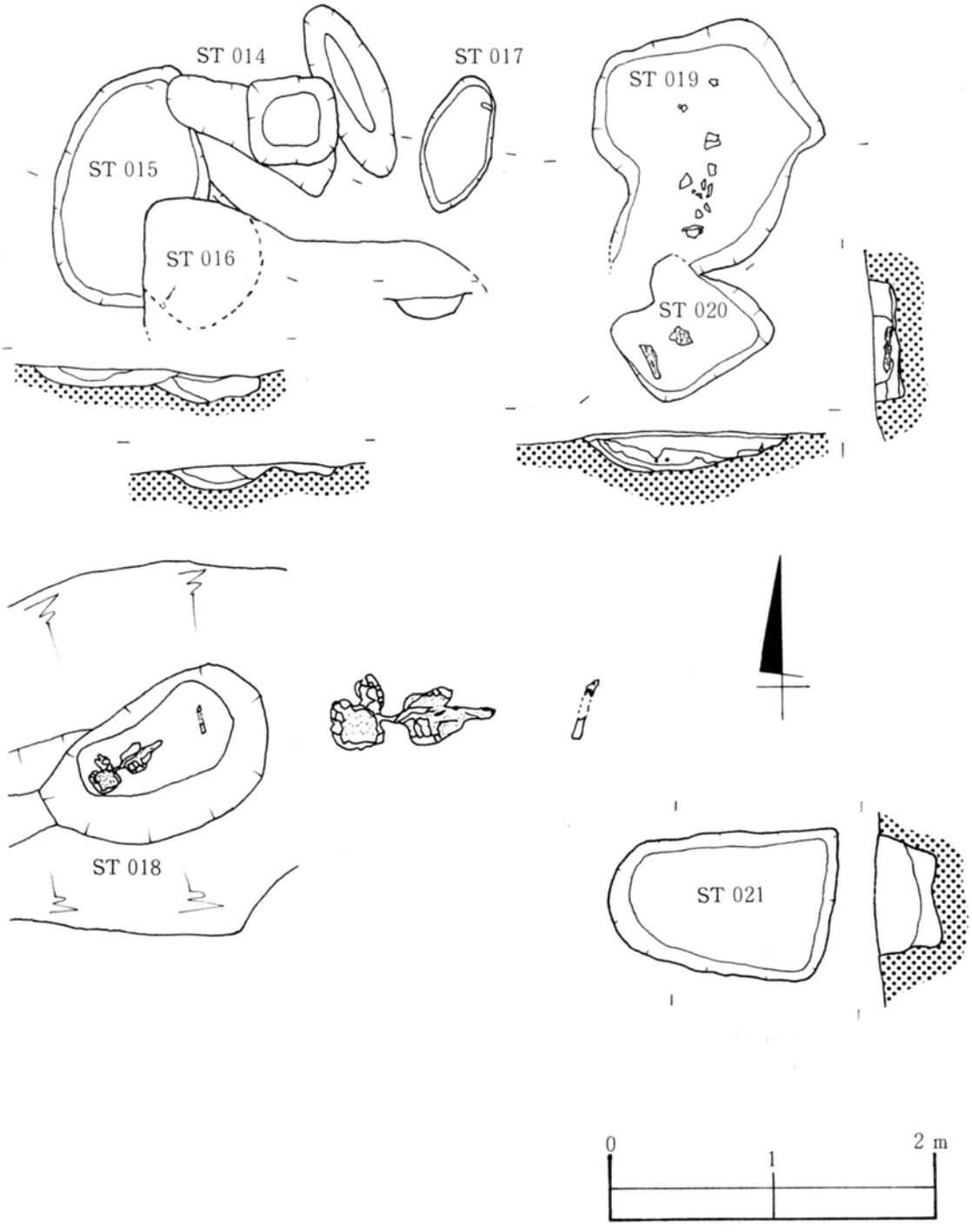
ST 021　東西約1.4m、南北約85cmのほぼ楕円形を呈する。深さは約34cmで壁は底部から若干斜めに立ち上がっている。覆土中には焼土、炭化物が含まれ、多量に骨片が認められる。下顎骨などがある。

2. 土　壙（第7図、図版2）

飛砂層面から13基の土壙が検出された。大きさは70cm～1m前後で円形、楕円形を呈するものが多い。深さは浅いもので20cm～30cm、深いものでは約50cm程ある。覆土は褐色、茶褐色砂が主体で黄色砂の混入するものもある。また中には、焼土、炭化物が混入している土壙もみられ、これら


ST 001
ST 002
ST 003
ST 004
ST 005
ST 006
ST 007
ST 008
ST 009
ST 010
ST 011
ST 012
ST 013
0
1
2 m

第8図　土壙墓



第9図　土壙墓

は土壙墓として考えることができると思われる。

3. 溝状遺構（第７図、図版２、３）

SD037、SD038、SD039、SD040の４本の溝状遺構を検出した。SD040を除き、東から西に向って走向し、調査区の中央部で止まっているようである。SD038は比較的深くしっかりしている。それぞれST009、ST018に切られている。SD039は広い部分で巾約60cm、深さは30cm～50cm程である。SD037中には、礫が混入し、また骨片が少量入っている。

出土遺物

土師器坏（第12図、図版42）

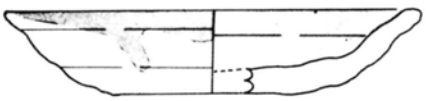
SD039から出土した破片である。口径約13、７cmで、底部は欠損して不明である。体部には稜をめぐらしており、稜から下方には細かいカキ目、内面には黒色処理を施している。

瀬戸、美濃（第10図、図版42）

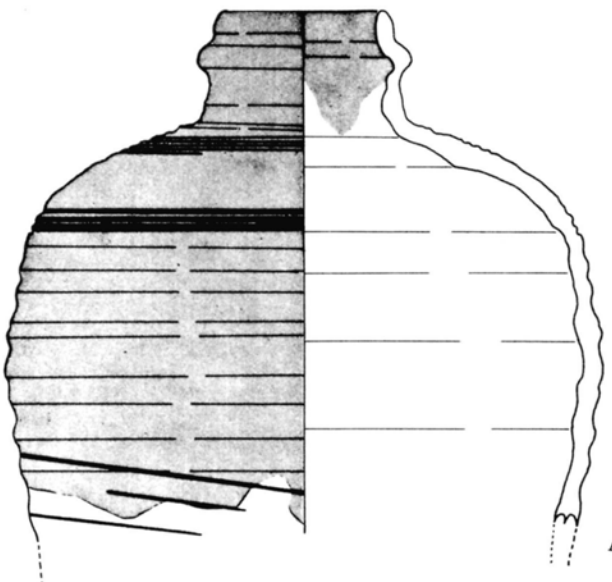
灰釉小皿、A－１は表土から出土した。口縁部内外、体部の一部に淡い黄緑色の釉をかけた小皿である。底部は回転糸切りである。A－２は撹乱土から出土した。口縁部内外面は淡い黄緑色の釉調を呈する。体部から底部は全面的に回転ヘラケズリを施し、高台はきれいに削り出してつくっている。A－３はST009から出土した。口縁部内外には淡い黄緑色の釉がかかっている。底部は回転糸切りで、丸みをもって立ちあがり体部に至る。

A－１

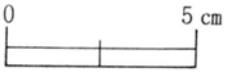
A－２



A－３

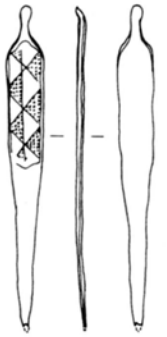


A－４



第10図　A地区出土遺物

梅瓶形瓶子、SD037から出土した。口径4.2cmで口頸部に縁帯が回る。張った肩部からゆるい丸みをもちながら底部に向っている。肩部、頸部付近に櫛状工具による沈線が回り、胴下半部にも同工具による調整が認められる。内面は全体に回転利用のナデがみられる。灰釉は外部全面、内部は口頸部にかかり、黄緑色の釉調を呈する。


A－10　⅓
第11図
A地区出土遺物

銅製品（第11図、図版42）

笄、飛砂層面から1点出土した。刀剣装具のうちの笄である。長さ12.8m、巾1.4cm、厚さ0.2cmで先端部が若干欠損するがほぼ完形品である。下り肩で一端はさかさ耳で耳掻きになっている。文様は中央部にあり、鋸歯状に区画し、交互に魚子を施している。

石製品（第12図、A－9、図版42）

SD037から掻器と思われるものが1点出土している。基部には打撃痕が認められ、片側面、先端部に剝離による加工が認められる。裏面にはほとんど加工が加えられていない。貢岩製である。

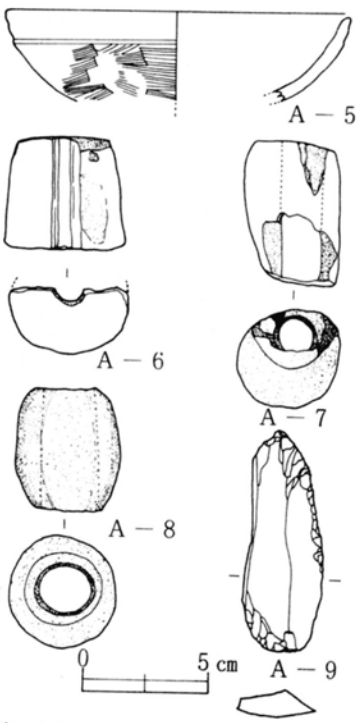
古　銭

各層位出土古銭（第13図、図版43）

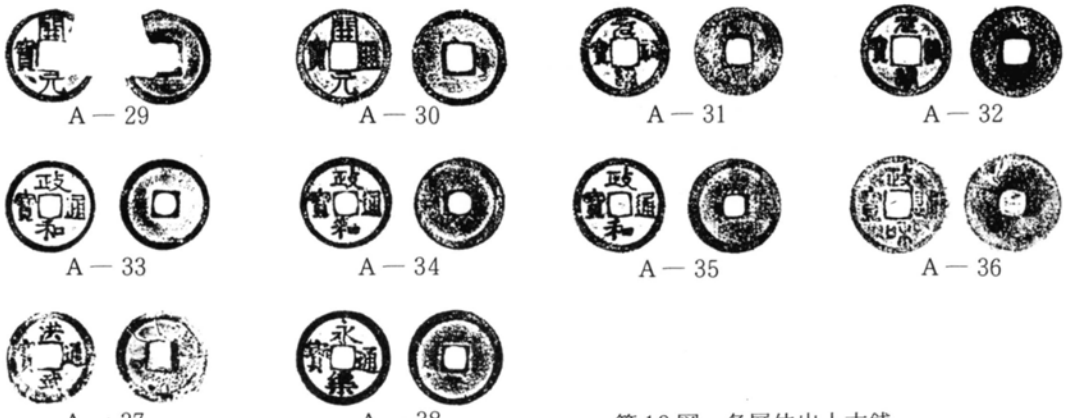
各層から五種十枚の古銭が出土した。字体別にみると楷書五枚、篆書三枚、隷書二枚である。北宋銭が最も多く、「政和通宝」が多く出土している。

土壙墓、落ち込内出土古銭（第14図、図版43）

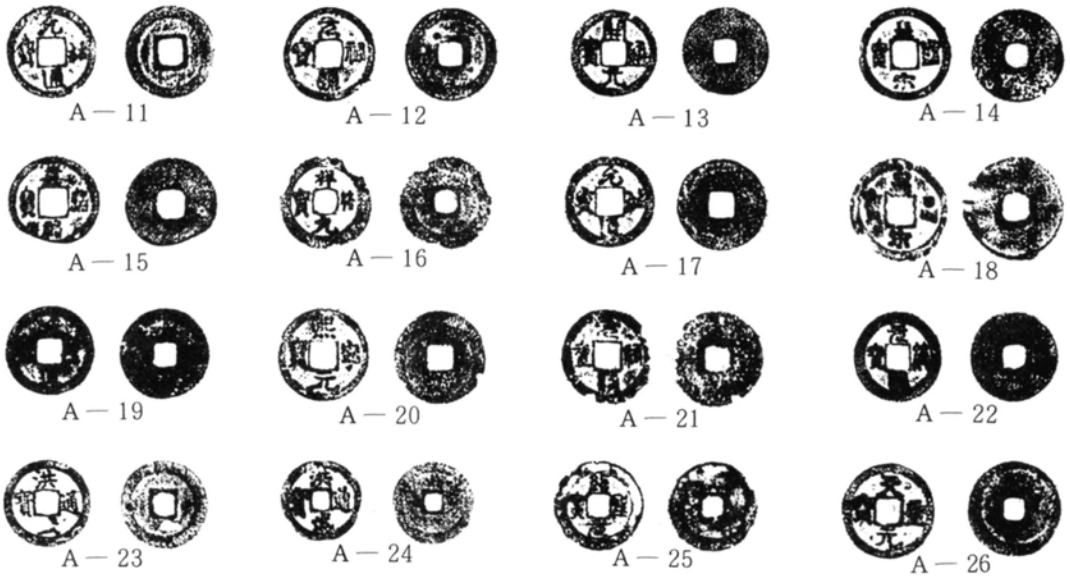
土壙墓の副葬品として、また落ち込み内埋土から各種の古銭が出土している。A－11、12はST002から出土した北宋銭「元祐通宝」である。A－13、14、15は、唐銭「開元通宝」北宋銭「皇宋通宝」「嘉祐通宝」でST006から出土している。ST008からはA－16、17、北宋銭「祥符元宝」「元祐通宝」が出土している。ST009からは北宋銭「皇宋通宝」一枚が出土している。A－19は北宋銭「元豊通宝」でST013から出土した。ST015からは北宋銭「熙寧元宝」「元祐通宝」「元符通宝」明銭「洪武通宝」二枚の計六枚が出土している。A－26、27、28は北宋銭「天聖元宝」「皇宋通宝」「元祐通宝」でSX042から出土した。以上の古銭はいずれも渡来銭であり、「寛永通宝」などの出土はなかった。



第12図　A地区出土遺物



第13図　各層位出土古銭



A—11、12— ST 002
A—13〜15— ST 006
A—16、17— ST 008
A—18— ST 009
A—19— ST 013
A—20〜25— ST 015
A—26〜28— SX 042
S＝½

第14図 土壙墓、落ち込み内出土古銭

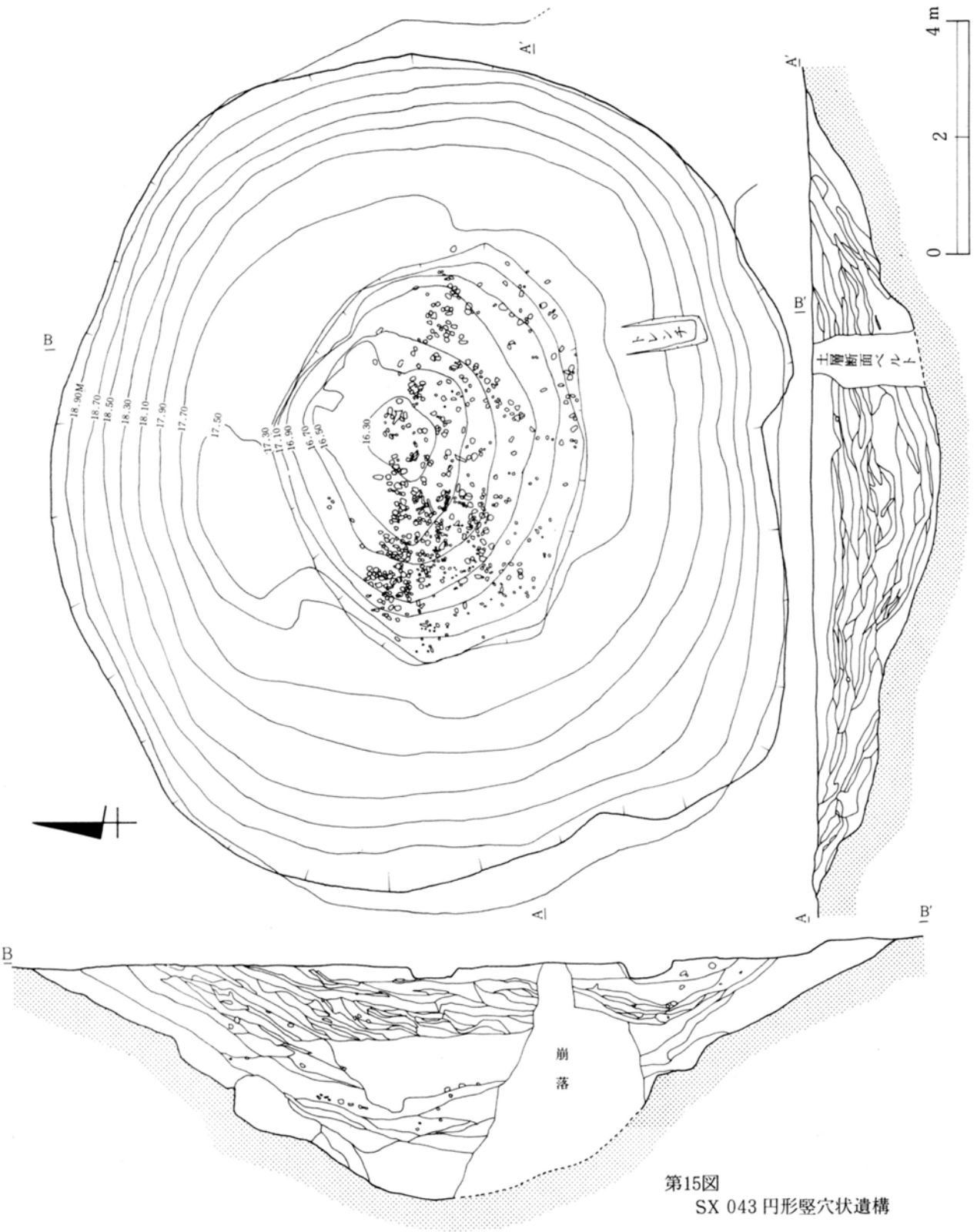
第3節　B地区検出遺構と出土遺物

B地区の飛砂層上面からSX043円形竪穴状遺構が検出された。また遺構内埋土から、須恵器、珠洲系陶器、瀬戸、美濃、青・白磁、染付、鉄製品、銅製品、石製品、古銭、漆器、木製品、犬・馬骨など多量の遺物が出土した。

検出遺構

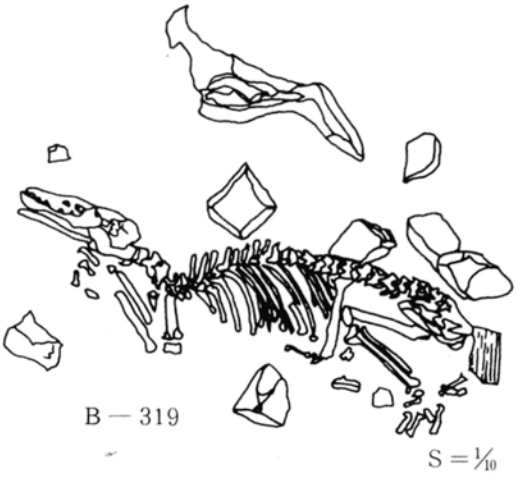
SX043円形竪穴状遺構（第15図、図版5）

東西約15m、南北約12m50cmのほぼ円形を呈する遺構である。深さは、最深部で確認面から約5.5m



第15図
SX 043 円形竪穴状遺構

である。断面形は底部からゆるい傾斜をもって立ちあがって擂鉢状を呈している。埋土は大分複雑に堆積しており、細部まで含めると80～84層位に分けられる。上面から２ｍ位までは主として黒色土、暗褐色土、灰褐色土、灰青色土がそれぞれ入り組んでうすく堆積し、泥炭化しているその下部には比較的厚く、粘性のある黒色土、黒色砂質土、褐色砂、黄白色砂、黄褐色砂等が堆積している。確認面から約1.2ｍ程掘り下げたところから下位は全面に鉄分を多く含んで酸化した、非常に固いガチガチした面である。埋土内には、こぶし大から人頭大の河原石が多く入っており、特に深さ1.2ｍ～1.4 ｍの面には多量に認められ、当初は敷きつめていたと思われる痕跡がある。しかしこれらの河原石の下からも遺物が出土することから多くは上部の石が崩落したものと思われる。遺物の多くは泥炭化した上部の埋土から多量の木製品、古銭、陶磁器、鉄製品等が出土した。また犬三頭分、馬の頭骨が出土している。本遺構は当初、河原石を敷きつめて、深さ1.2ｍから下位の鉄分が酸化した面には常時水を溜めていた施設と思われ、その後、二次的に不用な物の投棄場所に利用されたものと思われる。



第16図　SX 043 円形竪穴状遺構出土、犬骨

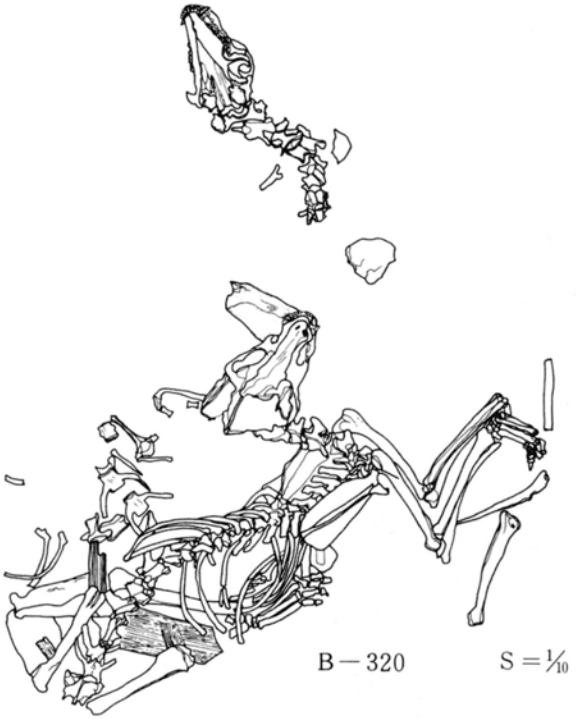
出土遺物

須恵器（第18図、図版44）

埋土から須恵器甕の口縁部片が２点出土している。B－37、38とも櫛状工具による波状文を施す。B－38は流水状を呈している。

瓦（第24図、図版48）

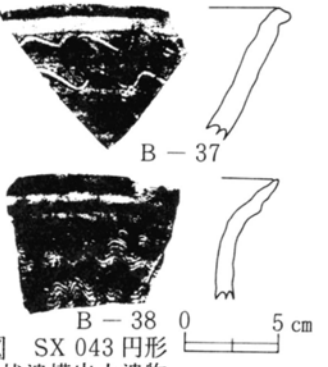
埋土から平瓦の破片が２点出土した。いずれも裏面は縄目の叩きを施すものである。



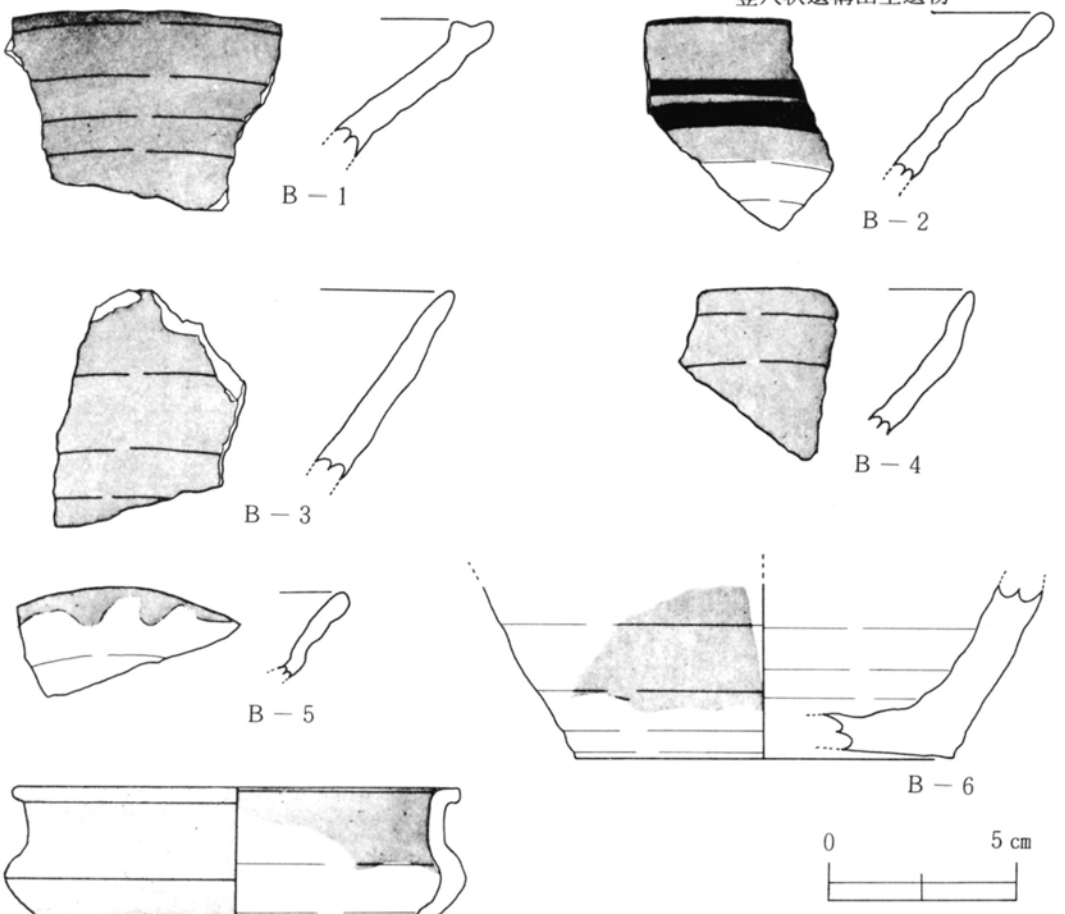
第17図　SX043円形竪穴状遺構出土、犬骨

瀬戸、美濃（第19図、図版43、44）

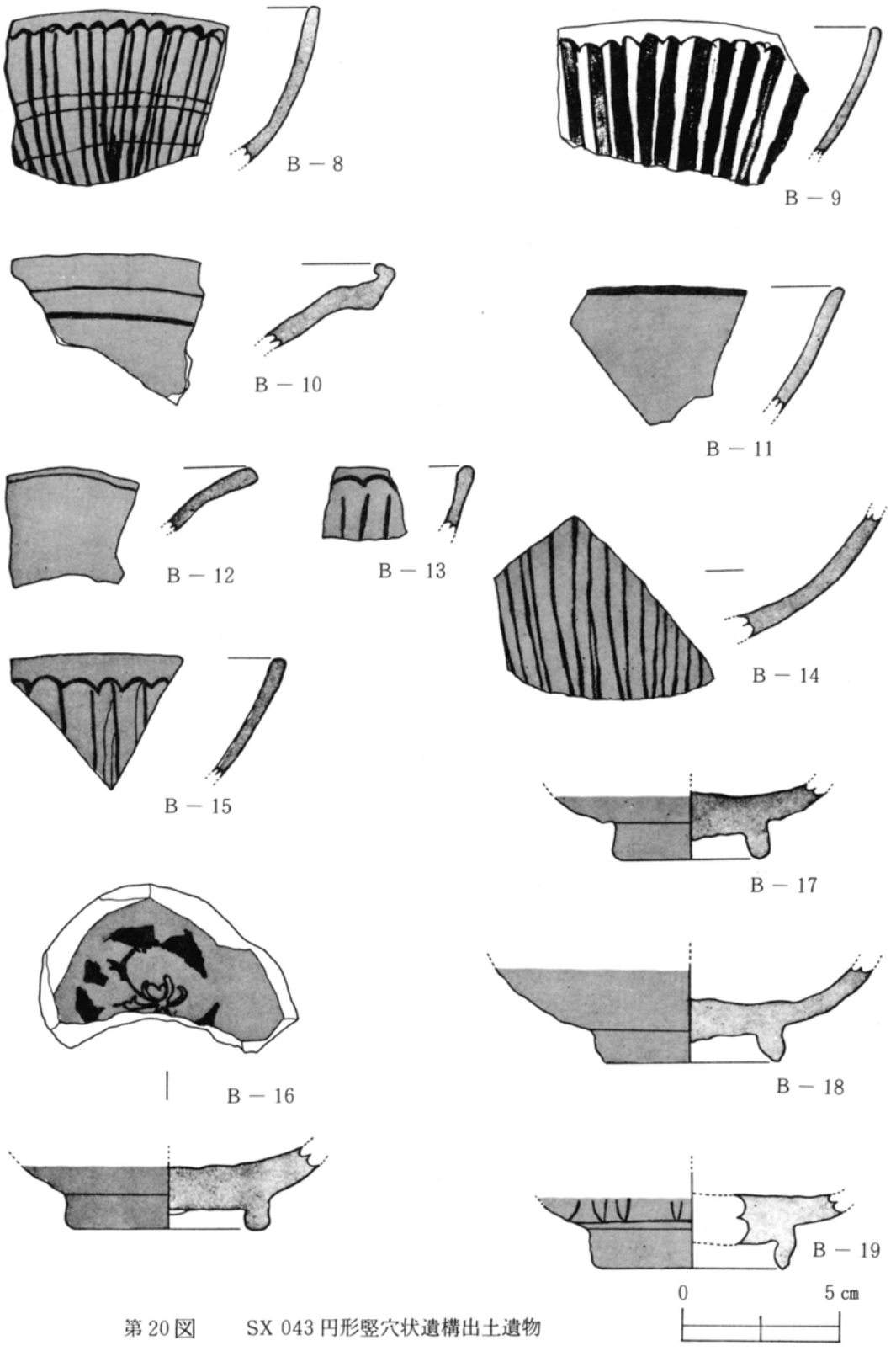
埋土から瀬戸、美濃と思われる破片が多数出土した。ここでは主なもの7点を図示した。B－1は盤と思われる口縁部破片である。灰釉であり、内外面は黄緑色の釉調を呈する。B－2は灰釉鉢の口縁破片である。釉は口縁部の一部内外面にかかっており、全体的に半透明な釉調をなすが、濃淡がみられ釉の厚くかかっているところは、うぐいす色を呈する。B－3は灰釉平椀の口縁部破片である。釉は淡い黄緑色の釉調を呈する。B－4は天目茶椀の口縁部破片である。釉は口縁部内外にかかり鉄釉である。B－5は小皿の口縁部破片である。B－6は壷と思われる底部破片で、回転糸切りである。外面は底部のやや上部から、内面は底部周縁に鉄釉がかかっている。B－7は香炉である。袴腰香炉で図上復元では口径11.7cm、器高4.5cmである。最大巾は口径部ではなく腰部にある。外へ屈折した平坦な口縁部をなす。底部は回転糸切りであり、3箇所に獣足がつく。光沢のある鉄釉が外面は胴部から



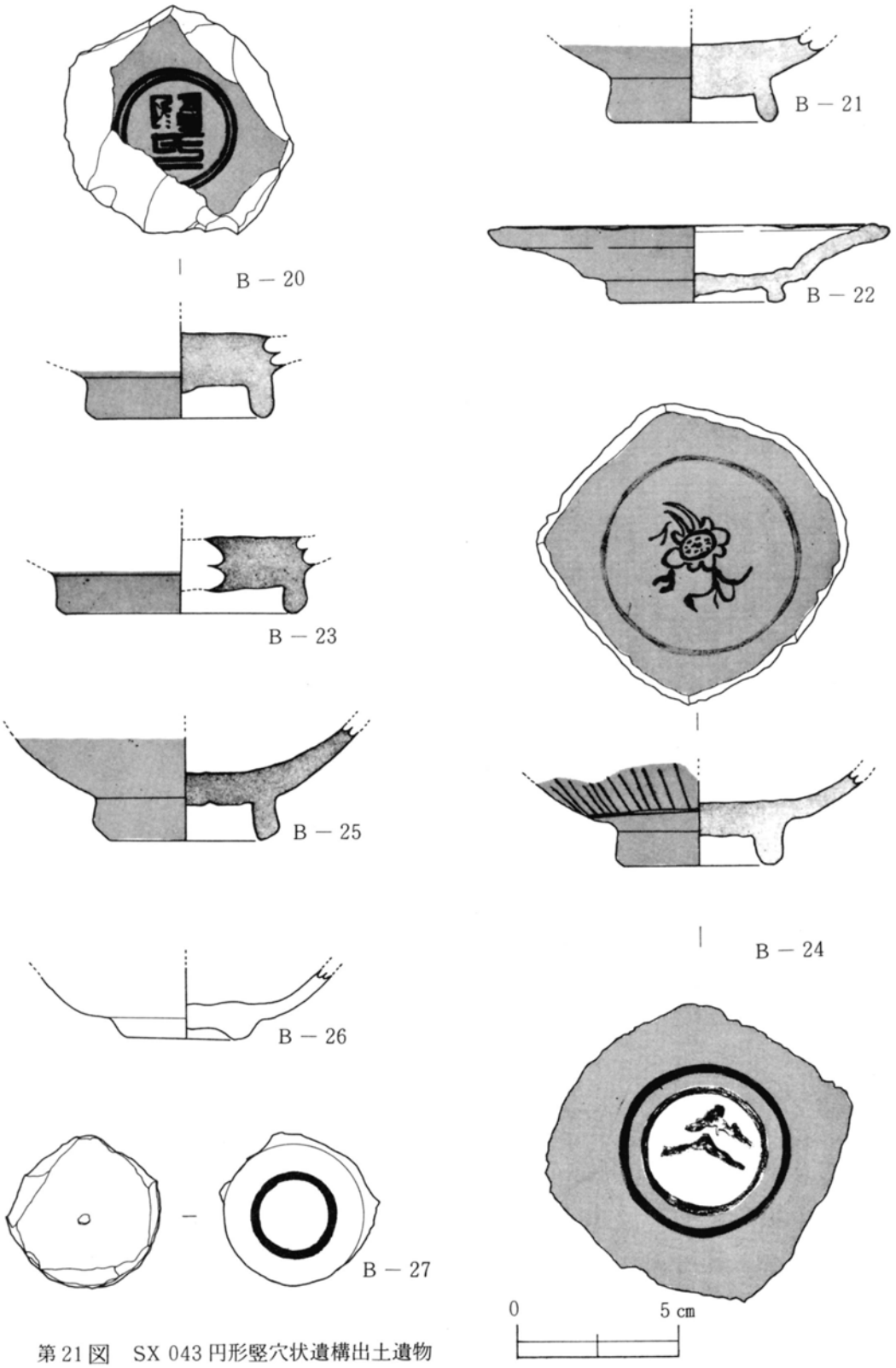
第18図　SX 043 円形竪穴状遺構出土遺物



第19図　SX 043 円形竪穴状遺構出土遺物



第20図　　SX 043 円形竪穴状遺構出土遺物



第21図　SX 043 円形竪穴状遺構出土遺物

口縁部に、内面は口縁部にかかっている。

青磁（第20・21図、図版44、45）

埋土から多量に出土した。ほとんど破損品であり、その中の一部を図示した。破片から器種を推定すると碗が最も多く、他に皿、盤などがある。

（碗）B－8、9、11、13～15は、口縁部、体部の破損品、B－16～21、B－23～25は底部の破損品である。B－8、9は巾の比較的狭い線刻による蓮弁文を有する。B－13～15は同様に線刻による蓮弁文を有するが、総じて線が細い。釉はB－8、9は黄緑色の釉調を呈する。B－9、14には貫入がみられる。底部破片は底径が5～7㎝のものがほとんどであり、B－16、24の見込み部には陰刻による花文を有している。B－20は見込み部に印刻による「顧氏」の文字がみられる。釉はB－16、20、21はオリーブがかった緑色、B－24は青緑色、他は灰緑色の釉調を呈する。

（皿）B－12、22は皿の破損品である。B－12は稜花皿の口縁部破片である。釉調は青緑色を呈する。B－22は口径12.5㎝、器高2.4㎝の稜花皿である。胎土は不良でレンガ色を呈し、釉もはぜており灰青色の釉調である。

（盤）B－10は盤の口縁部破片である。胎土は不良でレンガ色を呈する。釉調は黄緑色を呈する。

白磁（第21、22図、図版46）

白磁と思われる碗、小碗、皿が埋土から出土している。いずれも破損品である。

（碗）B－30は底部破片である。内面にはいわゆる猫掻の文様がみられる。釉調は灰白色を呈する。

（小碗）B－31は図上復元で口径7.7㎝、器高2.9㎝の小碗である。外面の底部には釉調は汚れた灰白色を呈する。

（皿）B－27～29、32は底部、体部の破片である。B－27は図上復元では口径11.8㎝を計る。釉調は灰白色を呈する。B－32は口径10㎝、器高1.9㎝の浅い小皿である。高台には抉りをもつ。釉調はアイボリーホワイトを呈し、底部内面には重ね焼きの痕跡が明瞭に認められる。

唐津系施釉陶器（第22図・図版46）

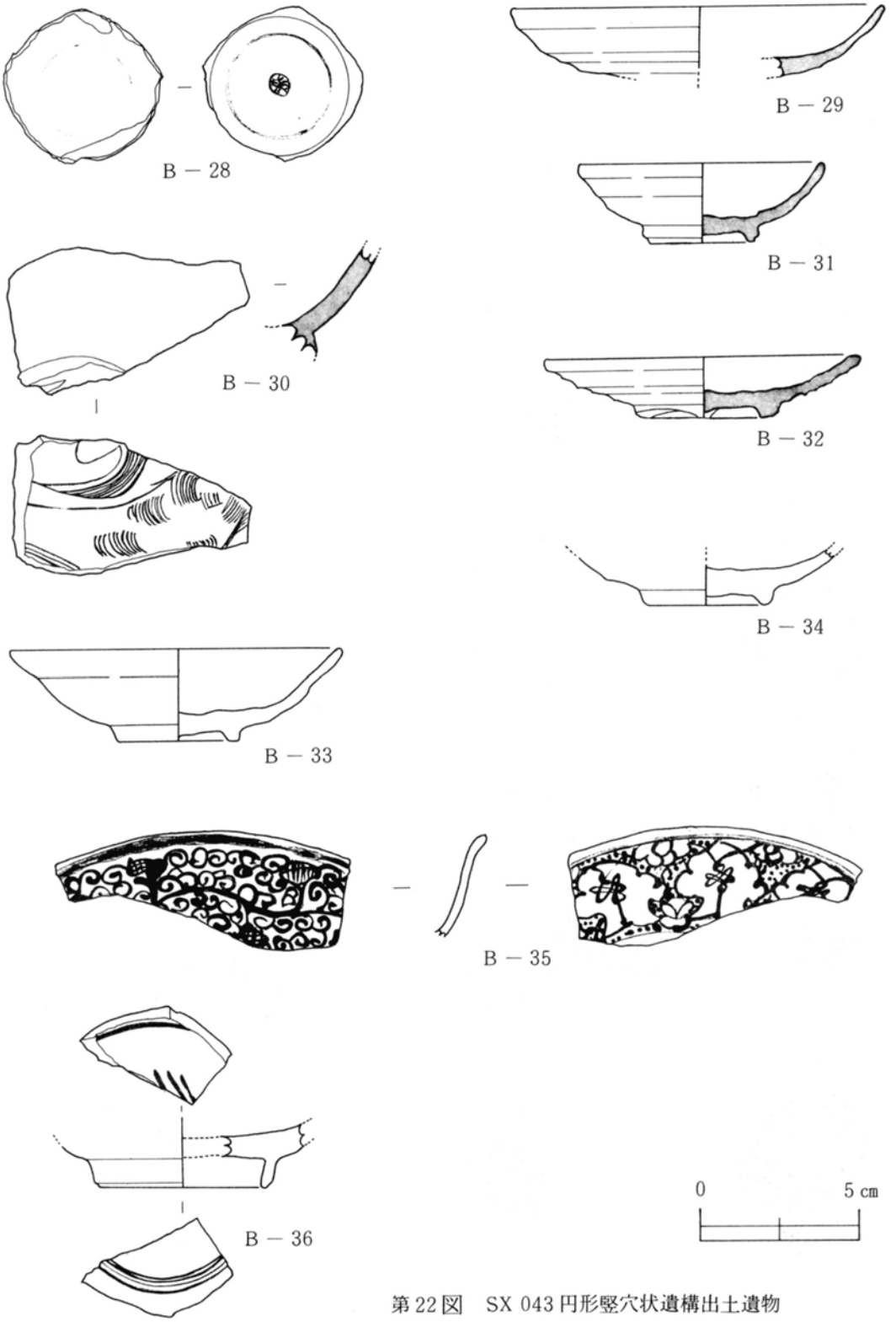
B－33、34は破損品であり、いずれも皿と思われる。B－33は図上復元で、口径10.4㎝、器高2.9㎝を計る。全体に釉がかかっており、釉調は灰緑色を呈する。また底部内面には重ね焼きの痕跡が認められる。

染付（第22図・図版46）

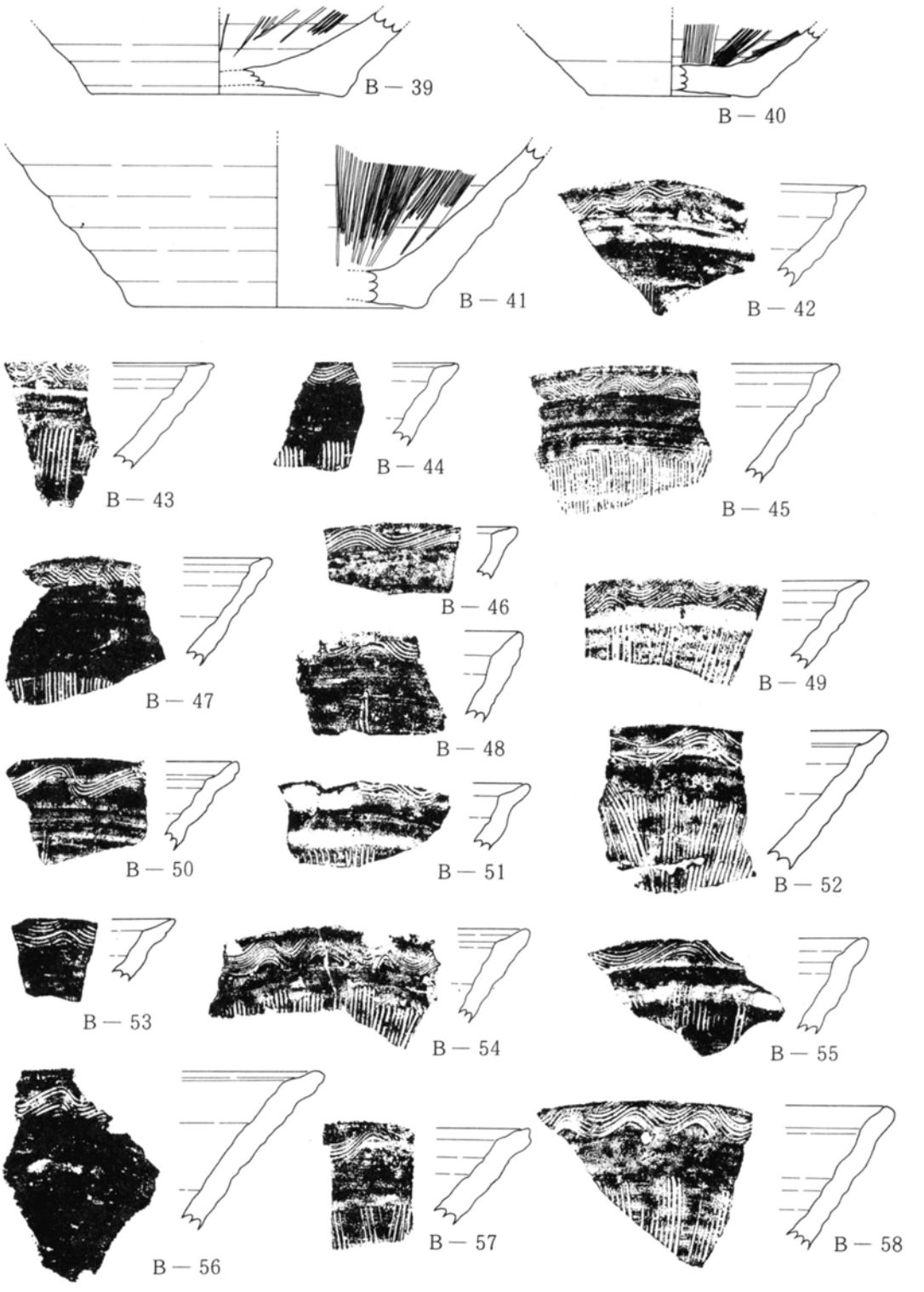
碗と思われる破損品が2点出土している。B－35は口縁部破片で、若干青みをおびた白磁に青藍色の呉須で外面には唐草文を描いている。

珠洲系陶器（第23・24図、図版47、48）

埋土から多量の珠洲系陶器が出土した。器種は甕、鉢であり、いずれも破損品である。ここでは良好なものを図示した。



第 22 図　SX 043 円形竪穴状遺構出土遺物



第23図　SX 043 円形竪穴状遺構出土、珠洲系陶器

（甕）B－59は甕の口縁部破片である。灰黒色の色調をなし、胎土中には小礫を多く含んでいる。頸部、口唇部にかけてはていねいな横ナデ調整を施している。短い口縁部は端部で丸みをおび、頸部から下方は内面に押圧具痕がみられ、外面は打圧具により3㎝当り7条ていどの叩きが施されている。

（鉢）B－39～41は底部破片を図上復元したものである。いずれも底部切り離しは静止糸切りである。B－39は底径約15.7㎝を計り、灰青色を呈する焼成良好な鉢で、胎土には若干小礫が混入している。内面の卸し目は櫛状工具によって施されるが、大分磨滅が激しい。B－40は底径約10.6㎝を計り、黒褐色の色調をなし焼成良好である。内面の卸し目は8条を1単位とした櫛状工具によって直線的に施されている。B－41は底径約18㎝を計り、灰黒色をなし焼成良好である。胎土中には大、小の礫が多量に混入している。外面には焼きぶくれや、割れがある。内面の卸し目は5～7条の櫛状工具によって施され底部周縁は磨滅している。B－42～58は口縁部破片の拓影図である。B－42～58は口縁部内面が若干内傾する面に櫛歯状結束による波状文をめぐらしている。B－47は特に波状文の波長が短い。B－42、45、48～58は、口縁を先細りにつくり、口縁端内面は長く内傾し、内くぼみのしっかりした面をもち、櫛歯状結束4～9条を1単位とする波状文をめぐらしている。櫛歯波状文には、波長間隔が4㎝前後（B－45、49、58）と2㎝前後（B－47）の比較的規則正しいものと、波長の不定なもの（B－54）、また波長がゆったりとうねるもの（B－50、52）などがある。内面の卸し目は櫛歯状工具によって直線的に施され、ほとんどが内面全体に施される。しかし、B－58は櫛歯状結束8条を1単位としてやや間隔をおいて施している。また卸し目は、口縁端部の波状文とあまり間をおかないで施すもの（B－43、49、50～55、58）と下方に下げて施すものがみられる（B－42、44～48、56、57）。B－42、55　56は卸し目がかなり磨滅している。色調は黒灰色、灰青色、灰褐色を呈するものなどさまざまである。焼成は黒灰色、灰青色をなすものが良好である。胎土中にはほとんどが大、小の砂礫を含んでいる。特にB－48、55は焼成不良である。またB－48、58は内面に自然降灰釉が粟粒状に付着している。

その他の陶器（第24図、図版48）

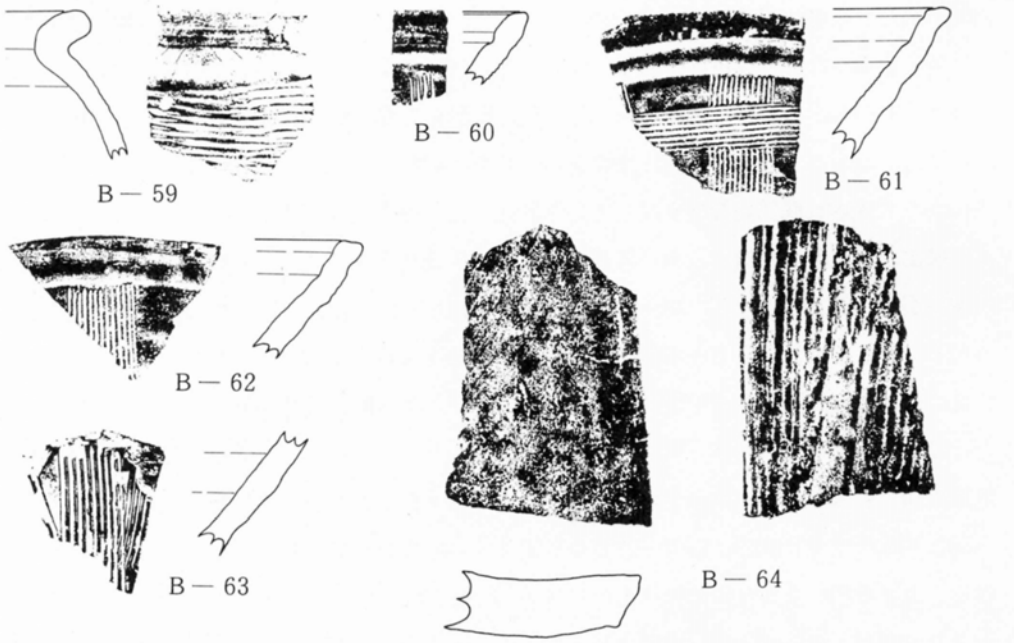
B－60～62は口縁部、B－63は体部破片である。B－60は黄橙色を呈し、焼成は良好である。口縁端部が若干内傾し、内面頸部には1条の凹線がめぐっている。卸し目は4条を1単位とした櫛歯具による深い櫛目文が施される。B－61は黄橙色、B－62は黄褐色を呈する。ともに口縁部はわずかに丸みをもち、端部はほぼ水平になる。卸し目はB－61は13条を1単位とする櫛歯具によって櫛目文が間隔をおいて施され、それに直行するように格子目状に横位に9条を1単位とする櫛目文を施している。B－63は赤橙色を呈し、焼成は良好である。内面卸し目は9条を1単位として櫛目文を間隔をおいて、深く施している。

瓦質土器（第25図、図版49）

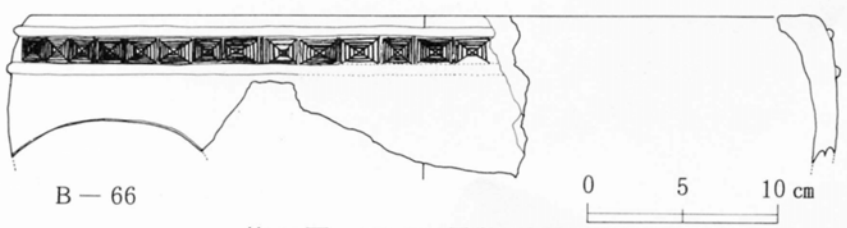
（火鉢）丸火鉢の破損品である。図上復元で口径約41.5cmを計る。黒色を呈し、全体に研磨されている。口縁部の下には2条の突帯が周り、突帯間には蜘蛛巣状の押印が連続してめぐっている。胴上部には窓が穿たれている。

鉄製品（第26図、図版49）

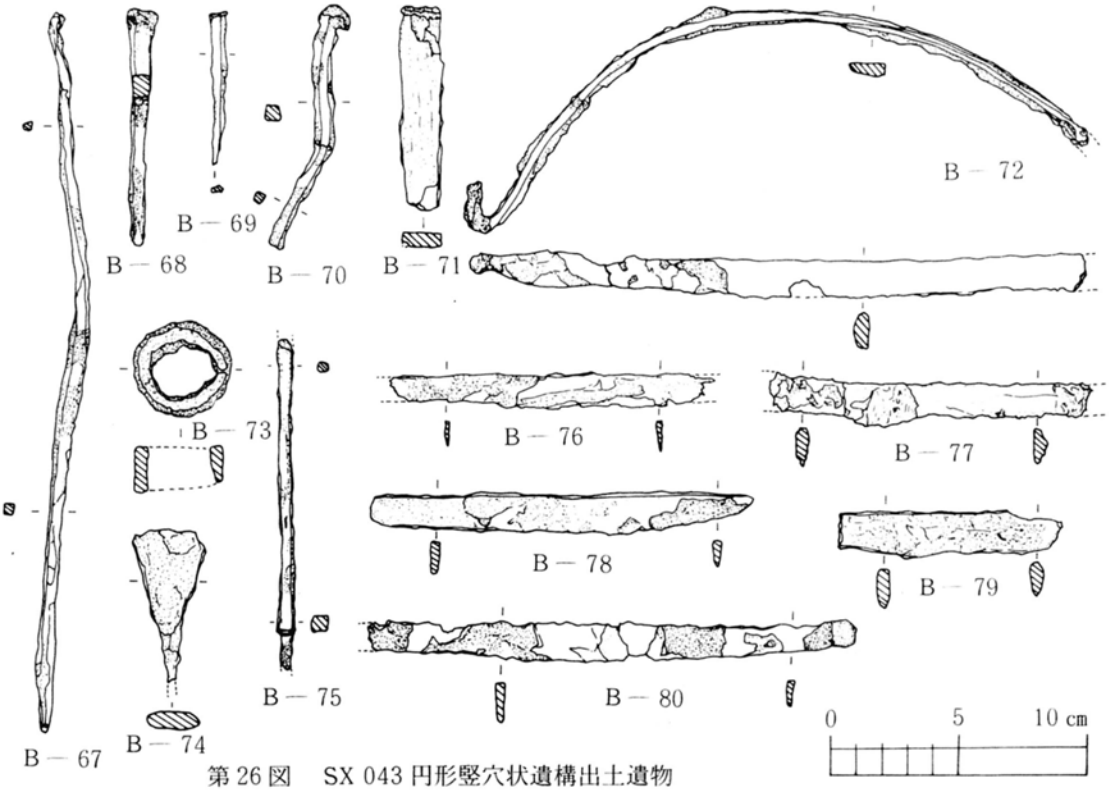
（火箸）B－67は、長さ約28cm、巾0.4cmの鉄製火箸と思われる。断面は方形を呈する。先端は細く



第24図　SX 043 円形竪穴状遺構出土遺物



第25図　SX 043 円形竪穴状遺構出土遺物



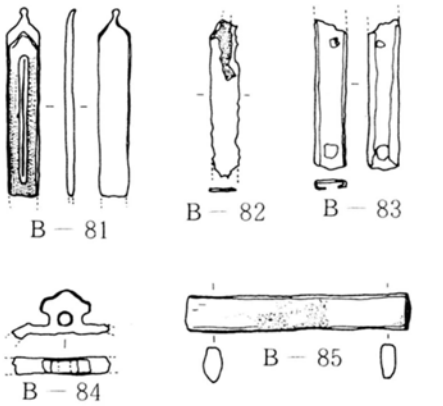
第 26 図　SX 043 円形竪穴状遺構出土遺物

尖らしている。基部は若干欠損しているが、丸く環状に折り曲げていたようである。

（鉄釘）B－68～70は鉄製釘である。いずれも叩かれてつぶれている。B－70は中程から折れ曲がる。

（取手）B－72は長さ 27.8cm、巾約 1.4cm、厚さ約 0.6cmである。一端は欠損しているが、半円形を呈て、端部を「V」字状に折り曲げ、掛けるようになっている。

（鉄鏃）B－74、75の二種類の鏃が出土した。B－74は茎の部分は欠損している。身の厚さ約 0.5mm とうすく、偏平な平根のものである。B－75は両端が若干欠損しているが、長さ約 12.6cm、巾約 0.6cmを計り、断面は方形を呈する。身と茎にわかれ、身の先端部は叩いて偏平にしている。



第 27 図　SX 043 円形竪穴状遺構出土遺物

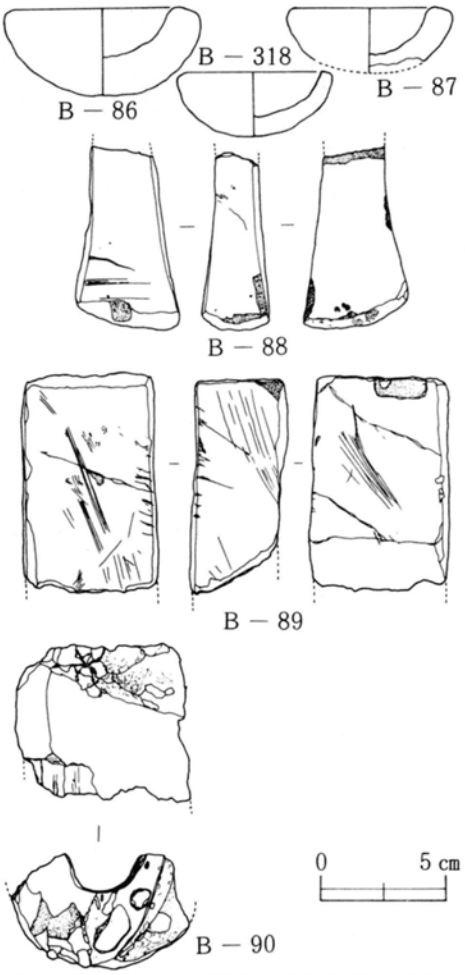
（刀子）B－76～80の 5 点を復元して図示した。B－78を除き他は欠損品である。B－78は長さ 14.6cm、厚さ約 0.4cmである。両区のようであり、身に比して茎が 9.2cmと長い。B－80は現長約19cmと比較的大型のものである。B－77は刃区であり、茎の部分に木部が若干残っている。鉄製品はいずれも腐蝕が著しい。

銅製品（第27図・図版50）

総数５点が埋土から出土した。

（笄）Ｂ－81、82の２点が出土した。Ｂ－81は刀剣装具のうちの笄である。現長 7.7㎝、巾 2.3㎝程で下り肩であり、一端は耳掻きになっている。文様は長さ約 5.2㎝、巾 0.3㎝で中央に溝を浮き彫りにし、外には魚子彫りを施している。Ｂ－82は現長 6.6㎝、厚さ約 0.1㎝程である。大分欠損し、緑青がういている。Ｂ－81はきれいな赤銅色をなしている。

（小柄）Ｂ－85は小柄の柄部である。現長約 9.4㎝、巾 1.4㎝、厚さ 0.8㎝程である。内部には柄に装着した刀身の茎が残っている。緑青が付着している。（不明製品）Ｂ－83はうすい銅板を両側に折り曲げたもので、二ケ所に穴を穿っている。Ｂ－84は長さ約４㎝、高さ 1.8 ㎝、厚さ約 0.6 ㎝程である。中央に径 0.6 ㎝程の穿孔がある。



第 28 図　SX 043 円形竪穴状遺構出土遺物

土製品（第28図、Ｂ－86、87、318、90、図版50）

埋土から坩堝、フイゴ羽口が出土した。Ｂ－86、87、318 は坩堝である。Ｂ－86、87は破損品であり、図上復元した。いずれも赤褐色をなし、口縁部、内部はガラス状になっている。Ｂ－318 は口径 6.1㎝の完形品である。口唇部はとけてガラス状になり、赤褐色を呈している。Ｂ－90はフイゴ羽口の破損品であり、先端部はかなり焼け、鉄滓が大分付着している。

石製品（第28図、Ｂ－88、図版50）

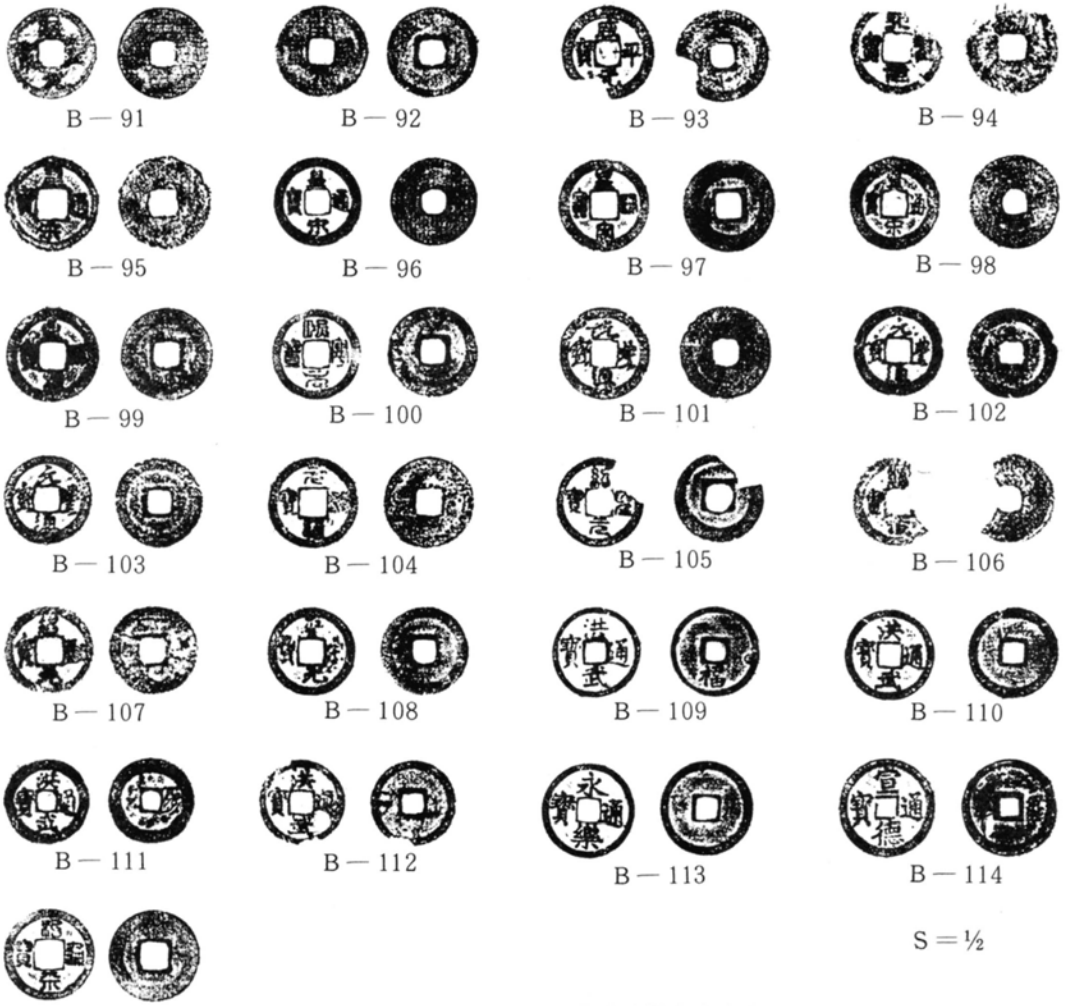
埋土から携帯用砥石が２点出土した。Ｂ－88、89とも欠損品である。いずれも４面使用で石質は凝灰岩である。

古銭（第29図、図版50）

埋土から十四種二十五枚の古銭が出土した。書体別にみると楷書体が十枚と最も多く、次に篆書体五枚、隷書体二枚の順である。内訳は、唐銭二枚、北宋銭十七枚、明銭六枚で、北宋銭が多く、中でも「皇宋通宝」、「元豊通宝」、「紹聖元宝」が多い。明銭では「洪武通宝」が多く、中には「福」、「一銭」の背文があるものもある。

木製品（第30～47図、図版51～66）

埋土から多量の木製品が出土した。図示したものの多くは破損片や製品の一部であり、機能、用



第29図　SX 043 円形竪穴状遺構出土古銭

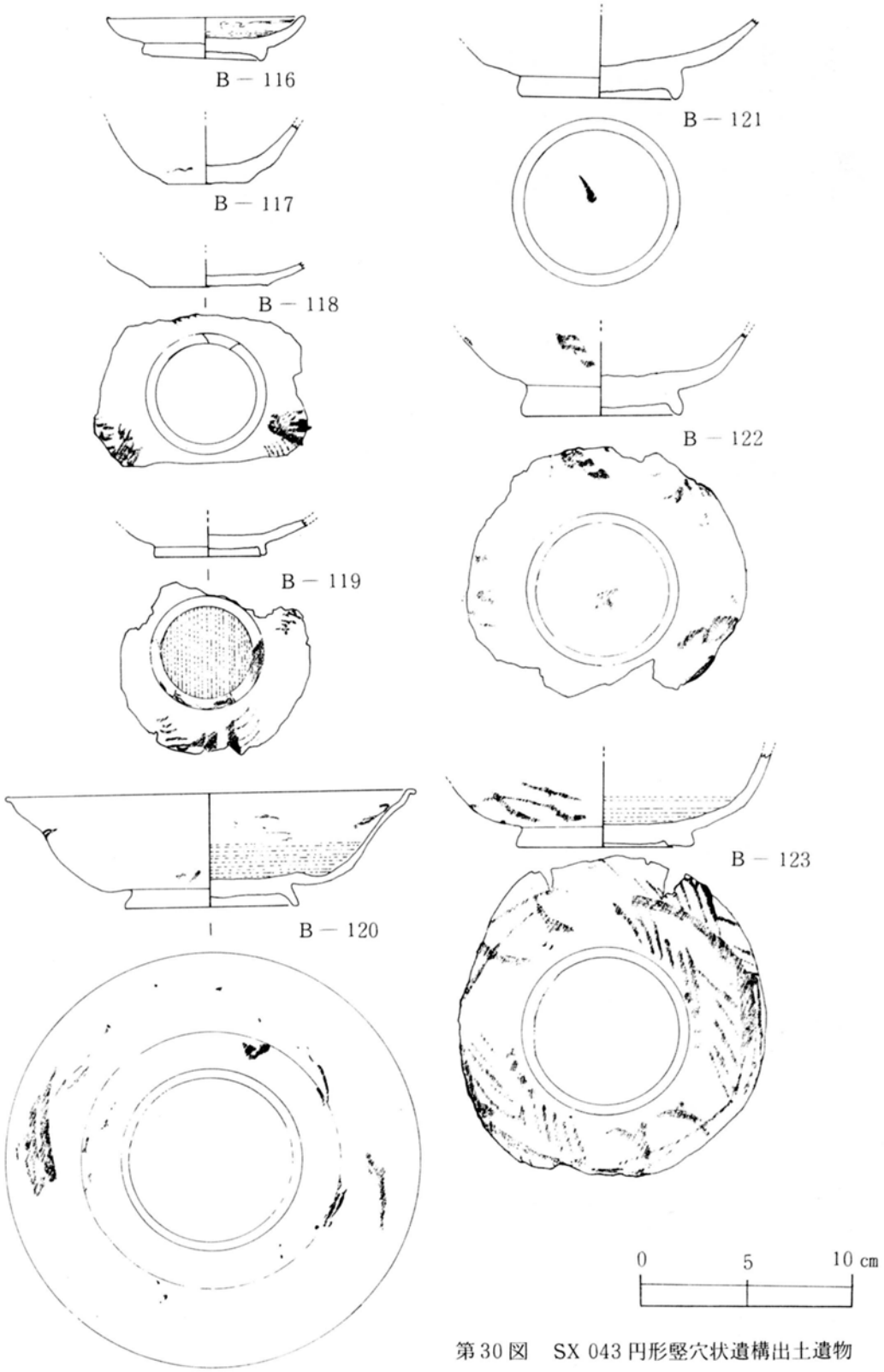
途の不明確なものも多数ある。以下生活機能的に分類し、述べてみたい。

1）食関係用器

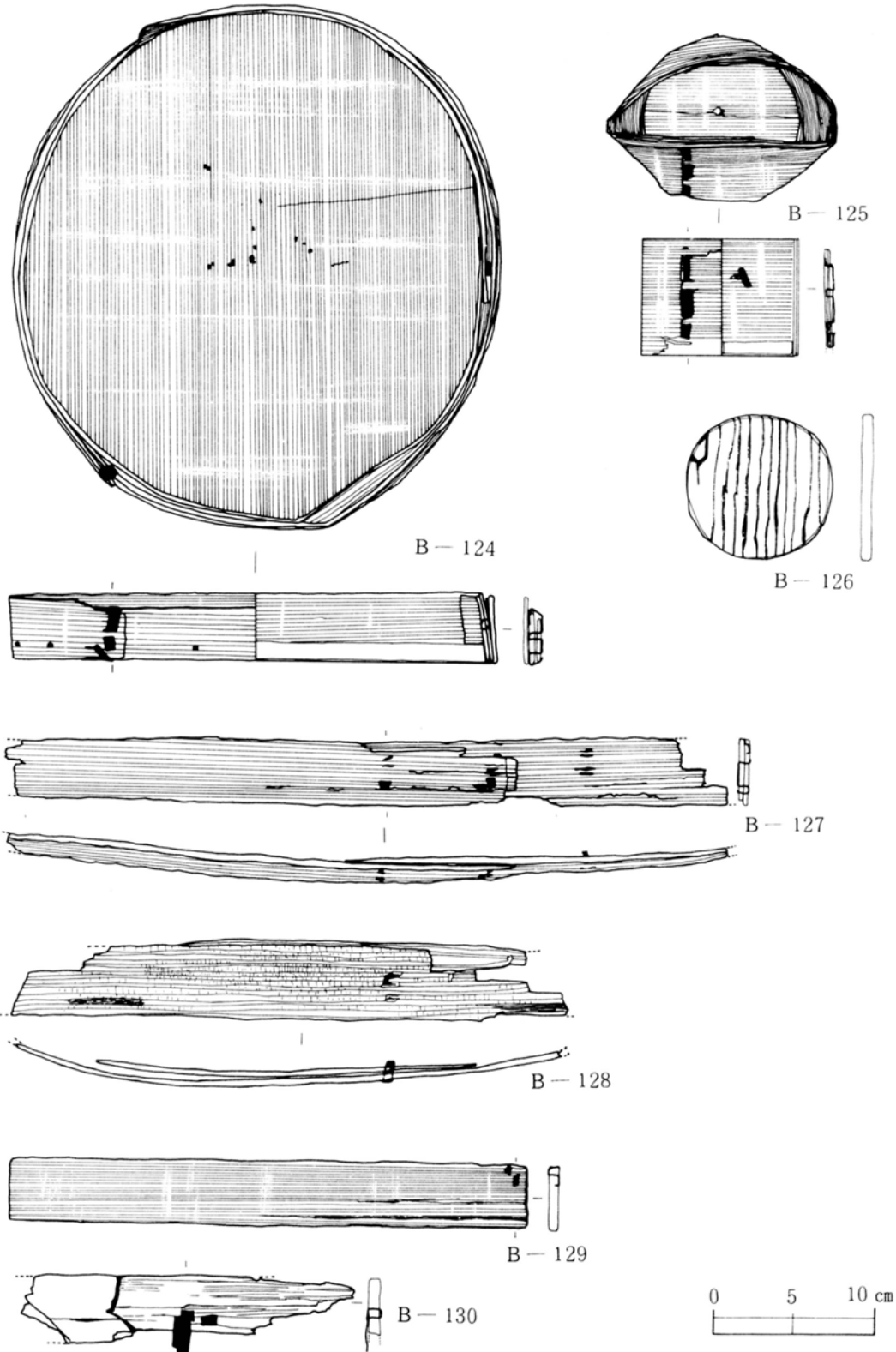
漆器　（B－116～123）、8点を図示した。他にも底部、体部の破片、細片や漆の剝落したものなどが多く出土している。器種は、皿が2点、うち1点（B－116）は完形品である。椀が6点である。いずれも外面は黒漆、内面は赤、朱漆が塗布されている。また外面には赤漆で上絵がつけられるが文様は不明のものが多い。

曲物　（B－124～130）、破損品、底板を含めて7点出土している。B－124、125は完形品である。B－130を除き柾目板を使用し、二重、三重に巻き、桜皮でとじている。

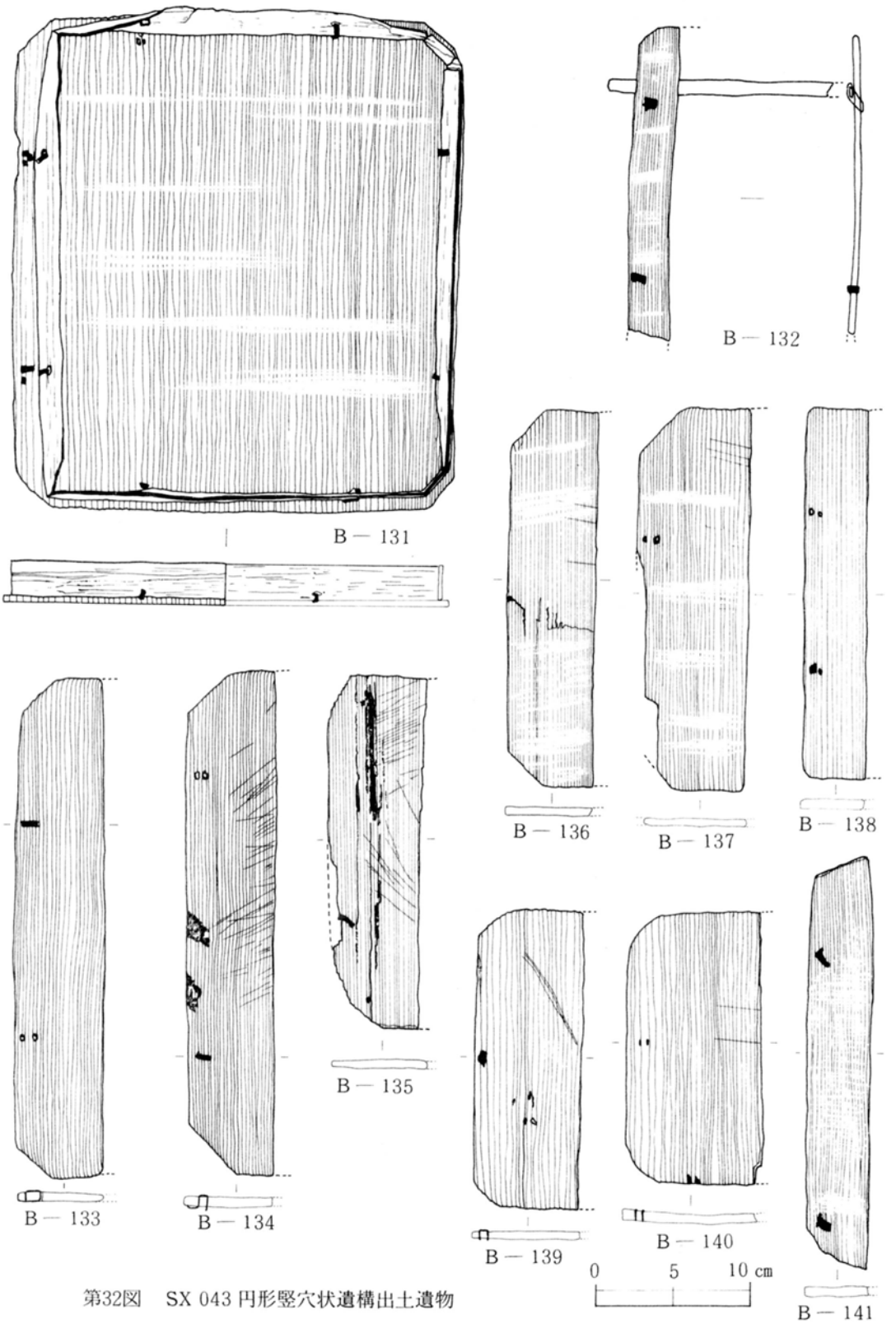
折敷　（B－131～162、165、170～172）総数42点が出土している。ほとんどが破損品で折敷の底板である。いずれも角折敷である。B－131は完形品である。今回出土の折敷は、辺の長さをみると、4寸のもの1点、5寸5分前後が3点、6寸前後8点、7寸前後7点、7寸8分前後が



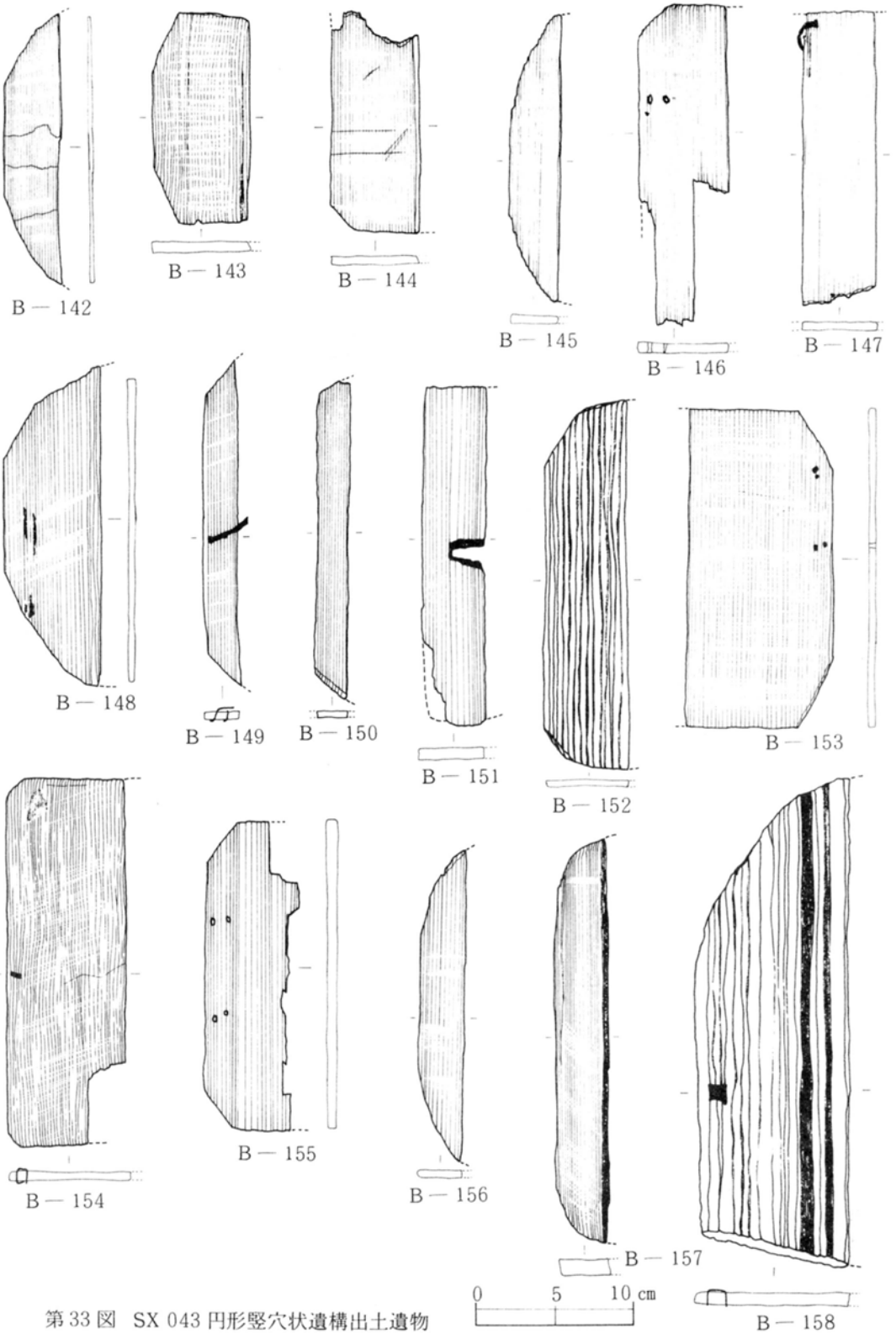
第30図　SX 043 円形竪穴状遺構出土遺物



第 31 図　SX 043 円形竪穴状遺構出土遺物



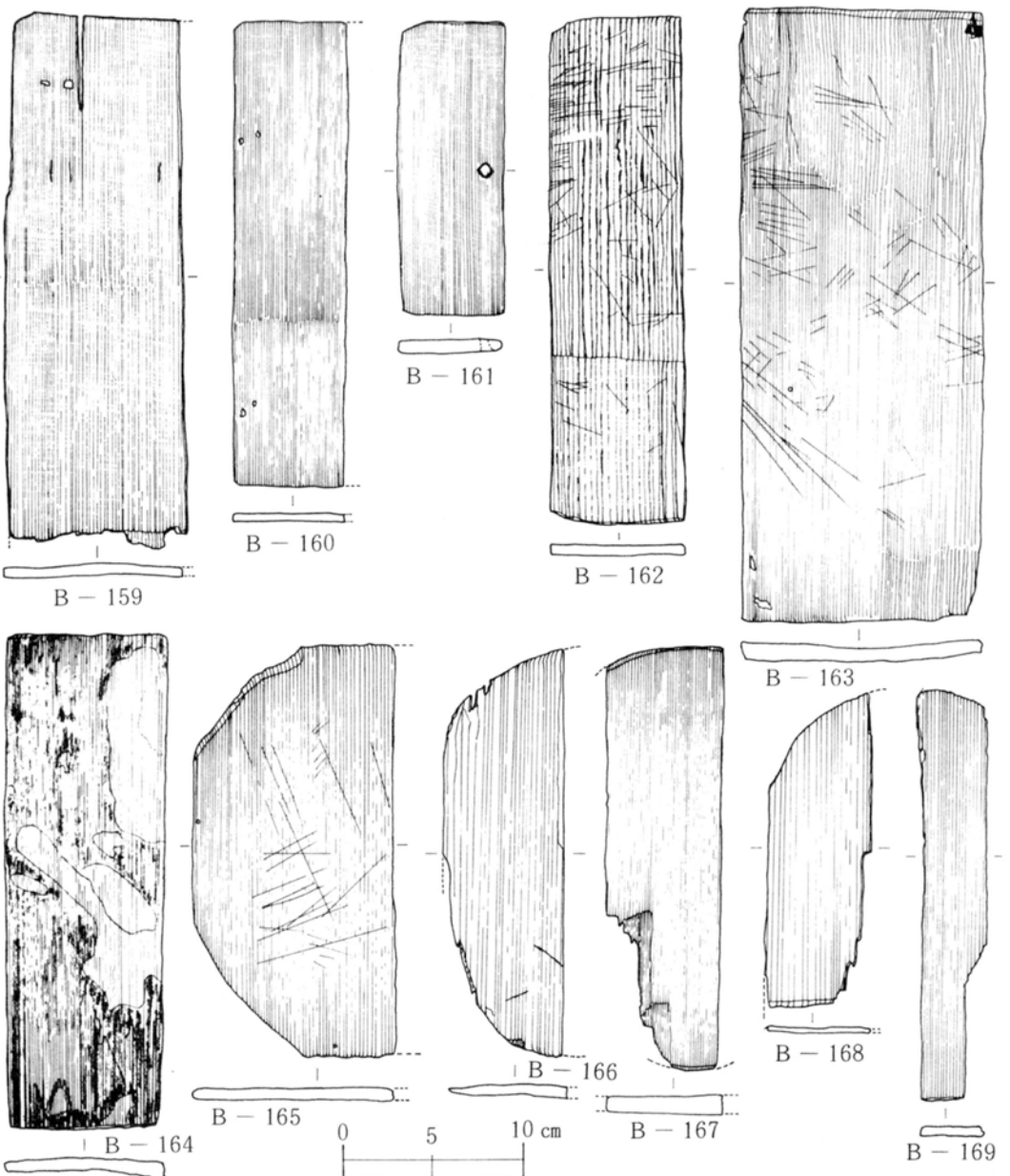
第32図　SX 043 円形竪穴状遺構出土遺物



第33図　SX 043 円形竪穴状遺構出土遺物

5点、9寸5分前後3点である。このことから6寸、7寸前後のものが主に使用されたと思われる。底板の多くは、一辺上にとじるための小孔が1対づつ2ケ所に穿たれている。

箸（B－210～229）、多量の箸が出土した。若干形は変形しているが、完形品だけでも529本を数える。これらの箸はいずれも両端を細く尖らしたり、先端を切断するもので面取りを施している。完形品について寸法をみてみると、長さ20cm～30cm前後が最も多く、全体の9割以上を占める。26cm～29cm前後のものが8本、30cm～35cm前後のものが5本を数える。26cm～35cm前後の箸は菜箸、魚箸と考えられる。



第34図　SX 043 円形竪穴状遺構出土遺物

柄杓　（B－182）、漆器椀を利用して作った柄杓が1点出土している。

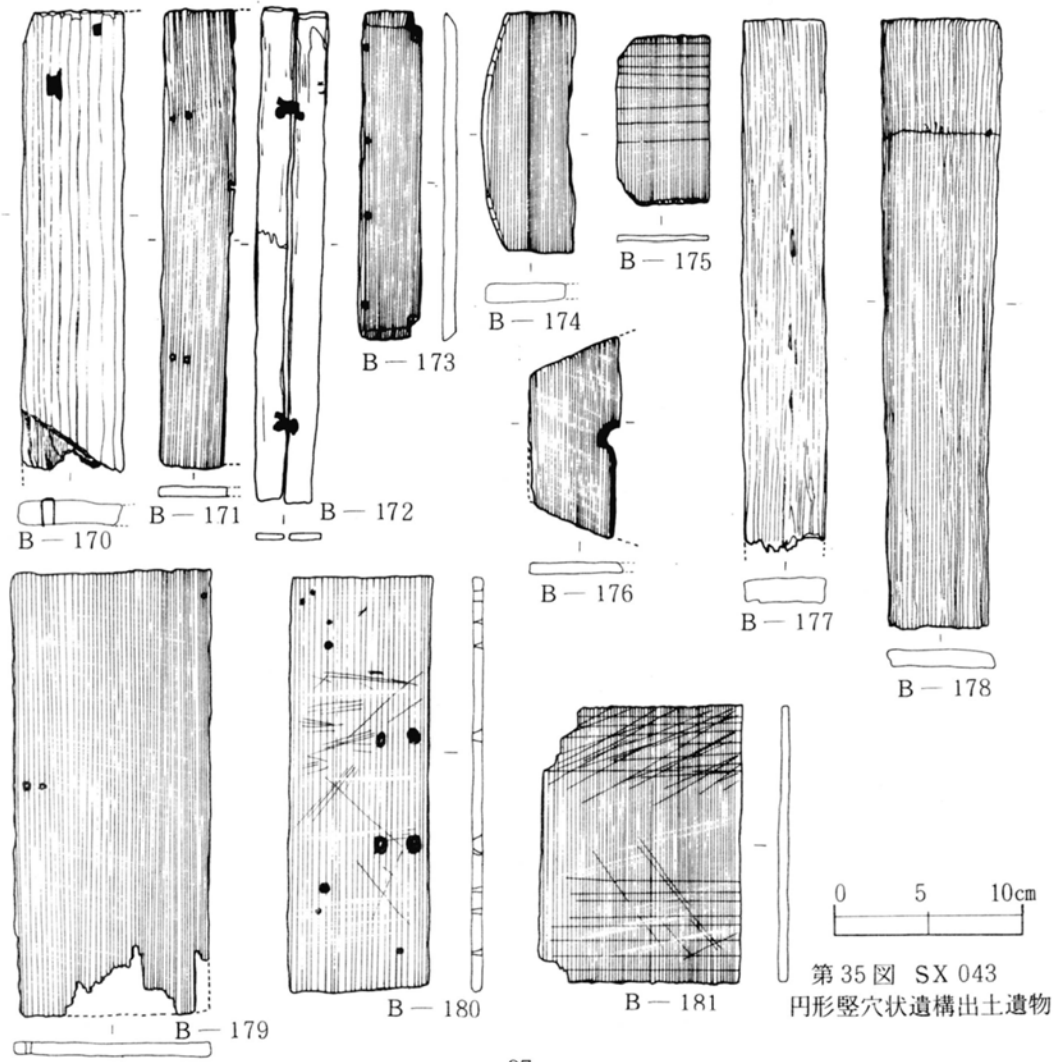
ヘラ状木製品　（B－169、183～188）、7点出土している。両面を切り落して加工したもの（B－183、184）と片面を切り落して加工したもの（B－169、185～188）がある。

取手　（B－189）、取手が1点出土した。着装部分は簡単にはずれないように加工されている。

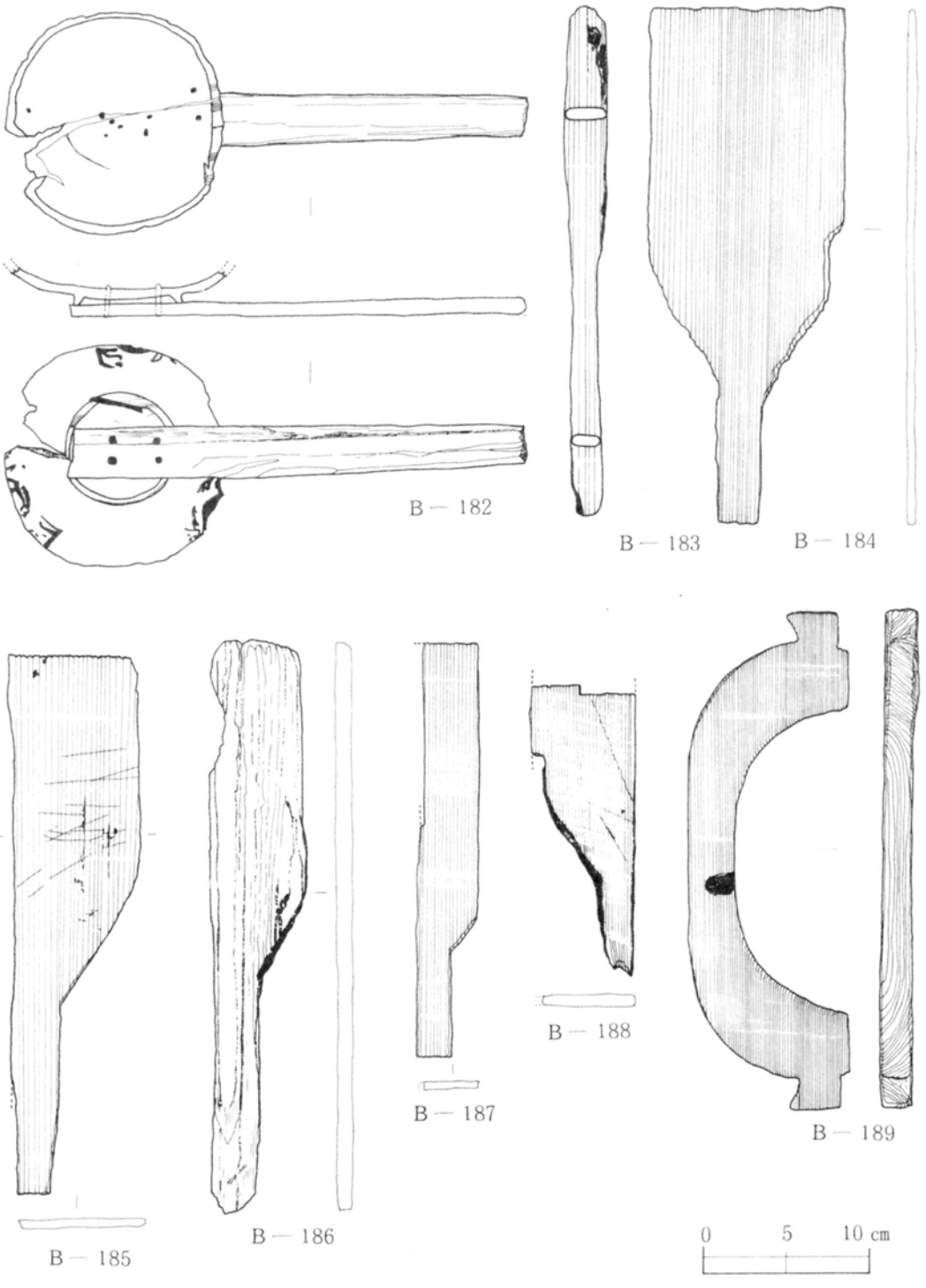
底板　（B－166～168、190～206）、17枚出土している。破損品がほとんどであるが、完形品も3枚ある。端部を桜皮でとじたものと、そうでないものに大きく分けられる。いずれも円形に切り落し、周縁部は若干台形状に加工される。底板の中には曲物の底板も含まれていると思われる。

蓋　（B－207～209）、3点出土しているが、いずれも破損品である。中央端部に切り込みを入れたものや、中央部に穴を穿っているものなどがある。また、柄を挿入しているものもある。

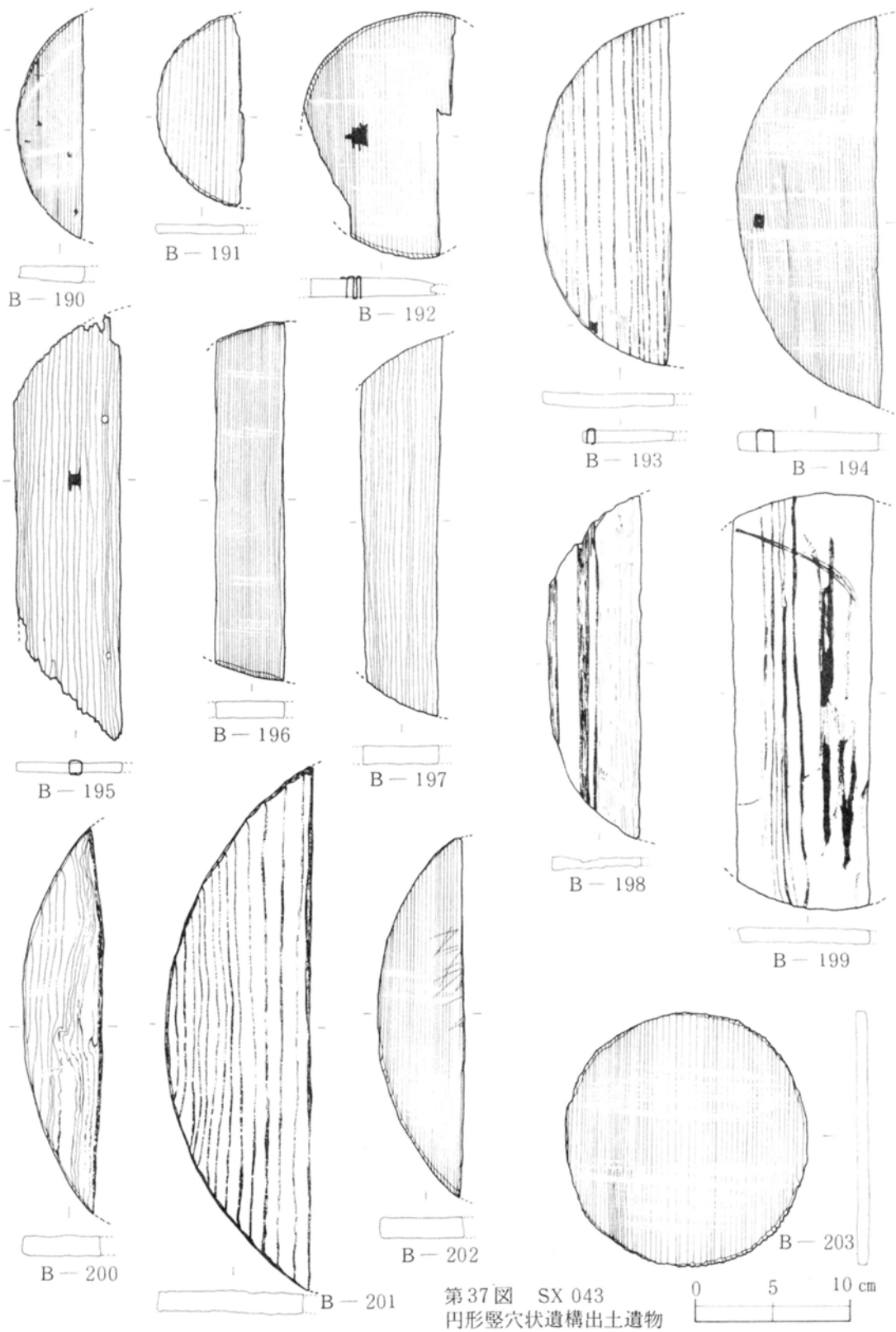
桶の側板　（B－163、164、177、178）、4点出土しており桶の側板の一部と思われる。いずれも若干内反りしており、全面に漆の塗布されたもの（B－164）や何か巻きつけた痕跡のみられるもの（B－178）などがある。



第35図　SX 043
円形竪穴状遺構出土遺物



第36図　SX 043 円形竪穴状遺構出土遺物



第37図　SX 043
円形竪穴状遺構出土遺物

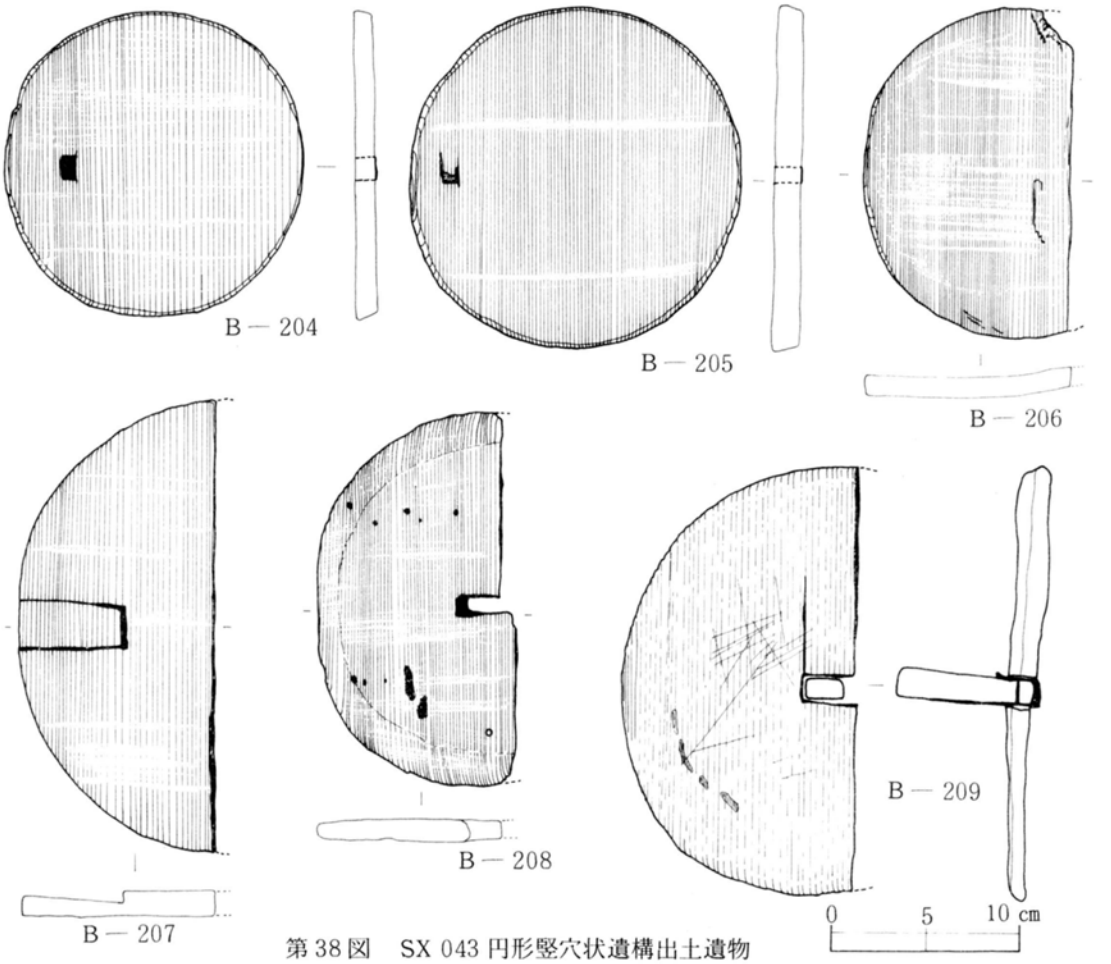
栓　（B－267）円形に加工し、先端部を尖らした楊などの栓である。

柄　（B－272）、刀子の柄である。茎挿入部は空洞になっている。

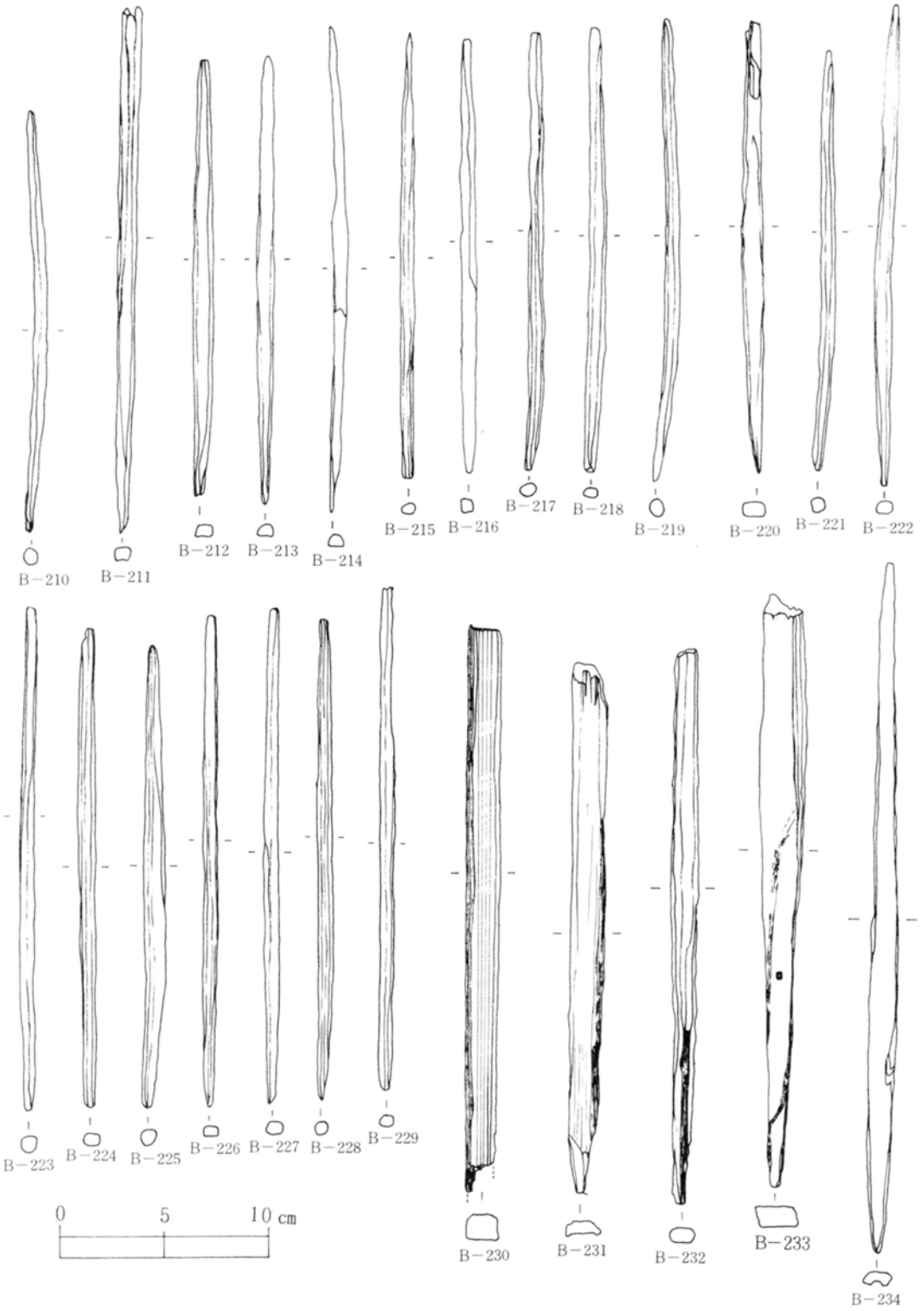
クシ状木製品　（B－230～247、251、256）、20点のクシ状木製品が出土した。B－234は箸と思われる。ほとんどのものは細長い木の一端を切り落し、片側は削って尖らせている。

2）衣関係

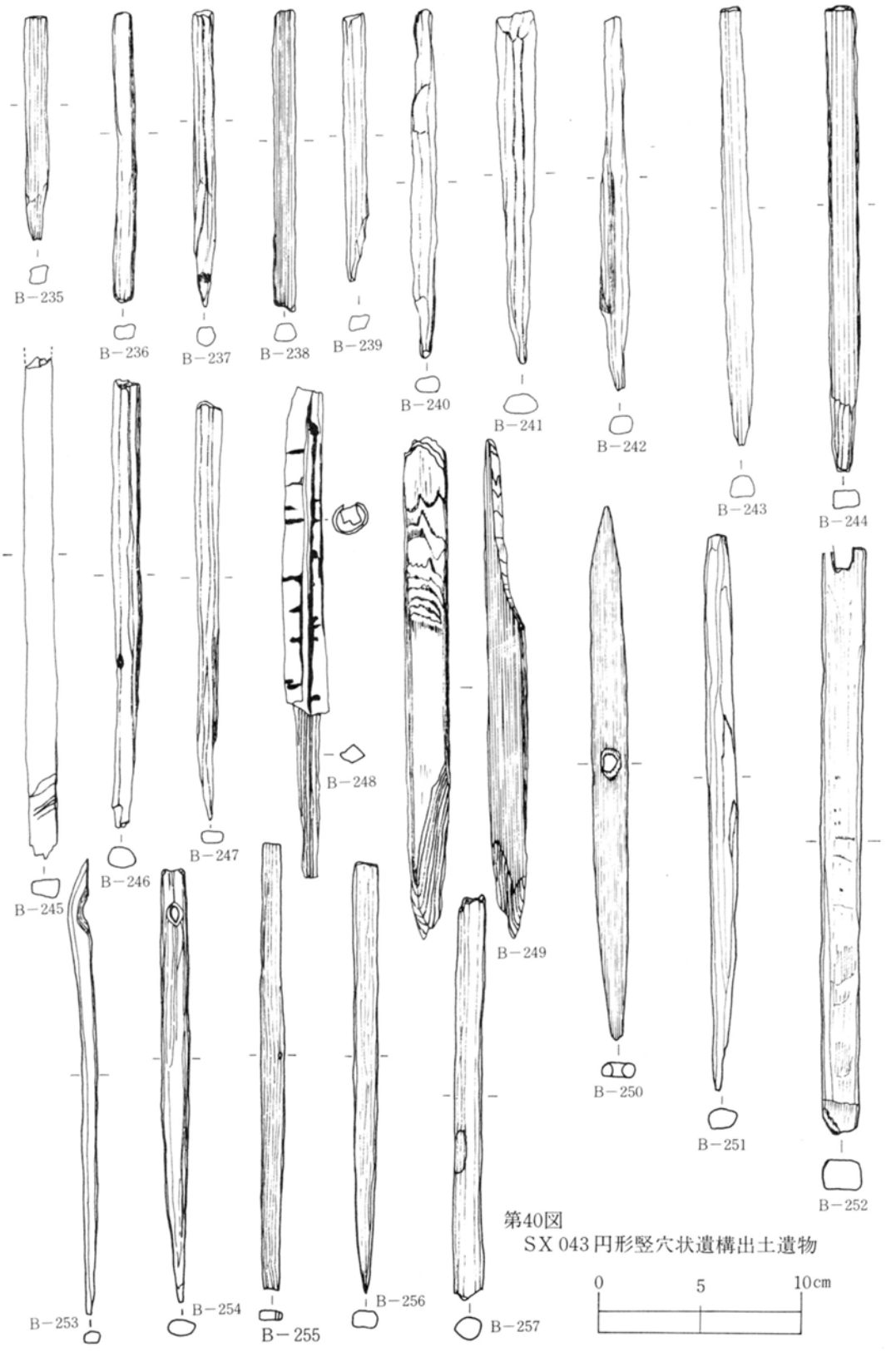
下駄　（B－301～313）、埋土から13点出土している。遺存状態はきわめて良好であり、完形品11点、破損品2点である。すべて連歯下駄であり、露卯下駄は出土していない。形状は隅丸の長楕円形、小判型を呈するものが12点と圧倒的に多く、長方形を呈するもの1点である。大きさは、平均すると長さは18cm～22cm前後、巾が9.5cm前後が最も多く、最大のものは、B－313の長さ22.8cm、巾12.4cmの下駄であるが、これは長方形のものである。最小はB－302の長さ15.7cm、巾7.7cmのものである。総じてこれらの下駄を概観すると、横緒穴が平行に穿たれているものより、斜めにずれて穿たれているものが多く、また、前後のあごの部分は斜めに面取りされているものが多い。さらに横緒穴が後歯にくい込んでいるものが5例程ある。前歯より後歯の減りが目立ち、特にB－



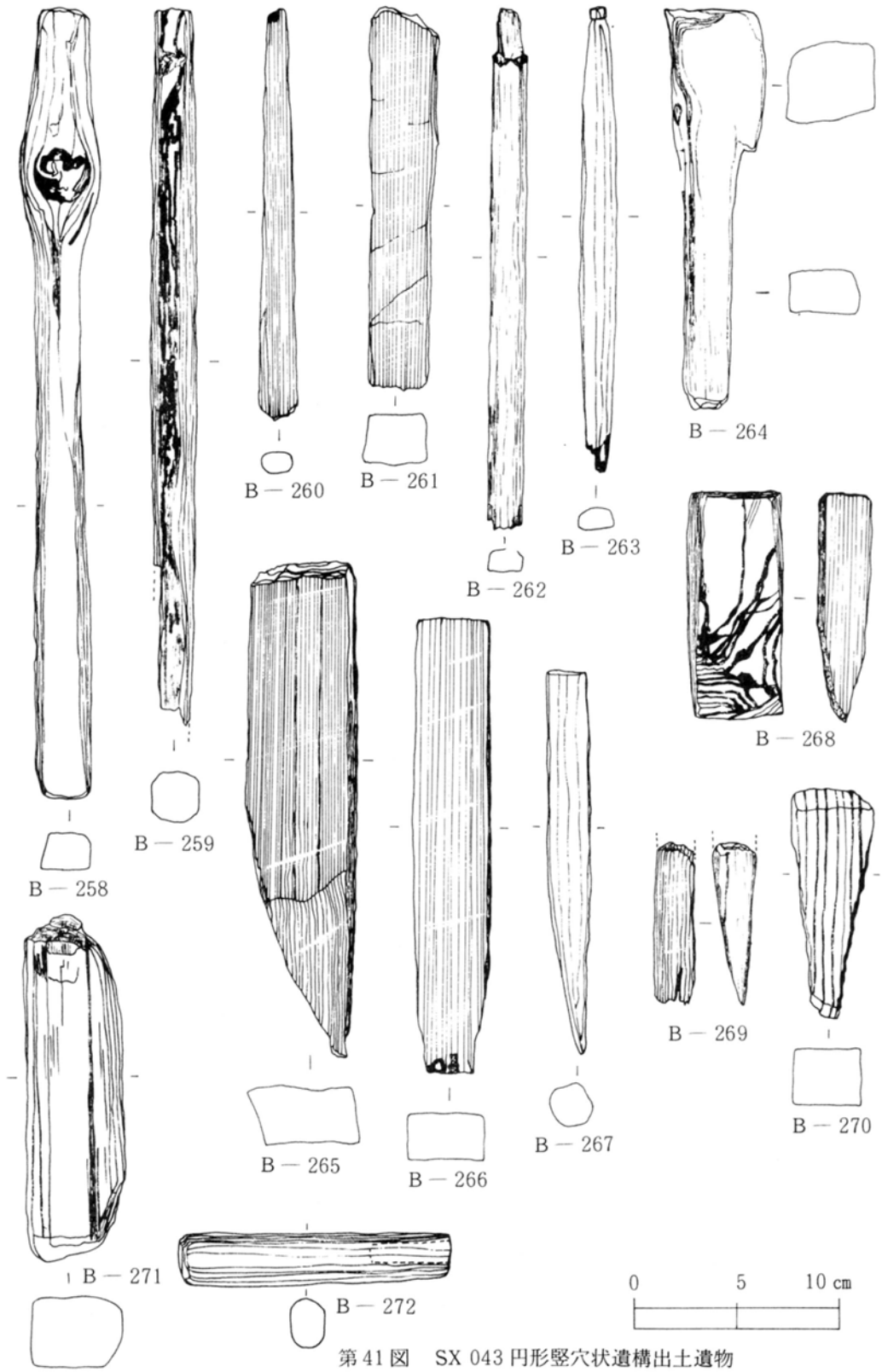
第38図　SX 043 円形竪穴状遺構出土遺物



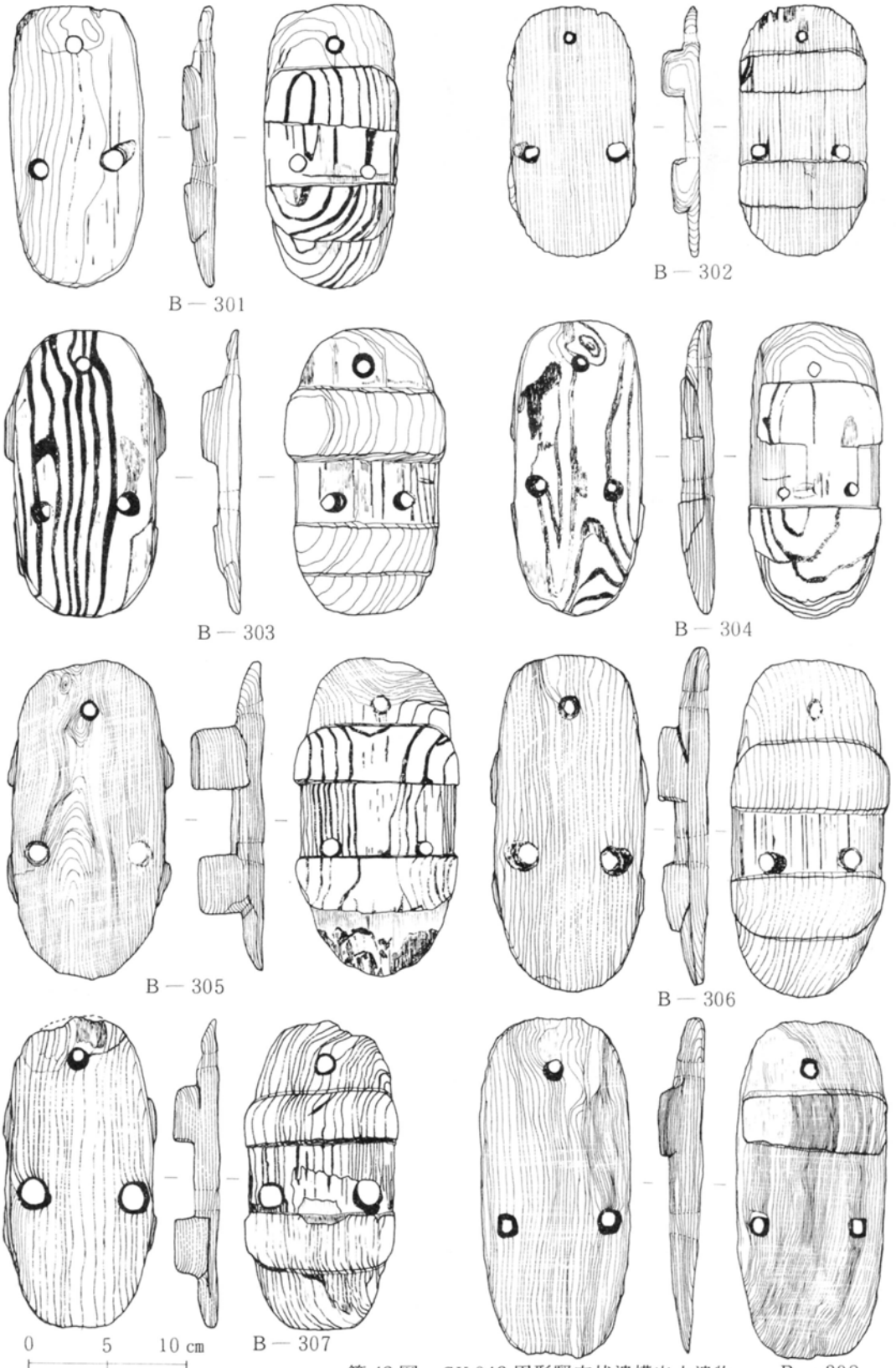
第 39 図　SX 043 円形竪穴状遺構出土遺物



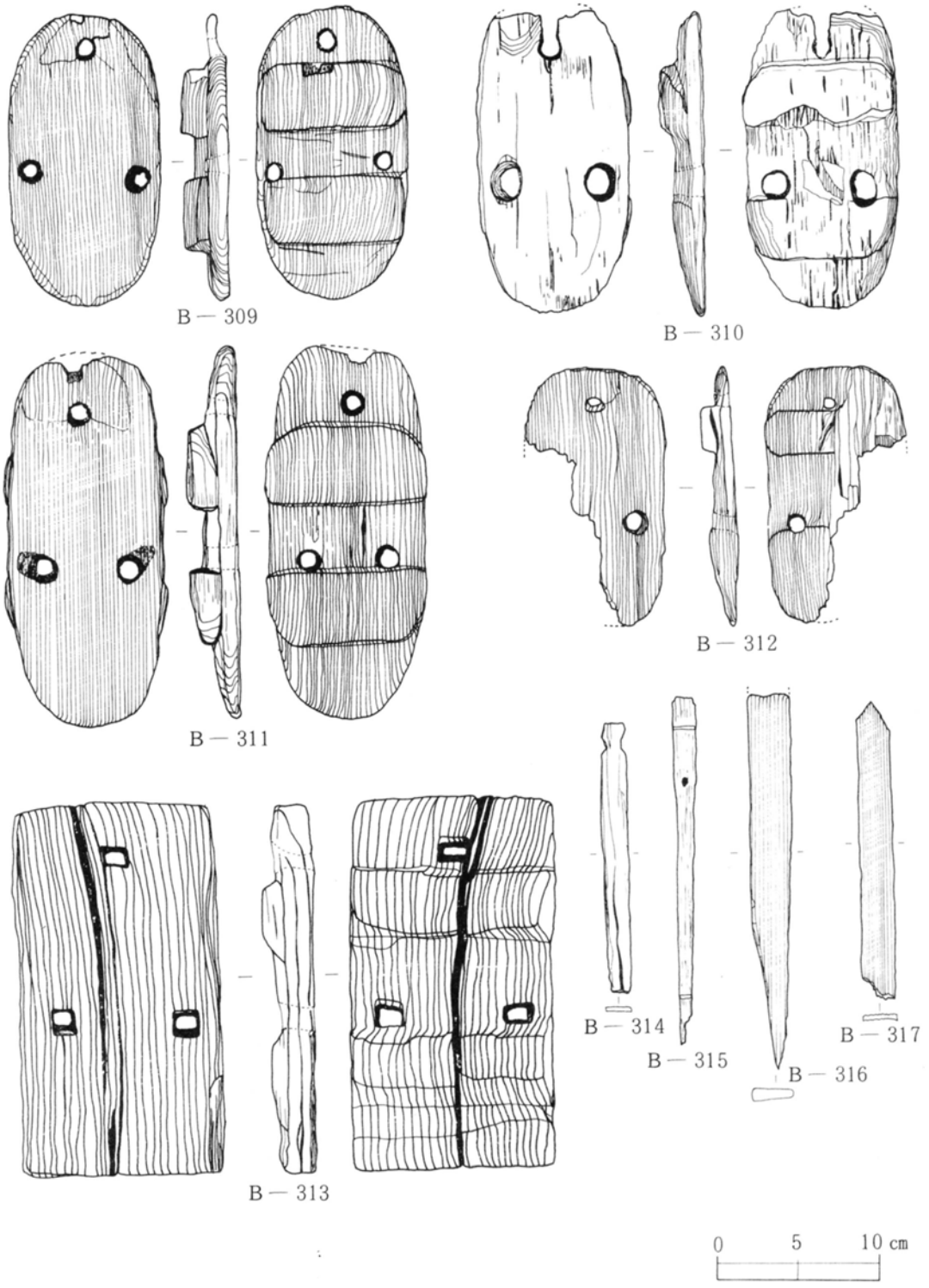
第40図
SX 043 円形竪穴状遺構出土遺物



第41図　SX 043 円形竪穴状遺構出土遺物



第 42 図　SX 043 円形竪穴状遺構出土遺物



第43図　SX 043 円形竪穴状遺構出土遺物

303、308、310、312、は著しく滅っている。B－301は台前部前壷の左側がかなり減りくぼんでおり右足用と思われる。これらの下駄をその形状、寸法から利用性別を推定してみると小さなB－302、312は子供用、B－301、303～311は成人女子、B－313は成人男子用と考えられる。

櫛　（B－293・294）、挽櫛と梳櫛が2点出土した。

住関係

屋根材　（B－179、180）、2点出土している。いづれも柾目板を使用している。何ケ所かに穴を穿っており、屋根材と考えられる。

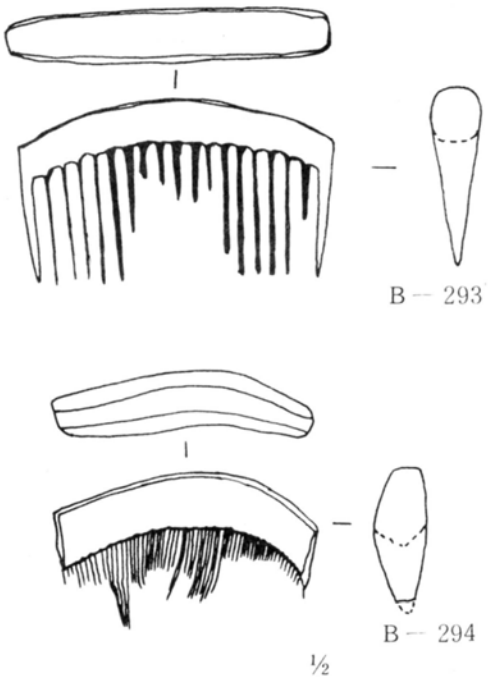
クサビ　（B－265、266、268～270）、大小5点出土している。一端あるいは両面から削ってクサビにしたものである。

釘隠し　（B－290、291）、2点出土している。いずれも菱型に切り落して加工したものである。

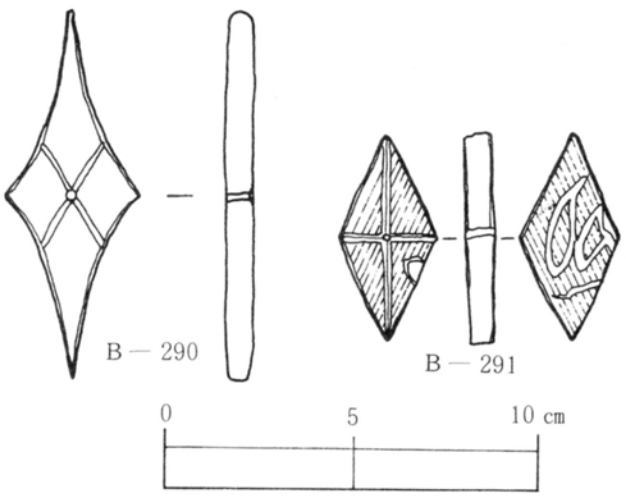
祭祀、信仰関係遺物

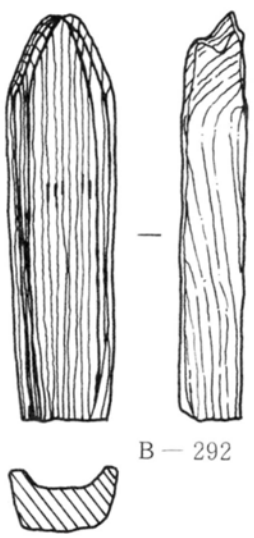
船形　（B－292）、船形状木製品が1点出土した。材を削り出して作ったものである。

塔婆板　（B－295～299）、6点出土している。長さは46cm前後で上部を山形に切り落し、下部は両方から切り鋭利に尖らせている。B－300を除き墨痕がありかすかに文字がみられるが判読不能である。（註1）

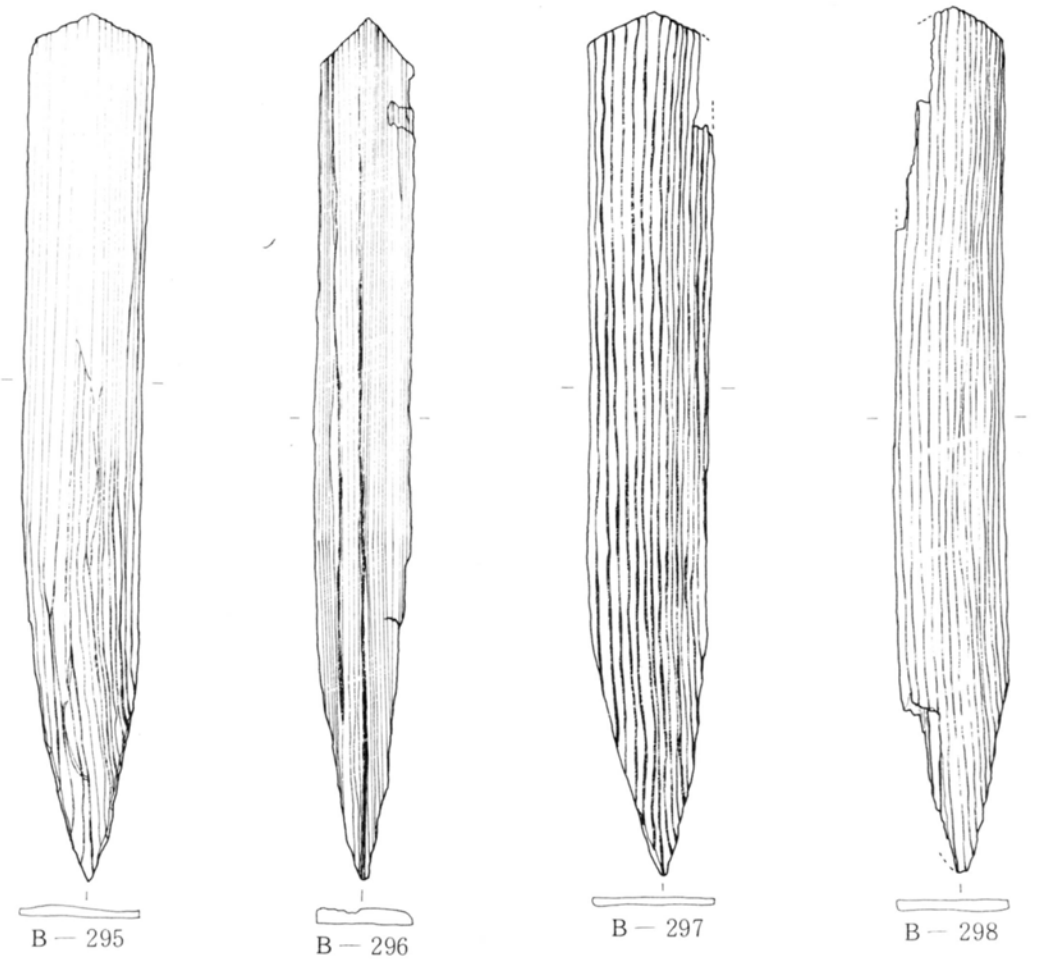


第44図　SX 043 円形竪穴状遺構出土遺物

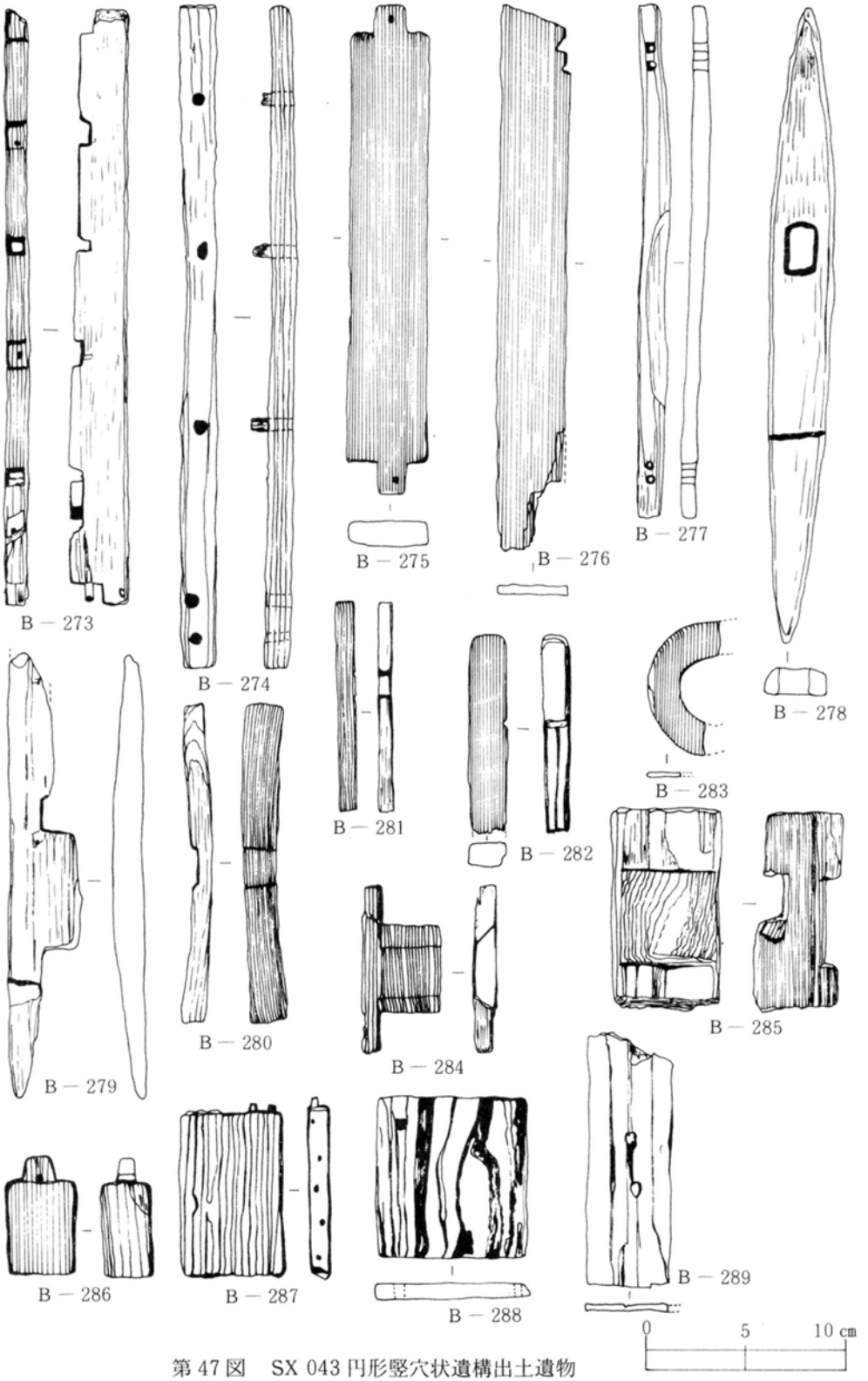




第45図　SX 043 円形竪穴状遺構出土遺物



第 46 図 SX 043 円形竪穴状遺構出土遺物



第 47 図　SX 043 円形竪穴状遺構出土遺物

その他の加工木製品

加工木製品としたものは本来製品の一部であったものや、棒状、板状のものに何らかの加工を施したもので、機能、用途がいまひとつ明確でないものである。杓子の柄、編針、織機の付属品「杼」、糸巻板と思われるものがある。

註1　東北歴史資料館で赤外線テレビカメラで撮影した。

第4節　C地区検出遺構と出土遺物

検出遺構（第48、49、50図、図版10、11）

C地区において検出された遺構の確認面を大別すると、第1・第2遺構面（耕作土～第4層－粘土混り褐色砂層、厚さ約50cm）、第3遺構面（第5層－黒色砂質土～第7層－褐色砂、厚さ約50cm）、第4遺構面－最下層遺構面－（飛砂層）の三面に区別される。第1・第2遺構面からは井戸跡8基、土壙19基、竪穴状遺構、方形枠組遺構、小鍛冶遺構、焼土遺構、落ち込み、第3遺構面からは井戸跡6基、土壙16基、溝跡2基、落ち込み、ピット群、第4遺構面からは掘立柱建物跡1棟、竪穴状遺構1基、井戸跡6基、溝跡3基、土壙23基がそれぞれ検出されている。ここでは確認面ごとに遺構を述べることとする。

1) **第1・2遺構面検出遺構**（第48図、図版10下）

SE 051 井戸跡（第52図、図版12上、13）

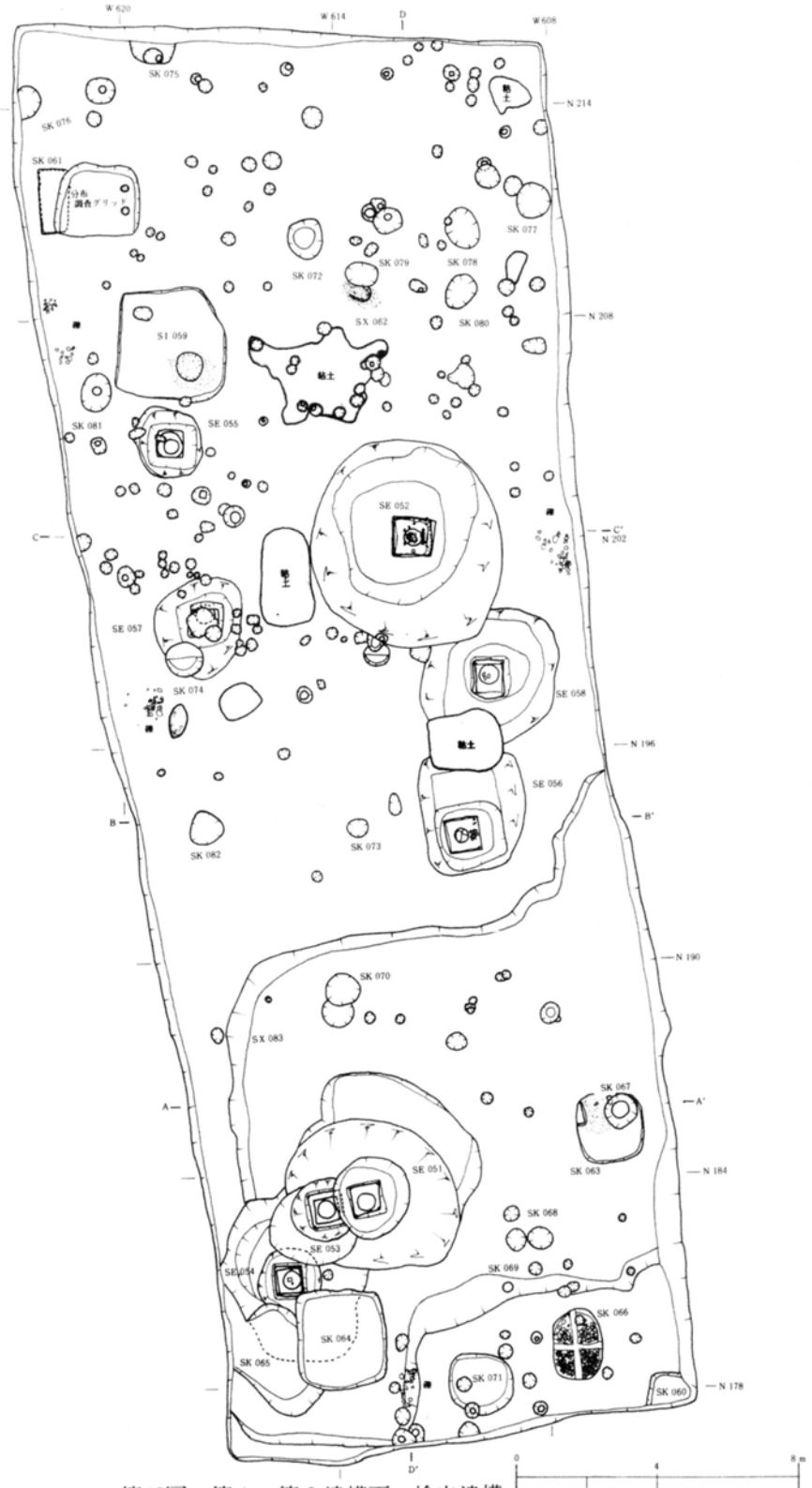
調査区南西部で検出された井戸跡である。SE 053の埋土を掘り込んで構築されている。掘り方平面形は、長径4.85 m、短径3.75 mの東西に長い楕円形を呈する。井側の上部確認面から底部までの深さは約1.1 mを計る。掘り方中央部の井側確認面から約50cm掘り下げた部分で、一辺85cmの方形を呈する横桟が検出されたが、腐蝕がはげしく残存状態は良好ではない。四隅に柱をたてて横桟で継ぎ、各辺には幅約15cm、厚さ4cmの縦板を5～6枚あてている。井側の破損が進んでいる。南側の横桟が内側に弓状に張り出している。井筒は直径約50cmの曲物で構成されたものである。なお曲物は腐蝕が著しく取り上げることができなかった。

SE 051 出土遺物

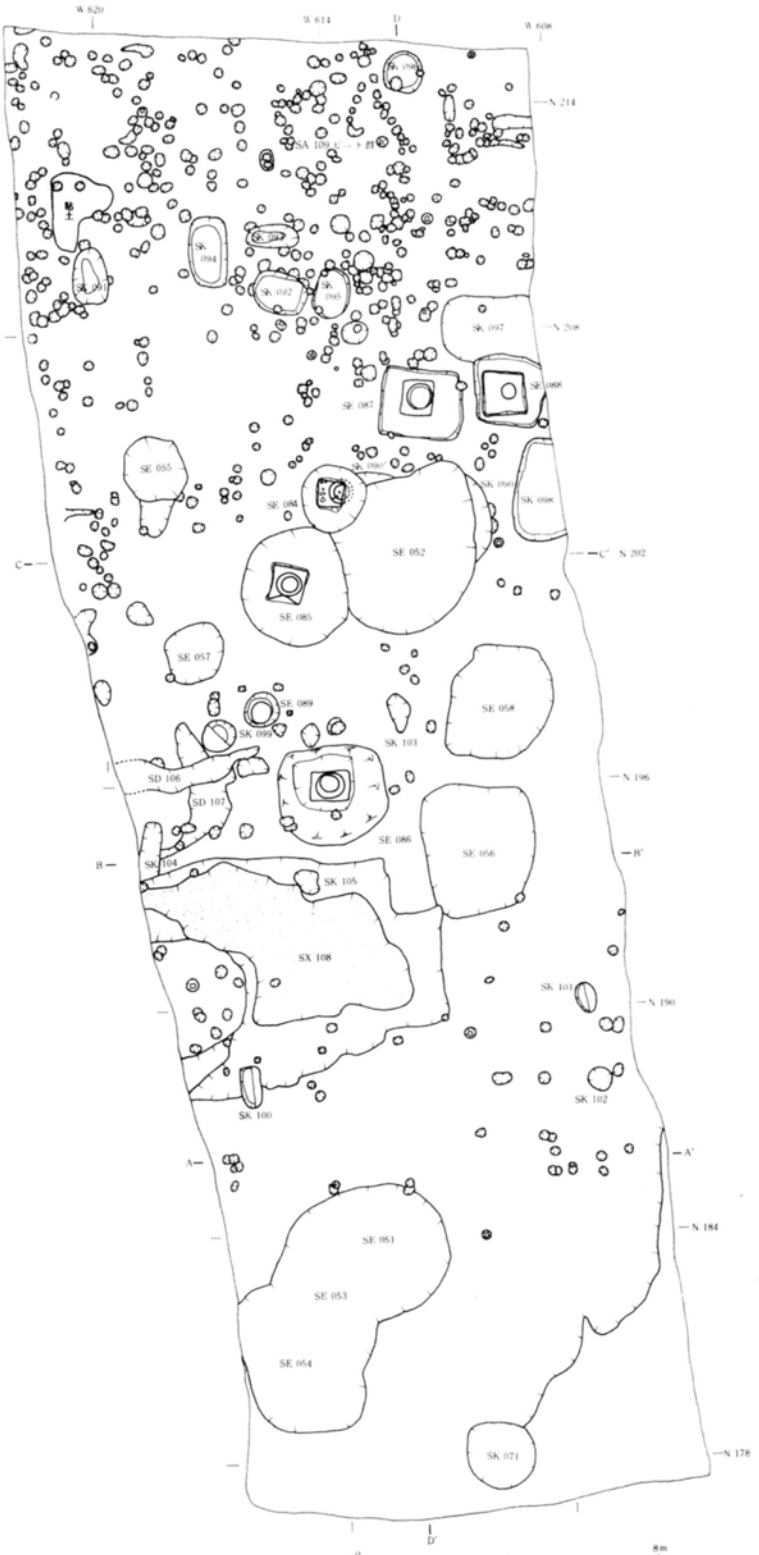
青磁台付碗C－35、青磁碗C－36、青磁碗C－39、瀬戸四足盤C－101、鉄鎌C－264、治平元宝C－349

SE 052 井戸跡　（第53、54図、図版12下）

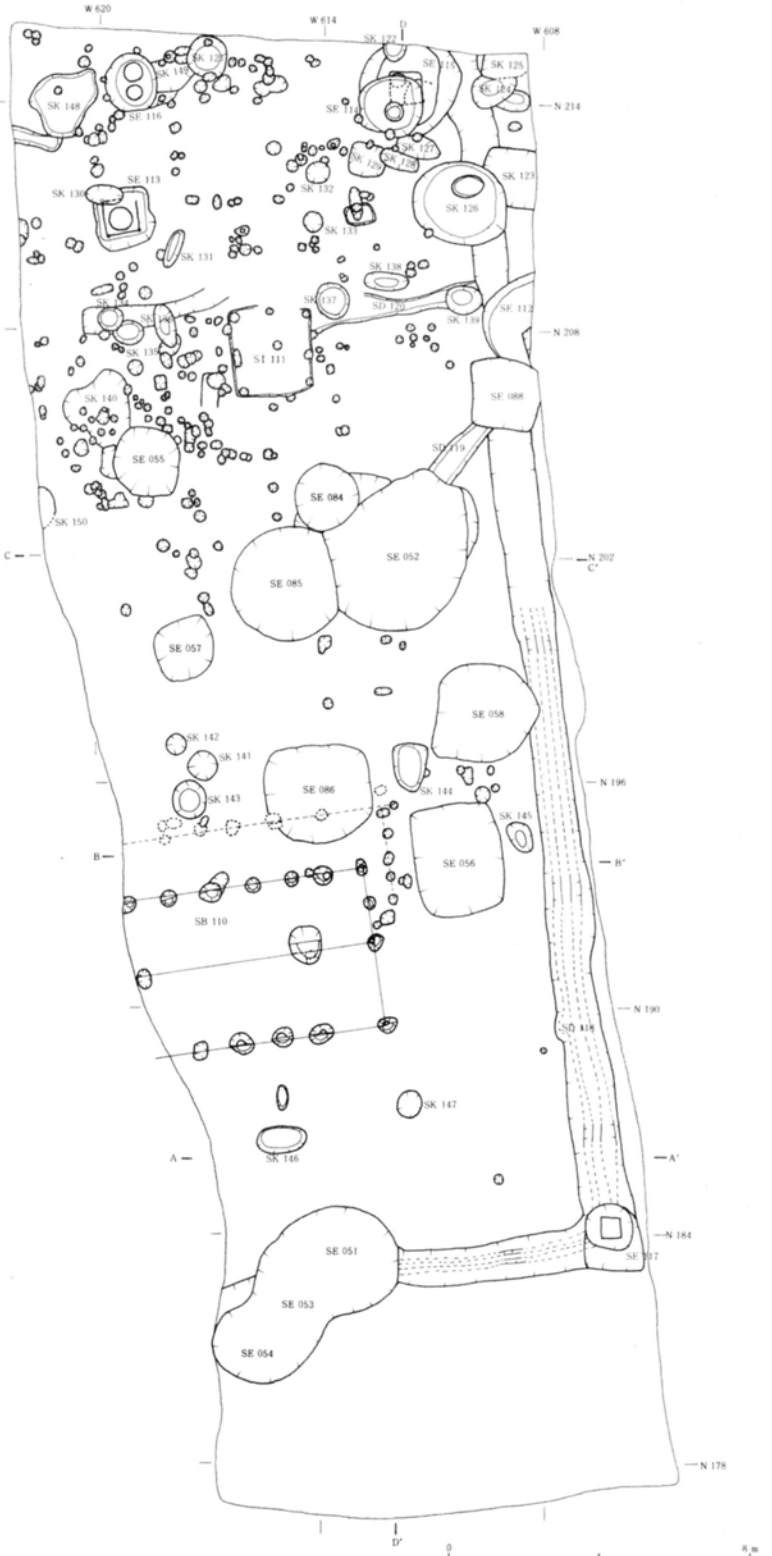
調査区北部で検出された井戸跡である。掘り方平面形は長径約5.8 m、短径4.6 mの不整円形を呈し、井戸底部までの深さは約2.6 mを計る。上部から約2.3 mほどゆるやかに擂鉢状に掘り込み、さらに径約70cm、深さ約30cmほど掘り込んである。約1.1 m掘り下げた部分で縦板と考えられる炭化材が検出されたが、遺存状態は良好でない。掘り方中央部には柱（杭）間約1 m四方の方形の井



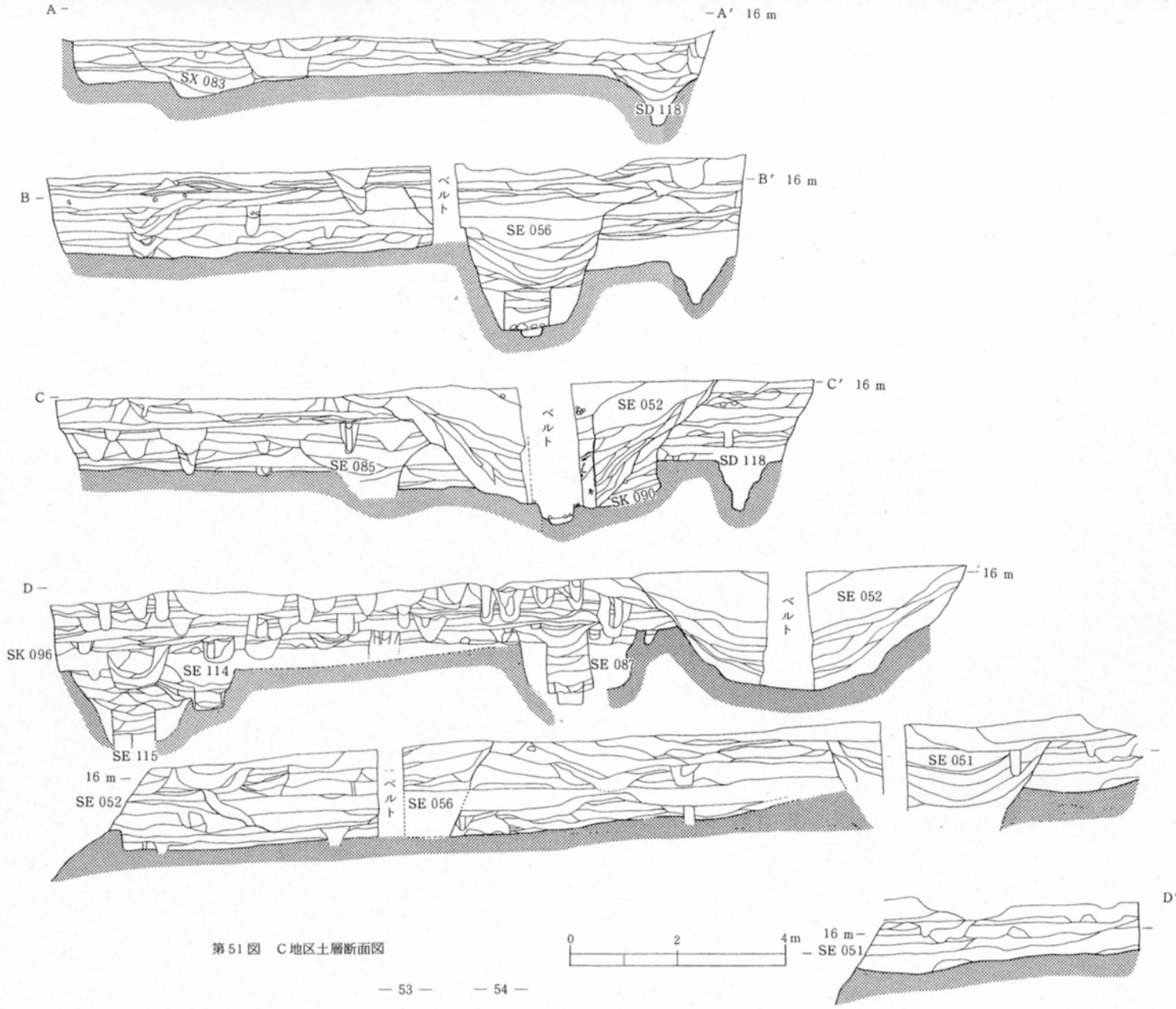
第48図　第１・第２遺構面　検出遺構



第49図　第３遺構面　検出遺構



第50図　最下層遺構面　検出遺構

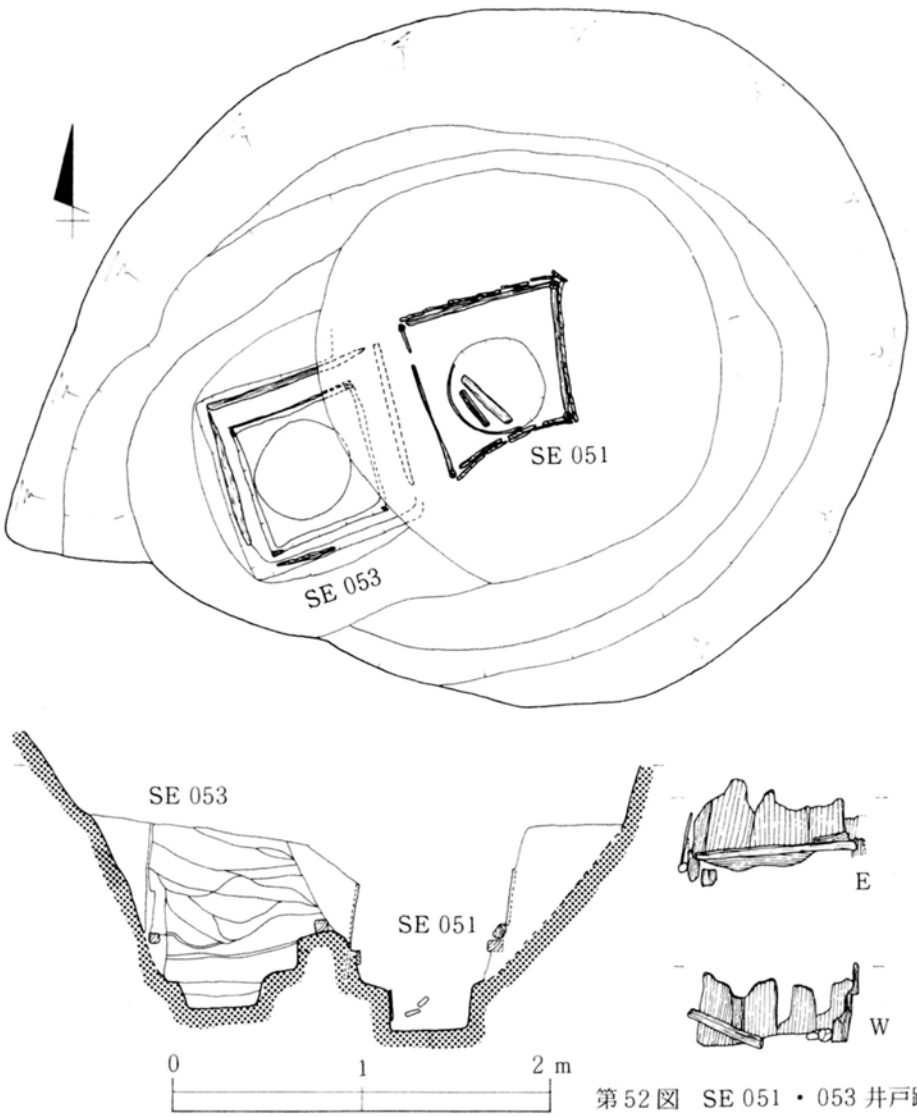


第51図　C地区土層断面図

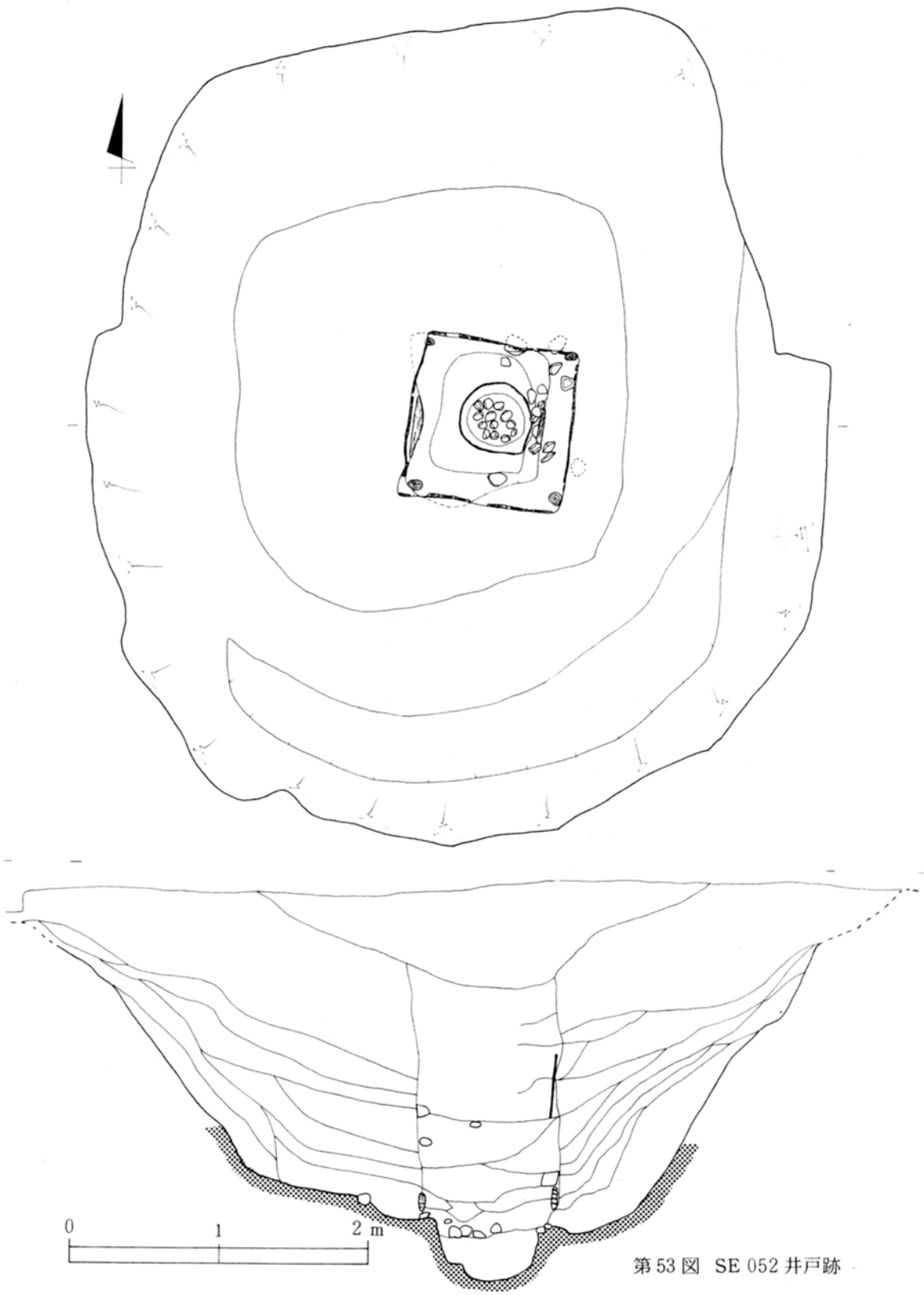
側が設置されたと考えられるが、井側で残存しているのは、約40cm～70cmの長さで太さ約10cmの隅柱と、約70cm～80cmの長さを計る横桟、さらに幅約20cm、現存長約15cm～50cmの縦板６～７枚であり、いずれの材も炭化している。井側内部には、直径約45cmの曲物が付設されたものと考えられるが、材は検出されなかった。

SE 052 出土遺物

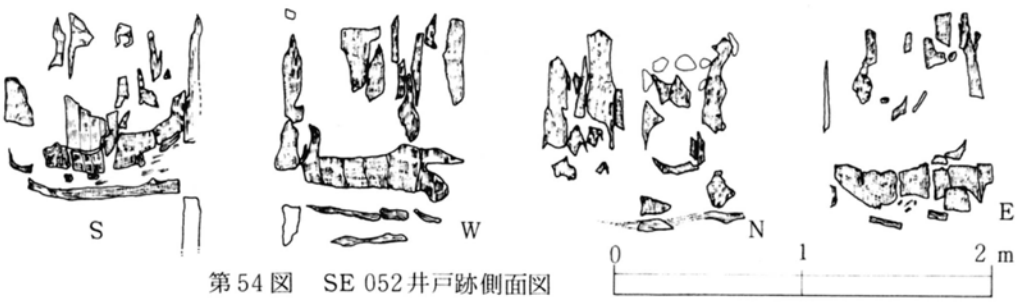
青磁碗高台部Ｃ－31、青磁碗Ｃ－34、青磁稜花皿Ｃ－５、瀬戸灰釉梅瓶Ｃ－95、開元通宝Ｃ－321Ｃ－322、永楽通宝Ｃ－389、宝篋印塔塔身部Ｃ－222、鉄製品、毛抜きＣ－316、Ｃ－317、釘等Ｃ－308、Ｃ－309、Ｃ－310、Ｃ－311、Ｃ－312、珠洲系甕・同壺Ｂ・同擂鉢、須恵器甕、瓦質火鉢



第52図　SE 051・053 井戸跡



第53図　SE 052 井戸跡

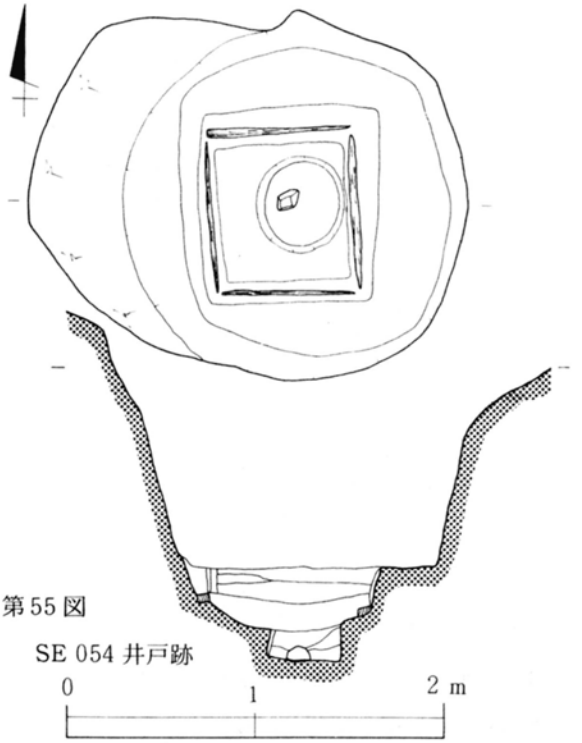


第54図　SE 052井戸跡側面図

SE 053 井戸跡（第52図、図版13）

SE 051 の西側で検出された井戸跡である。掘り方平面形は直径約 1.8 mの円形を呈する。井側確認面から底部までは約 1.0 mを計る。井側確認面から、約55cm掘り下げた部分で一辺約96cmの方形の井側を検出し、さらにこれより25cm掘り下げた部分で、一辺約64cmの方形の井側を据えているのが検出された。四隅には柱を立てて横桟を継いでいたものと考えられるが、柱はわずかしか残存していない。井側内には直径約50cmの曲物を据えて井筒として使用したと考えられるが、腐蝕が著しく取り上げ不可能であった。

出土遺物はない。



第55図
SE 054 井戸跡

SE 054井戸跡（第55図、図版13下14上）

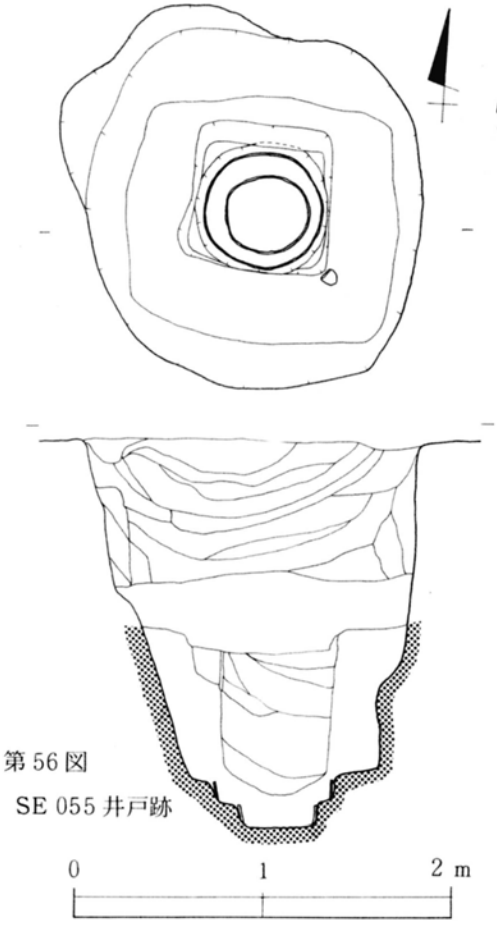
調査区南西部で検出され、SE 051 、053 よりも古い井戸跡である。掘り方平面形は長径約 2.3 m、短径約 1.8 mの東西にやや長い楕円形を呈している。掘り方確認面から井戸底部までの深さは約 1.7 mを計る。約 1.1 mの深さまでは、やや急に擂鉢状に掘り込み、幅をせばめて90cm×80cmの方形に深さ約30cmまで掘り込んで、さらに径約35cm、深さ約20cmの円形の掘り込みを施している。約 1.4 m掘り下げた掘り方中央部分で、現存長約70cm～80cmの横桟と考えられる方形に配された板材を検出したが、隅柱・縦板等は検出されなかった。井側内部には直径約35cmの曲物を付設していたものと考えられる。

SE 054 出土遺物

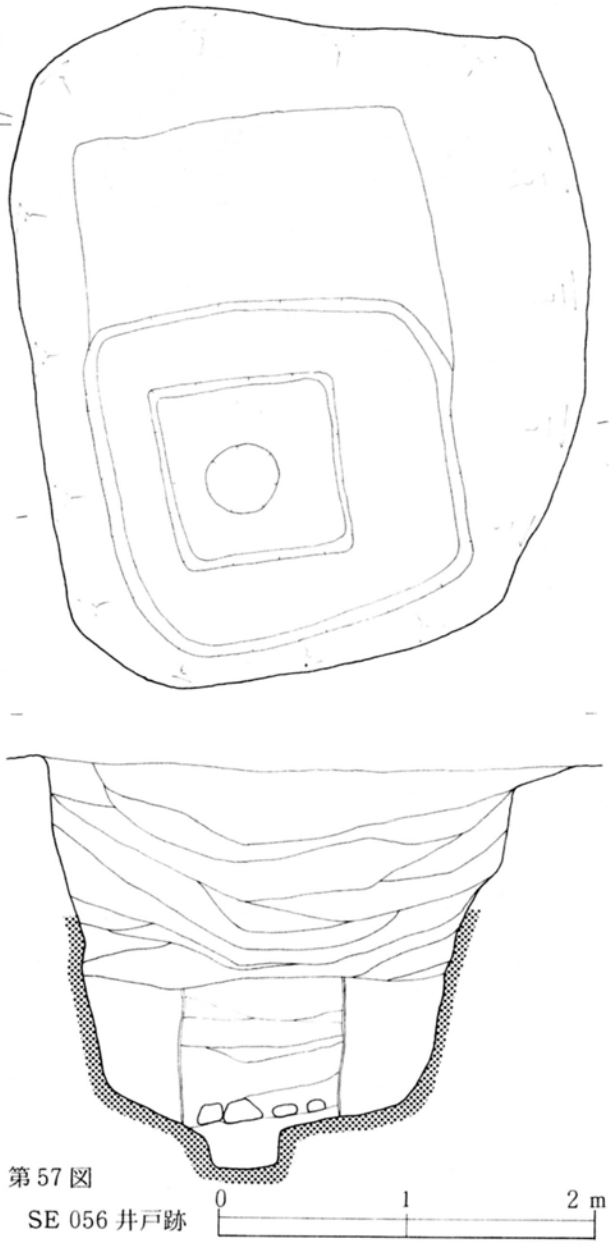
紡錘車C－ 227

SE 055 井戸跡（第56図、図版14下、15上）

調査区中央部北西側で検出された井戸跡である。掘り方平面形は直径約 1.8 mの円形を呈し、下部へいくにしたがってせばまっている。掘り方確認面から井戸底部までの深さは約 2.0 mを計る。



第56図
SE 055 井戸跡



第57図
SE 056 井戸跡

掘り方は確認面から約80cmほどやや急に擂鉢状に掘り下げたのち、一辺約 1.4 mで方形に約 1.0 m掘り下げている。さらに直径約70cm、深さ約10cmで円形に掘り込み、その下部には直径約45cm、深さ約10cmほど掘り込んで底部をなしている。確認面より約 1.1 mの深さまで掘り下げた掘り方中央部で一辺約80cmの方形の、井側と考えられる材の痕跡が検出された。これよりさらに約80cmほど掘り下げた部分の井側内部で、直径約60cm、現存高約10cmの曲物、さらにその下部に直径約45cm、現存高10cmの曲物の二段の井筒の痕跡が検出された。

SE 055 出土遺物

白磁皿C－49、瀬戸卸し皿C－90、洪武通宝C－388、赤褐色土器、須恵器坏

SE 056 井戸跡（第57図、図版15下）

調査区中央部東側で検出された井戸跡である。掘り方平面形は、長径約 3.6 m、短径約 2.5 mの

南北に長い方形を呈し、掘り方確認面から井戸底部までの深さは約 2.1 mを計る。掘り方は確認面から約80cmの深さまでは、緩やかに擂鉢状に広く掘り下げたのちに、南側に一辺約 1.9 mの方形の掘り込みを行い、この下部に井側等を設置している。確認面より約 1.2 m掘り下げた部分で、一辺約90cmの方形の井側痕が検出され、井側の深さは約70cmを計る。井側内部には、直径約40cmの曲物を付設していたものと考えられるが、腐蝕が著しい。

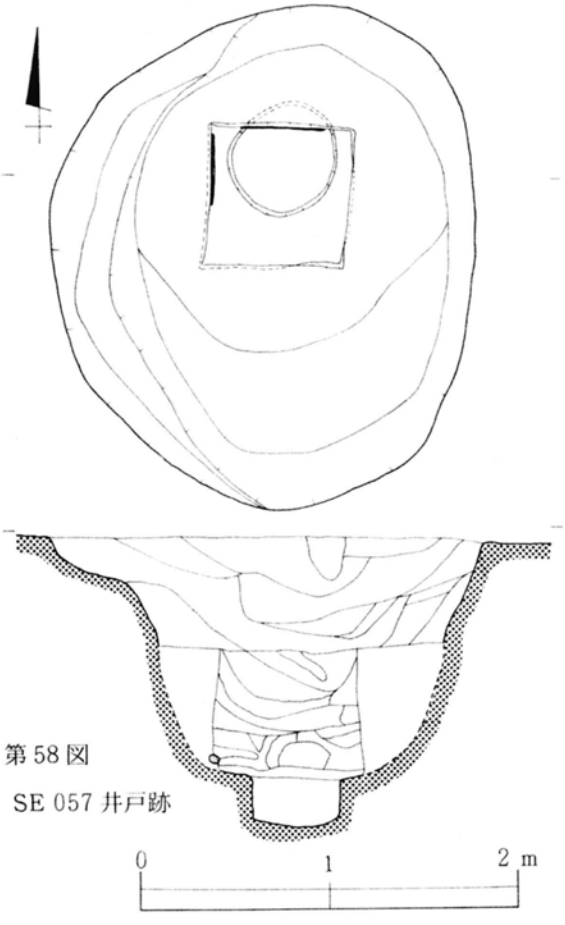
なお、井側内埋土下層より10cm～20cm大の礫が多量に検出され、その一部は井筒内を埋めており、意図的に礫等を投げ込み井戸を廃棄したものと考えられる。

SE 056 出土遺物

瀬戸灰釉四足盤C－101、鉄製品、釘C－269、C－270、C－271、石製品、土錘C－238

SE 057 井戸跡（第58図、図版16上）

調査区中央部西側で検出された井戸跡である。掘り方平面形は、長径約 2.5 m、短径約 2.3 mの南北に長い楕円形を呈し、さらに掘り方確認面より約60cm掘り下げた部分で直径約 1.5 mの円形を呈する掘り方になっている。この部分で一辺約75cmの方形の井側痕を検出し、材は北と西側に長さ約40cmの横桟が各一本ずつ検出したにすぎない。井側内部に直径約60cm、現存高20cmの曲物が付設されていたものと考えられる。ただし、この曲物は井側よりもやや北方に約15cmほどずれて付設されている。曲物痕は検出されない。



第 58 図
SE 057 井戸跡

SE 057 出土遺物

青磁碗C－40、青磁碗C－32の一部分

SE 058 井戸跡

（第59図、図版16下、17上）

調査区中央部東側、SE 056 の北側に隣接する井戸跡であり、掘り方平面形は、直径約 3.7 mの円形を呈し、上部から井戸底部までの深さは約 2.5 mを計る。上部から約 1.3 m掘り下げた部分から長径約 1.9 m、短径約 1.6 mの東西に長い楕円形の掘り込みが確認された。この面で一辺約 1.0 mの方形の掘り込みが検出され、その内部には柱（杭）間約80cm四方の隅柱横桟型の井側が設置されている。井側は隅柱が四隅に残存しているものの、横桟および縦板等の遺存状態は良好でない。井側内部には直径約54cm、現存高約30cmの曲物

が付設されている。

SE 058 出土遺物

古瀬戸天目茶碗C－73、古瀬戸小皿C－80、土錘C－234、刀子C－248、C－257、C－258鎌C－259、釘C－272、C－273、珠洲系甕・同擂鉢、須恵器坏、内黒土師器坏

SI 059 竪穴状遺構（第60図、図版22上）

調査区北西部で検出された遺構である。一辺約3mの不整方形を呈し、深さ約20cmを計る。床面に約1m×約70cmの範囲で多量の炭化物が認められた。埋土中より、珠洲系甕、古銭が出土している。

SI 059 出土遺物

珠洲系甕C－124、至大通宝C－379

SX 061 方形枠組遺構

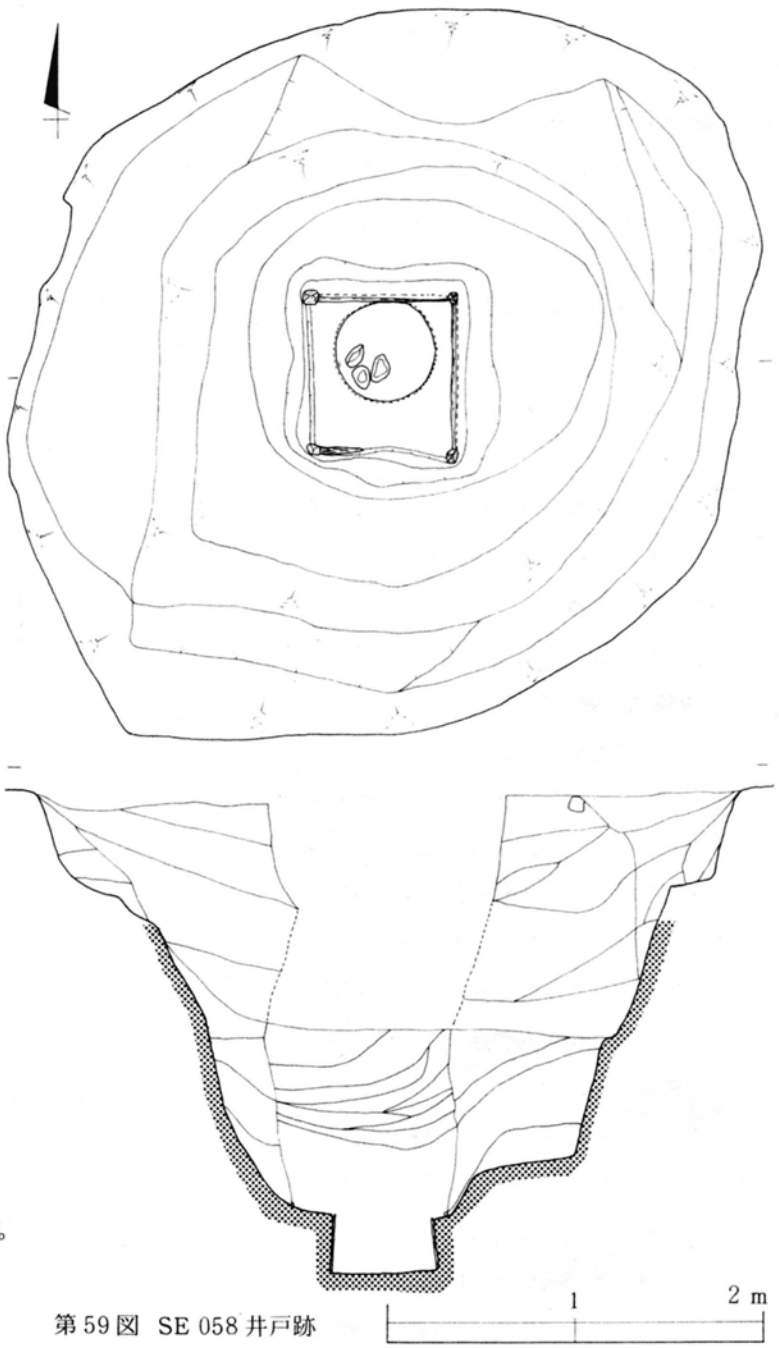
（第61図）

調査区北西部で検出された遺構である。長径約1.8m、短径約85cmの方形を呈し、深さは約20cmを計る。壁に材の痕跡をとどめ、さらに北側床面には最大長約50cm、幅約40cmの材等が残存しているが、いずれも遺存状態は良好でない。性格等については不明である。

SX 062 小鍛冶遺構

（図版23下）

調査区北部で検出された。約1m×60cmの範囲にわたる鍛冶遺構と考えられる円



第59図　SE 058 井戸跡

形の落ち込みである。黒色砂質土上に掘り込まれ、壁にはスサ入りの粘土が張り付けられている。炭化物が散布しており、炭化物堆積層内からは鉄滓の出土があった。

SX 063 焼土遺構（第62図）

調査区南西部で検出された。一辺約2mの隅丸方形を呈し、深さは約30cmを計る。床面に炭化物、焼土が散在しており、一方北向きにカマド状の石組み粘土塊が検出された。性格については不明である。坩堝が出土している。

SX 063 出土遺物

坩堝C－224

SK 064 ～ 065 土　壙

（第48図、図版10下）

調査区南西部で検出された土壙で、SK 065はSK 064によって切られている。SK 064は長径約2.8m、短径約2.2m、深さ約50cmを計る。埋土中には多量の礫を含み撹乱とも考えられる。SK 065は長径約3.0m、短径約2.2m、深さ約35cmを計り、埋土中に炭化物を含んでいる。SK 064から染付が出土している。

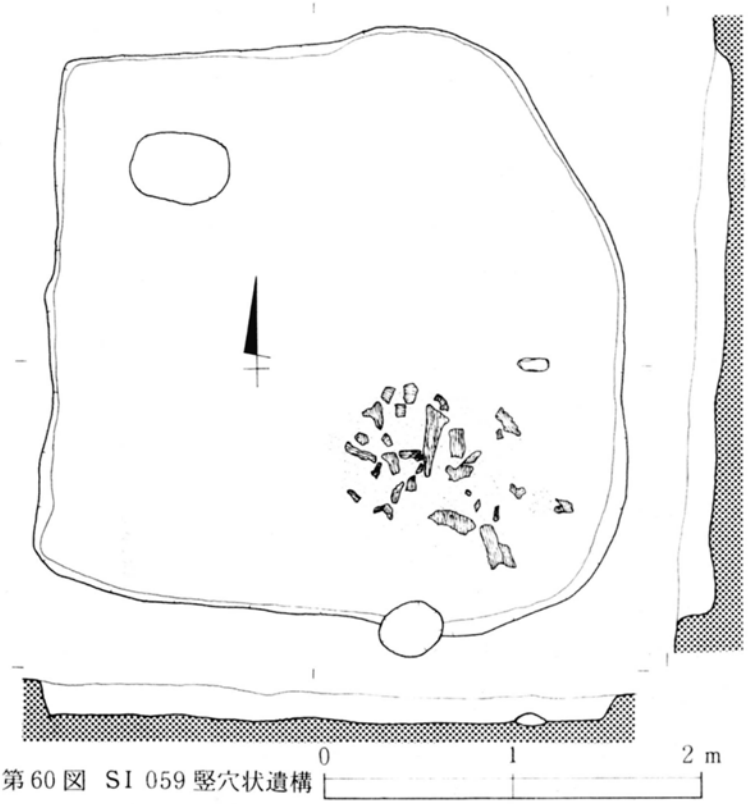
SK 064 出土遺物

染付C－68

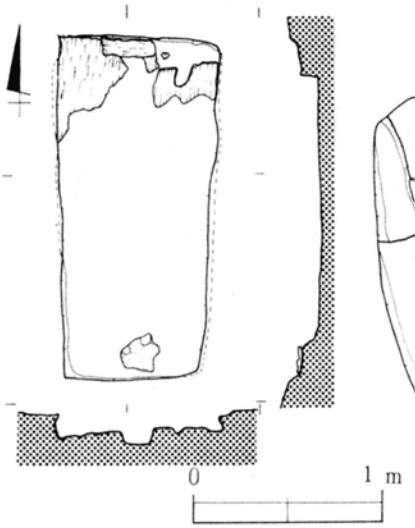
SK 066 土　壙

（第63図、図版24左上）

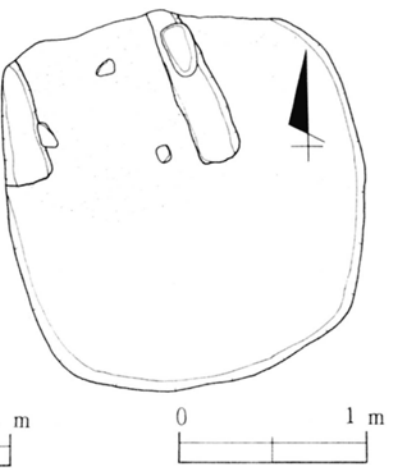
調査区南東部で検出された土壙で、長径約2.0m、短径約1.4m、深さ約60cmを計り、楕円形を呈する。土壙内には多量の礫を充填している。性格については不明である。



第60図　SI 059 竪穴状遺構



第61図　SX 061 方形枠組遺構



第62図　SX 063 焼土遺構

SK 067 ～ 071 土壙（第48図、図版10下）

SK 067 は SX 063 床面下層で検出された。直径約90cm、深さ約30cmの円形を呈している。 SK 068 ～ 070 は直径約60cm～ 1 m、深さ20～30 mの円形を呈する土壙である。 SK 070 の底面からは漆器の破片が出土している。S K 071 は SK 067 ～ 070 よりも大型で、直径約 1.8 mの円形を呈し、深さ70cmを計る。

SK 072 ～ 082 土壙（第48図、図版10下）

大きさが直径約60cm～ 1 mの円形を呈するもの（ SK 072 ・ 073 ・ 074 ・ 075 ・ 076 ・ 077 ・ 082）、長径約90cm～ 120 cm、短径約60cm～88cmの楕円形を呈するもの（ SK 078 ・ 079 ・ 080 ・ 081）の二種類に大きく類別される。 SK 075 より白磁碗台部が出土している。

SK 075 出土遺物

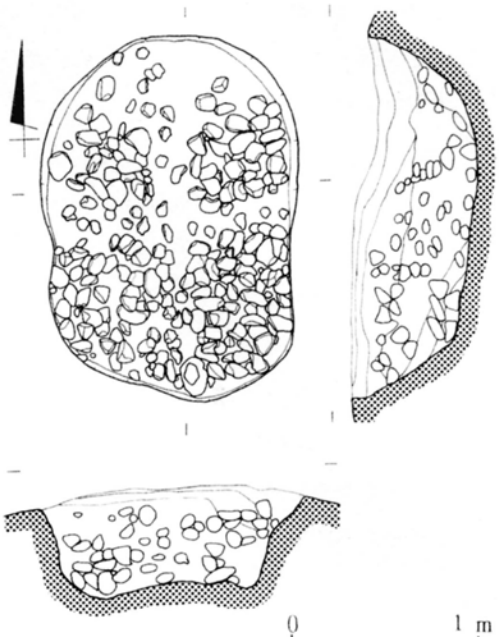
白磁碗台部C－50

SX 083 落ち込み（第48図、図版10下）

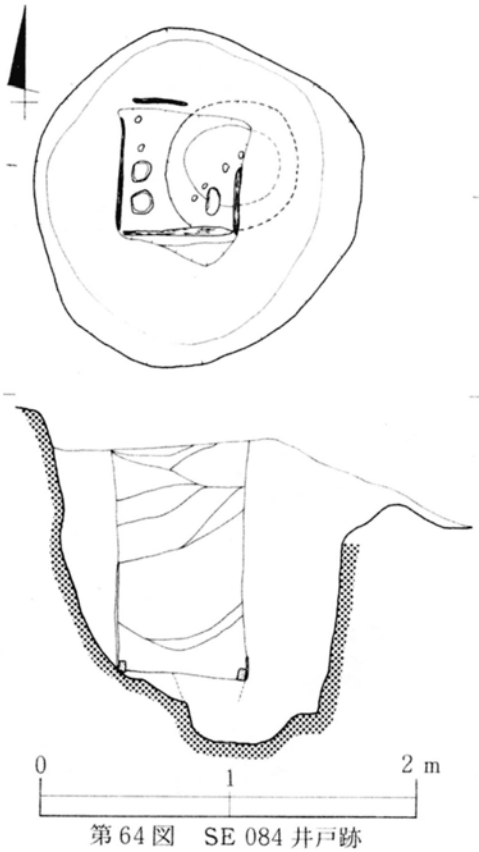
調査区南部で検出された不整形の落ち込みである。北東部および南西部に広がる。性格等については不明である。なお埋土内からは、青磁碗・同盤、白磁小盃、古瀬戸卸し皿、珠洲系陶器等多くの出土をみた。

SX 083 出土遺物

青磁碗台C－43、青磁盤C－44、白磁小盃C－47、古瀬戸卸し皿C－89、古瀬戸灰釉卸し皿C－ 91 、古瀬戸梅瓶C－95、瀬戸四足盤C－ 101 、珠洲系甕C－ 120 、C－ 155 珠洲系壺B型C－ 168 、珠洲系擂鉢C－ 177 、C－ 181 、瓦質土器C－ 207 、砥石C－ 221 、土錘C－ 231 、鉄鏃C－ 255 、 266 、釘C－ 274 、C－ 275 、C－ 276 、C－ 279 、C－ 287 銅製品C－ 318 、C－ 319



第 63 図　SK 066 土壙



第 64 図　SE 084 井戸跡

2) **第三遺構面検出遺構**（第49図、図版11上）

SE 084井戸跡（第64図、図版17下）

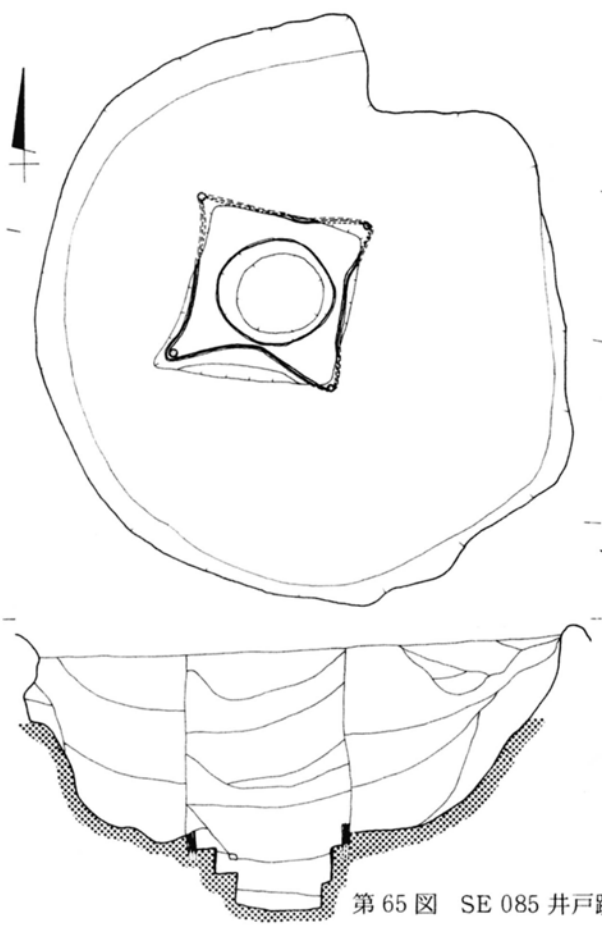
調査区中央部で検出された井戸跡である。 SE 052 よって切られている。掘り方平面形は直径約1.8mの円形を呈し、井側確認面から井戸底部までは約1.7mを計る。掘り方中央部で上部から約20cm掘り下げた部分において一辺約70cm四方の掘り込みが検出され、内部に一辺約65cm四方の方形の井側痕が確認された。井側最下部の四面には横桟が長さ約30cm～60cm、幅5cmで残存している。西側には現存高約55cmにわたって側板痕が認められる。井側内には、直径約65cmを計る曲物が付設されていたものと考えられるが、曲物の木質部は腐蝕している。さらに、この曲物痕は東に約30cmほどずれている。

SE 084出土遺物

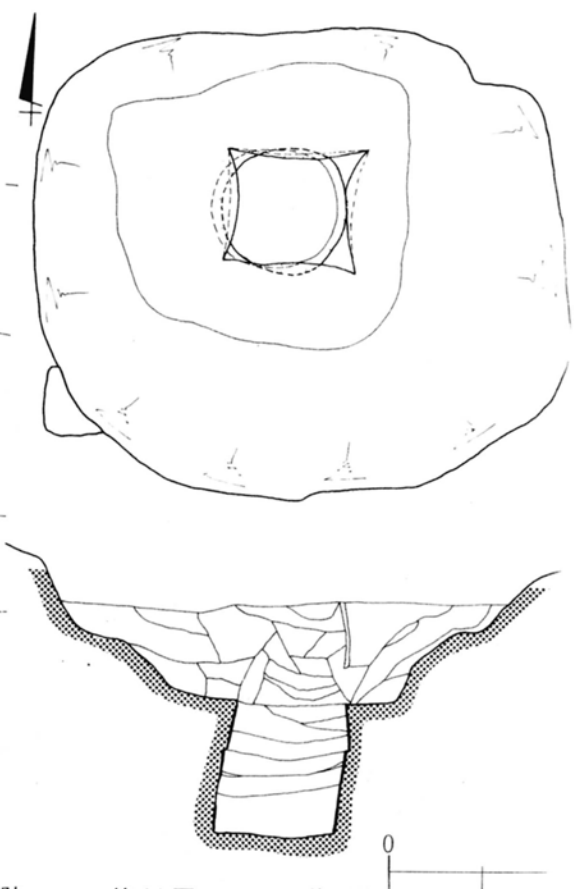
古瀬戸灰釉埦底部C－87、珠洲系甕・同壺A・同擂鉢B

SE 085井戸跡（第65図、図版18上）

調査区中央部、 SE 084 の南側に隣接する井戸跡である。掘り方平面形は、直径約3.05mの円形を呈し、井側確認面から井戸底部までの深さは約 1.4 mである。井側確認面での井側の大きさは、



第65図　SE 085 井戸跡



第66図　SE 086 井戸跡

隅柱間85cmを計る。南辺両端に隅柱、さらに西、東、南辺に横桟と同様の働きをなすと思われる横板を確認した。なお、井側確認面から約10cmほどの深さで、南辺の両端に釘状の金具（木部付着）を検出し、さらに50cmの深さで同様の金具を検出している。井側内部には、井筒として使用された曲物、直径約60cm・現存高約20cm、直径約45cm・現存高約15cmの二段が付設されている。
青磁皿、須恵器壺・甕・坏・珠洲系陶器等が出土している。

SE 085 出土遺物

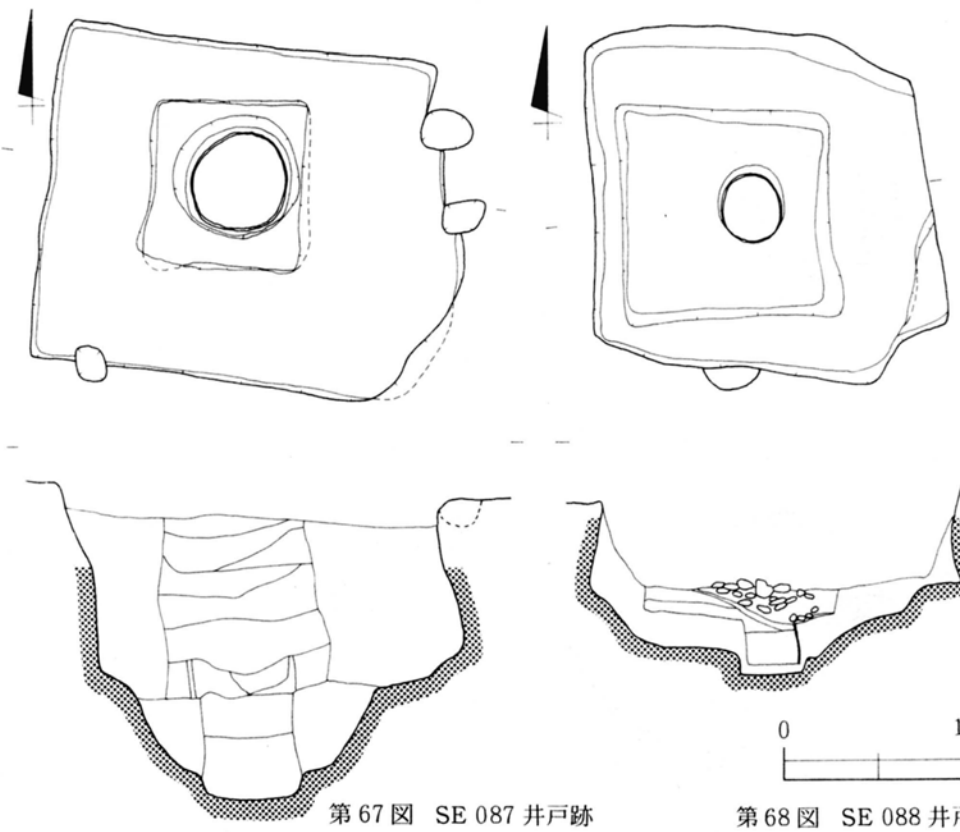
掘り方内からは、青磁菊花皿C－23、須恵器壺・甕・珠洲系擂鉢・同壺A・B・同甕、井側内からは珠洲系甕C－142、越前陶C－102、須恵器坏・甕

SE 086 井戸跡（第66図、図版20上）

調査区中央部で検出された井戸跡である。掘り方平面形は、長径約2.8 m、短径約2.4 mの隅丸方形を呈し、掘り方確認面より底部までは深さ1.4 mを計る。上部から約65cmまではゆるやかな擂鉢状に掘り下げた後に、1.0 m×0.8mの方形の井側を据えつけ、その下方に直径約65cm、現存高約45cmの曲物を付設していたものと考えられるが、井側・井筒ともに痕跡しか検出されなかった。井側内から珠洲系甕が出土している。

SE 086 出土遺物

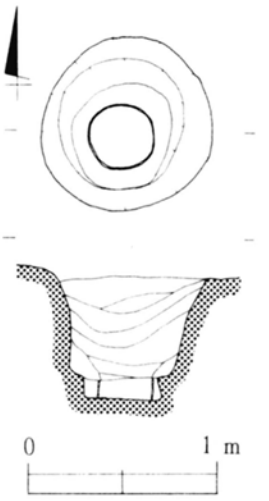
珠洲系甕C－112



第67図　SE 087 井戸跡　　第68図　SE 088 井戸跡

SE 087 井戸跡（第67図、図版18下）

調査区北東部、SE 084 の北東方向に位置している井戸跡である。掘り方平面形は、長径約 2.2 m、短径約1.75 mを計る東西にやや長い方形を呈し、掘り方確認面から底部までの深さは約1.7 mを計る。井側確認面での井側痕跡の大きさは約80cm×80cmを計るが隅柱・横桟等の材は検出されていない。井側内部には井筒として使用された曲物の痕跡が検出され、その大きさは、直径約60cmのものと、直径約45cm（いずれも現存高不明）のもの二段であるが、木質部は腐蝕している。掘り方埋土より灰釉壺、珠洲系擂鉢・同甕、砥石が出土している。



第69図　SE 089 井戸跡

SE 087 出土遺物

灰釉壺Ｃ－ 105、砥石Ｃ－ 220、珠洲擂鉢・同甕

SE 088 井戸跡（第68図、図版19上）

SE 087 の東側で検出された井戸跡である。掘り方平面形は、一辺1.75 mを計る方形を呈し、掘り方確認面から底部までは約95cmを計る。約45cm掘り下げた地点で、一辺1.15 m四方の井側を据えた掘り込みが検出され、さらに内部には直径約30cm、現存高約25cmの曲物痕が検出された。井側内部の底部より約25cmの高さの埋土中に 5 cm大の礫が多量に混在していたが、井戸の使用が不可能になった時に埋めたものと考えられる。井側内より珠洲系擂鉢・同甕等が出土している。

SE 088 出土遺物

珠洲系甕Ｃ－ 139、Ｃ－ 121、同壺Ａ型Ｃ－ 163、同擂鉢、同壺Ｂ型、内黒土師器杯

SE 089 井戸跡（第69図、図版19下）

調査区中央部ＳＥ 086 井戸跡の北西側で検出された井戸跡である。掘り方平面形は直径約92cmの円形の掘り方を呈し、底部までの深さは約70cmを計る。底部には直径約35cm、現存高約10cmの曲物を井筒として付設したものと考えられるが、曲物痕跡しか残存していない。井戸跡かどうか不明な点が多い。青磁碗等が出土している。

SE 089 出土遺物

青磁蓮弁碗Ｃ－18、須恵器坏、土師器甕、珠洲系甕

SK 090 土壙（第49図、図版11上）

調査区中央部の SE 052 井戸跡北東部で検出された土壙である。SK 090 の埋め土が SE 052 井戸跡掘り方によって切られていることから SK 090 土壙のほうが古いと考えられる。規模はSE052の掘り方によって削平されているため不明である。SE 052 井戸跡の東側部分に掘り方痕跡が認められている。

SK 091 ～ 096 土壙（第49図、図版11上）

調査区北部で検出された。長径約 1.4 m～ 1.8 m、短径約60cm～ 1.05cmの楕円形を呈し、深さ30

cm～45cmを計る土壙である。いずれの土壙も埋土は湿りをおび、泥炭状の黒色土・黒褐土を主体とする。SK 091 から土錘、釘等が出土している。

SK 091 出土遺物

土錘C－229、釘C－277、C－278

SK 097・098 土壙（第49図、図版11上）

SK 097 は調査区北東部、SE 088 の北側に隣接する。長径 2.2 m以上、短径約 1.8 mの隅丸方形を呈している。この土壙の下層から SE 112 が検出されている。一方、SK 098 は SE 088 の南側で検出された。長径約 2.8 m、短径 1.4 m以上の規模をもつ方形もしくは楕円形の土壙である。

SK 099～SK 105 土壙（第49図、図版11上）

調査区中央部で検出された土壙である。長径80cm～1 m、短径50cm～80cmを計る円形もしくは楕円形を呈する。性格等についてはいずれも不明である。

SD 106・107 溝跡（第49図、図版11上）

調査区西部で検出された溝である。SD 106 は幅約60cm、深さ約15cmを計る。SD 117 を切り東西方向に走る溝であるが、西側部分は削平等によって不明である。SD 117 は最大幅1 m、深さ約10cmを計り、南北方向から西方向へ走る。SK 104 によって切られているため延長部分については不明である。

SX 108 落ち込み（第49図、図版11上）

調査区西部で検出され、南北約6 m、東西6 m以上の規模にわたる不整形の落ち込みである。この落ち込みの下層から SB 110 掘立柱建物跡が検出されている。落ち込みの埋土内からは多量の炭化米が検出されており（図版23中）、建物跡の性格を考える上での一つの重要な要素と思われる。

SX 108 出土遺物

青磁蓮弁碗C－17、古瀬戸劃花文梅瓶型瓶子C－96、珠洲系擂鉢、越前陶か？C－201、珠洲系甕C－106、土錘C－240

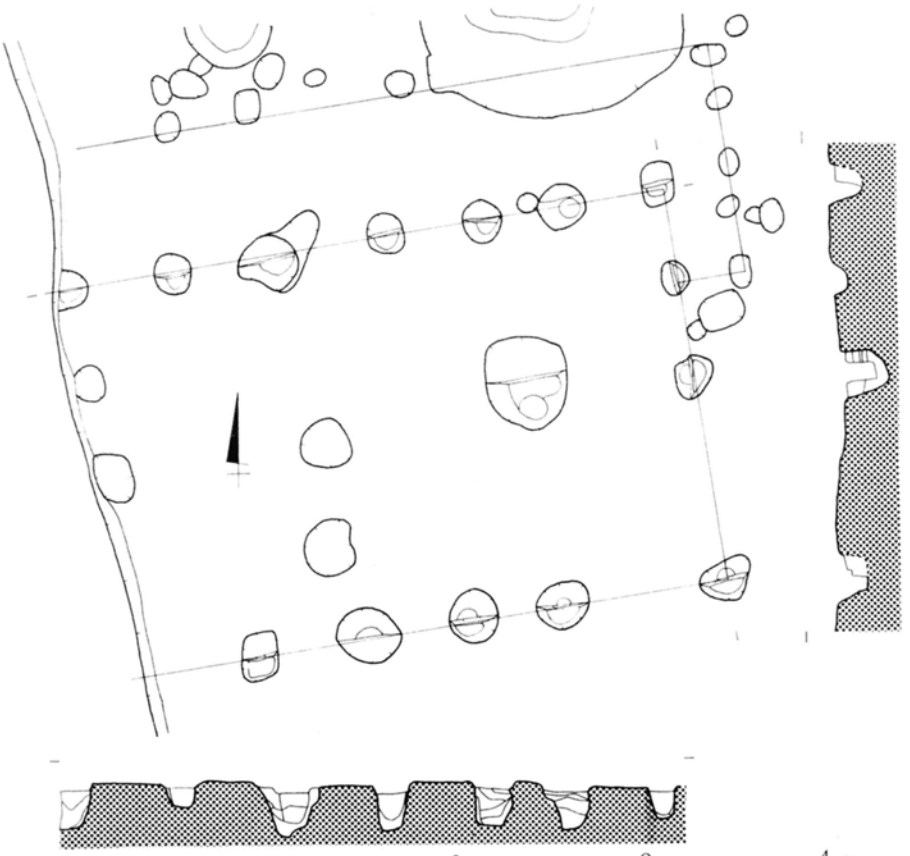
SA 109 ピット群（第49図、図版11上）

調査区北東部で多数のピット群を検出した。いずれも直径が約20cm～30cmのピット群であり、建物跡柱穴として明瞭に確認されたものはない。図上では建物跡を構成することはできないが、未調査部分の北部との関連性も考えられるため、建物跡柱穴群としてとらえたい。

3) **最下層遺構面検出遺構**（第50図、図版11下）

SB 110 掘立柱建物跡（第70図、図版23上）

調査区西部、SX 108 落ち込みの埋土を除去した段階で検出された建物跡である。西側部分は調査区外のため把握できなかった。東西6間（1.0 m＋0.95 m＋1.05 m＋1.2 m＋1.1 m＋1.1 m…）

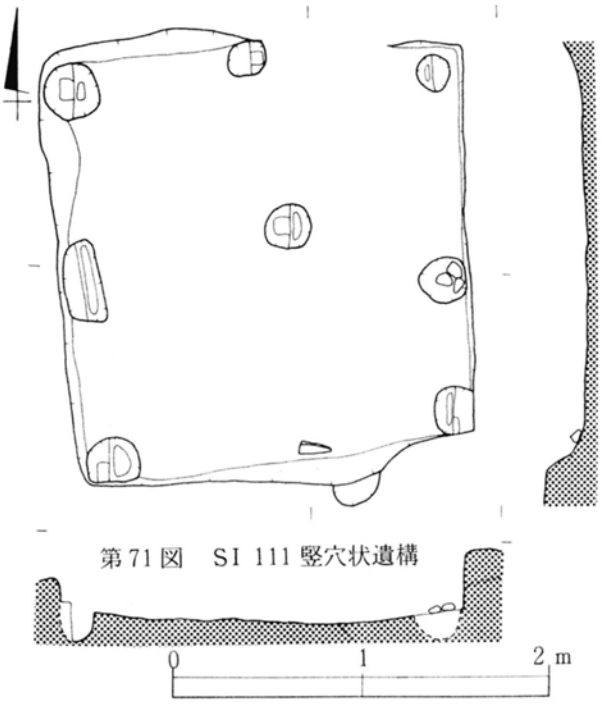


第70図　SB 110 掘立柱建物跡

以上×南北2間（2.0 m＋2.2 m）の東西棟の掘立柱建物跡であり、東柱筋は北で西へ約9°振れている。北側及び北東側に下屋あるいは廂と考えられる柱掘り方が検出された。柱掘り方平面形は約40cm～50cmの円形を呈し、深さは約40cm～50cmを計る。柱痕跡は円形で直径約20cmを計る。埋土には、焼土・炭化物が認められ、灰色砂・黒色砂等が互層をなしている。

SI 111 竪穴状遺構（第71図、図版22下）

調査区北部で検出された南北約 2.3 m、東西約 2.2 mを計る方形の遺構である。壁高は約20cm～30cmあり、各辺に三本の柱穴



第71図　SI 111 竪穴状遺構

が検出され、直径約20cm～30cm、深さ約15cm～20cmを計る。柱痕跡は一辺約10cmの方形を呈している。床面には炭化物が散在しているが、堅くしまった床面ではない。南側床面から鍬（まさかり）が出土している。

SE 112 井戸跡（第72図）

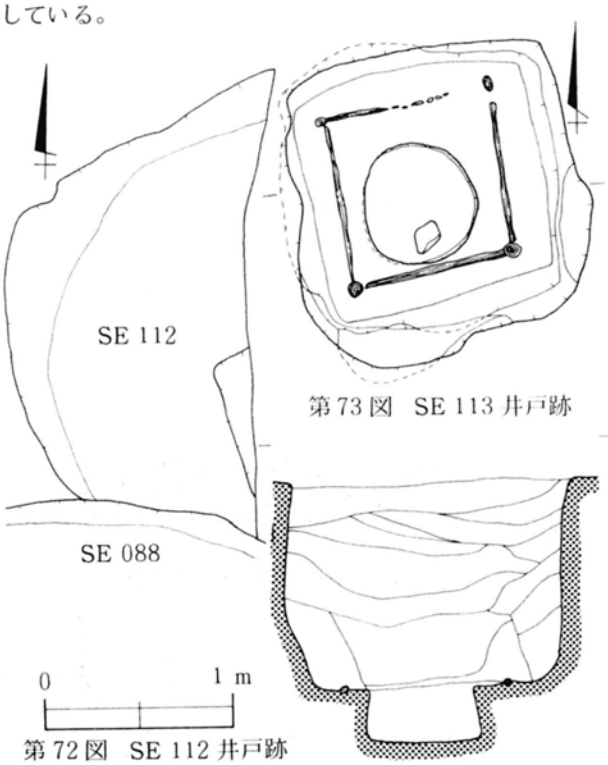
調査区北東部東壁付近、SE 088 の北側に隣接する井戸跡であるが、北西部しか検出できなかった。掘り方は隅丸方形を呈している。井側の材は検出されなかったが、方形を呈する井側痕が確認されている。掘り方内埋土より刀子等が出土している。

SE 112 出土遺物

珠洲系甕C－133、C－138、同擂鉢、須恵器甕、刀子C－242

SE 113 井戸跡（第73図、図版20下）

調査区北西部で検出された井戸跡である。掘り方平面形は一辺が1.55 mの方形を呈し、底部までの深さは1.35 mを計る。掘り方中央部に一辺約90cmの方形の井側を据えている。四隅に柱を立てて、横桟で継いでいるが、縦板等の検出はされなかった。井筒は直径約60cm、高さ約30cmの曲物を使用したものと考えられるが、材は検出されなかった。掘り方内より珠洲系擂鉢、須恵器坏等が出土している。



第73図　SE 113 井戸跡

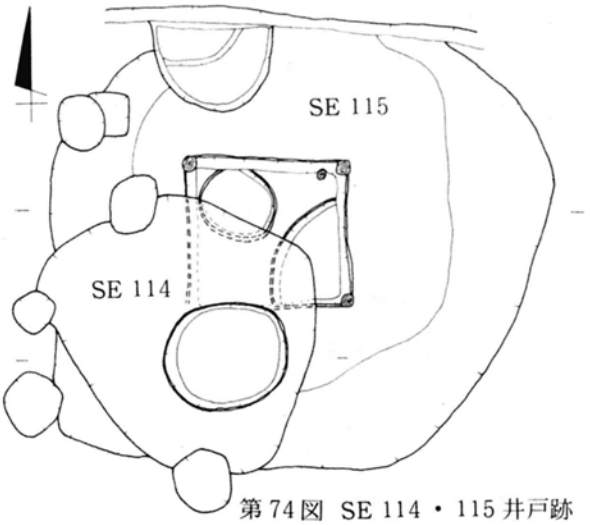
第72図　SE 112 井戸跡

SE 114 井戸跡（第75図、図版21上）

調査区北部において検出された井戸跡である。掘り方平面形は、長径約 1.5 m、短径約 1.3 mの楕円形を呈し、底部までは約75cmを計る。掘り方内部には井側の痕跡は認められず、やや東寄りに直径約50cm、現存高約25cm～30cmを計る曲物痕跡が検出された。井筒内より珠洲系擂鉢が出土している。

SE 115 井戸跡（第74・75図、図版21上）

調査区北部、SE 114 の下層で検出された井戸跡である。掘り方平面形は、直径約



第74図　SE 114・115 井戸跡

2.6 mの円形を呈し、底部までは約 1.4 mを計る。掘り方中央部に、一辺約85cmの方形の井側を据えている。南西隅を除く三隅には、枘穴を有する７cm～８cm角、現存長40cm～50cmの隅柱を立てているが、横桟は検出されなかった。井筒として使用された曲物は、直径約40cmのものが北西部に、さらに大型のものが¼程、南東部に、それぞれ痕跡として認められている。とくに後者は、井側を大きくはみ出しており、井戸の作り変えが考えられる。

遺物は青磁蓮弁文碗Ｃ－19、珠洲系甕・同壺Ａ種口縁部。

SE 116 井戸跡（第76図、図版　）

調査区北西部、 SE 113 の北側に位置する井戸跡である。掘り方平面形は長径約 1.55m、短径約 1.4 mの南北に長い楕円形を呈し、底部までは南側で約95cmを計る。掘り方の北側には直径約55cm、現存高約15cmの曲物、南側には直径約45cm、現存高約40cmの曲物がそれぞれ付設されていたものと考えられるが、腐蝕が著しく取り上げることはできなかった。。

SE 117 井戸跡（第77図、図版21下）

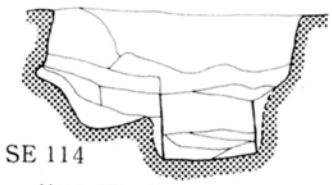
SD 118 の南東コーナー部分で検出され、SD 118 よりも新しい遺構である。掘り方平面形は直径 1.3 mの円形を呈する。深さは1.2 m。掘り方中央部分に約１ m四方の方形の井側痕、直径40cmの曲物痕跡が認められ、二段の横桟が確認された。

SD 118 溝跡（第50図）

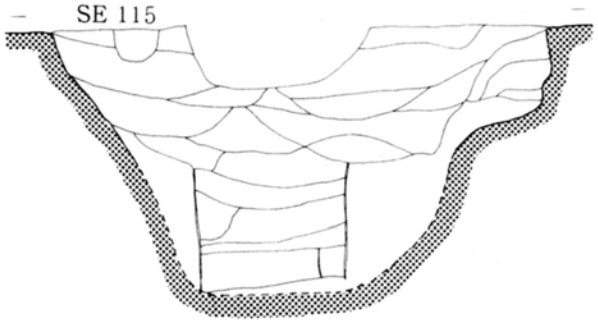
調査区東側を南北に走り、 SE 117 西側に屈折する溝跡である。幅約 1.1 m、深さ約80cm～90cmを計るが、断面は途中で一段掘り方が狭くなり、底面では幅約15cmを計る。最下層遺構面で検出された遺構の中でも古い遺構であると考えられる。性格等については不明である。

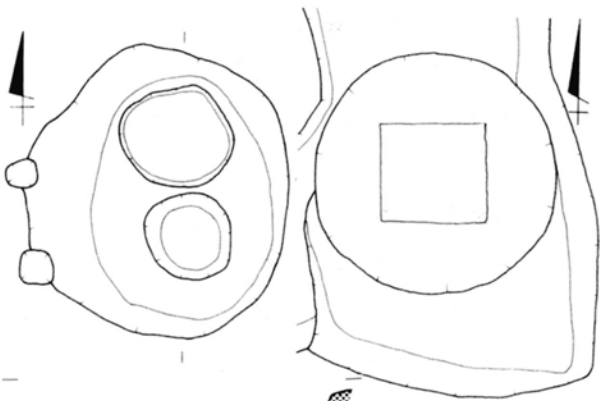
SD 119 ～ 120 溝跡（第50図）

調査区北東部で検出された。 SD 119 は、SE 088 から SE 052 方向へ走っている。幅

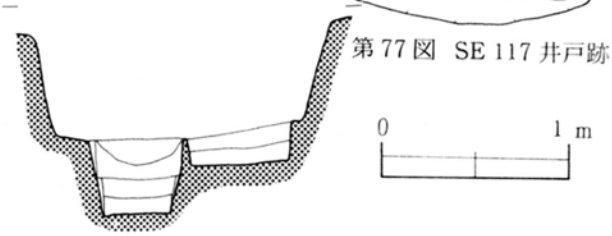


第 75 図　SE 114 ・ 115 井戸跡掘り方断面図





第 77 図　SE 117 井戸跡



第 76 図　SE 116 井戸跡

約60cm、深さ約10cm、現存長約2 mを計る。SD 120 はSE 112 北西部よりSI 111 に向かって東西に走る溝である。幅約40cm、深さ約10cm、現存長約 4.4 mを計る。

SK 121 ～ 125 土壙（第50図）

調査区北部で検出されている土壙である。SK 121 は直径約 1.2 m、深さ約70cm、SK 122 は直径約60cm、深さ約20cmの円形を呈する土壙である。SK 123 は一辺約 1.6 mの方形を呈し、深さ約20cmの浅い土壙である。SK 124 、125 ともに長径約 1.2 m、短径約80cm、深さ約30cmを計る土壙である。

SK 126 土壙（第50図）

調査区北東部で検出された直径約 2.2 m、深さ約60cmを計る、円形を呈する土壙である。SD 118 溝およびSK 123 土壙を切っている。

SK 127 ～ 139 ・ 148 ・ 149 土壙（第50図）

調査区北部で検出された楕円形もしくは円形を呈する土壙である。

SK 140 ・ 150 土壙（第80図）

SE 055 付近で検出された土壙。SK 140 は長径約2 m、短径約 1.8 mの不整形を呈する。深さ不明。一方、SK 150 は東側半分のみ検出されているが規模、深さとも不明である。

SK 141 ～ 145 土壙（第50図）

調査区中央部で検出された。SK 141 ～ 143 は直径約60cm～ 1.0 mを計る円形の土壙。SK 144 は長径約 1.2 m、短径約80cmの楕円形を呈する。SK 145 は長径約80cm、短径約60cmの楕円形を呈する。いずれも深さは不明である。

SK 146 ・ 147 土壙（第50図）

SB 110 建物跡の南側で検出された土壙である。SK 146 は長径約 1.3 m、短径約80cm、深さ20cmの楕円形を呈する。SK 147 は直径約70cmの円形の土壙である。

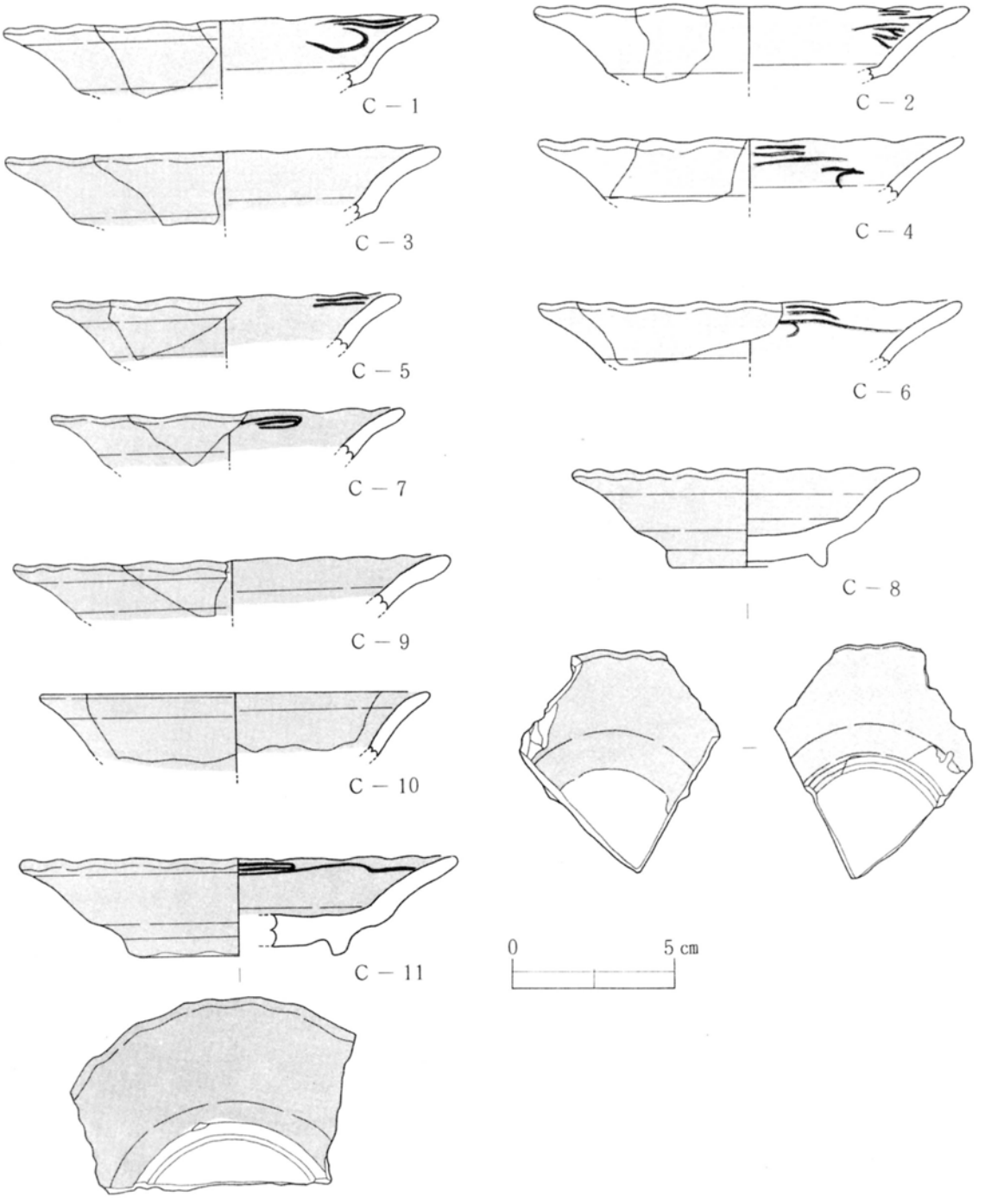
C地区出土遺物

C地区出土遺物は輸入陶磁類として青磁、白磁、染付、国内産陶磁類として瀬戸・美濃、珠洲系陶器、越前陶がある。他に鉄、銅製品、土製品、石製品、古銭が出土している。

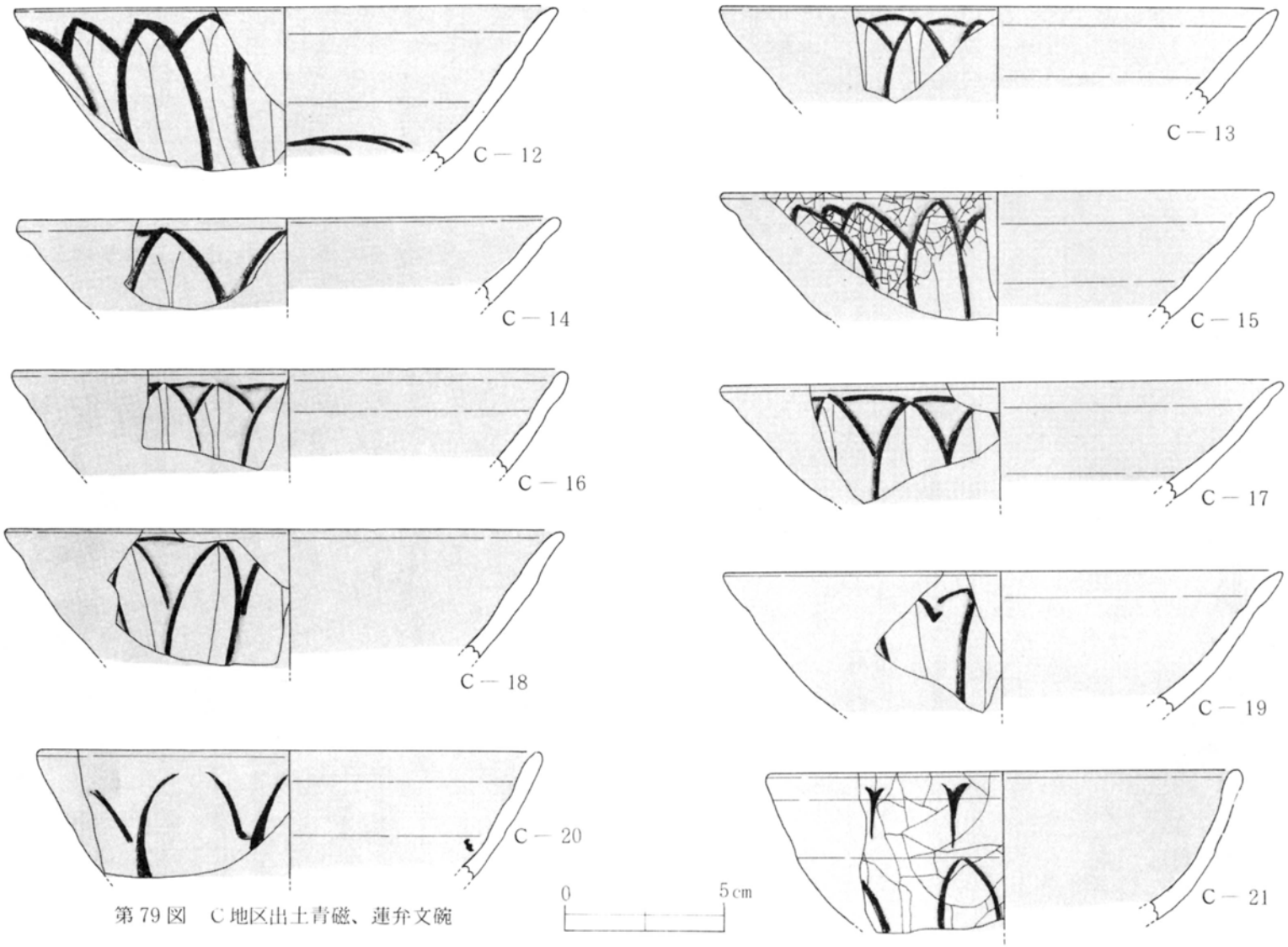
青磁（皿）（第78図、図版67上）

平担な口縁のC－10を除き、他はすべて口縁をくぼめて花弁状に作り出した稜花皿である。腰部に特徴的な稜をもち、稜より上は強く外反している。内面の口縁付近に線刻による渦文、波文が廻っている。底部の遺存している例では内面見込みが円形の露胎になっており、高台内、畳付も露胎となっている。口径が14cm程の比較的大ぶりなC－1、11の類と10cm前後の小ぶりなC－5、7、8の類が認められる。

（碗）（第79～82図、図版67下、68、69）（**蓮弁文碗**）（C－12～21）：外面に蓮弁の浮彫の廻る碗で



第78図　C地区出土青磁皿



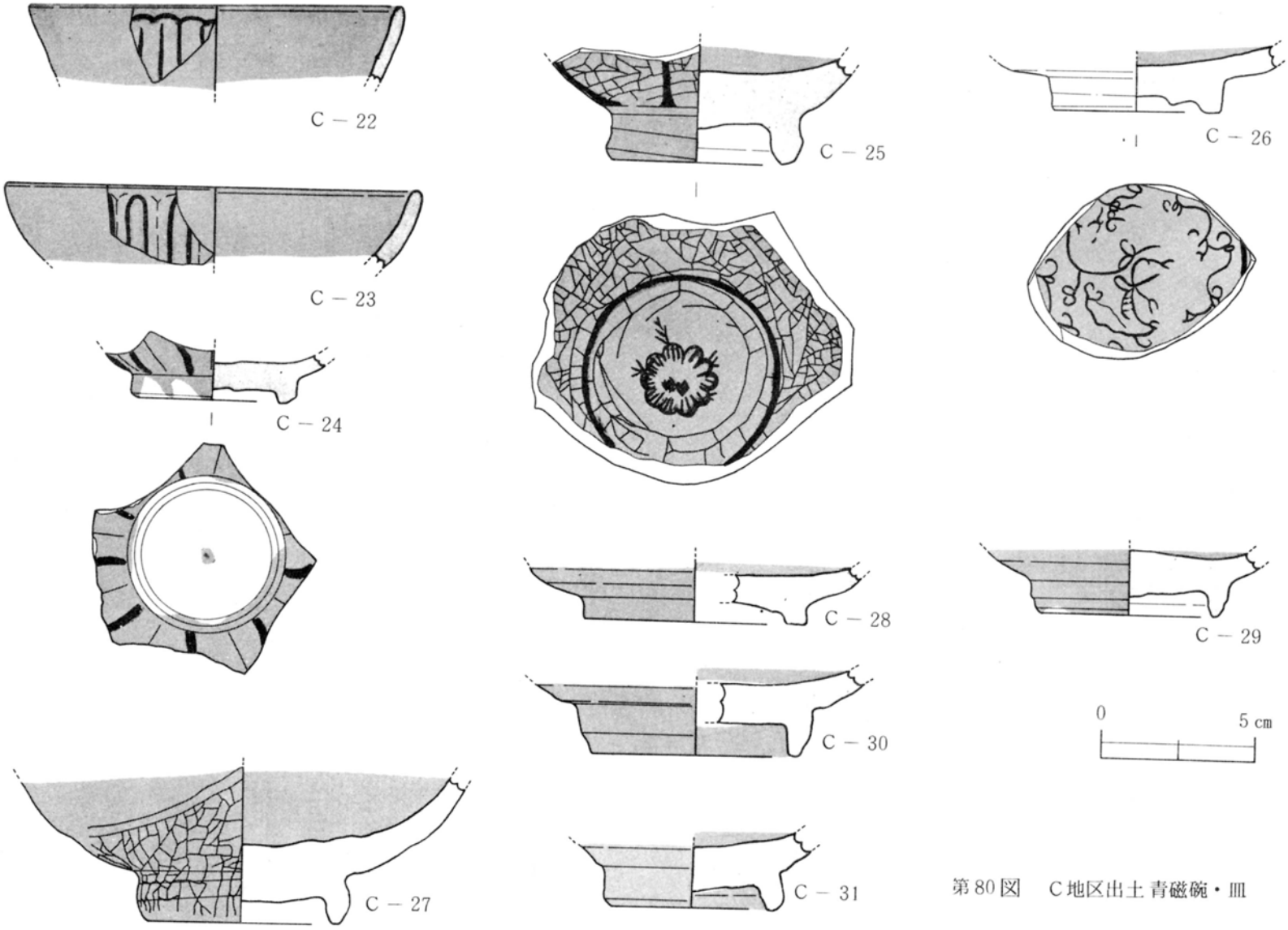
第 79 図　C 地区出土青磁、蓮弁文碗

ある。複弁で鎬の明瞭な類（C～12～16）、やや不鮮明な鎬の類（C－17～19）、鎬のない彫去も浅い類（C－20、21）などがある。器形は口縁部に向かって直線的に伸び、口縁付近でわずかに外反するものが多いが、C－20、21のようにやや内湾気味の口縁部で、全体的に丸味を帯びる器形のものもある。磁色はC－12～14は澄んだ青色であるが、他は緑色、褐色を帯びている。C－12は内面に草花文の片彫りの線刻が廻る。C－24、25も浮彫の蓮弁文の廻る碗で高台内は露胎で、C－24は中心にわずかに釉を残してぬぐい取っている。C－25に内面見込みに線刻の円圏が廻り、その中に草花の印刻を配している。C－22は前述の類と異なり、線刻による細い蓮弁のまわるもので、口縁直下に連弧を描き、その下に縦線を配して蓮弁を表現している。C－23は外面に浮彫による細い花弁を配した菊皿であるが、この類にまとめた。

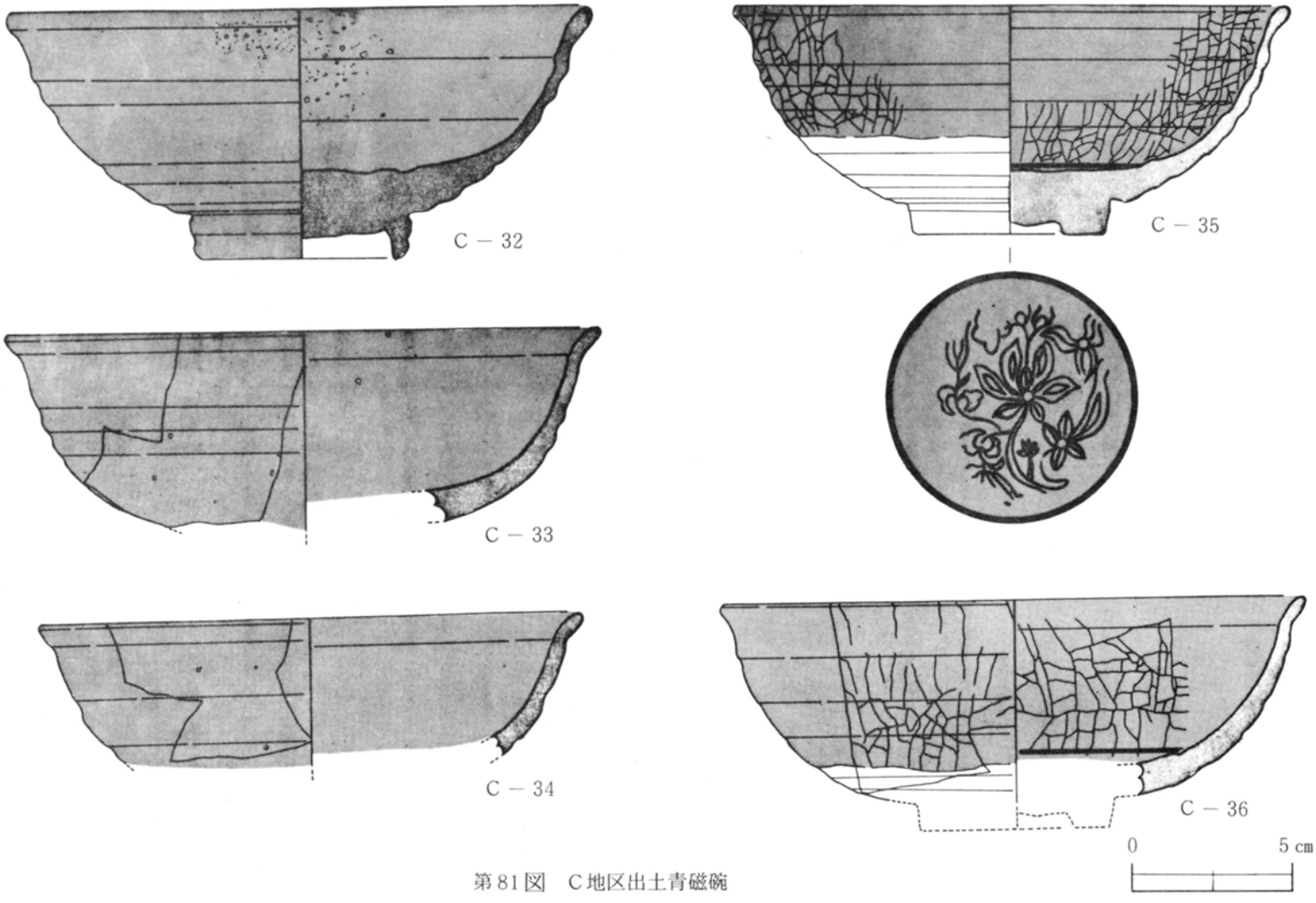
蓮弁のない碗　（C－26～44）：C－26、27は見込みに草花文が配されている。C－26は毛彫り状の繊細な唐草文で、外面は下半部から高台まで露胎している。磁色は鈍い鉛色に発色し、胎土も軟らかい。高台は削り出されている。C－27はスタンプによる印刻の草花文であるが磁胎が厚く不鮮明である。高台内だけが露胎となり、露胎部は赤く発色している。C－28～31は碗の高台部である。C－28、29は畳付きから高台内は露胎となる。　C－30、31は高台内まで施釉され、内面見込みには円形の露胎が認められる。釉色はいずれも緑色を帯びた青色に発色している。C－32～34は形態の類似する碗で、容量も同じで、釉はたっぷりかかり、重量感がある。全体の明らかなC－32をみると、見込みには円形の露胎があり、高台内も露胎している。露胎部は赤く発色している。器形は内湾気味に立上り、口縁に至って外反する。釉色は暗緑色で、磁胎は厚く、器肉は底部中央で最大となる。高台は貼り付け後、ケズリを行なっており、台部は先端を細くし、丸味をもたせている。C－35、36は体部外面は体部外面下半から高台が露胎している同一形態、同容量の碗である。いわゆる「つっこみがけ」といわれる施釉で、磁色は黄色を帯びた灰色で、磁胎は薄い。露胎部は黄白色で軟らかい。高台は幅広いもので、削り出しによって作り出され、高台内の中心部はえぐり取ったようにくぼんでいる。見込みには線刻による円圏が廻り、C－35はその中に蓮華と考えられる繊細な草花文が線刻されている。C－26もこの形態に入るものと考えられる。C－37～43は碗の口縁部、台部破片であるが、全体の不明なものである。C－37は口縁の強く外反するもので磁色は暗緑色を帯び貫入が著しい。C－38は全体に器肉が薄手で、容量もC－32などより小ぶりである。磁色は灰色を帯びた青色である。C－39はC－32と同様な碗である。

盤　（第82図、図版70上）：C－44は底部が露胎し、露胎部は赤く発色している。底部から開き気味に伸びた体部は口縁に至って一担水平に外に折れ、更に直角に立ち上る。体部内面には浅いくぼみが中心に向かい放射状に認められ、中央には蓮子状の文様がかすかに観察されることから蓮華を表現しているものと思われる。底部は碁筍底に削り出され、更に中心に向かい一段の高まりを作り出している。施釉はこの段まで行われている。釉色は褐色を帯びている。

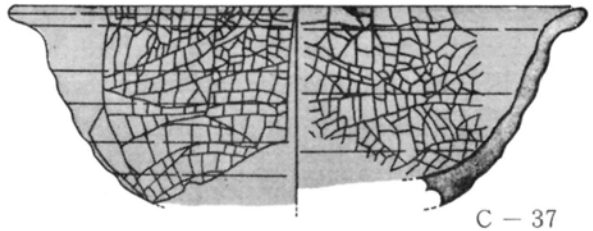
白磁（第83図、図版70下）



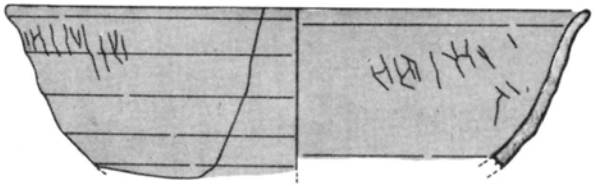
第80図　C地区出土 青磁碗・皿



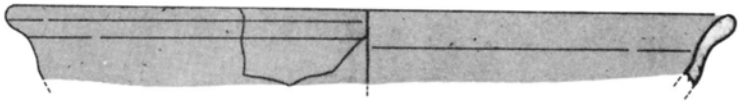
第81図　C地区出土青磁碗



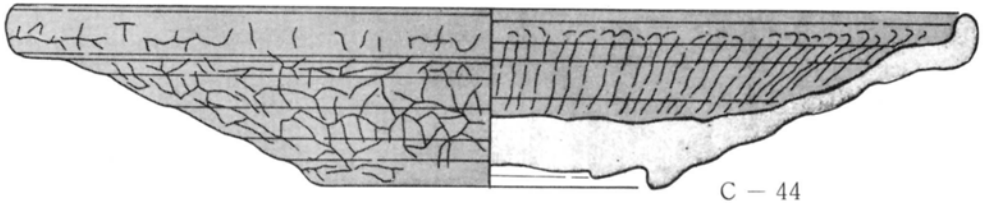
C－37



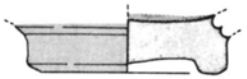
C－38



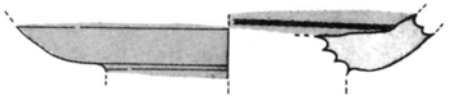
C－39



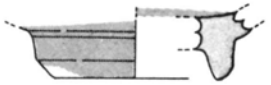
C－44



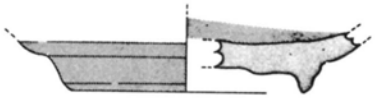
C－40



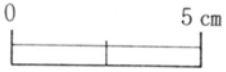
C－41



C－42



C－43



第82図　C地区出土青磁碗・盤

蓋　C－45はつまみの欠損した蓋である。器肉は厚く、外面には白地に灰色の斑点がある釉がかかる。胎土は白色で固い。

小盃　C－46、47、48はきわめて小ぶりの盃である。C－46は底部片であるが施釉は全体になされている。C－47は口縁が強く外反する形態で、畳付きから高台内が露胎している。C－48は口縁に向かい、全体に内湾する形態で、体部立上りから高台全体にかけて露胎している。

皿　（C－49～58）C－49は口縁が強く外反し、全体に薄手である。施釉は全体になされ、磁色も澄んだ白色で、胎土も固い。C－50～53はやや軟質の胎土で、磁色も乳白色である。器肉もやや厚手で高台はいずれも露胎している。C－53は体部下半から露胎し、内面見込みには蛇の目状に露胎部があり、重ね焼きの痕跡と考えられる。高台は削り出しによって作り出され、畳付きには明瞭な段が認められる。

碗　C－54はいわゆる口禿げの碗で、外反する口縁の端部が露胎している。磁色は青味がかった白色で、胎土は硬く焼きしまっている。

染付（第83図、図版71上）

細片が多く、器形、文様ともに全体の明確なものはないが、皿類が大部分と考えられる。胎土、磁胎はC－65がやや軟質で乳白色であるが、他はいずれも硬質で、青みを帯びた白色に発色している。草花文・雲文・バショウ文・動物文などの呉須による文様が認められ、更に1～2本の条線が廻るものなどがある。

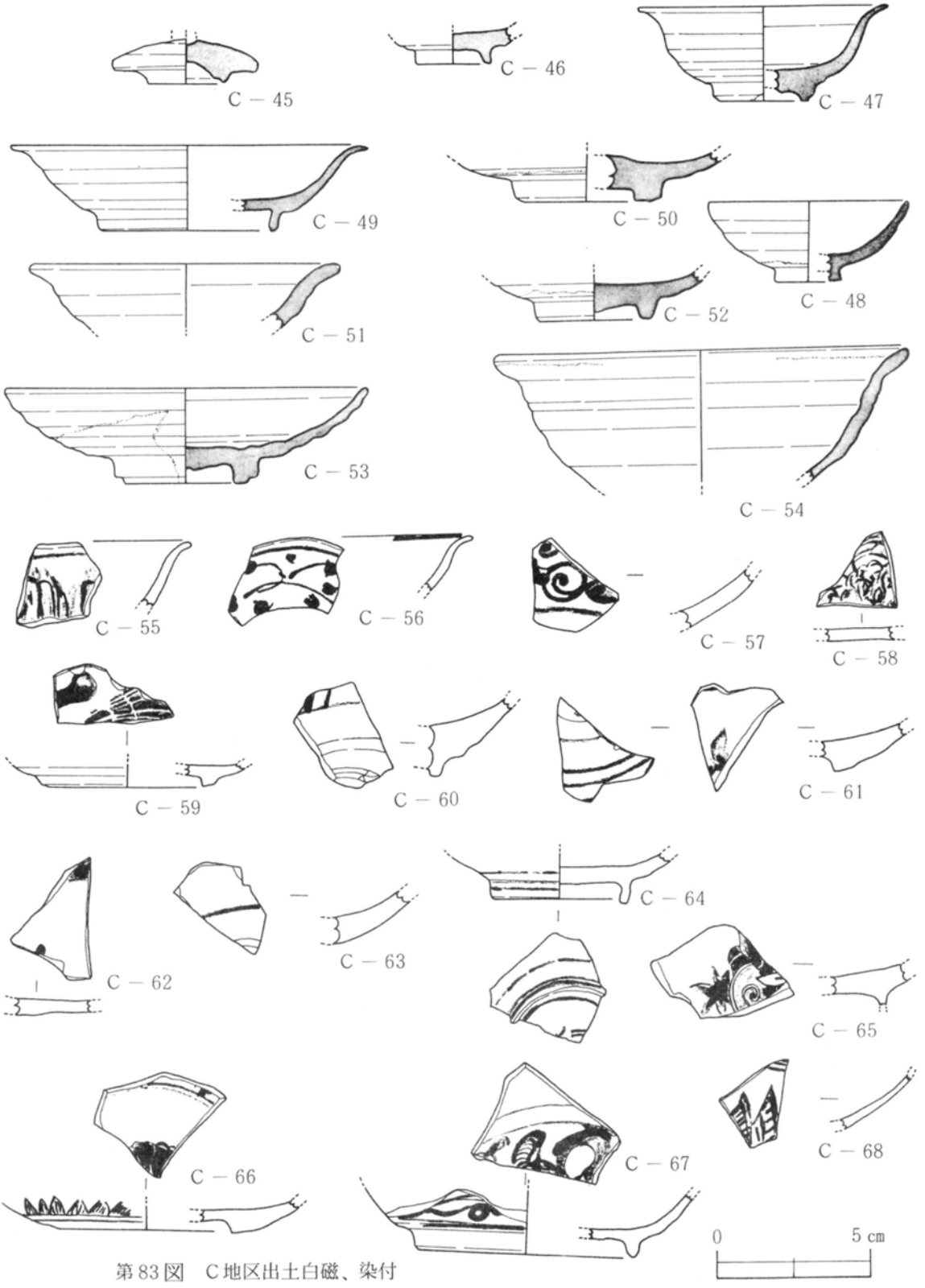
C－55は外面に濃淡で山水を表現したものと思われる。口縁が強く外反する小皿である。C－56は唐草文、或いは宝相華文のくずれたもの、C－57は雲文、C－58は目の描写があり、獅子などの動物文、C－59は草花文、C－60、61、63は外面に条線が廻り、C－61、62の内面には草花文が認められる。C－60、63は同一個体である。C－64は外面、高台部に2条、腰部に1条、更に高台内に1条の条線が認められる。高台内には又、二字の文字があり「大明○○」と読めそうであるが、明確でない。C－65はやや軟質な胎土で、釉色も乳白色を帯びている。見込みには草花文が配される。C－66は腰部にバショウ文のくずれた連続文様が廻り、内面見込みには菊花状の花文が認められる。C－67は腰部に宝相華唐草文、見込みの円圏内には獅子と毬鞠の文様の一部が観察され、高台の畳付きは露胎している。C－68は腰部にバショウ文が廻り、その上には3本の条線が認められる。底部の作りとしてはC－59、60、64、65、67のようないわゆる輪高台のものと、C－61、63、66のように碁笥底のものがある。

古瀬戸・美濃

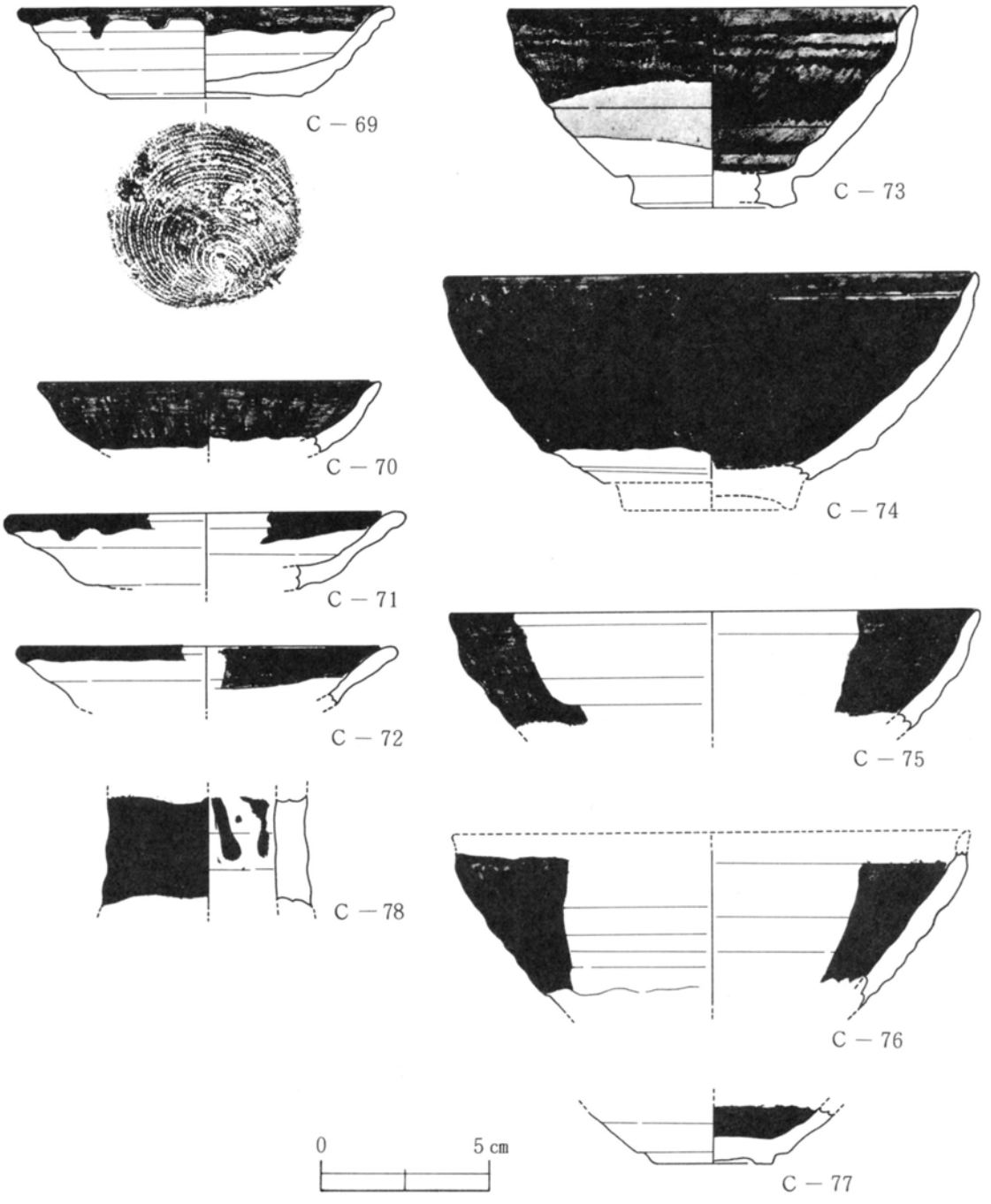
鉄釉及び灰釉のものが出土している。鉄釉のものとしては小皿・天目茶垸、花瓶、灰釉のものとしては小皿、垸、卸し皿、瓶子、四耳壺、鉢、花瓶、四足盤などがある。

鉄釉（第84図、図版71下、72上）

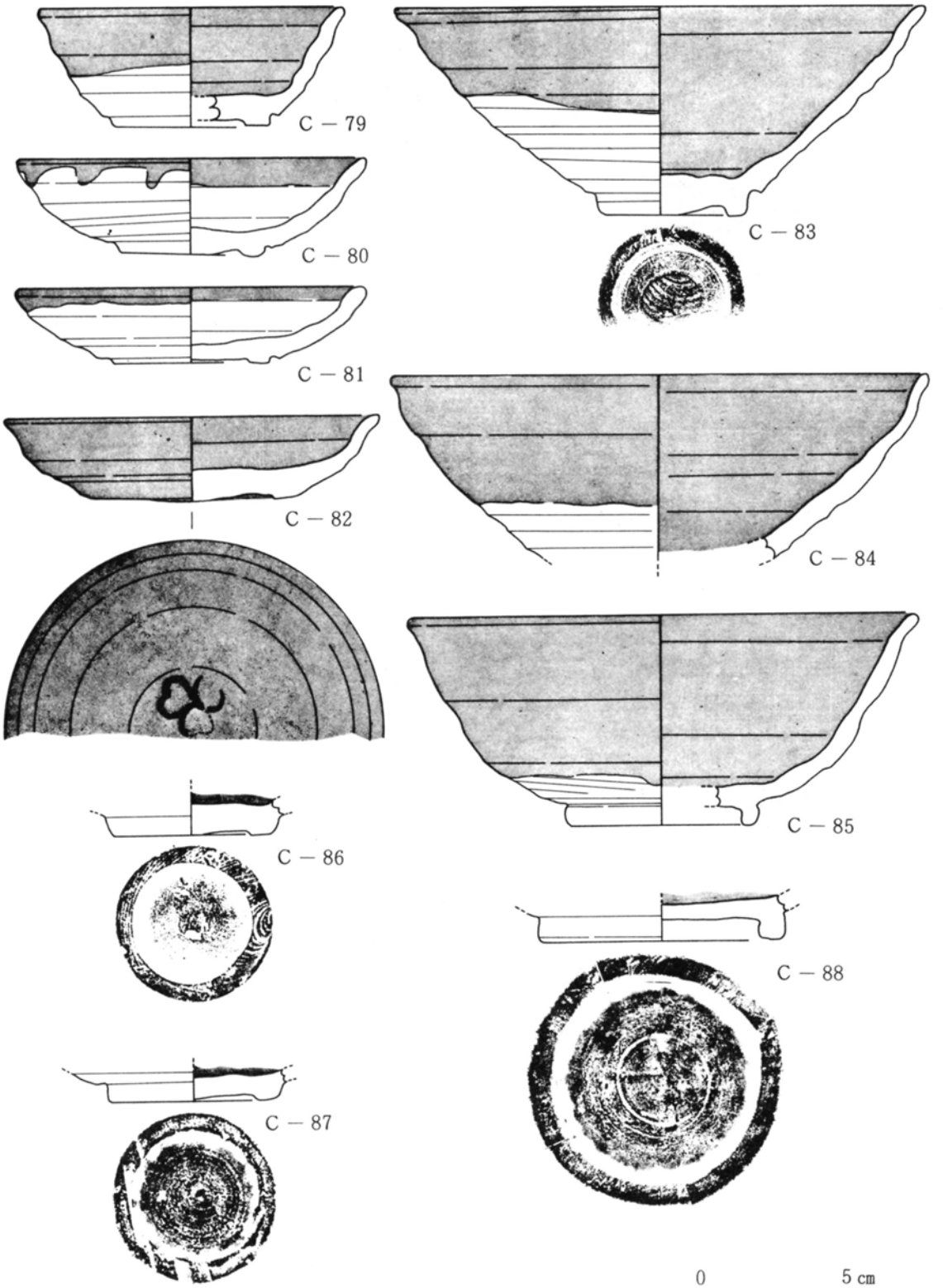
小皿　C－69、71、72は口縁部だけに施釉された小皿である。C－69の底部には回転糸切り痕が



第83図　C地区出土白磁、染付



第84図　C地区出土瀬戸・美濃鉄釉小皿・天目茶垸等



第85図　C地区出土瀬戸・美濃灰釉皿、埦

認められる。C－70は外面下半が露胎する小皿でC－69などより小ぶりである。

天目茶碗　C－73は外面上半から内面全体に漆黒の釉と褐色の釉がロクロ痕にそって斑に認められ、見込みには蛇の目状の漆黒の輪が廻る。露胎部と施釉部の間にはいわゆる鬼板と呼ばれる渋茶色のつやのない顔料を塗布している。高台は削り出しており、高台畳付き端部は面取りされている。C－74～76は図上による復原であるがC－73より容量が大きい。外面下半は露胎しており、釉は漆黒で部分的に褐色の釉が斑状に認められる。C－77は底部片である。外面は露胎、内面に漆黒釉と褐色の斑点が認められる。台部は削り出されており、中央を兜巾状に残している。

花瓶　C－78は花瓶の破片で、裾広がりの円筒形である。釉は外面の内面上部に施されたとみえ、上からのなだれた釉が内面の露胎部に認められる。

灰釉（第85～88図、図版72下、73、74、75）

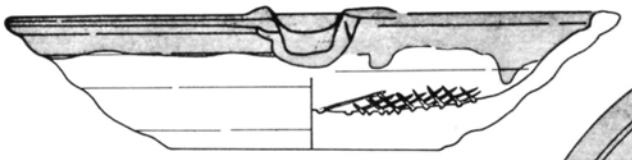
小坏　C－79は体部外面下半を露胎にしている。釉は黄色を帯びた淡緑色で、高台は削り出しによる低いものである。

皿　C－80、81は口縁部のみに施釉している。削り出しによる低い高台で、中央部、畳付部などに回転糸切り痕が残る。C－82は全体に施釉しており、見込みにはかたばみの葉が印刻され、底部は碁筍底に削り出されている。

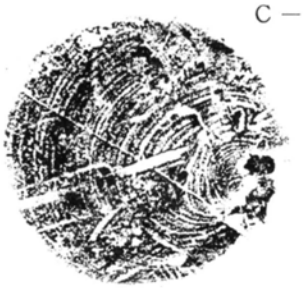
埦　C－83は小ぶりの底部から直線的に伸びる体部で、いわゆる平茶埦といわれるものと思われる。体外面下半は露胎しており、回転のケズリを施している。高台は削り出しで、中央と畳付きを削り残しており回転糸切り痕が認められる。釉色は黄色を呈する。C－84は天目茶埦風の器形で、やはり体外面下半は露胎している。釉は淡緑色を呈する。C－85は体部に丸味を帯びた器形で、高台はいわゆる輪高台である。釉は淡緑色、高台周縁から下が露胎している。C－86～88は皿及び、埦の高台と考えられ、削り出しによる高台が多い。C－86のように糸切り痕を残すものや、ていねいに削り取ってしまうC－87のようなものがある。C－88は付け高台で高台内と周辺を削っている。いずれも高台は露胎している。

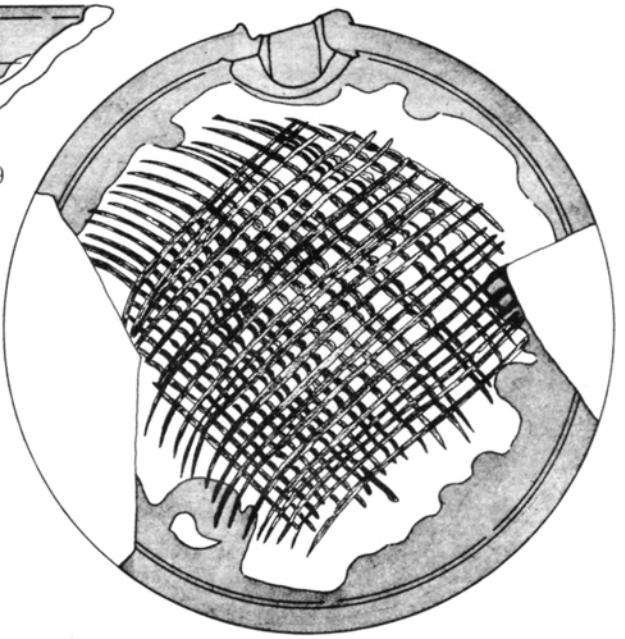
卸し皿　C－89　開き気味の器形で、角ばった短かい片口が付く。口縁は基部で一担押え、端部で折返し幅広に作り出している。卸し目は2方向からほぼ直角に交わるようにヘラ状工具によって刻まれている。釉は口縁内外、片口部のみに施され、他は露胎している。底部には切りっぱなしの回転糸切り痕が残る。C－90も底部、卸し目の状態は同様であるが、釉は内外面ともC－89より底部近くまで施され、器形もひとまわり大きい。C－91、92は口縁部破片であるが、C－91は外に傾斜する厚めの口縁で、立上りの屈曲も強い。片口は口縁をわずかに外傾させた丸味を帯びた短いものである。C－92は内傾する口縁形態で器形は開き気味である。釉は淡緑色で口縁内外のみに施されている。

瓶子　C－93～96はいわゆる梅瓶といわれる瓶子で、C－93は口頸部破片で、口唇部と頸部とのほぼ中間に巾 0.5 cmの凸帯が廻る。C－94、95は梅瓶の頸部から肩部にかけての破片で4～5条

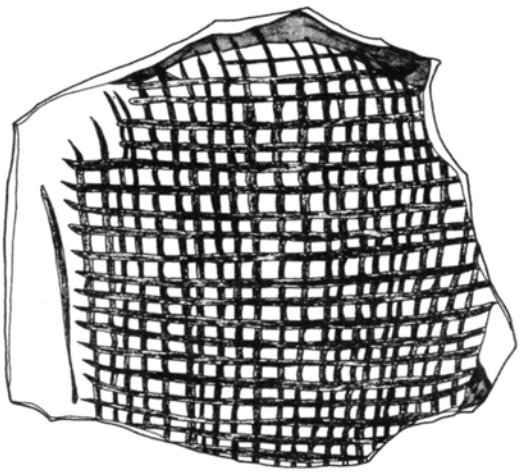


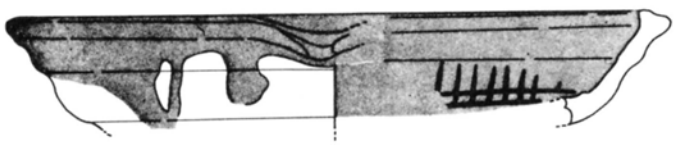
C－89



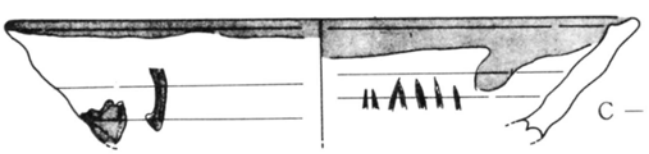


C－90





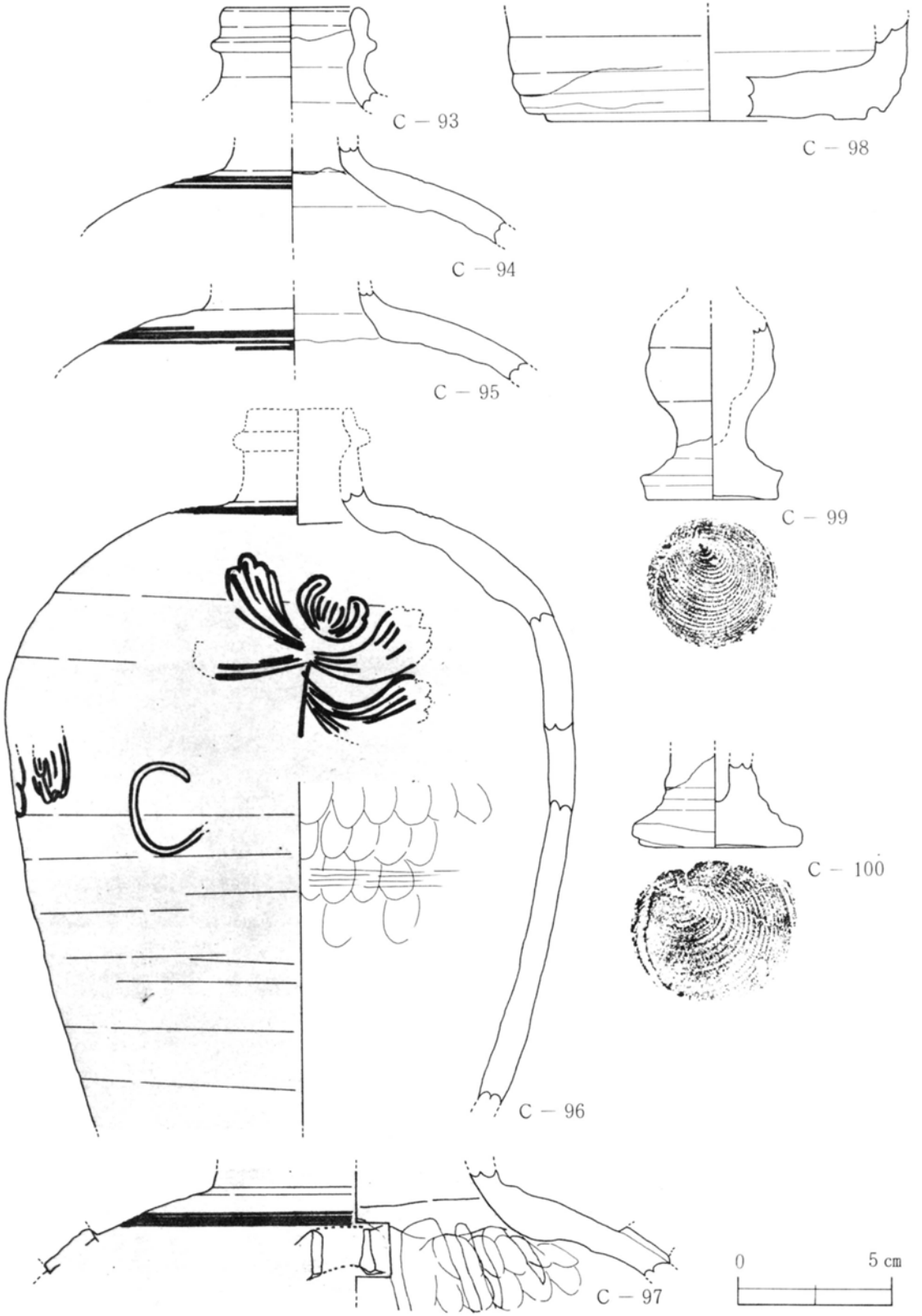
C－91



C－92

0　5 cm

第86図　C地区出土瀬戸・美濃灰釉卸し皿



第87図　C地区出土瀬戸・美濃灰釉瓶・壺類

の櫛歯状工具による沈線がめぐり、内面には指頭大の凹凸が認められる。C－96は口頸部が欠損した梅瓶で、頸部には櫛状工具沈線が廻り上半部には牡丹唐草の劃花文がある。下半部は回転ヘラケズリによる擦痕が著しい。内面にはC－94、95と同様に指頭大の凹凸が認められ、部分的に横ナデが行われている。釉はいずれも淡緑色を呈する。

四耳壺　C－97は頸部から肩部にかけての四耳壺の破片である。把手は欠損して、その痕跡が残るが、偏平な板を体部に貼り付け、屈曲させたもので、把手の上部、頸部よりの部分には4条の沈線が回る。内面の施釉は頸部付近で止まっており、釉色は淡黄緑色を呈する。

鉢　C－98は小ぶりな鉢の底部破片である。底部から立上り付近は露胎しており、釉は淡緑色を呈する。幅広の低い台が削り出されている。

小仏花瓶　C－99、100は円盤状の裾開きの台部のつく小仏花瓶である。台裏には回転糸切り痕が残っている。釉は台上部のくびれ部まで施されている。C－99は卵球形の蕪部がつく。

四足盤　C－101はやや外に開いた器形の折縁の大型四足盤である。接合した復元直径は約39㎝で、獣足状の4足が配されている。内外面の下半は露胎しており、内面には鬼板を塗付したと思われ、筋状に褐色に発色している。外面体部下半から底部は回転ヘラケズリによって平担に整形されているが、底部中心に回転糸切り痕が残る。黄緑色を呈し、光沢のある釉調を呈している。

その他の灰釉陶器等（第88図、図版72下、75）

山茶垸　C－102は極めて薄手の作りで、体部で2㎜程、底部付近の屈折部でも4㎜である。灰褐色の胎土で重ね焼痕と思われる帯状の自然釉が口縁部に認められる。内面にもゴマ振り状に自然釉が認められる。

（産地未詳の灰釉陶器）

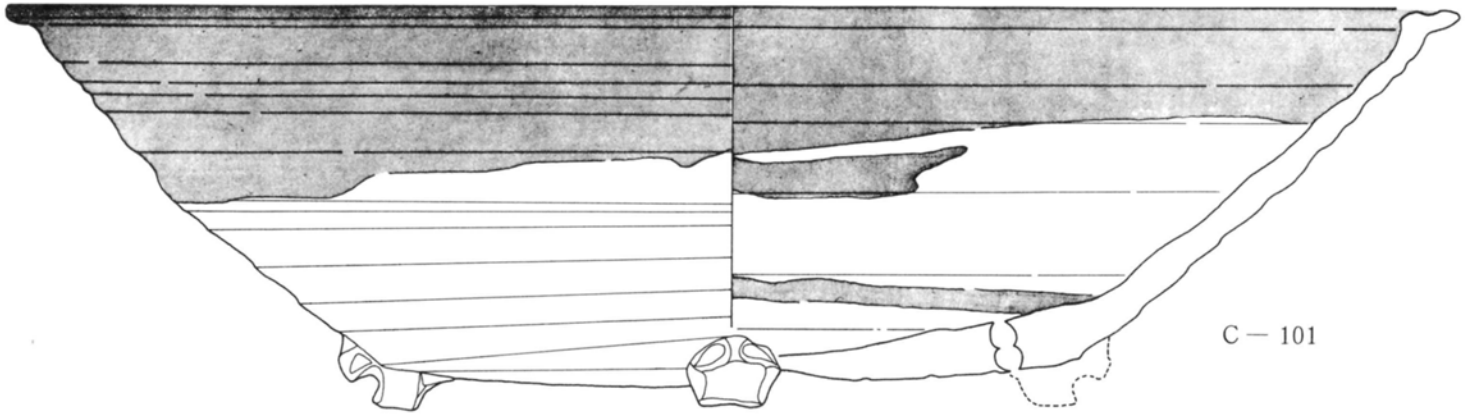
C－103、104、105は釉調、胎土などが古瀬戸、美濃とは異なるものと判断されたため、これらとは分けた灰釉の陶器である。C－103はボタン状の粘土貼付のある小鉢、C－104は回転糸切り痕を底部に残し、低い台を貼り付けた皿、C－105は櫛歯状工具による縦位の浅いカキ目を施した鉢、或いは壺の胴部である。

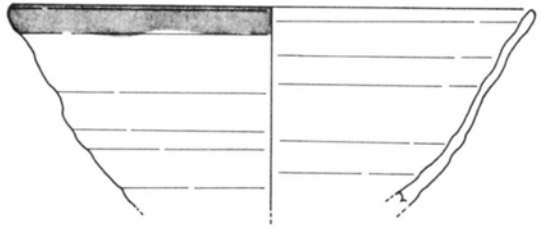
珠洲系陶器

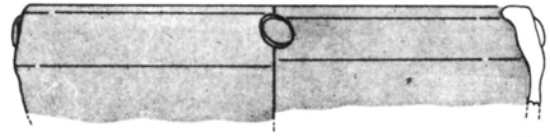
灰青色、灰色、暗灰青色の色調で、還元炎焼成による須恵器系の陶器である。器種としては、甕、壺、鉢がある。甕・壺の分類は、吉岡康暢氏の「珠洲法住寺第3号窯」の分類による、器高1対口径1程度の器形を甕とし、器高2対口径1ないしそれ以下の器形を壺とした分類に従った。しかし、全体系が復原できない破片がほとんどであるため、胴部破片については、湾曲の度合と、器肉の厚さ、打圧痕などによって甕と壺とに分類した。

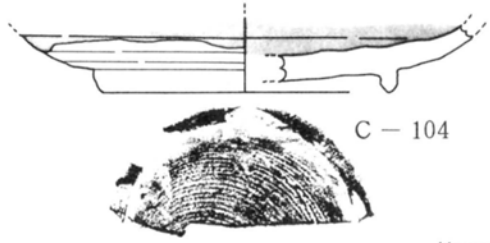
甕　（第89～92図、図版75下、76、77上左）

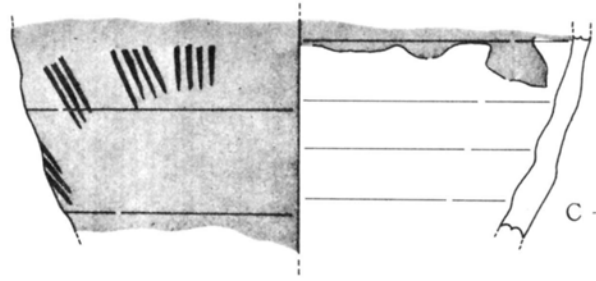
C－106は全体が図化できるまで復原できたものである。底部は砂底で、口縁部は角ばった短いもので、口径約45㎝、器高約42㎝の中型の甕である。製作工程は、口、胴、底の三段階にわけて

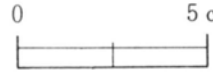












第88図　C地区出土瀬戸・美濃灰釉盤、及びその他の陶器

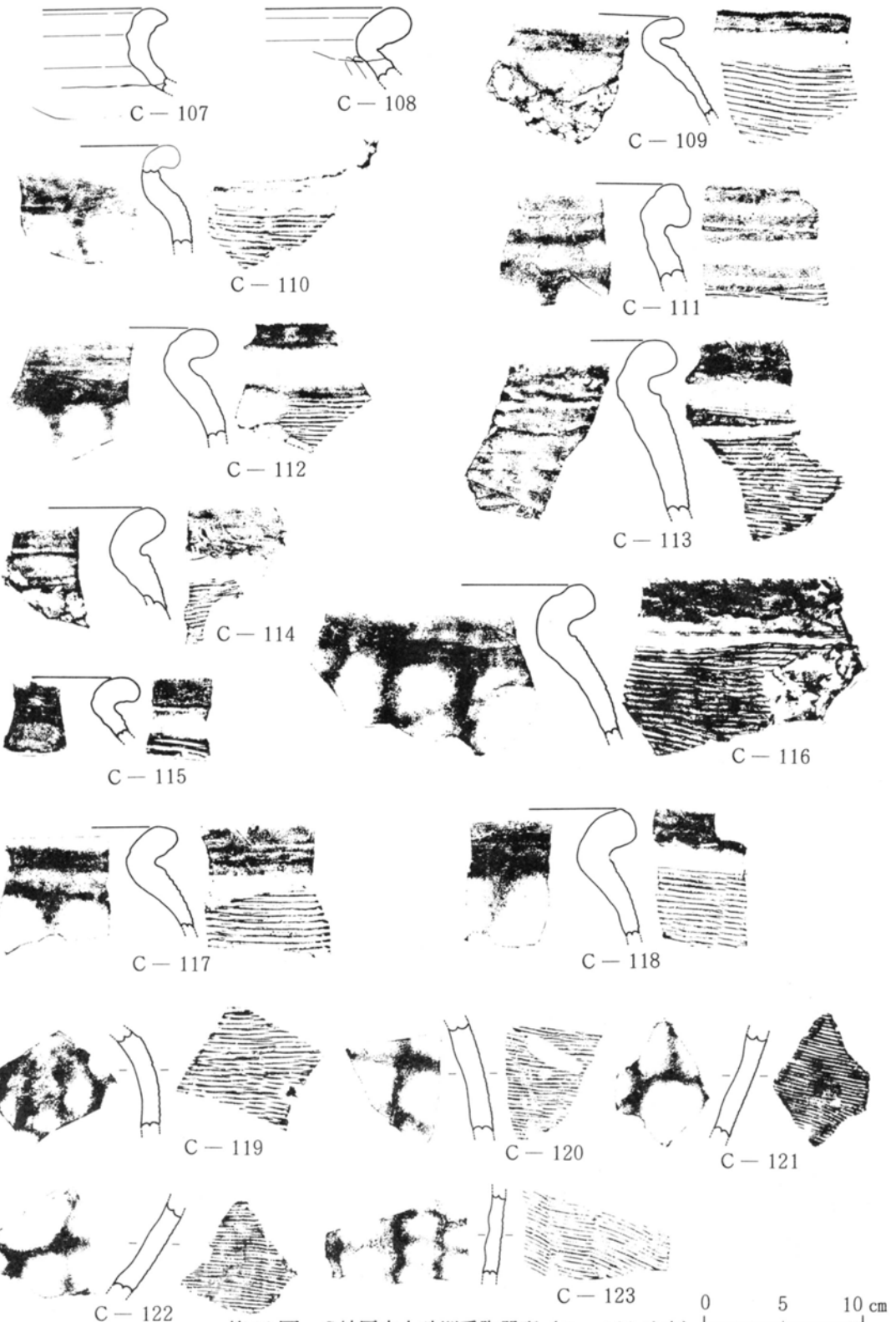
成形されている。まず、ロクロ（回転台）の上に砂をおき、その上に円板をおき、上に粘土紐を巻き上げて、底部付近の鉢形をこしらえて叩き締め、いったん乾燥させたのちにふたたび粘土紐を巻き上げ、叩き締め、胴部を成形し、更に口縁部となる粘土帯をつぎたしている。打圧痕は上胴部で横位、中胴部で右下り、底部付近では横位が主であるが部分的に斜位になるところもあり、底部では連続性がない。内面は底部から口縁の屈曲直下まで楕円形の押圧痕が認められ、底部と中胴部の接合部には横位のカキ目が認められる。胎土は暗灰青色を呈し、口縁一部に暗褐色の個所がある。

次に各破片について、口縁部、胴部、底部についてその特徴的な形態、技法などについてふれてみたい。

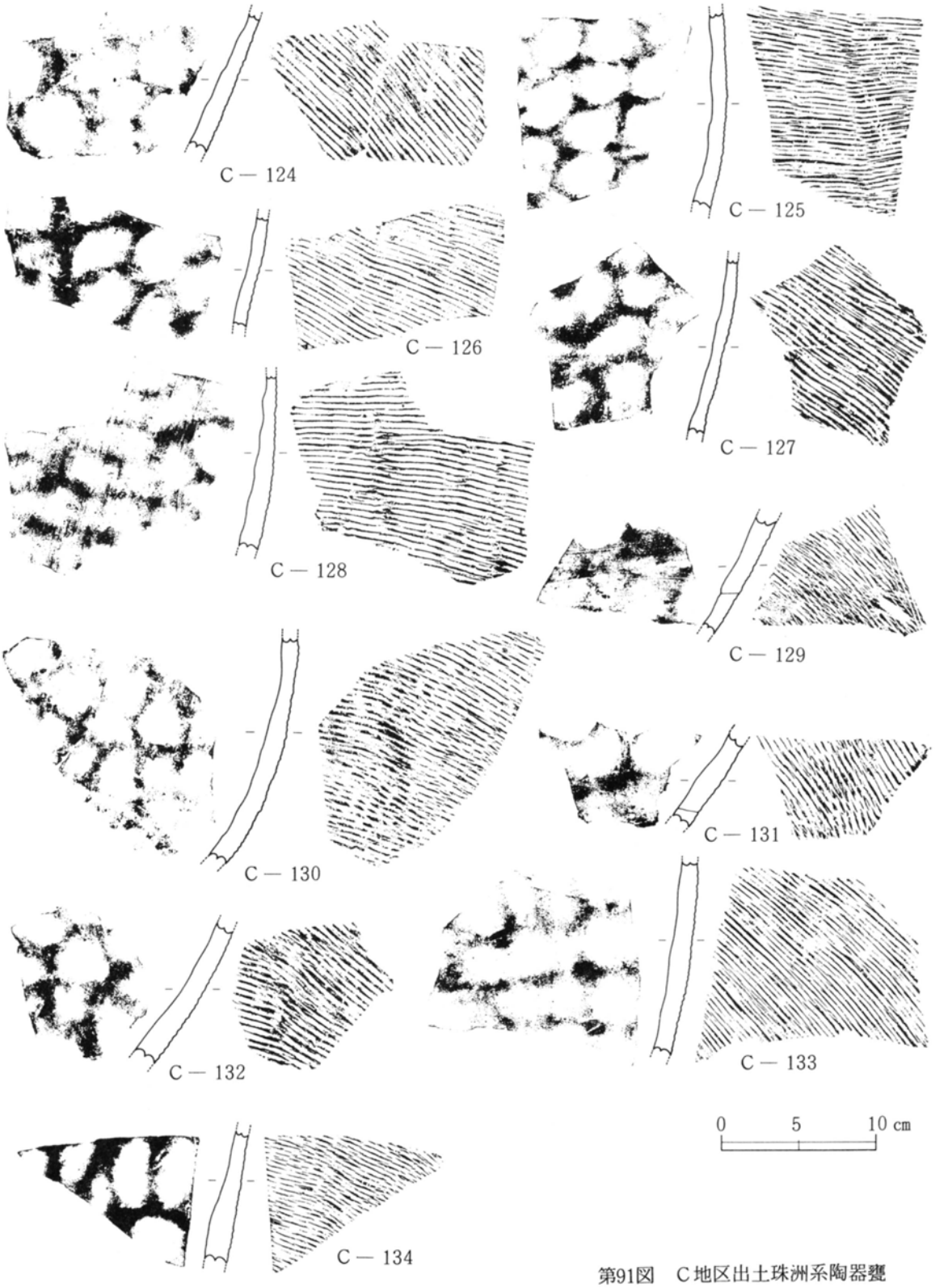
口縁形態としてはC－107のように長い口縁部を有するものはこの1点のみで、他は、C－108～C－119のように短いずんぐりした玉・角縁状の口縁である。しかし、屈曲がC－108～112、115のように比較的強いものと、C－116～118のように屈曲の弱いものがある。又、端部に丸味をもたせたもの、角ばったものがあり、口縁形態は一様でない。口縁付近における打圧痕の状態も、打圧が口縁部への屈折付近からすぐ始まるC－114～C118と、やや離れた位置から始まるC－107～113がある。後者の類にはC－109のように始めから右下りに叩き締めるものが認められる。

胴部叩き締めの打圧痕の条線はC－119～122のように繊細なものと、C－124～134のように

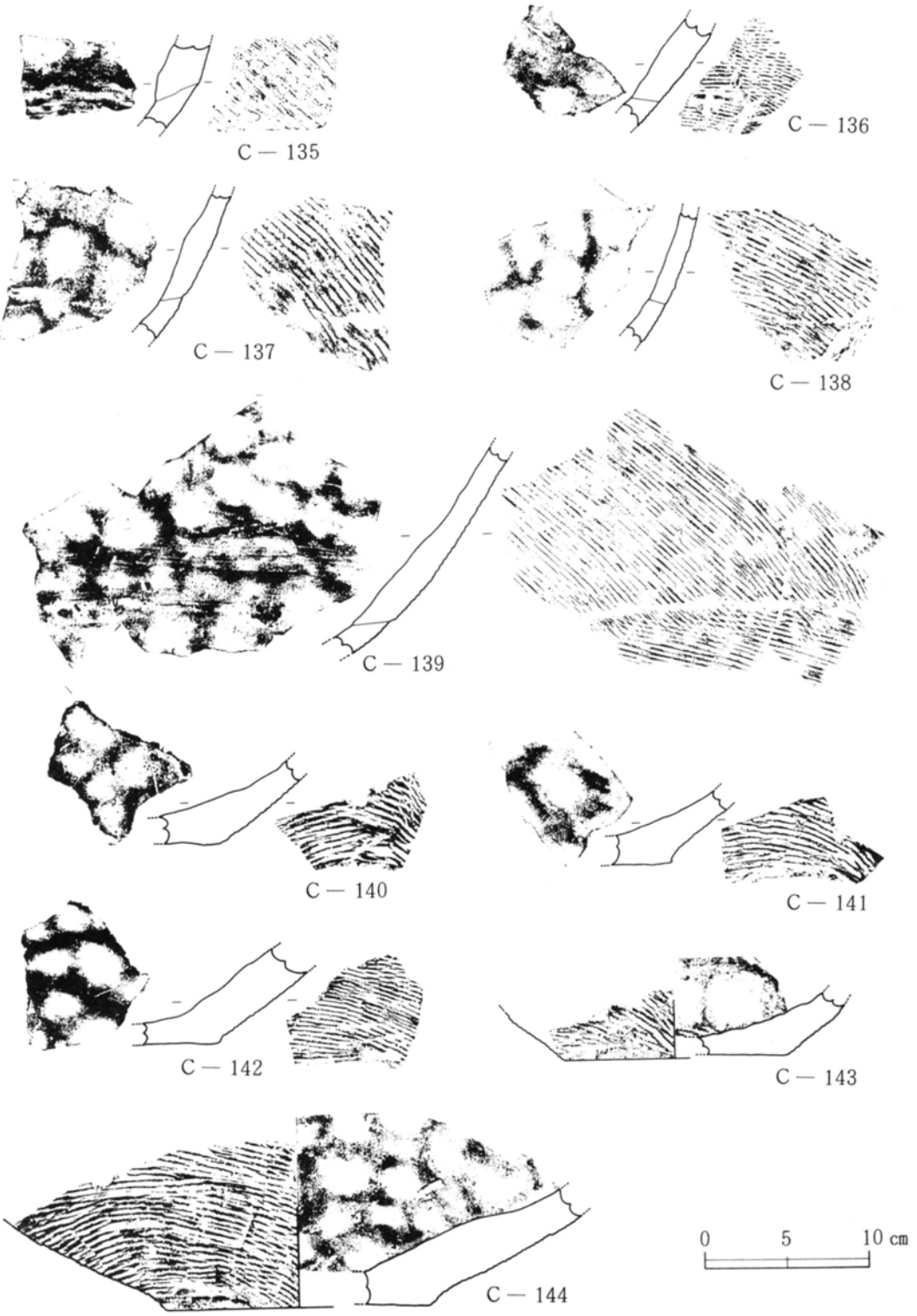
第89図　C地区出土珠洲系陶器甕



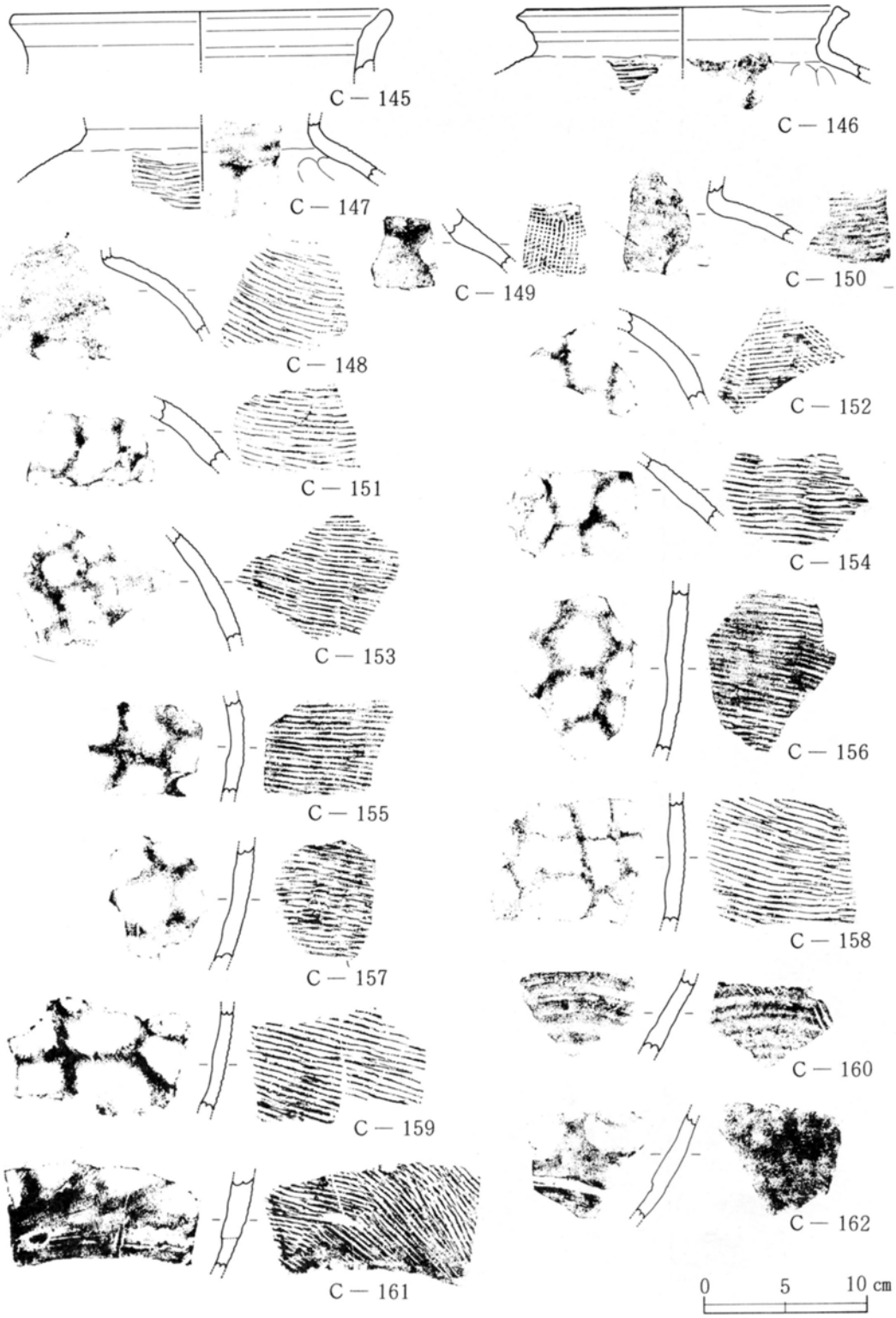
第 90 図　C 地区出土珠洲系陶器甕（C — 123 は壺）



第91図　C地区出土珠洲系陶器甕



第92図　C地区出土珠洲系陶器甕



第93図　C地区出土珠洲系陶器壺A

やや太めのものがある。いずれも胴上部は横、胴中部は右下りの連続する打圧痕となる。内面は円形、或いは楕円形の押圧痕で、C－128のように縦位のヘラ状工具によるカキ目の認められるものがある。

C－129、135～144は底部及び、胴部との接合部破片である。接合部は、凹線となって明瞭に観察できるものが多い。C－129、139のように接合部内面に横位のナデつけ、或いはヘラ状工具によるカキ目が認められる。打圧痕は接合部までは右下り、底部付近では横位である。底部はいずれも砂底で、内面の押圧痕は底部中央まで、打圧痕はほとんど立上りまで認められる。C－135の打圧痕の条線は特に繊細である。

壺　（第93、94図、図版77、78上）胴部の¼ないし⅕程度に相当する底部をロクロ（回転台）で鉢形にこしらえ、その上に粘土紐を巻き上げ、叩き締めて胴部をつくり、口縁部を取りつける甕と同様の成形の壺Aと、器体の整形に主にロクロ（回転台）を使用した小型品の壺Bがある。Aの胴下部の鉢形部分、壺Bの器面にも、ロクロ痕とは合致しない凹線や、亀裂が認められることから、粘土塊から一気に水挽きにしたものでなく、粘土紐により一担、巻き上げ成形した後にロクロを使用しているものと判断された。壺Aは器高40㎝前後の中型品、壺Bは器高20㎝前後の小型品と思われる。

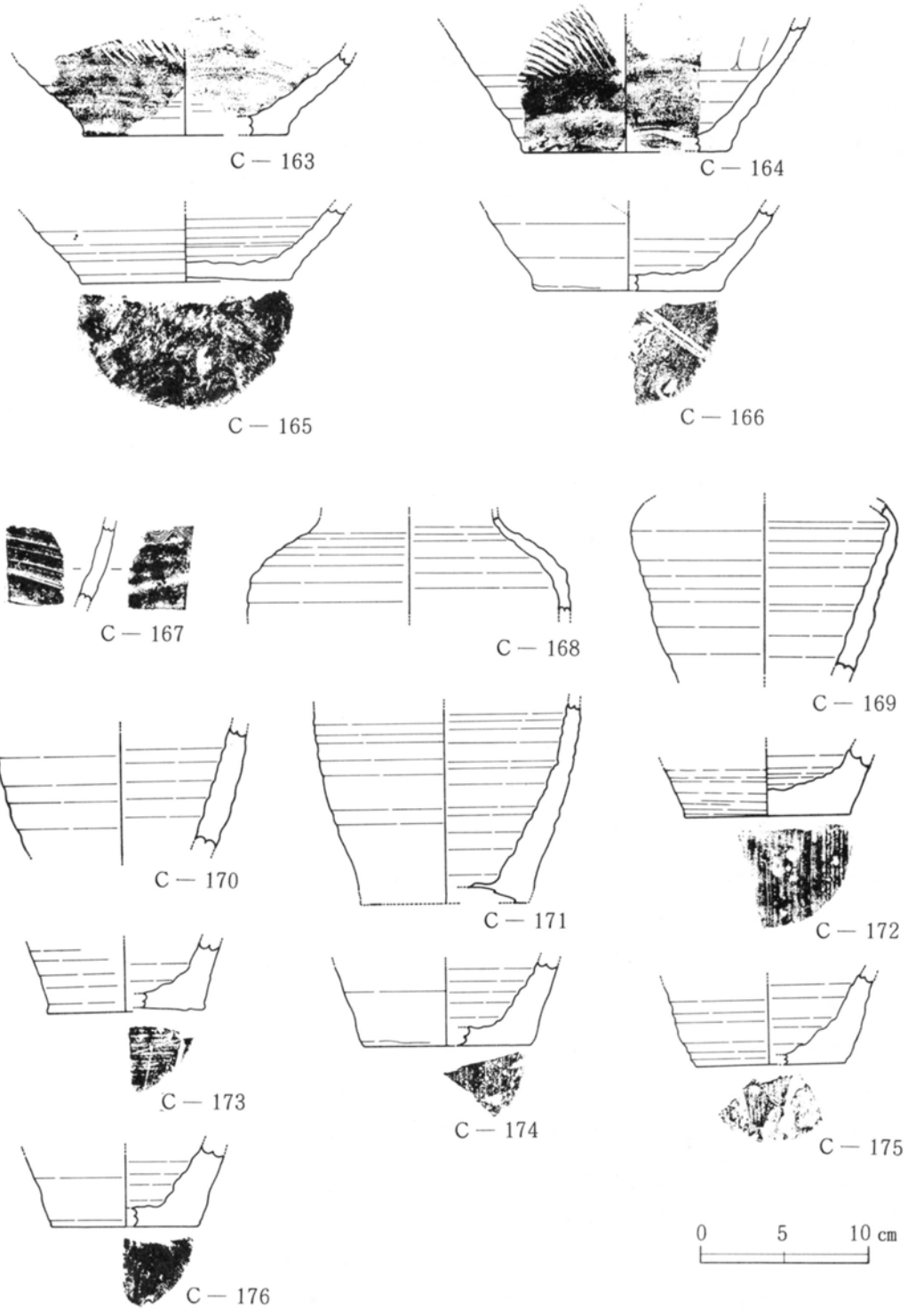
《壺A》C－123、145～166は叩き締めのある壺で、口縁はC－145のように器肉の厚いやや直立なものと、C－146のように「く」字状に外傾するものがある。C－147も端部を肥肉にし、146と同様の形態と考えられる。叩き締めは頸基部から打ちはじめている。頸部付近の打ちはじめが水平になるもの（C－146、147など）が多いが、C－148のように右下りに打ちはじめるものもある。又C－149のように格子状の叩きも認められる。胴中部は右下りの叩きが多いがC－123、152のように縦位に連続して叩き、綾杉状の打圧痕を残し、器面を多面体状に仕上げるものがある。又、C－162のように打圧痕を消しているものも認められる。C－160、163～166は底部、及び、胴中部と底部との接合部であるが、ロクロ痕が内外面に認められる。底部遺存のC－163～166は甕のような砂底の痕跡、壺Bのような糸切り痕などが認められず、指、或いはヘラ状工具により不定方向のナデつけが観察される。

《壺B》C－167～176は粘土巻上げ後、ロクロ成形した小型壺で底部にはC－172～176のように静止糸切り痕が認められる。C－167は肩部直下と考えられ、櫛歯による振幅の小さい波状文が回る。内面の器表面は凹凸が著るしく、底部立上り付近で器肉が極端に厚くなる。

（片口鉢）（第95、96図、図版78下、79）

器体にC－177の上半部に認められるようなロクロ回転によって生じるひだ目の凹凸と一致しない継ぎ目やひび割れがある例が観察され、粘土塊から一貫した水挽きによって成形されるのでなく、いったん粘土紐巻上げによって成形し、二次的にロクロを使用するものと判断された。

口縁形態は端部外面で面を取る、外削ぎの例はなく、口縁基部でかるく押え、端部を肥厚につくり出し、水平にするもの（C－177～181、183、184、186）と、端部が内傾するいわゆる内削



第 94 図　C 地区出土珠洲系陶器壺 A・B

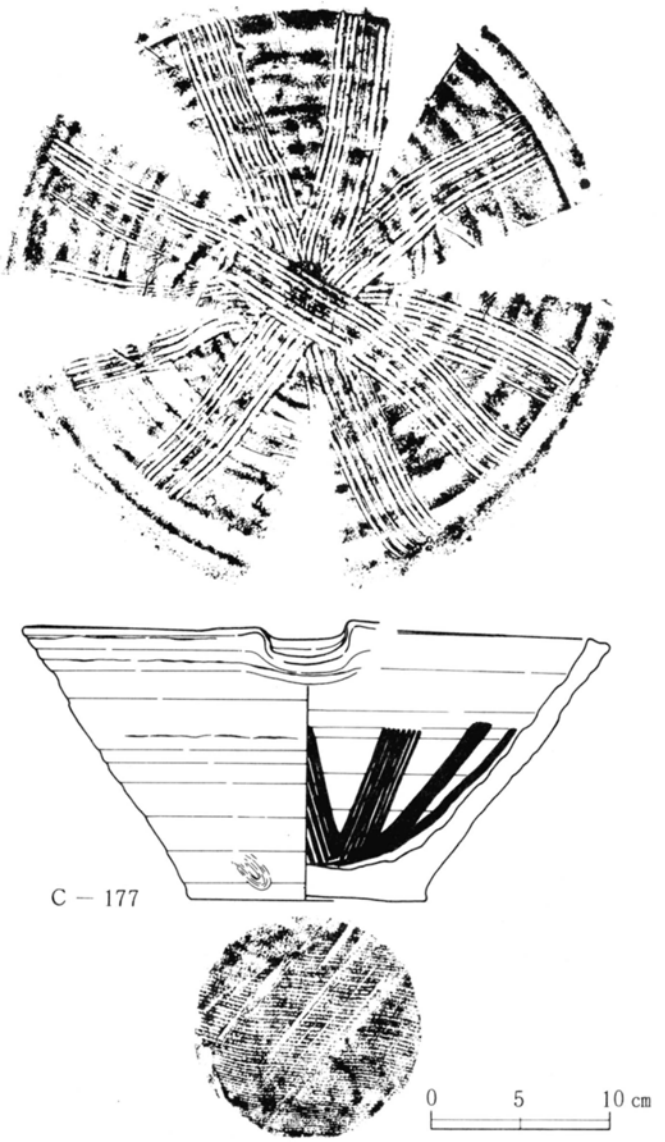
ぎのもの（C－182、185、187、188）がある。内削ぎのものにはC－187、188のように面取りした端部に櫛歯状工具による波状文をつける例がある。水平な端部のものではC－177のようにわずかに中くぼみのものが多いが、C－181のように丸味のあるもの、C－186のように平直なもの、C－180のように外端部が突き出すものなどがある。

内面の卸し目は、C－172のように卸し目のない直径20cmほどの小型品の他は、すべてに認められる。卸し目の条線が1.5 mm～2 mmまでの中太の例が多く、2.5 cm～3 cm巾、12～15条を一単位の卸し目で、卸し目と卸し目の間隔の広いもの、C－190、191、192などがこの類である。条線が2.5 mm～3 mm程の太いものは、3 cm～3.3 cm巾、9～11条を一単位とするものと、1.5 cm巾、6～7条を一単位とするものとがある。後者は卸し目と卸し目の間隔が狭く（C－187）、連続して引いているもの（C－198）もある。前者は卸し目の間隔の広いものと（C－177、184～186、195、196）、C－197のように連続して密に引いているものがある。C－189は非常に繊細な1 mm未満の条線で、1.6 cm巾、11条を1単位とする間隔のある卸し目である。C－182、193は使用のため磨滅しており、正確な卸し目の状態は把握できないが巾2.5 cm以上、9条を一単位とすることからC－177などのように本来は太い条線のものと思われる。

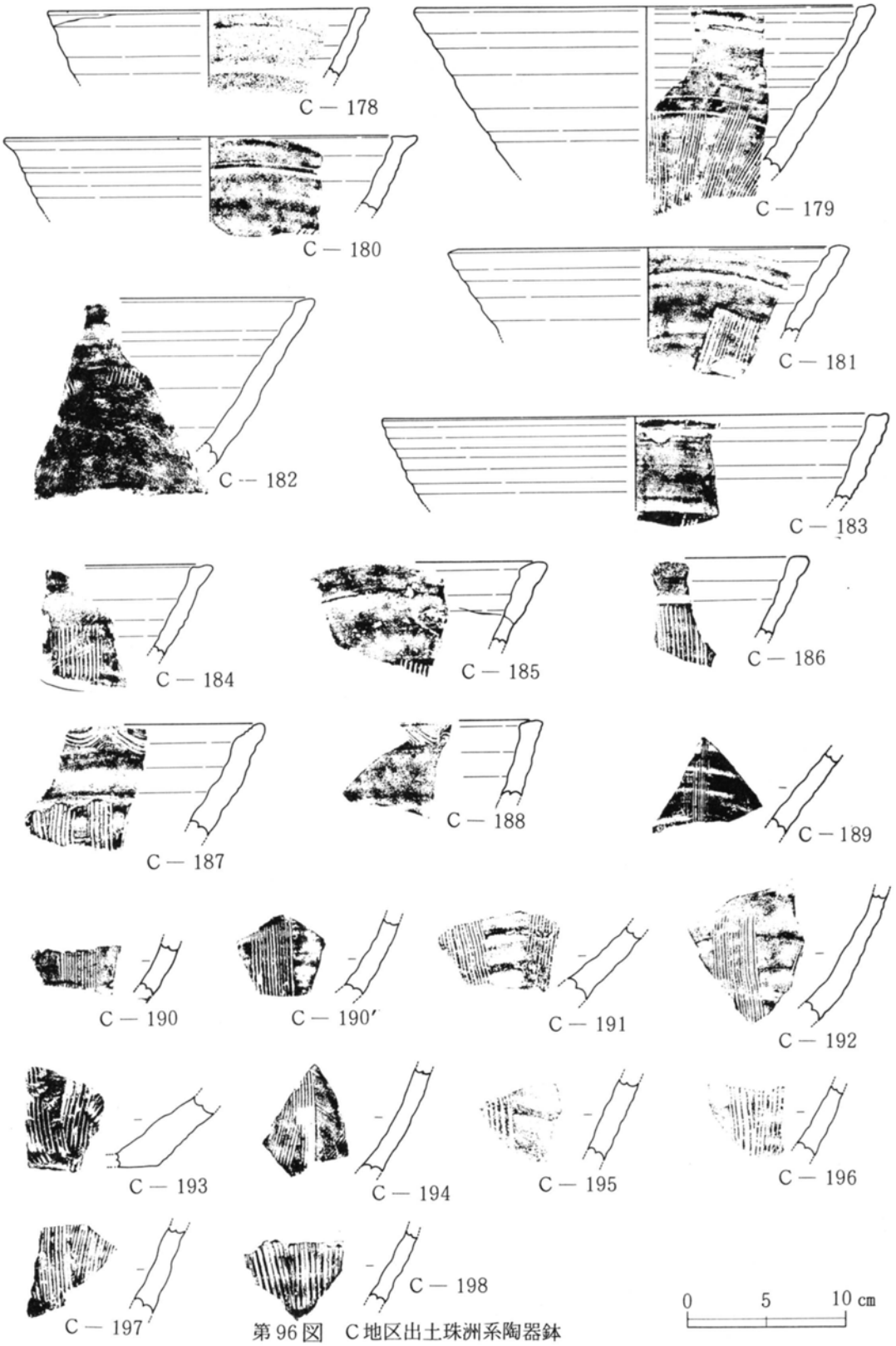
底部遺存例はC－177と193のみである。両者とも静止糸切りによってロクロから切り離されている。C－177には成形後、持ち上げる際についたと考えられる指頭の痕跡が立上りに残る。

越前陶（第97図、図版79下右）

C－199～206は越前陶と考えられる赤褐色、或いは褐色を呈する甕の破片である。C－199、202～204には黄緑色の自然釉が認められる。器面調整としてはC－200のような簾子状の



第95図　C地区出土珠洲系陶器片口鉢



第96図　C地区出土珠洲系陶器鉢

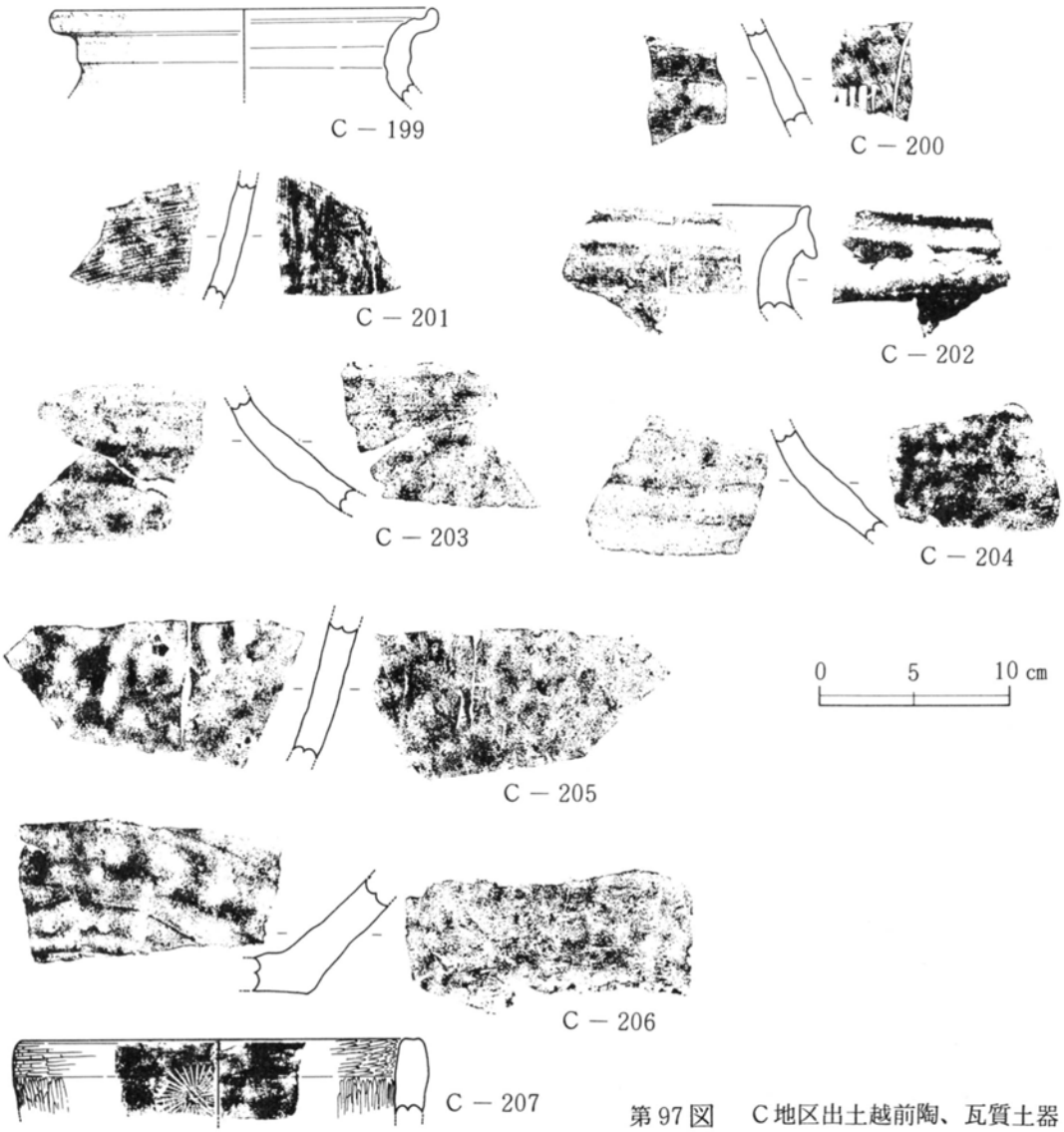
叩き、C－201のようなヘラケズリ、内面にはC－203～206のように指頭、或いはヘラ状工具による横位のナデつけ、外面は頸部に近い部分では、C－203、204のような横ナデ、体下半部ではC－205、206のような縦位のヘラケズリ状の調整が認められる。口頸部のつくりとしては、口頸21cmを計るC－199は短い口頸部で、端部はいったん直角に折れ曲り、更に垂直に立ち上がる。C－202は端部の折れ曲りがN字状になり、巾広い口縁帯をつくり出している。

瓦質土器　（第97図、図版97）

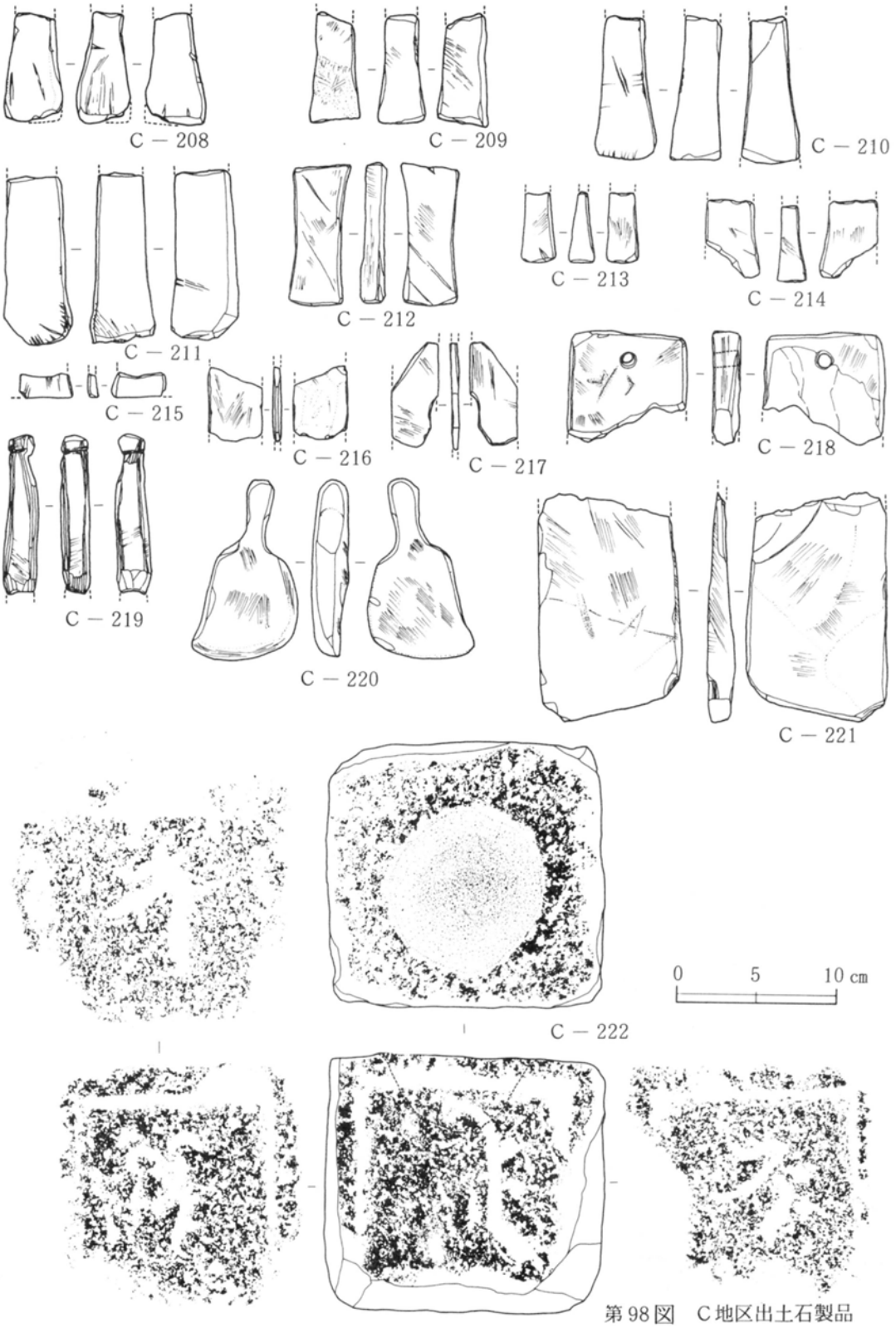
C－207は瓦質の火炉の口縁部で、口縁直下には菊花状の刻印が認められる。軟質で赤褐色を呈する。

石製品　（第98図、図版80）

砥石　C－208～221は砥石である。C－220を除き、いずれも欠損している。C－208～211



第97図　C地区出土越前陶、瓦質土器



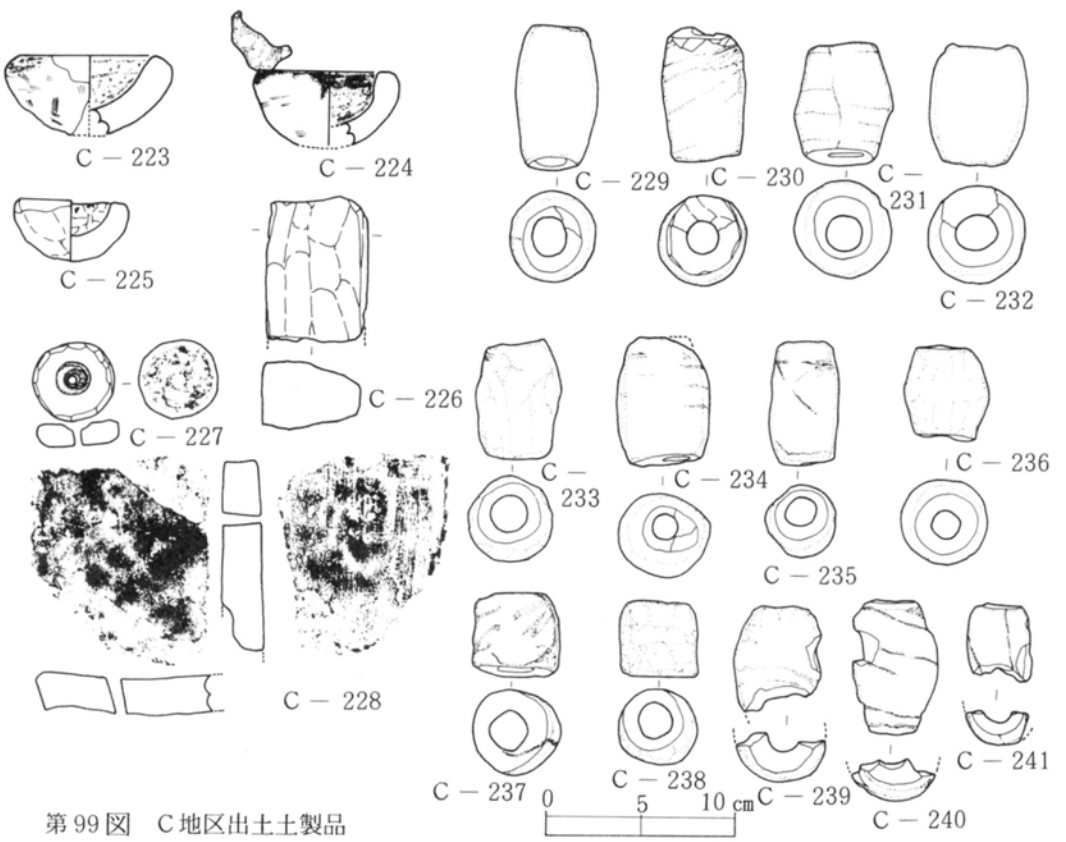
第98図　C地区出土石製品

は分銅形のもので使用痕は4面及び、下端部に認められる。C－212～214は短冊形であるが使用痕の状態は分銅形と同様である。C－215～217は薄い板状の砥石で、両側端部には磨り切りによって形作った痕跡が残る。C－218は211と同様大型の砥石で表裏、両側面に使用痕が残る。C－219は、両端に切り込みを入れた棒状の砥石で四角に面取りした後、角を更に面取りしている。他の用途に使用する目的で作られた可能性があるが、砥石と同様の擦痕が認められる。C－220も把手状の長い突起のあるヘラ形を呈し、C－219と同様、使用目的が別にあることが考えられるが表裏面と端部の使用痕から砥石と判断した。

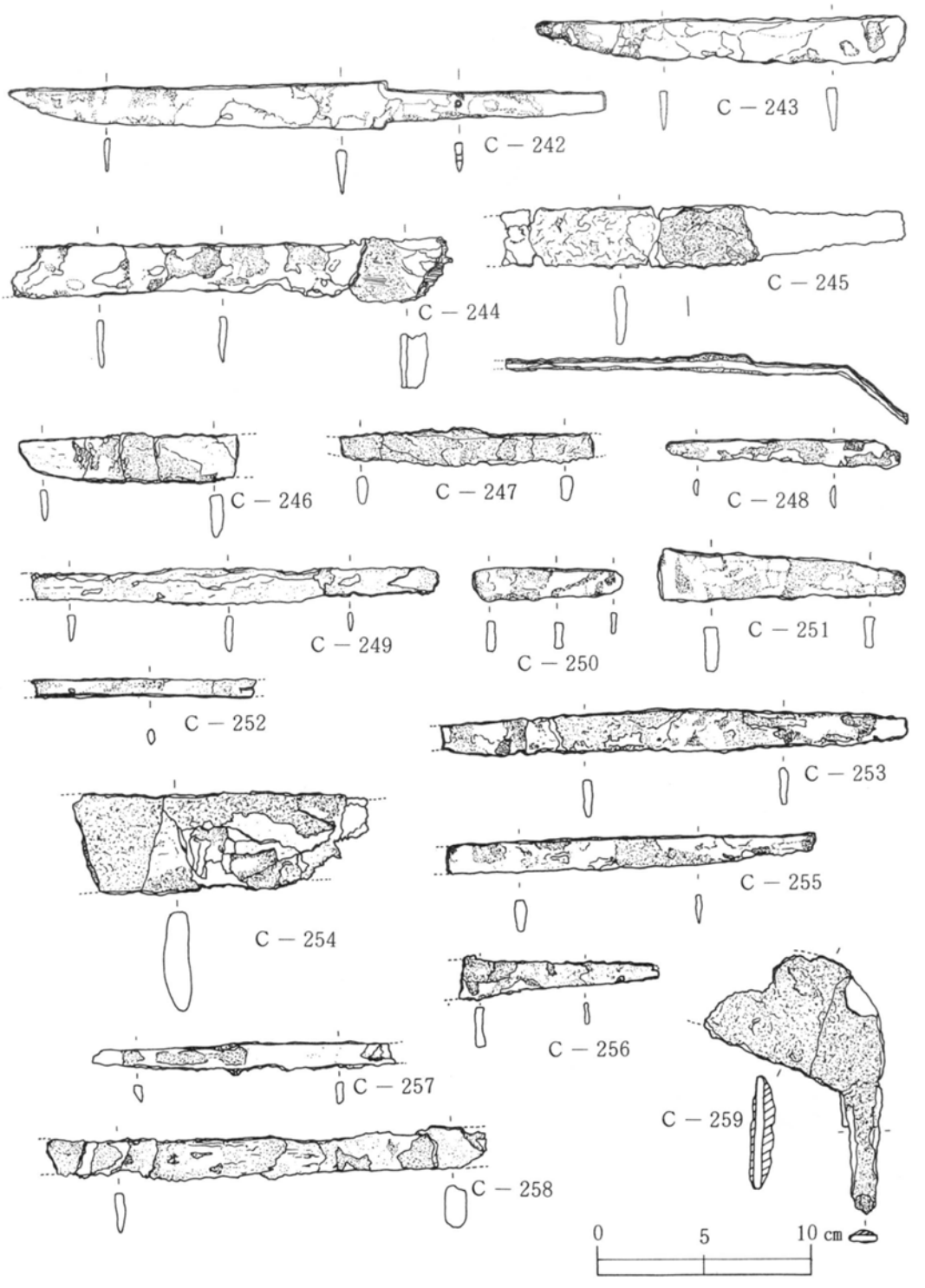
宝篋印塔　C－222は宝篋印塔の塔身部と考えられる。一辺17.5cm、四面には12.5cm四方の画線内に四仏の種子が刻まれており、上面には笠部を受ける軸穴がうがってある。種子は彫りも浅く、磨耗して鮮明でないが、(キリーク)、(バク)、(バイ)、(サ)で阿弥陀如来（西）、釈迦如来（南）、薬師如来（北）、観音菩薩（東）との四方仏を配している。薬師如来と観音菩薩の配し方に問題があるが、東に位置していた大悲寺の本尊が聖観音であることから、これとの関連で、薬師如来と観音菩薩の配置をかえたものと推測される。石質は男鹿半島にみられる輝石安山岩である。

土製品（第99図、図版81）

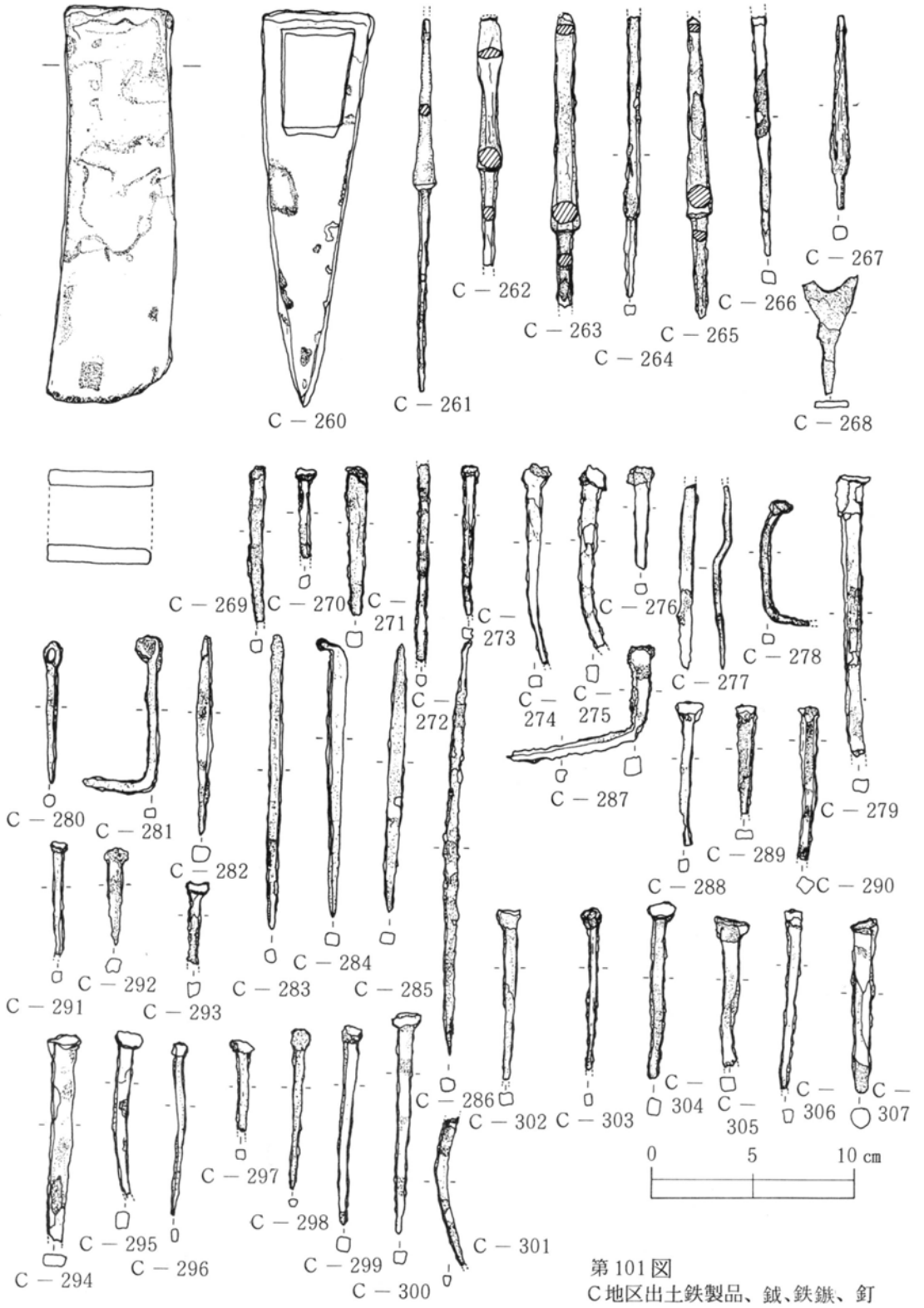
坩堝　C－223～224は緑青の付着した赤色の銅滓が認められ、銅の溶解に使用されたものと



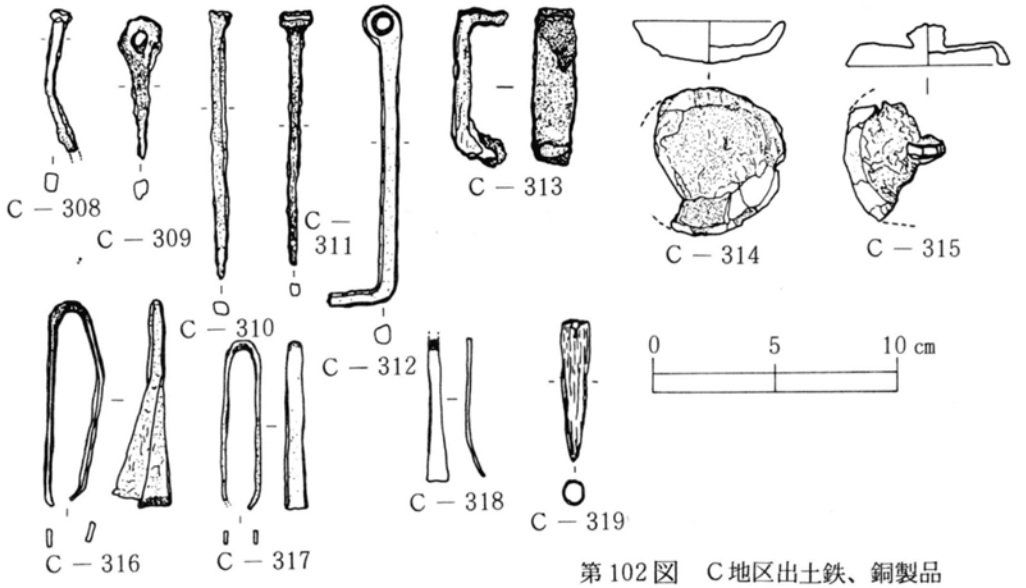
第99図　C地区出土土製品



第100図　C地区出土鉄製品、刀子、刀、鎌



第101図
C地区出土鉄製品、鉇、鉄鏃、釘



第102図　C地区出土鉄、銅製品

考えられる。C－225は小ぶりな坩堝で、内面にはわずかにガラス状の鉄滓が付着している。

紡錘車　C－227は赤褐色土器を転用した紡錘車で、底部の中央を残し、周辺を円形に面取し、孔をうがっている。わずかに回転糸切り痕が残る。

瓦　C－228は釘止めの小孔がうがってある平瓦で、布目痕はなく、叩きも平滑な板によるものである。

土錘　C－229～C－241はいずれも有孔の土錘である。形態的にはC－229のようなやや中太の円筒形、C－231のように中が大きく膨らむ算盤玉形、C－237のように直径と長さが1：1程の寸づまりの短円筒形がある。粘土紐の結合痕が観察される例が多く、棒状のものに粘土紐を巻きつけて成形しているものと考えられる。

不明土製品　C－226は用途不明の土製品である。端部の一方を欠損しているが、ヘラ削りによって、断面が六角に面取りされている。焼成は瓦と同様に軟質で、灰白色を呈する。

他に図示しえなかったが、2点のフイゴ羽口破片が出土している。

鉄、銅製品（第100～102図、図版81～83）

C－242～251、254～259は刀及び刀子である。茎、切先、身の断片が多いが、ほぼ完形のC－242は全長25.2cm、刀身の長さ18cm、身巾2.1cm、平造りで両区の形態である。茎には区から3cm程の部分に目貫孔がある。C－259は鎌、C－260は鉞（まさかり）、C－252、261～268は鉄鏃、C－286は火ばし、269～279、282～285、287～309、311～313は鉄釘、C－280、281、310、313は頭部に円環のある鉄製品で鍵とも考えられる。C－314は鉄製の把手、C－315 316は鉄製の容器と蓋、C－317、318、319は毛抜きで、C－317、318は鉄製、C－319は銅製である。C－320は中空の円錐状の銅製品で用途は不明である。

C — 321

C — 322

C — 323

C — 326

C — 330

C — 329

C — 332

C — 333

C — 337

C — 339

C — 341

C — 342

C — 343

C — 345

C — 346

C — 348

C — 349

C — 350

C — 351

C — 353

C — 354

C — 357

C — 352

C — 35

C — 360

C — 361

C — 364

C — 365

C — 366

C — 370

C — 371

C — 374

C — 375

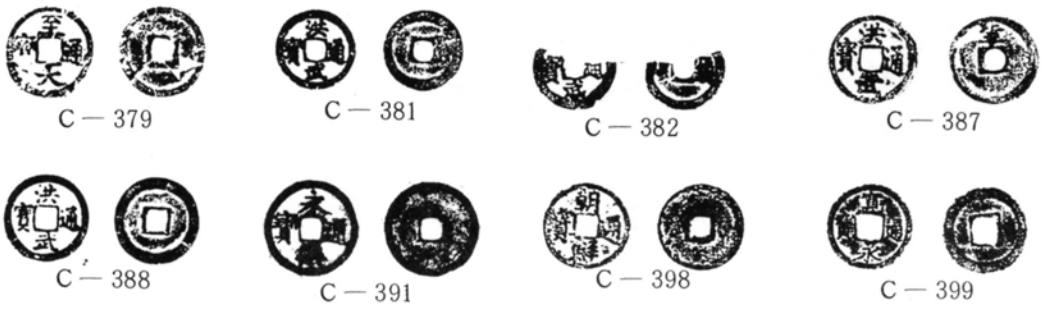
C — 376

C — 377

C — 378

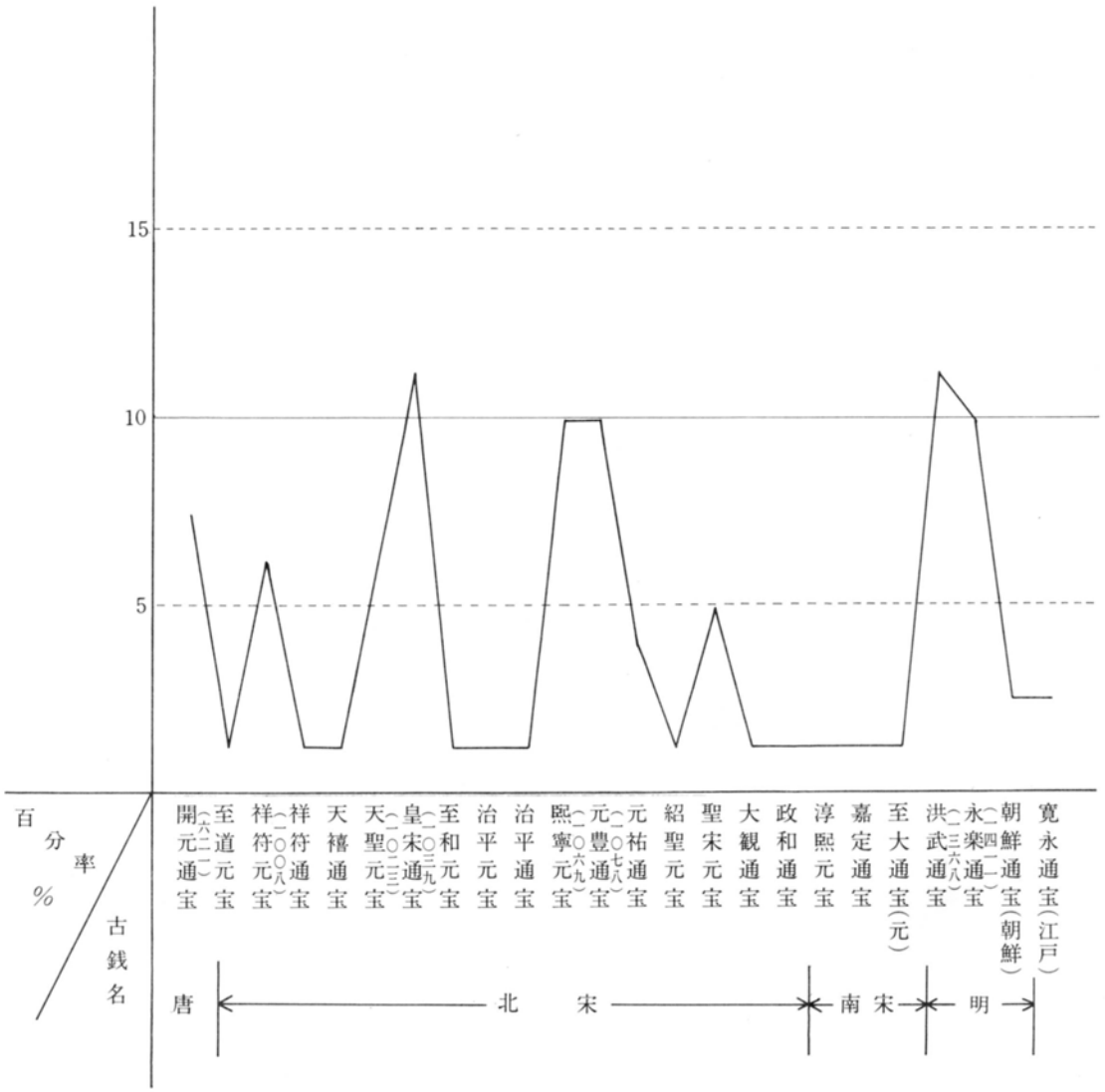
S＝½

第 103 図　C 地区出土古銭

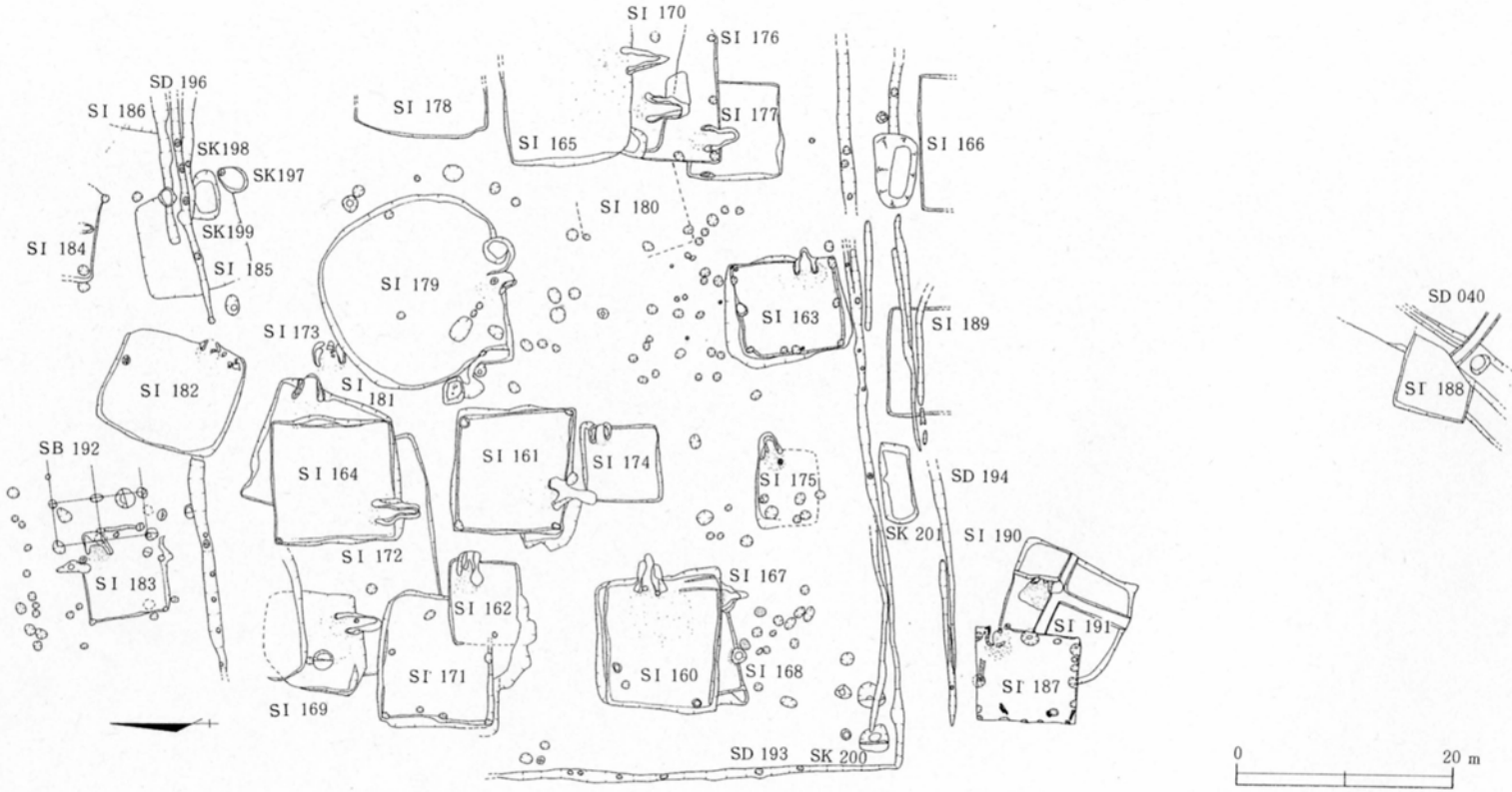


第104図　C地区出土古銭

S＝½



C地区出土古銭名の比率



第105図　　E地区発見遺構全体図

古　銭（第103、104図、図版84）

C地区からは96枚余りの古銭が出土しているか、銭貨名等の明確な古銭はそのうち81点であり、銭貨名・字体の別等は付表覧に示してある。また代表的な古銭は第103・104図に示した。種別は銭貨名で24種、書体別にすれば28種になる。初鋳年で時代を大別するならば、唐銭が一種で7.4％、北宋銭が16種で62.9％、南宋銭が二種で2.5％、明銭が二種で21％である。このほか数は少ないか元銭、朝鮮通宝、寛永通宝がそれぞれ一種ずつ出土している。銭貨名で全体の5％以上を占めるのは、開元通宝7.4％、祥符元宝6.2％、天聖元宝6.2％、皇宋通宝11.2％、熙寧元宝9.9％、元豊通宝9.9％、洪武通宝11.2％、永楽通宝9.9％などである。背文のある貨幣は、開元通宝か2枚（一・人）、淳熙元宝1枚（十五）、洪武通宝2枚（一銭・一枚は不明）である。

第5節　E地区検出遺構及び出土遺物

検出遺構

本地区で検出された遺構は、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝状遺構、土壙、その他（ピット等）である。出土遺物については、実測可能なものは洩れなく集録し図示したか、他に破片等も多量にみられる。なお、瓦類については一括して後述する。

SI 160 住居跡（第106図、図版28）

東西約5ｍ、南北約4.22ｍの方形を呈し、壁高は約50cmを計る。カマドは東壁ほぼ中央に粘土で構築され遺存状態は良好であるが、再構築されたと考えられ、古いカマドの一部が南袖に残存する。焚口部付近には焼土、粘土、炭化物が多量に検出された。柱穴は認められないが、各々直径約30cmを計るピットが西壁南側に1個、北壁西側付近に2個認められる。部分的に周溝が認められ、特に南壁下は良く残る。本住居跡はSI167住居跡と重複しており、本住居跡が新しい。方位は西壁かほぼ南北を指している。

SI 160 住居跡出土遺物（第107図、図版85）

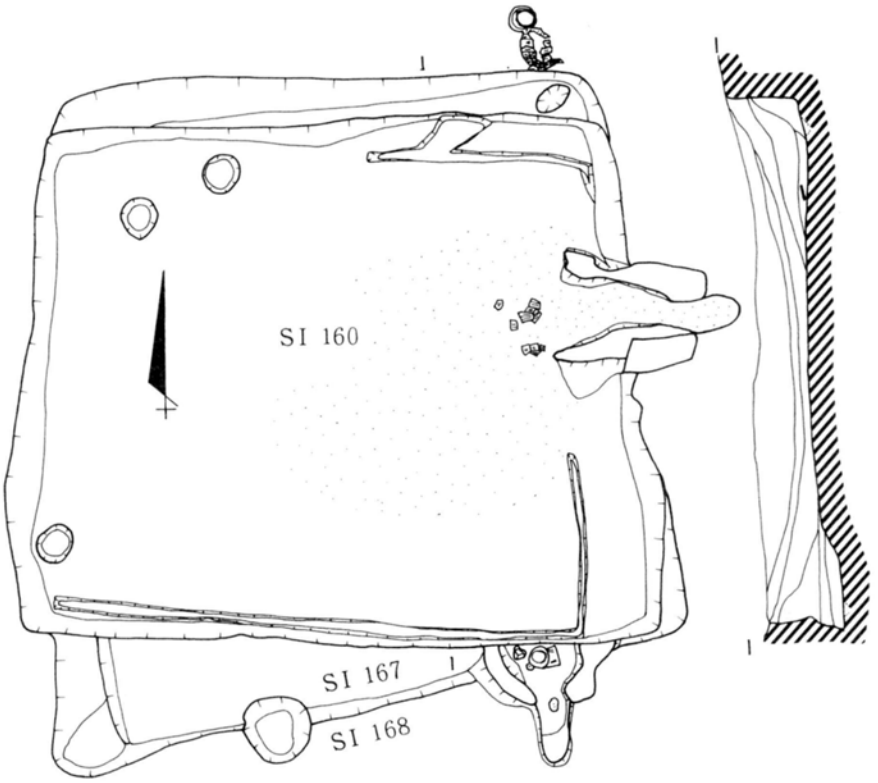
土師器、須恵器、砥石、鉄鎌、鉄鏃、平瓦（埋土）、有段丸瓦（埋土）等が出土した。

（埋土出土）

E－3、E－4、E－5は口縁部から頸部にかけて段を有する土師器甕である。E－2は須恵器蓋である。ツマミ部を欠き、⅓程の残存である。天井部外面は一部回転ヘラケズリがみられ、回転ヘラケズリの後に簡単なナデを行っている。灰白色を呈し、胎土、焼成共に良好である。E－6は砥石で、4面に使用痕が認められる。石質は緑色凝灰岩である。E－7は鉄鎌の破片で、刃部が若干内反りする。E－8は鉄鏃で、先端部が偏平、茎部が四角形を呈する。共に錆化が著しい。

（床面出土）

E－1は須恵器蓋で、硯に転用している。偏平なツマミをもつが、中央部はわずかに擬宝珠状を呈し、全体的に少々いびつである。天井部外面は回転ヘラケズリを施し、切り離しは不明。内面に

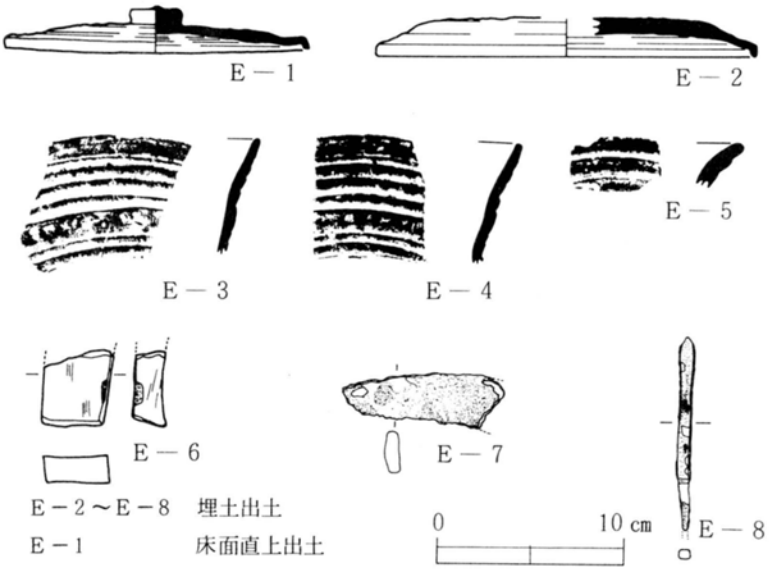


第106図　SI 160・167・168住居跡

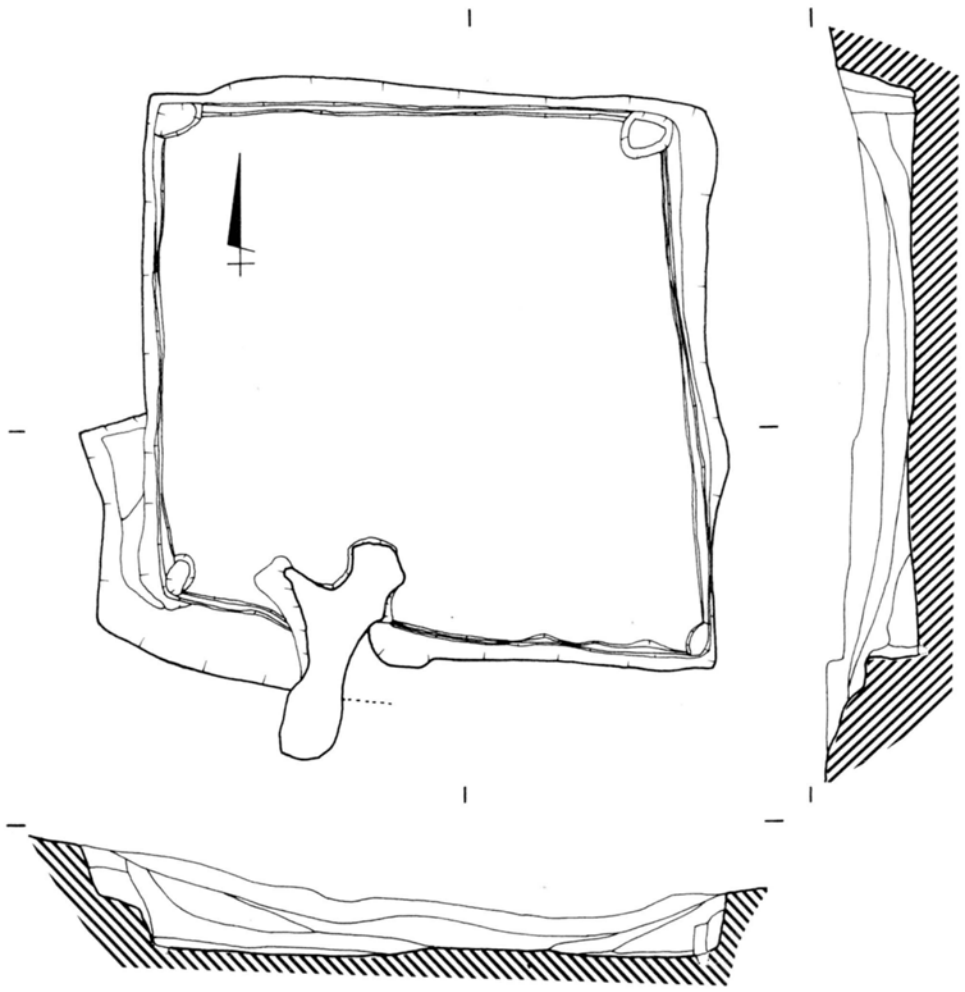
は全体に墨痕が認められ、かなりすべすべしている。灰色を呈し、胎土、焼成共に良好である。他に、カマド焚口部付近より土師器甕等の破片が出土した。

SI 161住居跡　（第108図、図版28）

東西約4.72m、南北約4.6mの方形を呈し、壁高は約50cmを計る。カマドは南壁西寄りに粘土で構築されている。柱穴は各コーナー部四隅に検出され、北西、北東コーナー部は各々直径約40cm、南西、南東コーナー部は各々直径約20cmを計り、遺存状態良好な周溝が巡る。方位



第107図　SI 160住居跡出土遺物



第108図　SI 161住居跡

は西壁がほぼ南北を指している。

SI 161住居跡出土遺物（第109図、図版85）

土師器、須恵器、縄文式土器、石鏃、鉄鏃、平瓦（埋土、カマド左袖）、丸瓦（埋土）等が出土した。

（埋土出土）

E－9は口縁部から頸部にかけて段を有す土師器甕である。口唇部には凹線が巡る。E－12は先端部が偏平な鉄鏃である。錆化が著しい。

第109図　SI 161住居跡出土遺物

（周溝内出土）

E－10は縄文時代晩期の土器で鉢型の器形をなす。地文はL $\left\{\begin{matrix}R\\R\end{matrix}\right.$単節斜縄文を施し、体部下端は、磨消縄文の手法を用いる。E－11は石鏃で、石質は流紋岩である。E－13は鉄鏃で、先端部が偏平、茎部が四角形を呈する。錆化が著しい。

SI 162 住居跡（第110図、図版29）

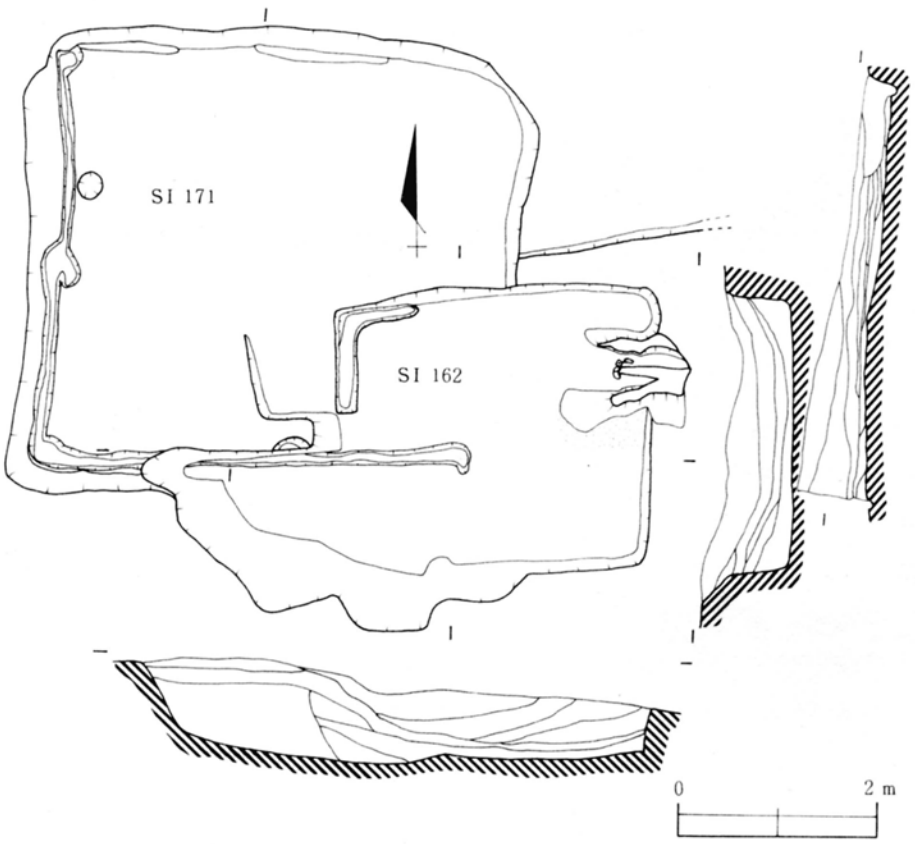
東西約4.88m、南北約3.1mの長方形を呈する。SI 171住居跡と重複しているため西側は不明で壁の遺存状態は良好でないが、残りのよい東壁の壁高は約50cmを計る。カマドは東壁北寄りに粘土で構築されていて、南袖付近に焼土、炭化物が認められる。柱穴は検出されなかった。本住居跡はSI 171住居跡より新しい。方位は西壁が不明であるが、ほぼ南北方向を指している。

SI 162 住居跡出土遺物（第111図、図版85）

土師器、須恵器、鉄鏃、平瓦（埋土）、丸瓦（埋土）等が出土した。

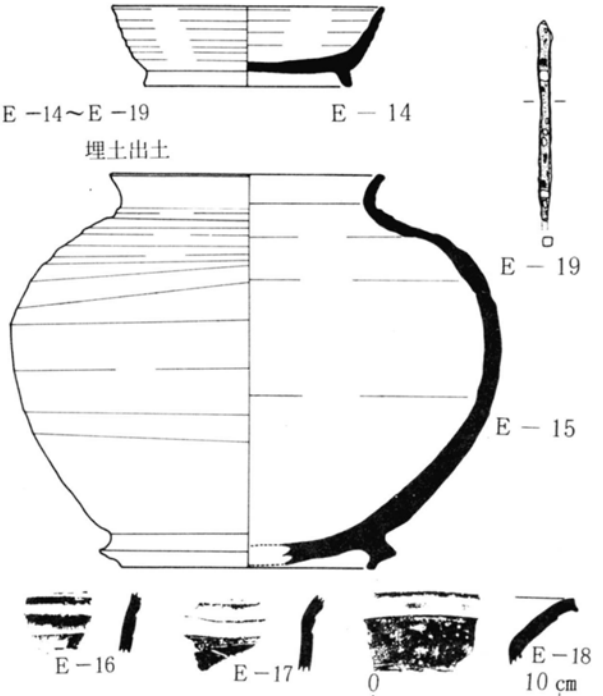
（埋土出土）

E－16～E－18は口縁部から頸部にかけて段を有す土師器甕である。E－18の口唇部には浅い凹線が巡り、ヘラ状工具と考えられるもので巾広の溝を作り出している。E－14は須恵器台付坏。底部



第110図 SI 162・171住居跡

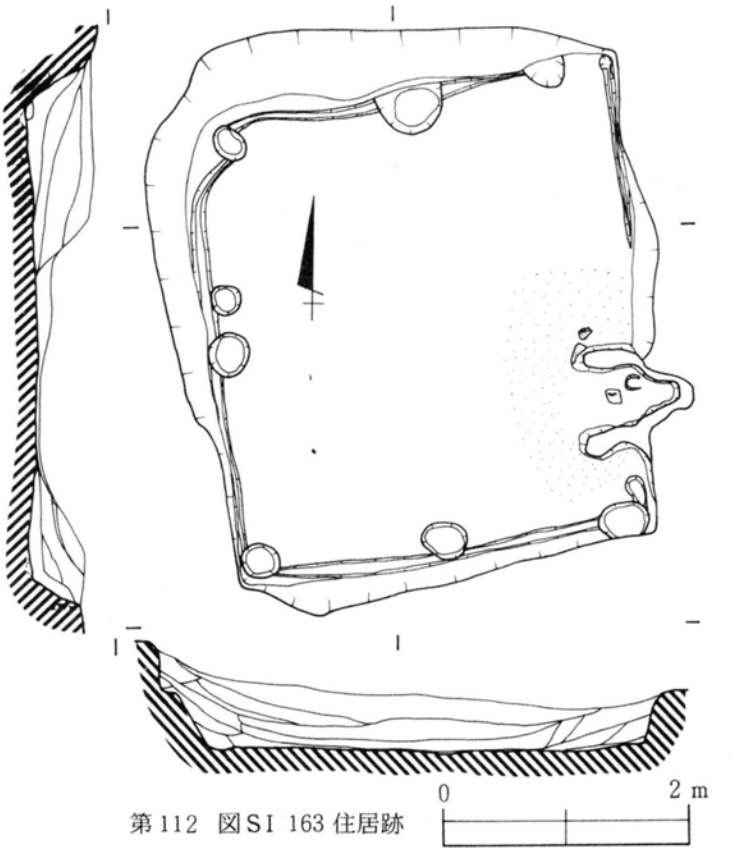
切り離しは回転ヘラ切り。高台を貼り付けた後、周辺部にナデを行う。青灰色を呈し、胎土に砂粒、小石粒が少々混入するが、焼成は良好である。E－15は須恵器短頸壺。出土地点はまばらであるが、本住居跡からの破片出土数が最も多かった。外面は全体的に回転ヘラケズリを行い、体部上半はロクロ痕が認められ、下半には部分的に平行タタキ板痕がみられ、体部中程から下方向へヘラケズリを行う。底部に高台を有する。底部と体部下半の破片数点は、二次火熱を受けたものと思われ赤橙色に変色し、他は汚れた灰白色を呈する。胎土に砂粒が少々混入し、焼成はやや軟弱である。E－19は鉄鎌で、先端部が偏平、茎部が四角形を呈する。錆化が著しい。



第111図　SI 162 住居跡出土遺物

SI 163 住居跡（第112、113図、図版29）

東西約4.1ｍ、南北約4.56ｍの方形を呈し、壁高は約50㎝を計る。カマドは東壁南寄りに粘土で構築され遺存状態は良好である。焚口部付近には粘土、焼土、炭化物が検出され、カマド中央部には土器を支えるための支脚として石が埋められている。柱穴は各コーナー部の四隅と北辺に2個、西辺中央部に2個、南辺中央部に1個検出され、周溝が巡る。カマド中央部より土師器甕等の遺物が出土している。方位は西壁がほぼ南北を指している。



第112　図SI 163 住居跡

SI 163 住居跡出土遺物（第114図　図版85）

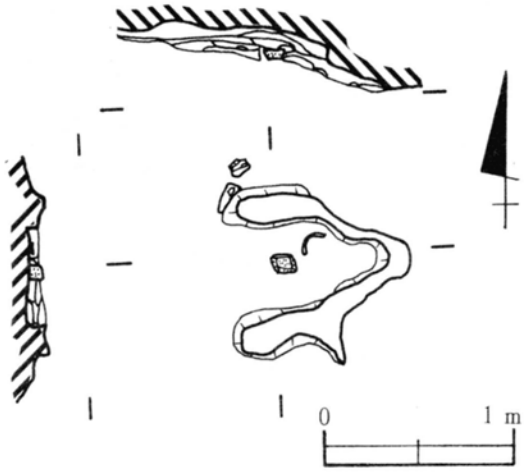
土師器、須恵器、砥石、平瓦（埋土）等が出土した。

（埋土出土）

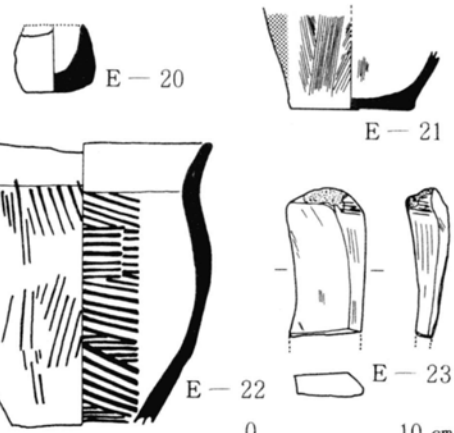
E－20は土師器小型手捏ね土器である。口縁部を欠き、成形はかなりいびつである。暗褐色を呈し、胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。E－23は砥石で、4面を使用している。石質は凝灰岩である。

（カマド出土）

E－21は土師器甕の底部である。外面は縦位方向カキ目を施した後にヘラミガキを行う。内面は部分的にハケ目が認められ、焼成良好である。E－22は底部欠損の土師器甕。口縁部内外面は横ナデを行い、体部外面縦位方向、内面横位方向に太目のカキ目を施す。カキ目は内外面同一工具によるものであるが、外面はカキ目の後に全面にナデを行うが、部分的にカキ目が残る。全体的にいびつである。黄褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、焼成はやや軟弱である。



第113図　SI 163 住居跡カマド



E－20、E－23　埋土出土
E－21、E－22　カマド出土

第114図　SI 163 住居跡出土遺物

SI 164 住居跡（第115、116図、図版30）

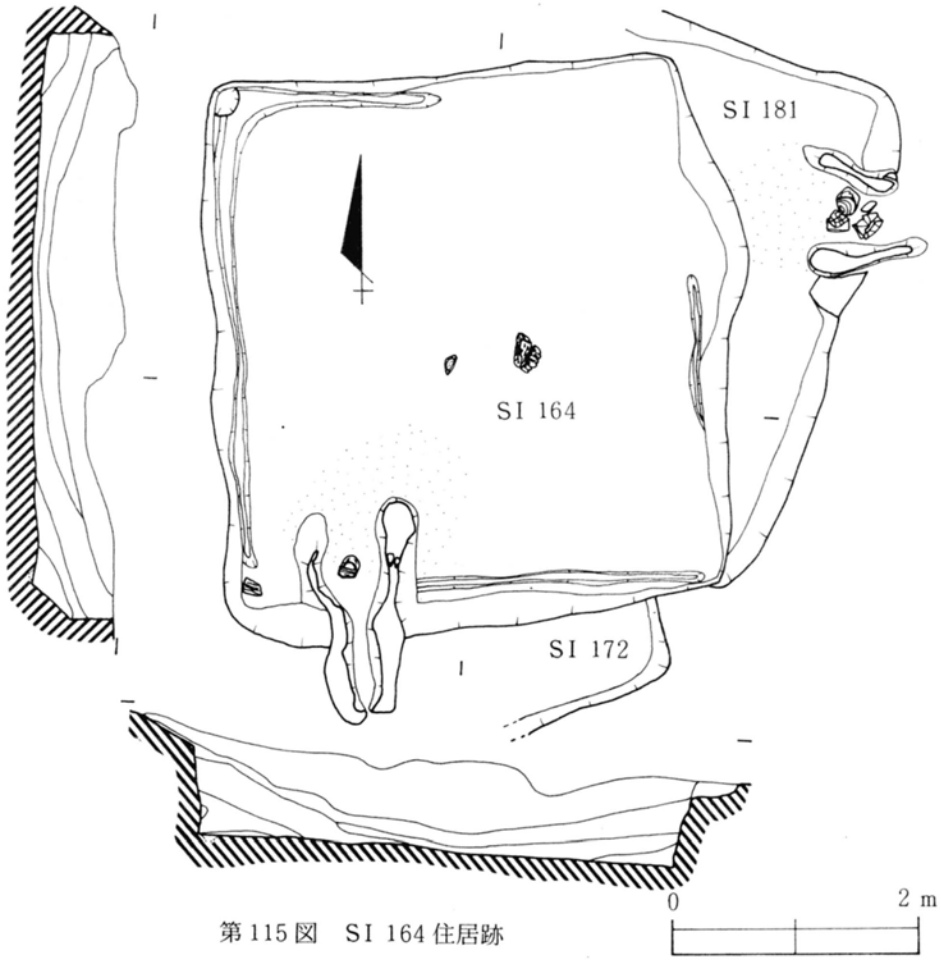
東西約4.2m、南北約4.56mの方形を呈し、壁高は約60cmを計る。カマドは南側西寄りに粘土で構築され、焚口部付近には焼土、粘土が認められた。柱穴は北西コーナーに1個検出されている。カマド内より土師器甕、須恵器台付坏破片、住居跡中央部より馬の歯、また南西コーナーより小型の土師器甕、瓦等の遺物が出土している。SI 181 住居跡と重複関係にあり、本住居跡が新しい。方位は西壁がほぼ南北を指している。

SI 164 住居跡出土遺物（第117図、図版86）

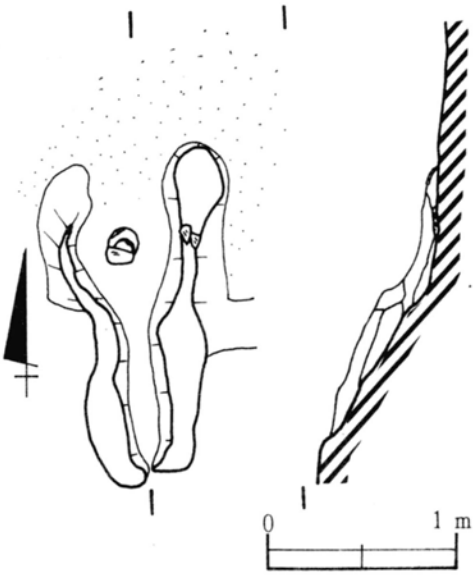
土師器、須恵器、円盤状土製品、馬の歯、平瓦（埋土）、丸瓦（埋土、カマド付近床面）等が出土した。

（埋土出土）

E－24は須恵器坏である。底部切り離しは回転ヘラ切り、無調整。灰色を呈し、焼成良好である。重ね焼痕が認められる。E－25は須恵器坏。底部切り離しは静止糸切りで、切り離し後外周に回転ヘラケズリ調整を行う。灰白色を呈し、焼成はやや弱い。E－26は須恵器坏。底部切り離しは回転ヘラ切り、無調整、青灰色を呈し、焼成は良好である。火ダスキが認められる。



第115図　SI 164 住居跡



第116図　SI 164 住居跡カマド

（カマド付近床面出土）

E—28、E—29は小型の土師器甕で、いずれもカマド西脇からの出土である。E—28は頸部が「く」の字状を呈し、段が巡る。口縁部内外面は横ナデを行い、体部外面は縦位方向のカキ目を施す。内面は斜位方向のカキ目を施し、後にヘラ状と思われる工具によりナデを行い、カキ目を消しており、部分的にのみカキ目が認められる。胎土、焼成共に良好で、底部に木葉痕をもつ。E—29は頸部が「く」の字状を呈し、口縁部が若干内反する。口縁部内外面は横ナデを行い、体部外面は縦位方向のカキ目を施す。内面はナデを行って

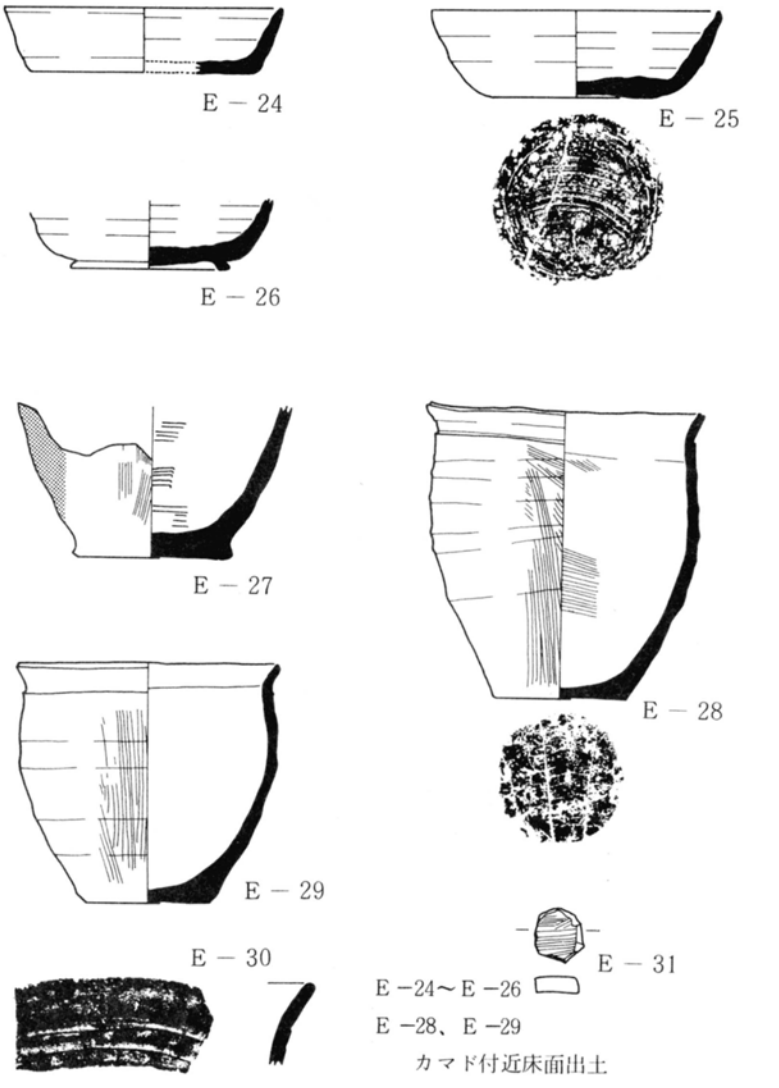
おり、頸部下方に少々斜位方向のカキ目が部分的に認められる。煤状炭化物の付着がみられ、胎土、焼成共に良好である。

（カマド出土）

E－27は土師器甕の底部で、外面は縦位方向のカキ目を施した後にヘラミガキを行い、内面は横位方向のカキ目を施す。胎土、焼成共に良好である。E－30は口縁部から頸部にかけて段を有する土師器甕である。E－31は須恵器甕の破片を利用した円盤状土製品である。他に須恵器台付坏が出土したが破片であり図示しえなかった。

SI 165 住居跡（第118図、図版30、31）

東西約4.7m、南北約4.56mの方形を呈し、壁高は約60cmを計る。カマドは南壁東寄りに粘土で構築され、焚口部から住居跡中央まで広範囲にわたり粘土、焼土、炭化物が認められる。柱穴は検出されなかった。本住居跡はSI 176・176住居跡と重複関係にあり、両住居跡より新しい。方位は西壁がほぼ南北を指している。



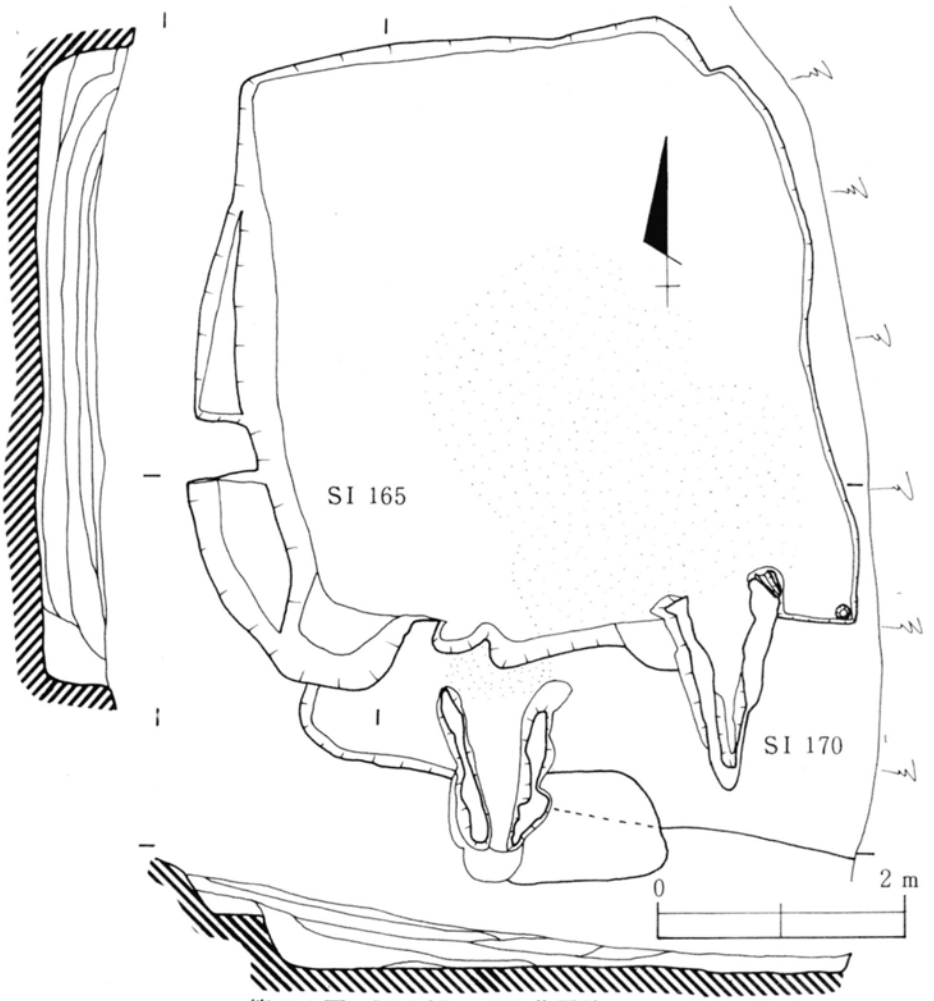
第117図　SI 164 住居跡出土遺物

SI 165 住居跡出土遺物（120図、図版86）

土師器、須恵器、紡錘車、土錘、刀子、平瓦（埋土、カマド内）、丸瓦（埋土）、有段丸瓦（埋土）等が出土した。

（埋土出土）

E－33は須恵器坏である。底部切り離しは回転ヘラ切り、無調整。青灰色を呈し、焼成良好である。火ダスキが認められる。E－34は須恵器蓋で、偏平なツマミをもつが、中心部はわずかに擬宝珠状



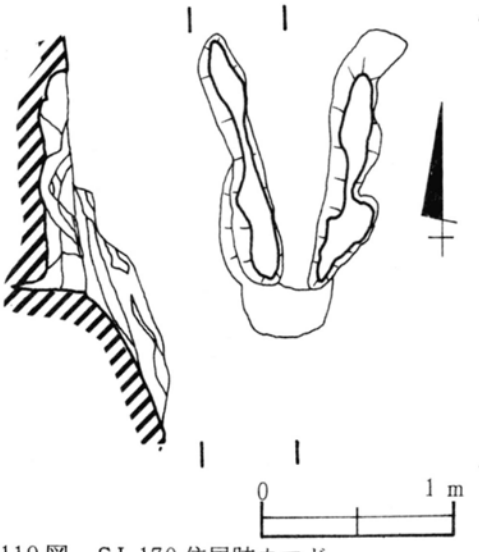
第118図　SI 165・170 住居跡

を呈する。切り離しは不明で、回転ヘラケズリ調整を施す。全体的にいびつで、外面全体に自然釉がかかる。暗灰色を呈し、胎土に小石粒を含み、焼成良好である。

E－38は土錘である。E－39、E－40は刀子で、刀身部の破片である。錆化が著しい。

（カマド付近出土）

E－35、E－36は土師器甕の底部である。E－35は外面に縦位方向のカキ目、内面はハケ目がみられ、底部に木葉痕をもつ。E－36は外面に縦位方向のカキ目、内面は横位方向のカキ目を施す。E－35、E－36は胎土、焼成共に良好である。



第119図　SI 170 住居跡カマド

（カマド出土）

E－32は須恵器坏である。底部切り離しは回転ヘラ切り、無調整。全体的には灰青色を呈するが底部外周一部が橙色をなし、焼成は良好である。E－37は紡錘車である。

SI 166 住居跡（第121図、図版31）

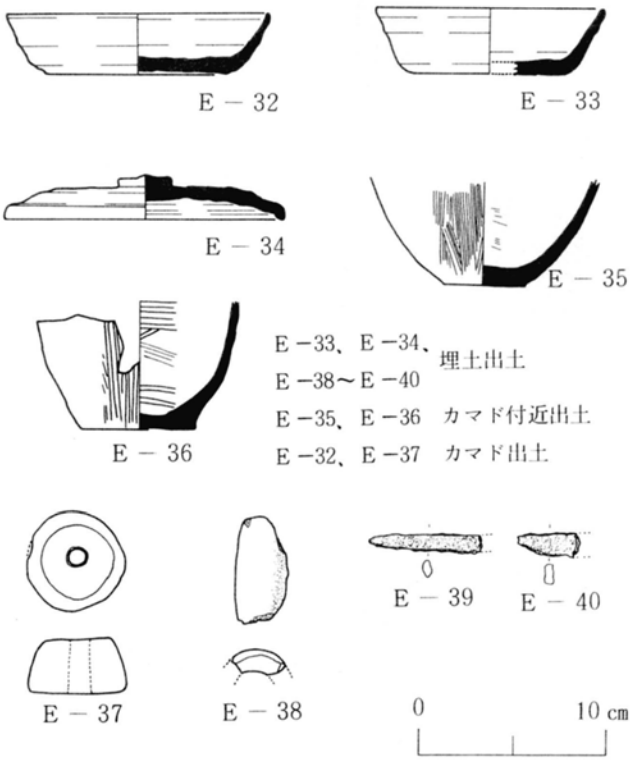
南側は調査区外なので不明であるが、東西約5.02ｍあり、調査部分より考えて方形を呈すると思われる。壁高は約20cmを計る。カマド、柱穴は認められない。方位は西壁がほぼ南北を指している。

SI 166 住居跡出土遺物（第122図、図版87）

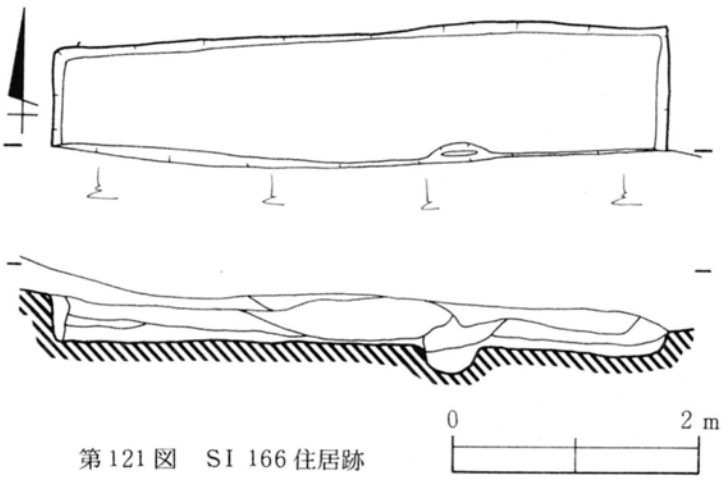
土師器、須恵器、縄文式土器、土錘、鉄鎌、環状金具、平瓦（埋土）、丸瓦（埋土）等が出土した。なお、環状金具については錆化が著しく、錆取り作業の過程で破損し、図示しえなかった。

（埋土出土）

E－42は土師器壺と考えられる器形の底部である。外面は縦位方向のカキ目、内面は横位方向のカキ目を施し、かなり雑な作りである。E－43、E－44は口縁部から頸部にかけて段を有する土師器甕である。E－41はツマミ部を欠く須恵器蓋で、約½程の残存である。内面に2条の刻線が認められ、窯印とも考えられる。胎土に小石粒を多く含み、器面はざらざらである。青灰色を呈し、焼成良好である。E－45は縄文式土器。E－46は土錘。E－47は鉄鎌で、刃部は内反りし、木柄着装部折り返しは刃部に対し直角である。錆化が著しい。



第120図　SI 165 住居跡出土遺物



第121図　SI 166 住居跡

SI 167 住居跡（第106図、図版28）

東西約5.1ｍ、南北約5.2ｍの方形を呈し、壁高は約60㎝を計る。カマドは南壁東寄りに粘土で構築され遺存状態は良好で、カマド中央部に平瓦を据え、その上に土師器甕の底部を倒立させて置き、支脚としている。他に石等もみられた。柱穴は検出されなかった。北東コーナー外側に土師器甕が2個体出土したが、本住居跡に伴うものかは判然としない。本住居跡はSI 160住居跡と重複関係にあり、本住居跡が古い。方位は西壁がSI 160住居跡と重複しているが、南北を指している。

E－41

E－42

E－43

E－44　E－45

SI 167 住居跡出土遺物（第123図、図版87）

土師器、須恵器、平瓦（カマド）等が出土した。なお、須恵器については破片であり図示しえなかった。

（カマド出土）

外面が縦位方向のカキ目、内面は横位方向のカキ目を施す土師器甕である。底部に種子と思われる圧痕が認められる。焼成良好である。

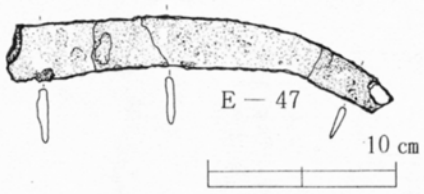
E－41～E－47
埋土出土

E－46

SI 168 住居跡（第106図、図版28）

SI 167住居跡の南壁にカマドの痕跡のみが残っている住居跡である。SI 167住居跡を構築の際破壊されたものと思われる。このことより本住居跡はSI 167住居跡より古いと考えられる。

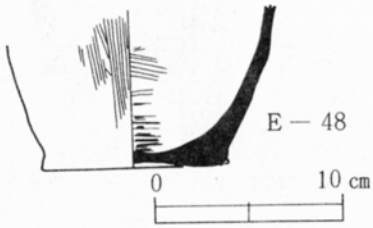
なお、出土遺物はなかった。



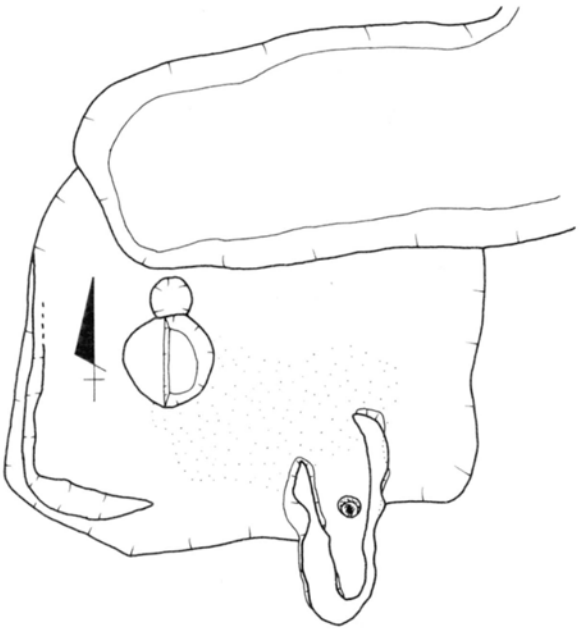
第122図　SI 166住居跡出土遺物

SI 169 住居跡（第124、125図、図版26）

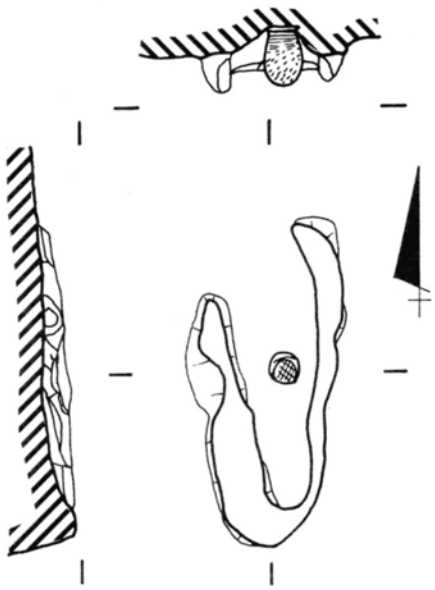
東西約3.8ｍで、南北は北側が落ち込みで切られているため不明であるが、方形を呈すると思われる。カマドは南壁東寄りに粘土で構築され、中央部に丸底の土師器甕が支脚としてふせられていた。柱穴は認められない。周溝は、南西コーナー部と西壁下に一部確認された。SI 172住居跡と重複し、本住居跡が新しい。方位は西壁がほぼ南北を指している。



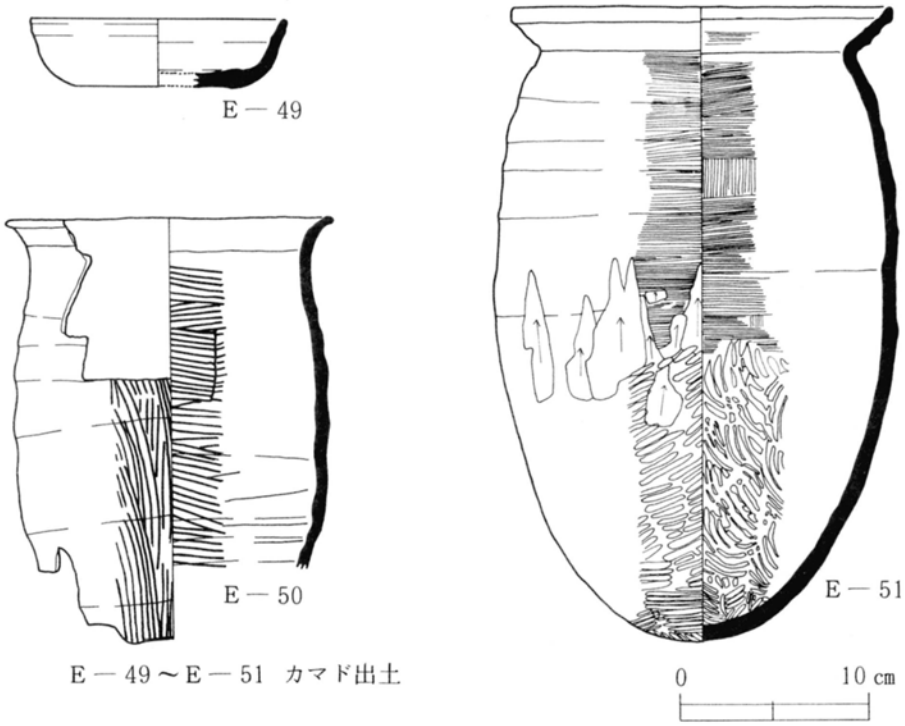
第123図　SI 167住居跡出土遺物



第124図　SI 169 住居跡



第125図　SI 169 住居跡カマド



E — 49 ～ E — 51　カマド出土

第126図　SI 169 住居跡出土遺物

SI 169 住居跡出土遺物（第126図、図版87）

土師器、須恵器、平瓦（カマド）、丸瓦（埋土）等が出土した。

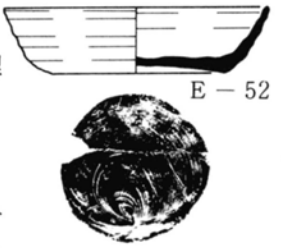
（カマド出土）

E－50は土師器甕である。口縁部がゆるく外反し、外面は縦位方向、内面は横位方向に太目のカキ目を施す。胎土に砂粒、小石粒を多量に含み、焼成は良好である。E－51はカマド支脚として倒立した状態で検出した完形の土師器甕である。器形は砲弾型を呈し、頸部が「く」の字状に外反し、口唇部がやや内反する。ロクロ整形されており、体部外面上半は横位方向のカキ目、内面は縦位方向のカキ目を施した後に横位方向のカキ目を施す。体部下半及び底部は、外面が斜位方向に平行タタキ板痕、内面に同心円アテ板痕が認められ、体部外面中央部はヘラケズリが行われている。色調は赤褐色を呈し、胎土に小石粒が少々混入し、焼成は良好である。また、外面の一部に煤状炭化物の付着がみられる。E－49は須恵器坏、底部切り離しは不明で、土師器にみられるようなミガキが調整として行われている。灰白色を呈し、焼成はやや弱い。

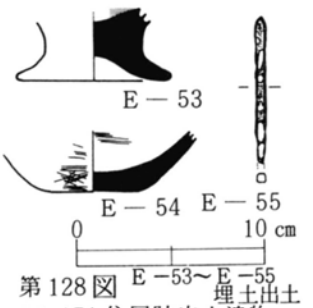
SI 170 住居跡

（第118、119図、図版30）

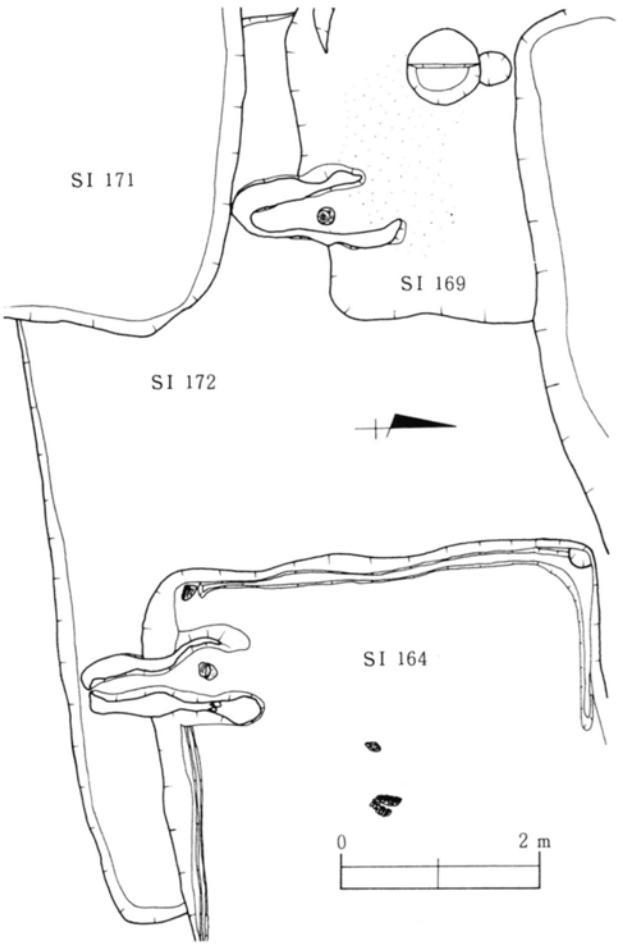
本住居跡はSI 165 住居跡に切られているため全体について



第127図 SI 170 住居跡出土遺物



第128図 E－53～E－55 埋土出土 SI 171 住居跡出土遺物



第129図 SI 172 住居跡

は不明である。カマドは南壁西寄りに粘土で構築され遺存状態は良好である。焚口部に焼土、また東袖付近に粘土、焼土、炭化物が検出された。柱穴は認められない。本住居跡はSI 165・176住居跡と重複関係にありSI 165住居跡より古く、SI 176住居跡より新しい。

SI 170 住居跡出土遺物（第127図、図版87）

土師器、須恵器、平瓦（埋土）等が出土した。なお、土師器については破片であり図示しえなかった。

（カマド出土）

須恵器坏で、底部切り離しは回転糸切り、無調整。灰白色を呈し、焼成はやや弱い。

SI 171 住居跡（第110図、図版29）

東西約5.1m、南北約4.4mの方形を呈し、壁高は約30cmを計る。カマドは認められない。柱穴は計3個検出された。周溝は西・南辺にみられる。SI 162・172住居跡と重複関係にあり、本住居跡はSI 162住居跡より古く、SI 172住居跡より新しい。

SI 171 住居跡出土遺物（第128図、図版87）

土師器、須恵器、鉄鏃、平瓦（埋土）、丸瓦（埋土）等が出土した。なお、須恵器については破片であり図示しえなかった。

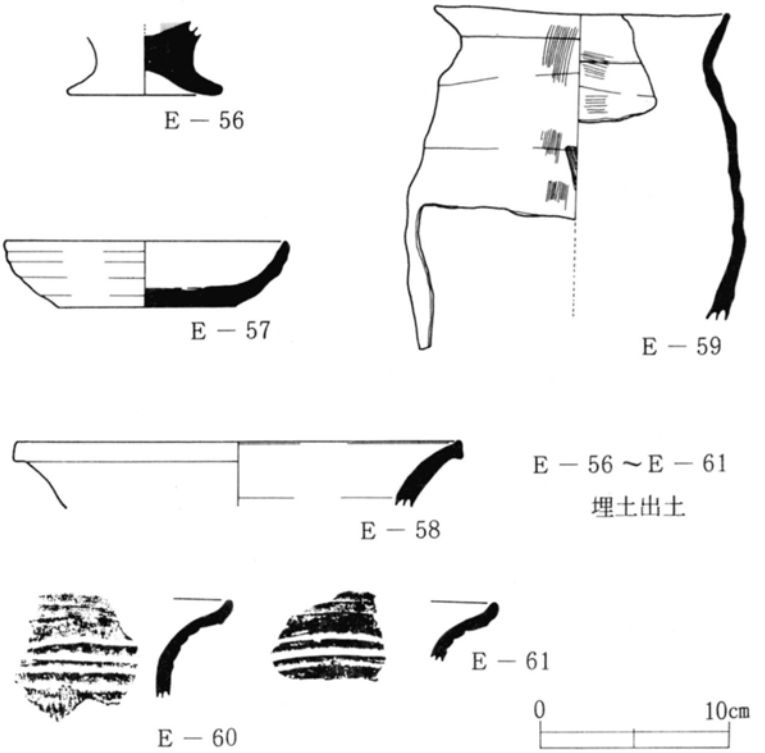
（埋土出土）

E－53は内黒土師器高坏の脚部である。E－54は土師器甕の底部で、外面は横位及び斜位方向のカキ目、内面は横位方向のカキ目を施す。焼成は良好である。E－55は鉄鏃で、先端部は偏平、茎部は四角形を呈する。錆化が著しい。

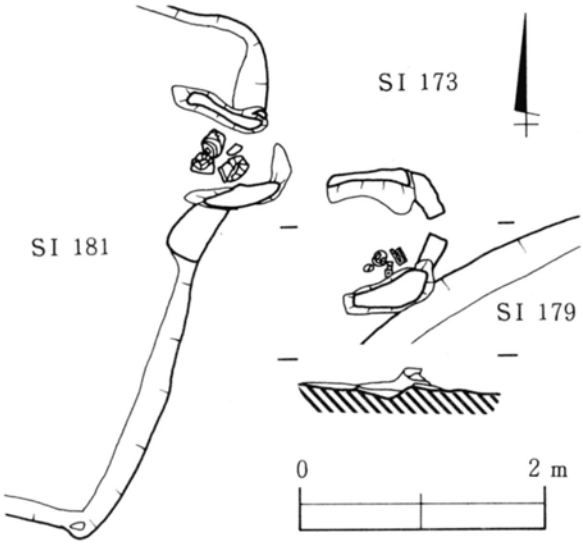
SI 172 住居跡

（第129図、図版27）

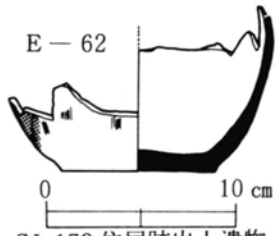
SI 164・169・171・181住居跡、落ち込み等で切られており、南北は不明であるが、東西約8.5mを計り、方形を呈すると考えられる。カマドの付設は認められなかった。



第130図　SI 172住居跡出土遺物



第131図　SI 173住居跡



第132図　SI 173住居跡出土遺物

SI 172住居跡出土遺物

（第130図、図版88）

土師器、須恵器、平瓦(埋土)、丸瓦（埋土）等が出土した。

（埋土出土）

E－56は内黒土師器高坏の脚部である。E－59は土師器甕。口縁部内外面横ナデ、外面は縦位方向のカキ目、内面は横位方向のカキ目を施す。外面に煤状炭化物の付着が認められ、胎土、焼成共に良好である。E－60、E－61は口縁部から頸部にかけて段を有する土師器甕である。E－57は須恵器坏。底部切り離しは不明である。色調は褐色部分と青灰色部分がみられ、焼成はやや弱い。E－58は須恵器甕の口縁部である。灰白色を呈し、焼成はやや弱い。

SI 173住居跡（第131図、図版27）

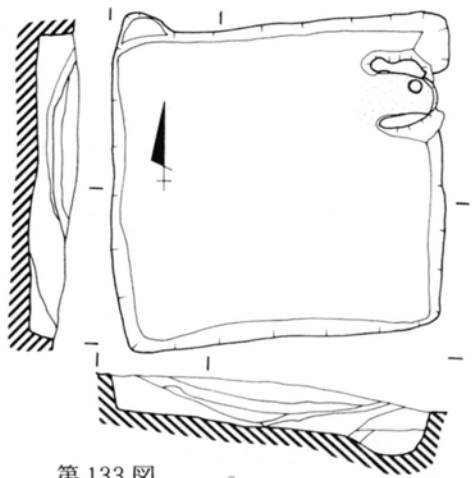
SI 179 住居跡の北西、 SI 181 住居跡の東にカマドのみが検出された住居跡である。カマド内には焼土、炭化物等が多量に堆積し、土師器甕、瓦等の遺物が出土している。本住居跡は、SI 179・181住居跡より新しい。カマド方位はほぼ東西を指している。

SI 173住居跡出土遺物（第132図、図版88）

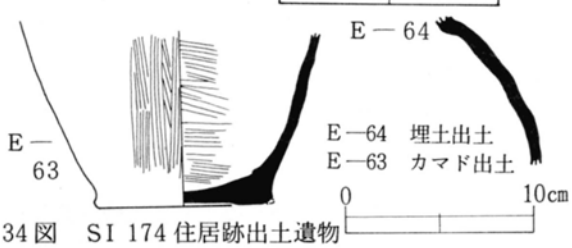
土師器、平瓦等が出土した。

（カマド出土）

土師器甕の底部である。底部より丸味をもって立ち上る器形と考えられる。外面は縦位方向のカキ目を施した後にヘラミガキ、内面はヘラミガキが認められる。淡い赤橙色を呈し、焼成は良好である。



第133図
SI 174住居跡



第134図　SI 174住居跡出土遺物

SI 174 住居跡（第133図、図版32）

東西約3.04ｍ、南北約2.86ｍ、の方形を呈し、壁高約30㎝を計る。カマドは東壁北寄りに粘土で構築され、カマド内には土師器甕の底部を倒立させ支脚として使用されていた。柱穴は検出されなかった。方位は西壁がほぼ南北を指している。

SI 174 住居跡出土遺物（第134図、図版88）

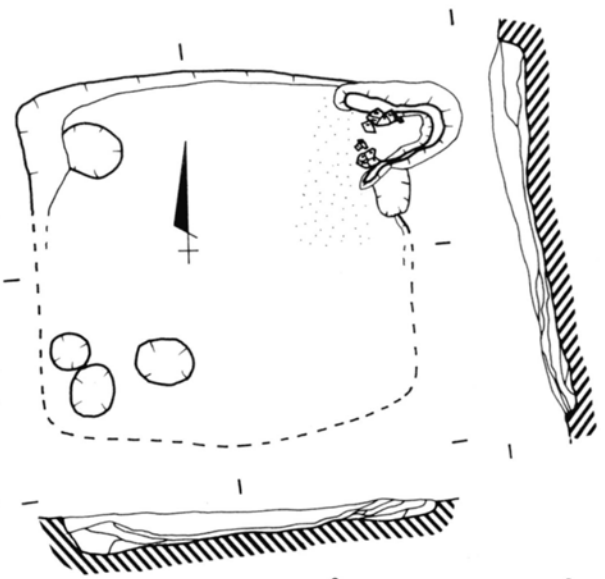
土師器、須恵器、平瓦（埋土）、丸瓦（埋土）等が出土した。なお、須恵器については破片であり図示しえなかった。

（埋土出土）

Ｅ－64は土師器壺と考えられる器形である。外面は縦位方向のヘラミガキ、内面は横位方向のヘラミガキが施され、頸部に沈線を巡らし、その下は一部横位方向にヘラミガキを施す。暗灰色、褐色を呈し、焼成良好である。

（カマド出土）

Ｅ－63はカマド支脚として使用されていた土師器甕である。外面が縦位方向のカキ目、内面は横位方向のカキ目を施す。外面に二次火熱を受けたと思われ淡い赤橙色を呈し、焼成良好である。



第135図　SI 175 住居跡

SI 175 住居跡（第135図、図版32）

東西約3.04ｍ、南北約3.14 ｍの方形を呈する。南側は床面のプランのみしかわからないが残りのよい北壁の壁高は約20㎝を計る。カマドは東壁北隅に東向きに粘土で構築されていて、焚口部付近には炭化物が堆積している。方位は西壁が南北を指している。

SI 175 住居跡出土遺物（第136図、図版88）

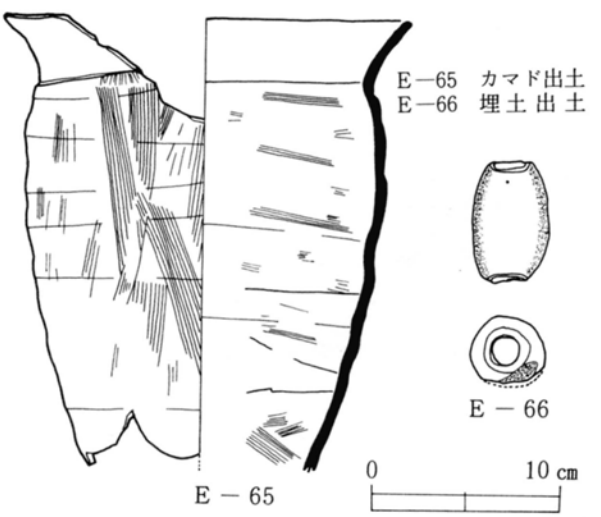
土師器、須恵器、土錘等が出土した。なお、須恵器については破片であり図示しえなかった

（埋土出土）

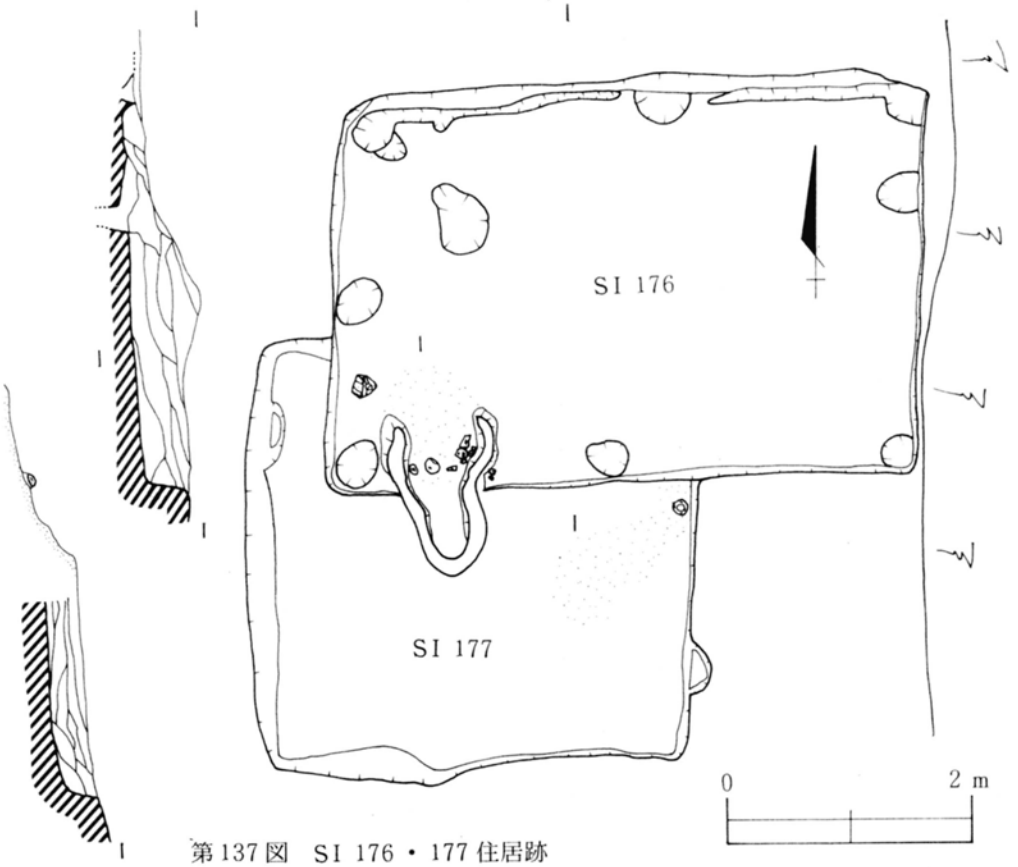
Ｅ－66は土錘である。

（カマド出土）

Ｅ－65はカマド中から出土した土師器甕であ

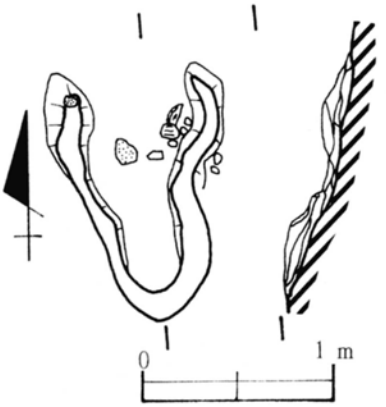


第136図　SI 175 住居跡出土遺物



第137図　SI 176・177 住居跡

る。頸部が「く」の字状を呈し、外面が縦位方向のカキ目、内面は横位方向のカキ目を施し、口縁部内外面に横ナデを施す。輪積み痕が明瞭に観察できる。灰白色、淡い赤褐色を呈し、焼成良好である。



第138図　SI 176 住居跡カマド

SI 176 住居跡（第137、138図、図版26）

東西約4.8ｍ、南北約3.26ｍの長方形を呈し、壁高約40㎝を計る。カマドは南壁西寄りに粘土で構築されていて、焚口部に焼土が検出された。柱穴は各コーナー四隅に検出され、北・西・南辺の中央に各々1個ずつ、東辺の北寄りに1個検出されている。各々直径30～40㎝を計る。北壁下に周溝がみられる。カマド焚口部に土師器甕、石、また西袖付近に土師器甕等の遺物が出土している。本住居跡はSI 165・170・177 住居跡と重複関係にありSI 177 住居跡より新しく、SI 165・170 住居跡より古い。方位は西壁がほぼ南北を指し、長軸は東西を指している。

SI 176 住居跡出土遺物（第139図、図版88）

土師器、須恵器、弥生式土器等が出土した。なお、須恵器については破片であり図示しえなかっ

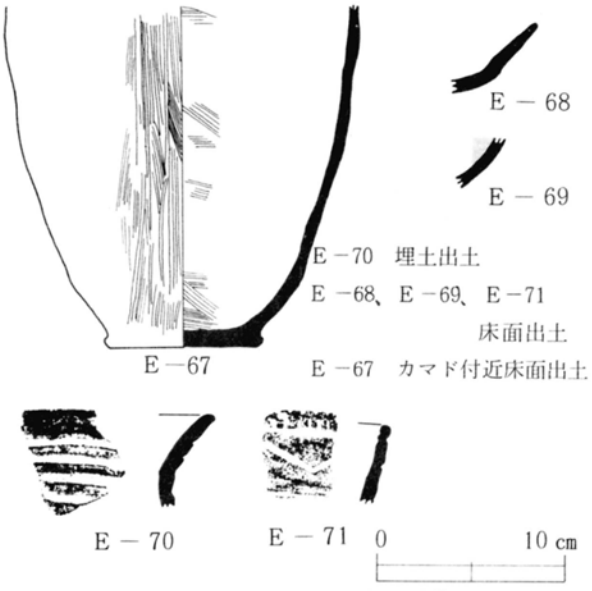
た。

（埋土出土）

E－70は口縁部から頸部にかけて段を有する土師器甕である。

（床面出土）

E－68は体部中央部に段をもち、丸底を呈し内面黒色処理を施さない土師器坏である。E－69は内黒土師器坏で、内外面にヘラミガキを行う。E－71は弥生式土器の口縁部で、口唇部内外面に刻みを入れ、外面口唇部下部及び頸部と思われる箇所に沈線が巡り、その沈線間に連続山形文を施す。内面口唇部下部にも2条の平行沈線が巡る。



第139図　SI 176 住居跡出土遺物

（カマド付近床面出土）

E－67は西袖付近出土の土師器甕である。外面が縦位方向のカキ目、内面は横位方向のカキ目を施す。器肉は比較的薄く、色調は赤褐色を呈し、焼成良好である。煤状炭化物の付着が認められる。

焚口部出土の土師器は破片であり図示しえなかった。

SI 177 住居跡（第137図、図版26）

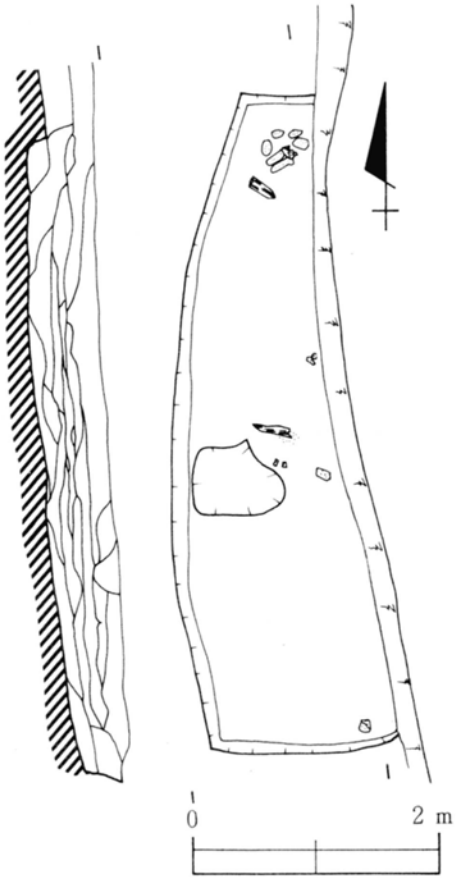
東西約3.6ｍ、南北約3.5ｍの方形を呈し、壁高は約20㎝を計る。北側はSI 176 住居跡に切られているため不明である。カマド、柱穴は認められないが、東壁付近に焼土が検出された。東壁付近に土師器甕等の遺物が出土している。方位は西壁がほぼ南北を指している。

SI 177 住居跡出土遺物

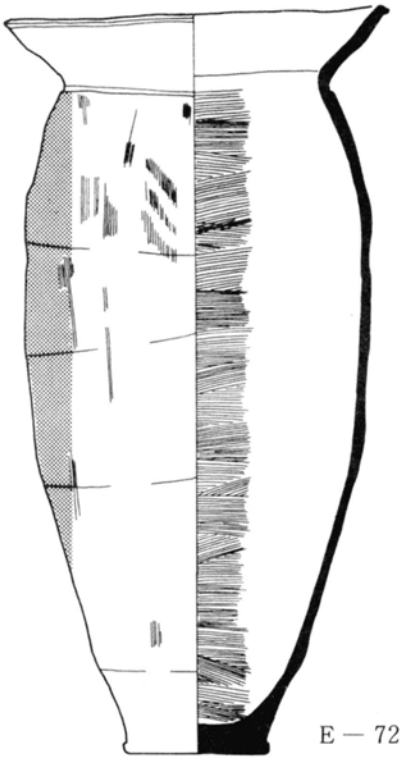
土師器甕の破片が埋土より数点出土したが、図示しえなかった。

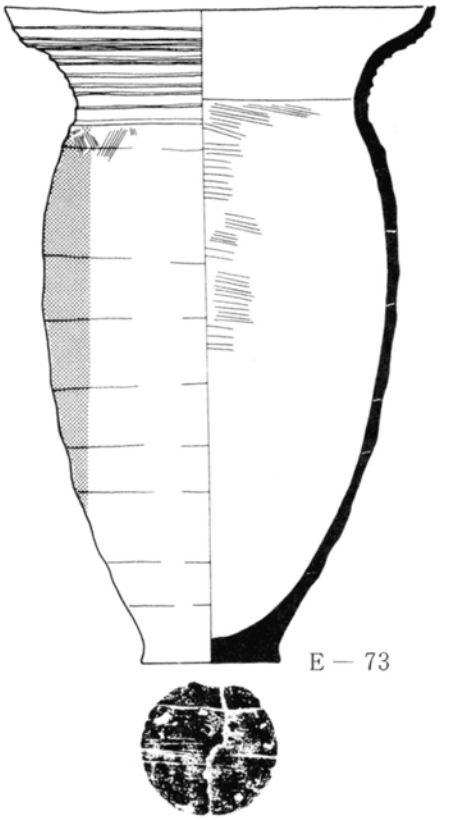
SI 178 住居跡（第140図、図版33）

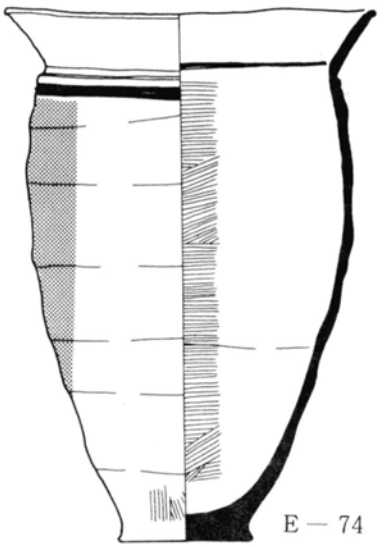
東側は調査区外なので不明であるが、南北約5.3ｍあり、調査部分より考えて方形を呈すると思われる。壁高は約50㎝を計る。カマド、柱穴は検出されなかったが、西壁寄りにピットがみられる。床面より炭化材や、数個の石が検出された。方位は西壁がほぼ南北



第140図　SI 178 住居跡







E—72～E—74　埋土出土　　0　10 cm

第141図　SI 178住居跡出土遺物

を指している。

SI 178 住居跡出土遺物（第141図、図版89）

土師器甕が3点出土した。

（埋土出土）

E—72は頸部が「く」の字状を呈する長胴の甕である。頸部に段を有し、外面が縦位方向のカキ目を施した後に縦位方向にヘラミガキを行い、部分的にカキ目がみられる。内面は横位方向及び斜位方向にカキ目を施す。口縁部内外面に横ナデを行う。色調は汚れた黄褐色で、部分的に黒斑がみられる。器肉は薄手でかなりもろく、焼成はやや弱い。外面に部分的に煤状炭化物の付着がみられる。E—73は口縁部から頸にかけて11条の段を有し、朝顔形に開く甕である。体部は張りの少ない長胴で、作りの良い土器である。外面は縦位方向のカキ目を施した後に縦位方向にヘラミガキを行

う。内面は横位方向のカキ目を施した後に縦位方向のヘラミガキを行い、口縁部は横位方向にヘラミガキを行う。 内外面共に部分的にカキ目がみられ、 輪積み痕が比較的明瞭に観察できる。色調は汚れた黄褐色を呈し、焼成良好で、外面に煤状炭化物の付着がみられる。底部に木葉痕をもつ。E－74は頸部が「く」の字状を呈する甕である。頸部に段が付き、その下に2条又は箇所により1条の沈線が巡る。外面が縦位方向にカキ目を施した後に縦位方向のヘラミガキを行い、内面は横位方向のカキ目を施す。色調は光沢のある黒褐色部分が多く、箇所により黄褐色を呈し、焼成良好である。外面に部分的に煤状炭化物がみられる。

SI 179 住居跡（第142図、図版33）

東西約7.2ｍ、南北約6.8ｍの不整円形を呈し、壁高は約30cmを計る。カマドは南壁中央に粘土で構築され、西袖のみが残存していて遺存状態は良好でない。カマド西側に径約1ｍの貯蔵穴状ピットが検出され、埋土内より土師器鉢が出土した。他に数個のピットが検出された。カマド焚口部より土師器甕等の遺物が出土している。

SI 179 住居跡出土遺物（第143図、図版90）

土師器、須恵器、石斧、刀子、鉄鏃等が出土した。なお、須恵器については破片であり図示しえなかった。

（埋土出土）

E－77は非内黒の土師器で、椀状の器形をなし、成形に際してはロクロを使用しない。底部は手持ちヘラケズリ調整を行い、丸底を呈し、器形はややいびつである。色調は汚れた灰白色をなし、一部赤橙色もみられる。胎土に砂粒、小石粒を多量に含み、焼成はやや弱くもろい。E－78は口縁部から頸部にかけて段を有する土師器甕である。内面は横位方向にヘラミガキを施す。焼成良好で、煤状炭化物の付着がみられる。なお、器形は比較的小型である。E－79は土師器甕。頸部は「く」の字状に浅く外傾し、段が2段つく。外面が縦位方向のカキ目、内面は横位方向及び斜位方向にカキ目を施す。口縁部内外面は横ナデを行う。黒褐色をなし、焼成良好である。内面の一部と外面には部分的に煤状炭化物の付着がみられる。E－83は小型の磨製石斧。体部下半から刃部にかけて欠損し、石質は緑色片岩と考えられる。E－84は刀子。刀身の破片で、錆化が著しい。E－85は鉄鏃で、先端部は偏平、茎部は四角形を呈する。錆化が著しい。

（カマド付近出土）

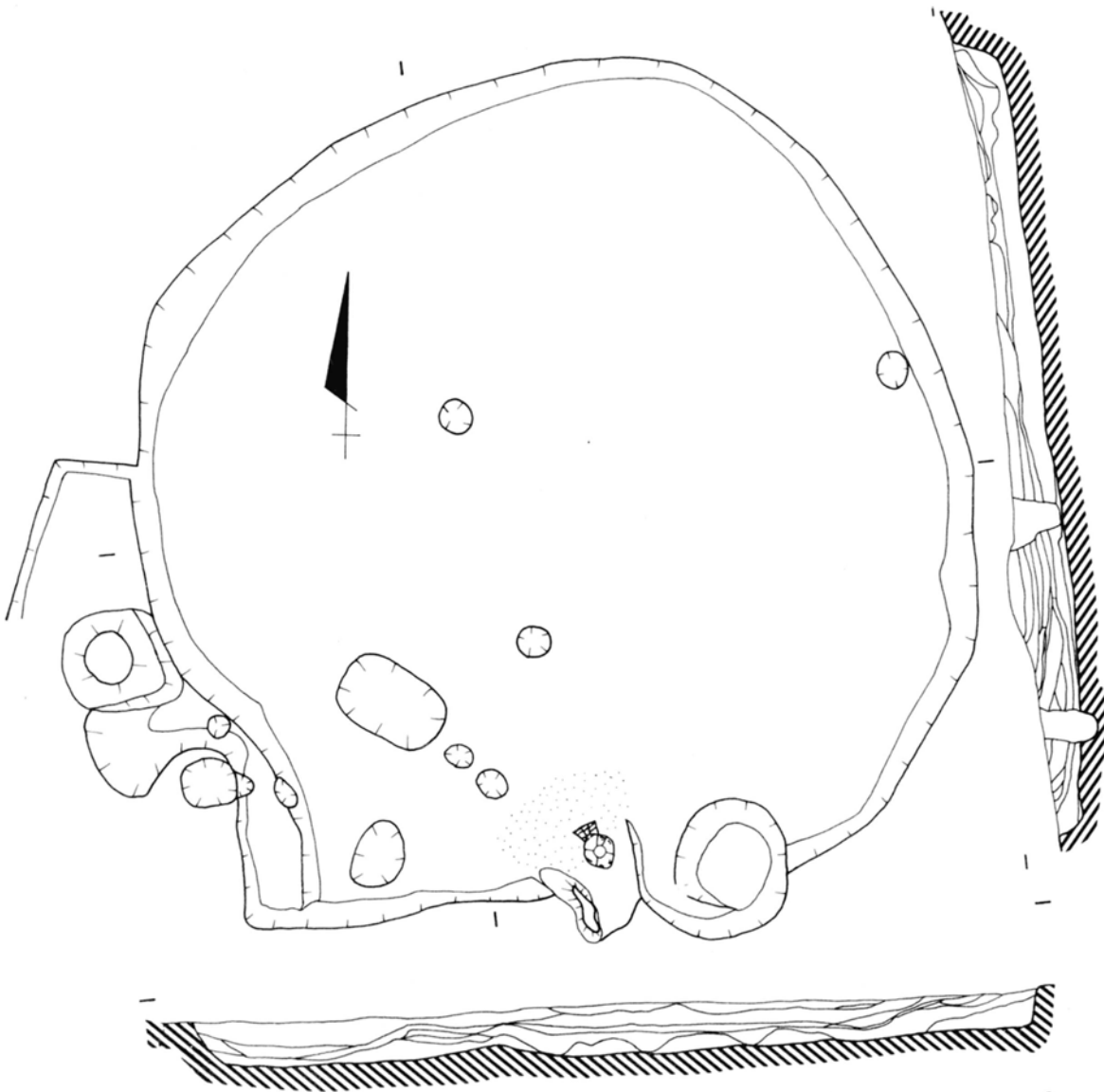
全てカマド東側からの出土である。E－75はロクロ非使用の内黒土師器坏である。底部が小さく椀に近い器形をなす。内外面共に、横位方向にヘラミガキを施す。胎土に小石粒を含み、焼成は弱い。E－76はロクロ非使用で、内面黒色処理を施さない土師器坏である。内外面共に横位方向のヘラミガキを行う。外面は黒色を帯び、焼成は良好である。E－81は体部下半及び底部を欠く土師器甕である。頸部が「く」の字状を呈し、口唇部に凹線が巡る。外面が縦位方向のカキ目、内面は横位及び斜位方向にカキ目を施す。口縁部内外面に横ナデを行う。焼成良好である。

（カマド出土）

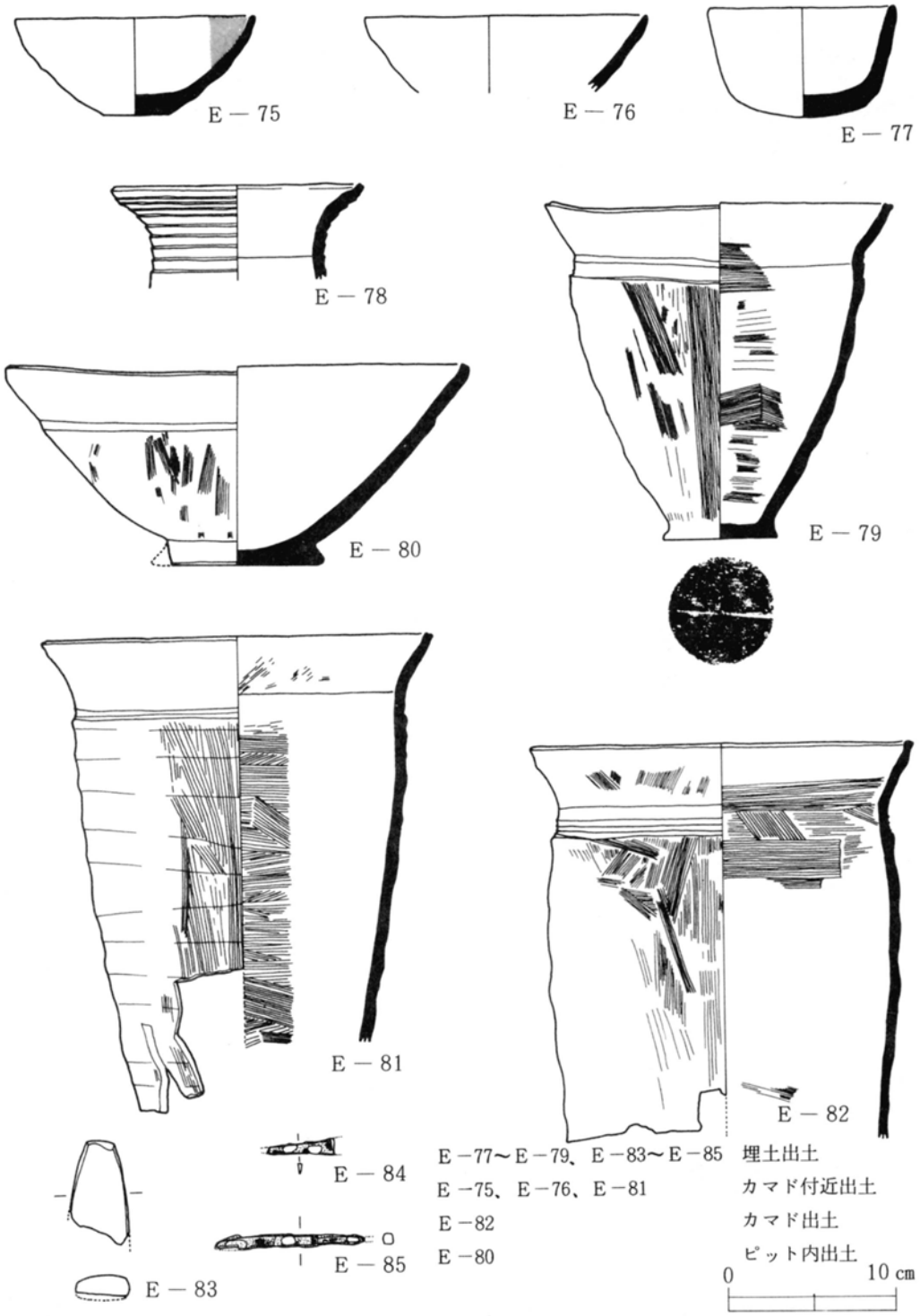
E－82はカマド中より倒立した状態で出土した土師器甕である。頸部が「く」の字状を呈し、段を有し、その上に数条の稜線が巡る。外面が縦位及び斜位方向のカキ目、内面は横位及び斜位方向のカキ目をまばらに施す。口縁部内外面はカキ目を施し後に横ナデを行う。胎土に小石粒を含み、焼成良好である。

（ピット内出土遺物）

E－80は土師器鉢で、擂鉢状の器形をなす。外面の中程より上部に段をもち、口縁部はやや内湾



第142図　SI 179 住居跡



第143図　SI 179住居跡出土遺物

する。外面は段を境にして下方が縦位方向のカキ目を施し、後にヘラミガキをまばらに行い、上方は横ナデを行う。内面は黒色処理を施し、横位方向にヘラミガキを行う。底部内面は剥落がみられ、胎土に小石粒が多量に混入し、焼成は良好である。底部に笹葉痕をもつ。

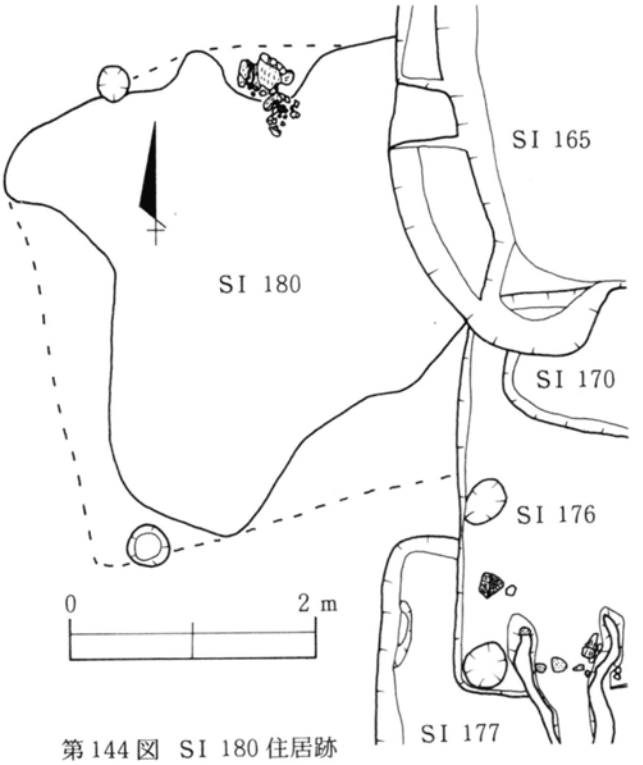
SI 180 住居跡（第144図、図版26）

SI 165・170・176住居跡の西側に検出された住居跡で、床面の痕跡しか確認されなかった。確認範囲の北側より土師器甕等の遺物が出土している。

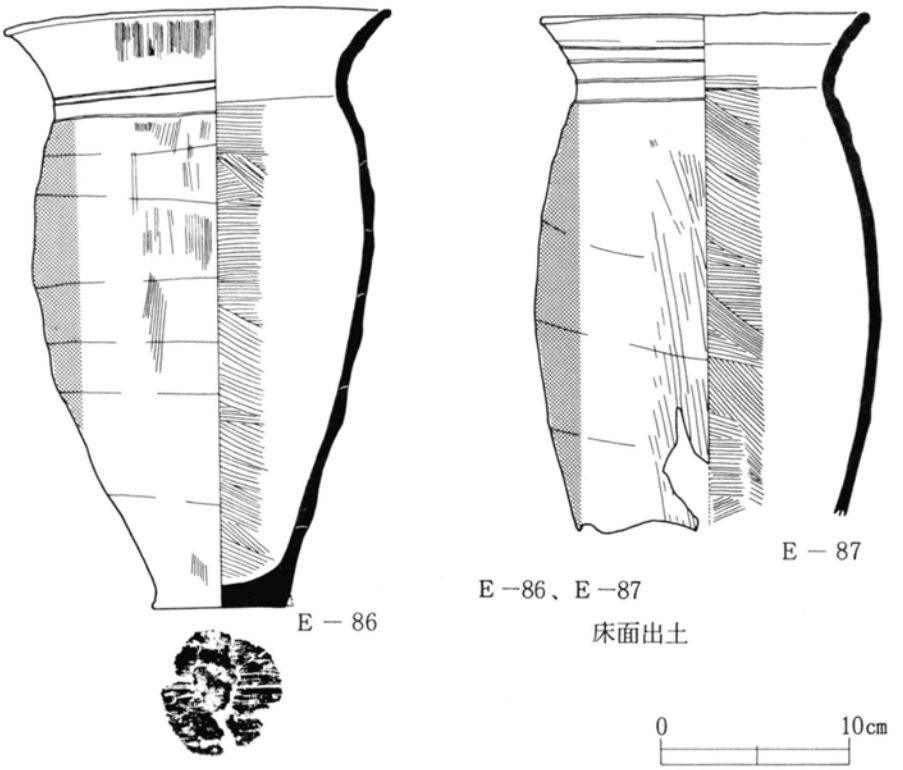
SI 180住居跡出土遺物

（第145図、図版91）

土師器甕が2点出土した。



第144図　SI 180住居跡



第145図　SI 180住居跡出土遺物

（床面出土）

E－86は頸部が「く」の字状にゆるく外反し、口縁部が比較的大きい。頸部に段をもち、その上方に数条の稜線が巡る。外面は縦位方向のカキ目を施した後に縦位方向にヘラミガキを行い、内面は横位方向にカキ目を施す。口縁部内外面にナデを行う。煤状炭化物の付着が認められ、全体的にやややもろい。底部に笹葉痕をもつ。E－87は頸部が「く」の字状にゆるく外反し、口縁部から頸部にかけて4条の浅い段をもつ。外面は縦位方向にカキ目を施した後に縦位方向にヘラミガキを行い、内面は横位方向及び斜位方向にカキ目を施す。胎土に砂粒を多く含み、焼成はやや弱い。

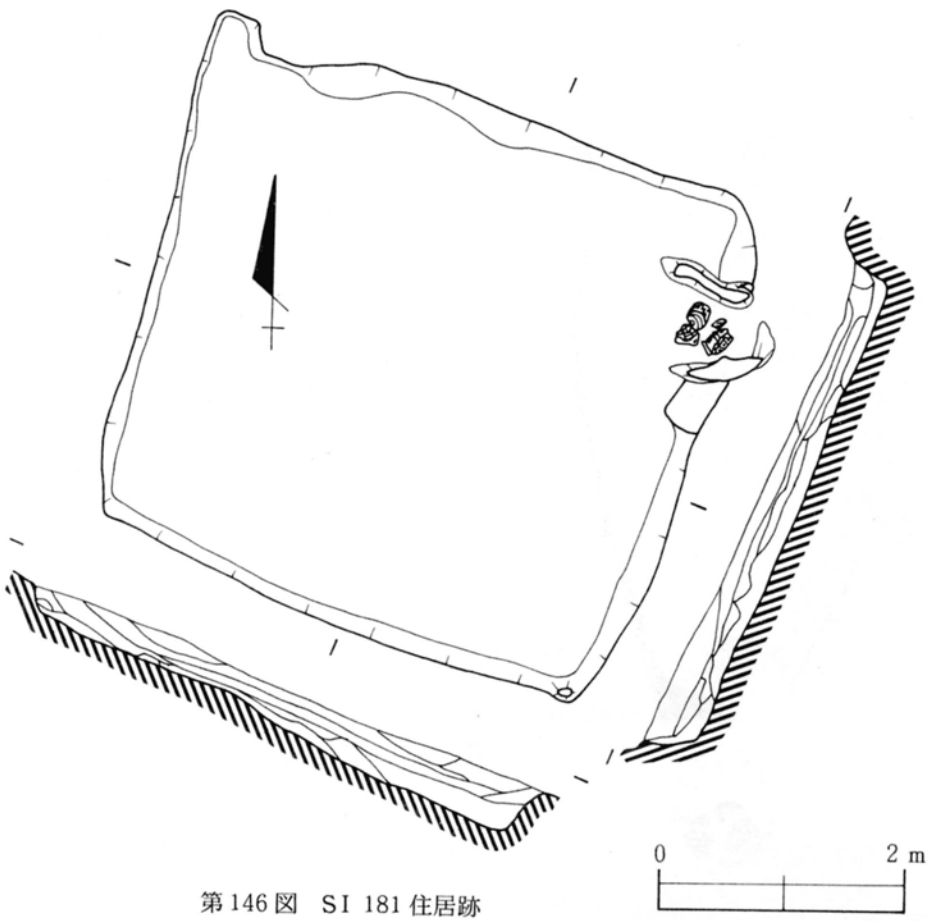
SI 181 住居跡（第146図、図版34）

東西約4.64m、南北約4.4mの方形を呈し、壁高は約40cmを計る。カマドは東壁北寄りに粘土で構築されていて、カマド内より土師器甕等の遺物が出土している。柱穴は検出されなかった。本住居跡はSI 164住居跡と重複関係にあり、本住居跡が古い。方位は西壁が、北で東に約12°傾いている。

SI 181 住居跡出土遺物（第147図、図版91）

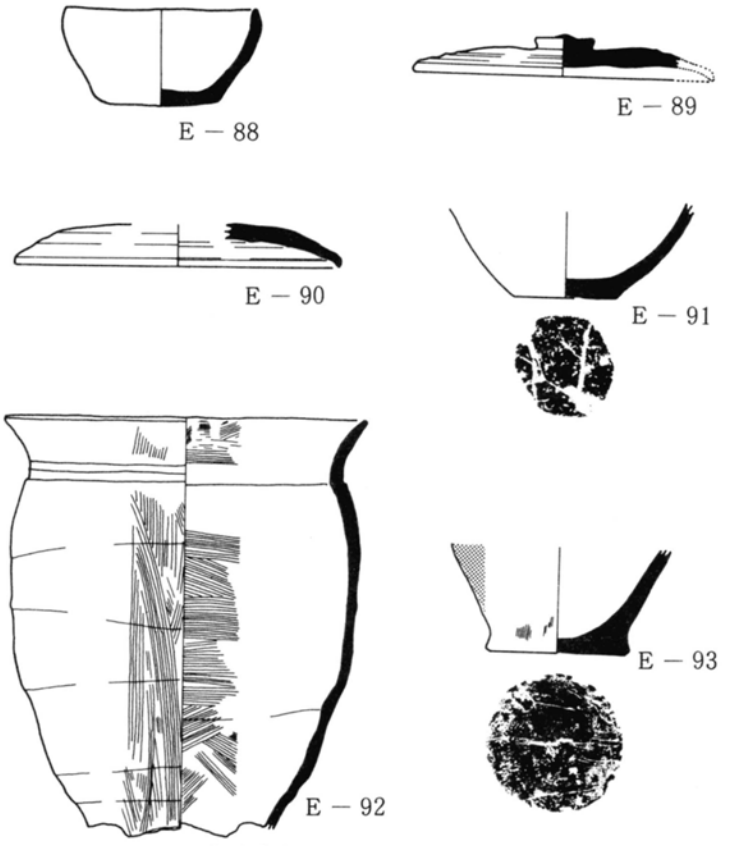
土師器、須恵器、平瓦（埋土）等が出土した。

（埋土出土）



第146図　SI 181 住居跡

E－88はロクロ非使用の土師器坏で、黒色処理を施さないものである。底部はやや丸味をもち、底部より内湾気味に立ち上る。胎土に砂粒、小石粒が混入し、一部器面が剝落し、外面には黒斑がみられる。E－89は須恵器蓋。偏平なツマミをもつが、中心部はわずかに擬宝珠状を呈する。外面天井部は回転ヘラケズリ調整を施し、切り離しは不明である。外面に一部自然釉及び火ダスキが認められる。灰色を呈し、焼成良好である。E－90は天井部及びツマミ部を欠き、¼程残存の須恵器蓋である。青灰色を呈し、焼成良好である。



E－88～E90　埋土出土
E－91～E93　カマド出土

第147図　SI 181住居跡出土遺物

（カマド出土）

E－91は土師器甕の底部である。外面は磨滅が著しい。淡橙色を呈し、焼成はやや弱い。底部に木葉痕をもつ。E－92は土師器甕。頸部が「く」の字状を呈し、軽い段をもつ。外面は縦位方向のカキ目、内面は横位方向及び斜位方向のカキ目を施す。口縁部外面は横ナデ、内面はカキ目がみられる。焼成良好で、内外面の一部に酸化鉄状の物の付着が認められる。E－93は土師器甕の底部。外面縦位方向のカキ目を施した後に縦位方向にヘラミガキを行う。胎土に砂粒を多く含み、焼成はやや弱く、全体的に磨滅している。底部に笹葉痕をもつ。

SI 182 住居跡（第148図、図版35）

東西約4.1ｍ、南北約4.8ｍの隅丸方形を呈し、壁高は約30cmを計る。東辺はわずかに床面の痕跡が確認された程度で、カマドは東壁南寄りに粘土で構築されているが、北袖の一部が残存しているにすぎない。柱穴は検出されなかった。南東コーナーカマド付近より土師器甕、土師器高坏、須恵器台付坏等の遺物が出土している。方位は西壁が北で東に約15°傾いている。

SI 182 住居跡出土遺物（第149図、図版92）

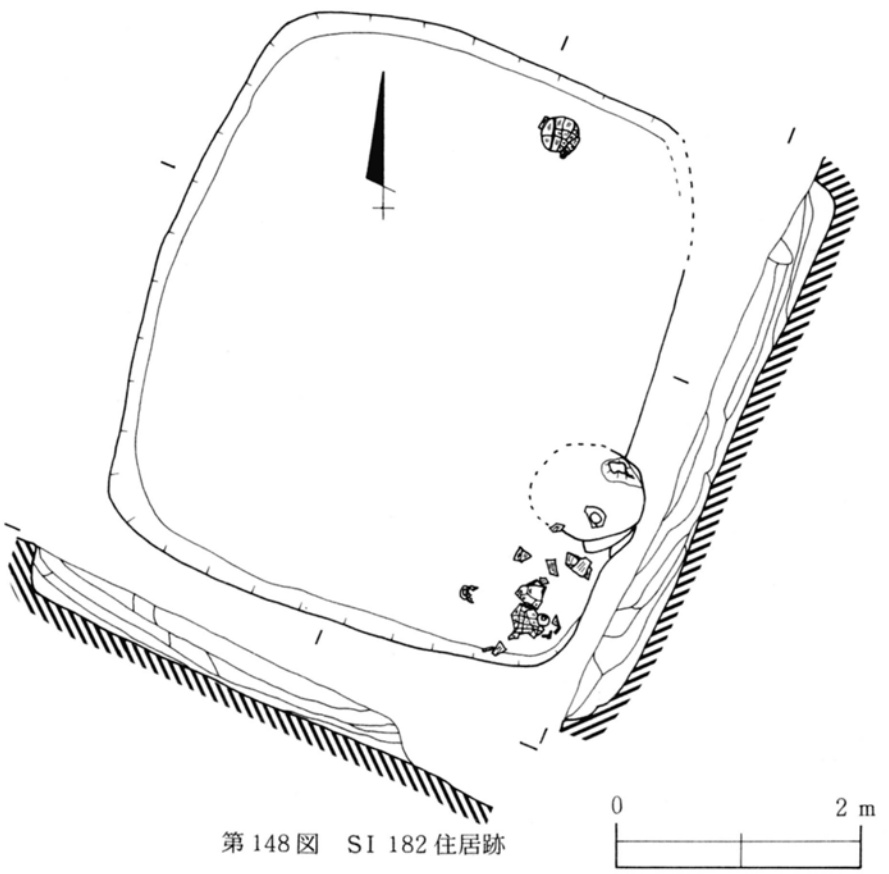
土師器、須恵器等が出土した。

（床面出土）

E－100は北壁際から出土した広口の土師器壺である。体部中央部に最大径があり、球形をなし、頸部は「く」の字状を呈し段をもつ。外面は縦位方向及び斜位方向にカキ目を施し、後に縦位方向へヘラミガキを行う。内面はナデを行い、口縁部内外面はカキ目を施した後に横ナデを行う。器肉が厚く、全体として均整がとれ安定感がある。胎土に砂粒、小石粒を含み、色調は淡黄色で黒斑がみられ、焼成は良好である。底部に木葉痕をもつ。

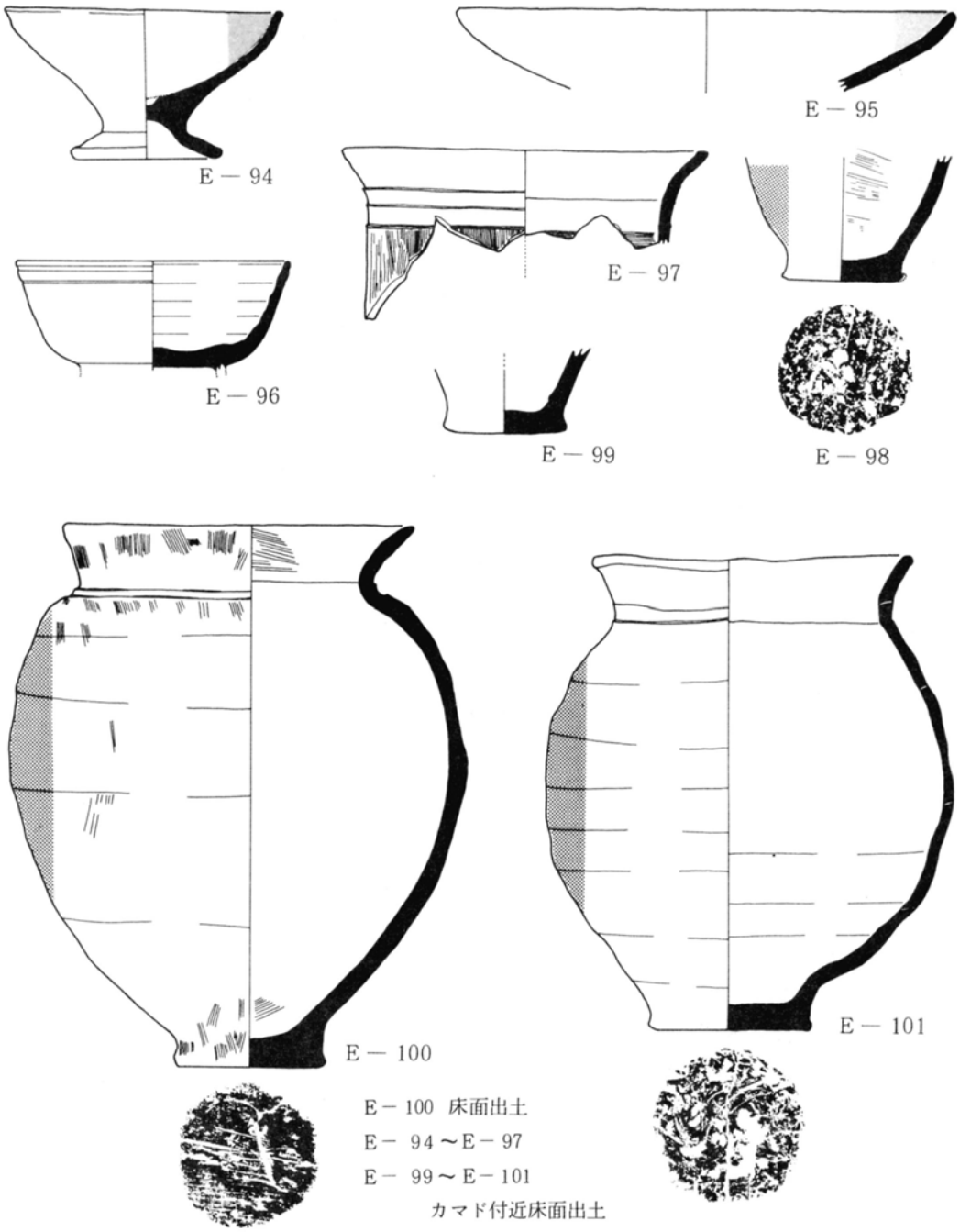
（カマド付近床面出土）

全てカマド南側からの出土である。E－94は内黒土師器高坏である。外面は坏部が横位方向のヘラミガキ、坏部と脚部の接合箇所は割れ口により観察される。外面色調は赤橙色及び一部黒色を呈し、焼成良好である。E－95は内黒土師器坏。内外面共にヘラミガキが行われ焼成良好である。E－97は土師器甕。頸部がゆるく「く」の字状に外反し、段をもち、その上に軽い段をもつ。外面が縦位方向のカキ目、内面は横位方向のカキ目を施し、口縁部内外面は横ナデを行う。焼成は良好である。E－99は土師器甕の底部で、丸味をもち、笹葉痕をもつ。E－101は広口の土師器壺。体部中央部に最大径があり、球形を呈する。頸部が「く」の字状を呈し段をもち、口縁部に2～3



第148図　SI 182住居跡

条の段をもつ。外面体部は下方が縦位方向、他は斜位方向にきめ細かいヘラミガキを施し、光沢がみられる。内面は横位方向にヘラミガキを行う。口縁部は外面が横ナデ、内面が横位方向にきめ細かいヘラミガキを行う。器形は体部中央部が一方に脹らみをみせているが、底部が大きいために安



第149図　SI 182住居跡出土遺物

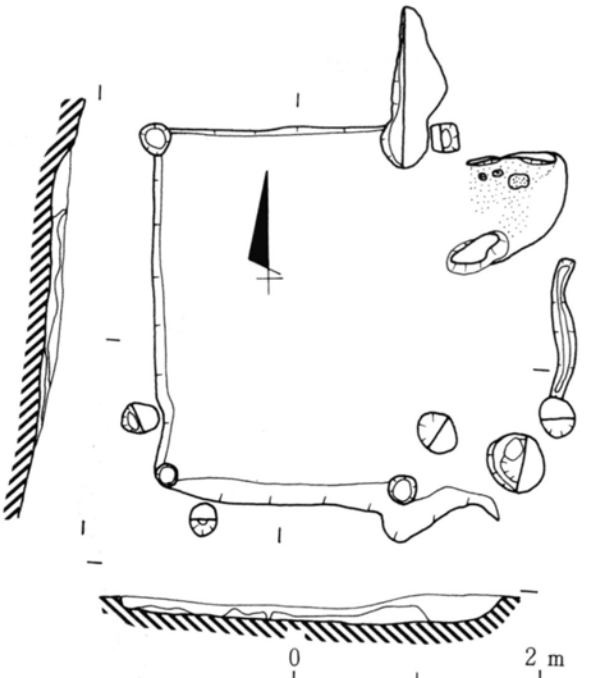
定している。又、輪積み痕が観察される。色調は淡黄色で黒斑がみられ、焼成良好である。底部に木葉痕をもつ。E－96は須恵器台付埦で、台部が欠損する。体部上方に大小2条の平行沈線が巡らされている。底部はロクロ使用によるナデを行い、切り離しは不明である。色調は黄灰色を呈し、焼成良好である。内面底部に火ダスキが認められる。

（カマド出土）

E－98は土師器甕の底部である。外面はヘラミガキを施しており、カキ目はみられない。内面は横位方向、斜位方向にハケ目を施す。焼成良好で、底部に笹葉痕をもつ。

SI 183 住居跡（第150図、図版34）

東西約3.42 m、南北約3.08 mの方形を呈し、壁高は約10cmを計る。カマドは東壁北寄りに粘土で構築されているが、遺存状態は良好でなく、北袖は良く焼け部分的に残存するが、南袖はほとんど残存しない。カマド内より炭化物、灰が検出された。柱穴はコーナー部四隅に検出され、東辺に周溝が確認された。方位は西壁がほぼ南北を指している。



第150図　SI 183 住居跡

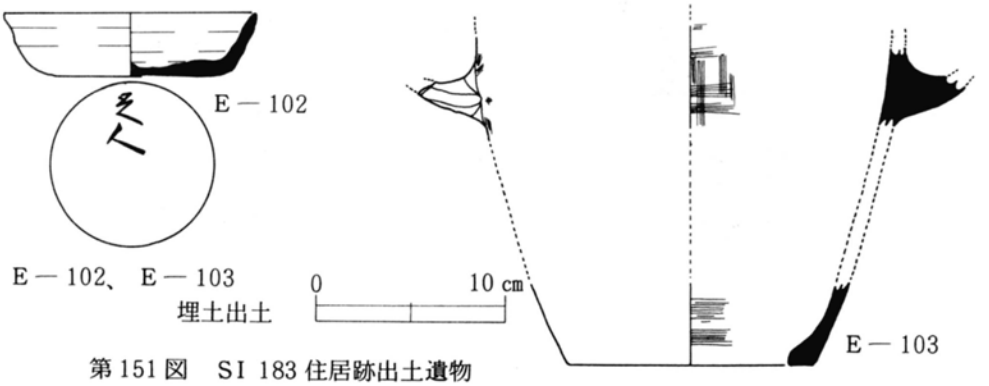
SI 183 住居跡出土遺物

（第151図、図版93）

土師器、須恵器等が出土した。

（埋土出土）

E－103は土師器甑と考えられるが、破片2点を図上復元したものである。外面把手部周辺にはカキ目がみられ、体部下方はヘラケズリを行う。内面は縦位方向及び横位方向にカキ目を施し、体部下方は横位方向にのみカキ目を施す。E－102は須恵器坏。底部切り離しは回転ヘラ切り、無調整。



第151図　SI 183 住居跡出土遺物

底部に「足人」と判読される墨書が認められる。灰色を呈し、焼成良好である。

SI 184住居跡（第152図、図版35）

東西約3.52m、南北は北側が調査区外なので不明であるが、方形を呈すると思われる。壁高は約20cmを計る。カマドは検出されなかった。

SI 184住居跡出土遺物

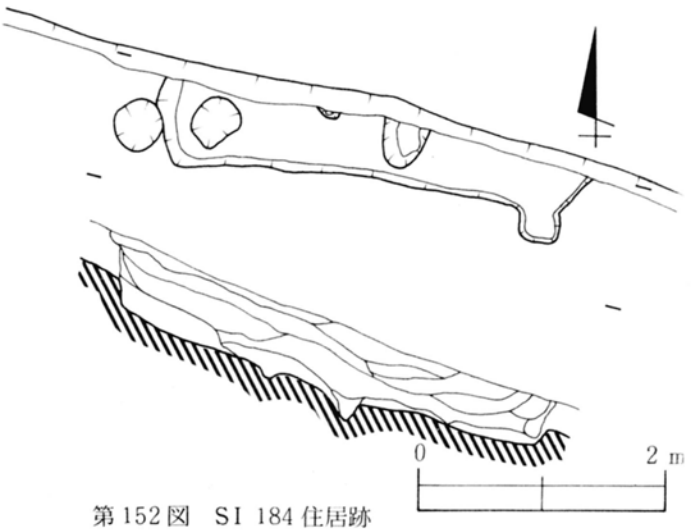
土師器甕の破片が埋土より数点出土しているが、図示しえなかった。

SI 185住居跡（第153図、図版35）

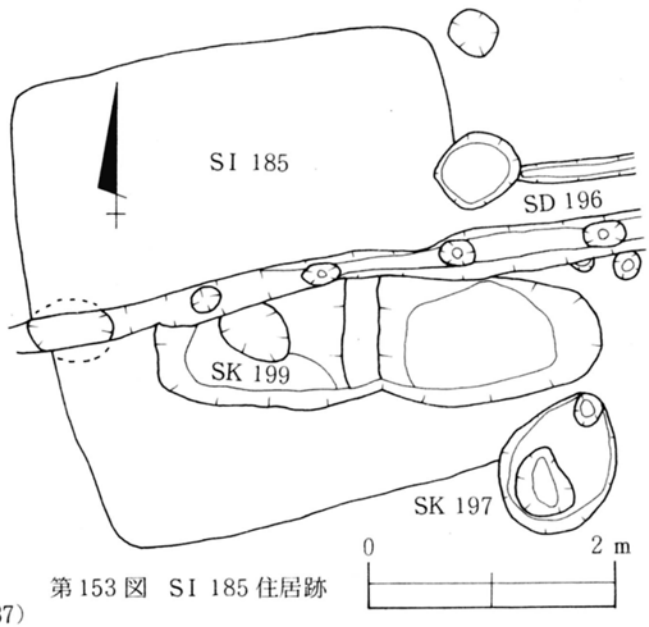
東西約3.6m、南北約3.9mの隅丸方形を呈する。プランのみしかわからず、カマド、柱穴は検出されなかった。本住居跡はSD 196 溝状遺構、SK 197・198・199土壙で切られている。方位は西壁が、北で西に約20°傾いている。なお、出土遺物はなかった。

SI 186住居跡（第154図、図版27）

プランの一部しか検出されておらず、また北東側大部分が調査区外のため不明である。本住居跡はSD 196 溝状遺構で切られている。なお、出土遺物はなかった。



第152図　SI 184住居跡



第153図　SI 185住居跡

SI 187住居跡（第155図、図版36・37）

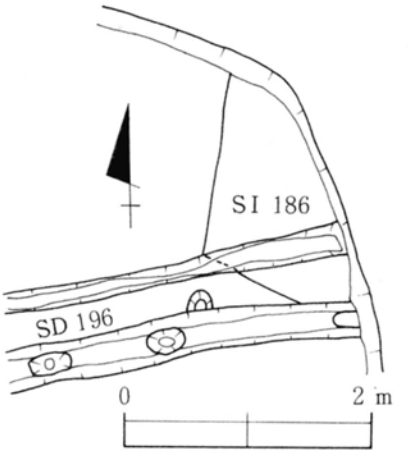
東西約3.5m、南北約3.7mの方形を呈し、壁高は西壁が約40cm、東壁が約20cmを計る。カマドは、西壁北寄りに粘土で構築され、北袖のみが残存する。本住居跡は火災を受けたと考えられ、炭化材の散乱がおびただしい。北・西壁は炭化材の遺存状態が良好で、北壁際下には手斧痕跡が明確に残る壁板の炭化材が横たわり残存していた。西壁は壁板を横に据え、コーナー部は壁板を縦に据え、北壁は約1m、西壁は約70cmのほぼ一定間隔で、径約10cm程の杭で止めてある。壁板を止める杭のピットは明確に確認され、径約20cm～40cm、床面からの深さ約55cm～65cmを計り、杭の表面のみが炭化し、芯部は腐朽し空洞となっていた。東側中程には径約60cm程のピットがみられる。SI 191住居跡と重複関係にあり、本住居跡が新しい。方位は西壁が南北を指している。

SI 187 住居跡出土遺物（第156、157図、図版93、94）

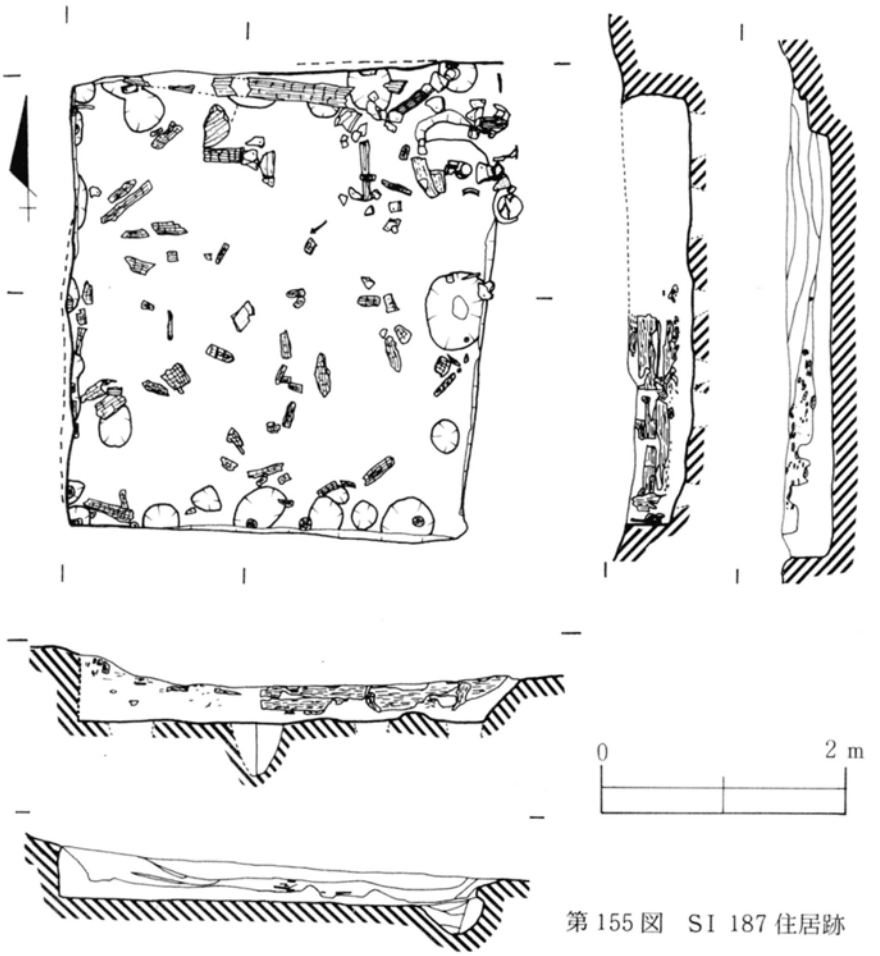
土師器、須恵器、砥石、土錘、刀子、鉄鏃、浮石、平瓦（埋土）等が出土した。

（埋土出土）

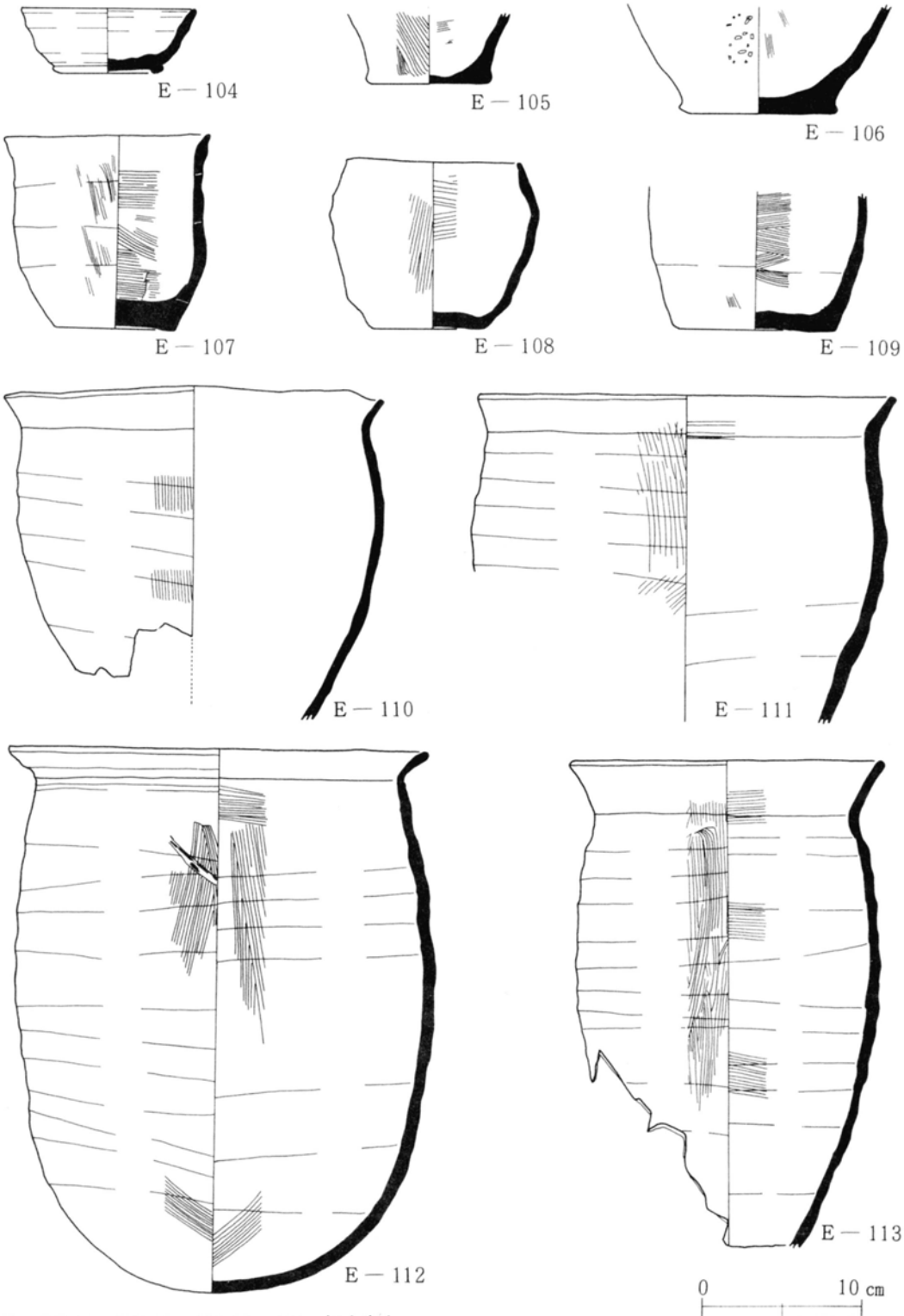
E－105、E－109、E－111、E－113は土師器甕である。E－105は底部。E－109も底部で、ゆるく内湾しながら立ち上る。二次火熱を受け、外面の器壁は剝落し、部分的にカキ目が認められる。内面は横位方向にカキ目を施す。E－111は外面が縦位方向及び斜位方向にカキ目を施し、内面は横位方向にカキ目を施す。焼成良好で、煤状炭化物の付着がみられる。E－113は外面が縦位方向のカキ目、内面は横位方向のカキ目を施す。輪積み痕が明瞭に観察される。淡黄色を呈し、焼成良好である。E－114は上部に穿孔して携帯用にした砥石である。4面使用しておりスベスベしている。



第154図　SI 186 住居跡



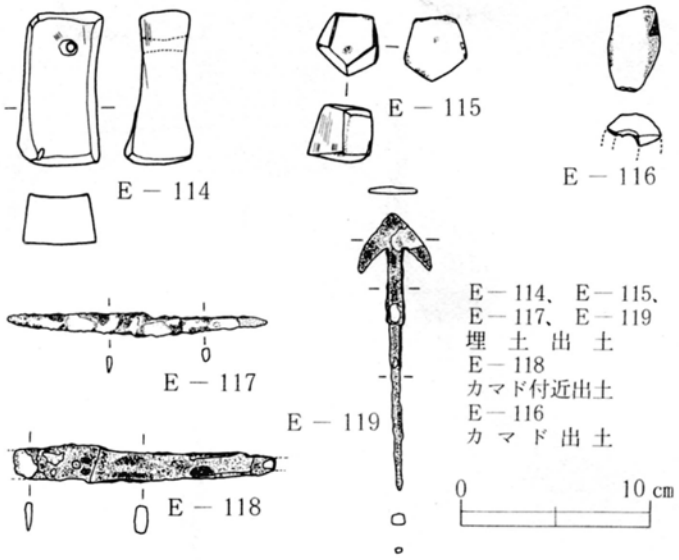
第155図　SI 187 住居跡



E — 105 E — 109 E — 111 E — 113　埋土出土
E — 104 E — 106 E — 107 E — 110　カマド付近出土
E — 108 E — 112　カマド出土

第156図　SI 187 住居跡出土遺物

石質は緑色凝灰岩である。E－117は刀子である。区は不明で、銹化が著しい。E－119は鉄鏃で、全体の形成を残す有茎鏃である。身は三角形状を呈し偏平で、茎は長く断面は楕円形である。銹化が著しい。



第157図　SI 187住居跡出土遺物

（カマド付近出土）

E－106、E－107、E－110は土師器甕である。E－106は底部で、胎土に小石粒が多量に混入しており、外面は小石粒が剝れ落ちたと思われる痕跡がみられ、又、小石粒が器面に露出している。内面はカキ目がみられるが良く研かれている。黒褐色を呈し、焼成良好で、煤状炭化物の付着がみられる。E－107は小型で底部の器肉が厚く、体部は良く立ち上り、口縁部はゆるく外反する。外面は縦位方向のカキ目、内面は横位方向のカキ目を施す。外面の器壁は、全体的に強い火熱を受けて剝落している。色調は外面が赤橙色、内面が黒色及び灰黄色を呈し、焼成はやや弱い。E－110は体部が丸味をもって立ち上り、頸部がゆるく外反する。外面の器壁は、全体的に剝落し、一部分縦位方向にカキ目が認められる。色調は淡黄色及び暗褐色を呈し、胎土に小石粒が多量に含まれる。焼成は良好で、煤状炭化物の付着がみられる。E－104は須恵器台付坏。底部切り離しは回転ヘラ切り、高台を貼り付けた後に周縁部にナデを行う。二次火熱を受けたのか内外面に黒色部分がみられる。青灰色を呈し、焼成良好である。E－118は刀子の茎部及び刀身の一部である。区は棟区で銹化が著しい。

（カマド出土）

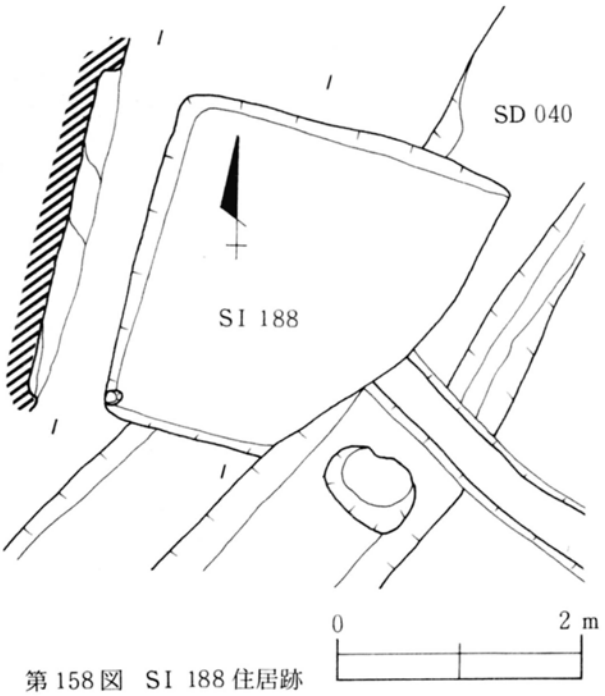
E－108はカマド中から出土した小型の土師器甕である。底部より内湾して立ち上り口縁部に至る。外面が縦位方向のカキ目、内面は横位方向のカキ目を施し、口縁部は横ナデを行う。外面の器壁は、全体的に強い火熱を受けて一部剝落している。淡黄色を呈し、焼成は良好である。E－112はカマド北袖に使用された土師器甕である。底部が砲弾型を呈し、内湾気味に立ち上り、頸部が「く」の字状に強く外傾する。体部外面は縦位方向のカキ目、底部は不定方向のカキ目を施し、体部内面上方は横位方向のカキ目、中央部は縦位方向のカキ目、底部は不定方向のカキ目を施す。口縁部内外面は横ナデを行う。胎土、焼成共に良好で、輪積み痕が明瞭に観察できる。E－116は土錘である。

SI 188 住居跡（第158図、図版38）

南北約2.74ｍ、東西は東側がSD 040 溝跡で切られているため不明であるが、方形を呈すると思われ、壁高は約15㎝を計る。カマドは検出されなかった。柱穴は南西コーナー隅に1個検出されたが他には認められない。方位は西壁が、北で東に約13°傾いている。

SI 188 住居跡出土遺物

土師器甕の破片が埋土より数点出土したが、図示しえなかった。



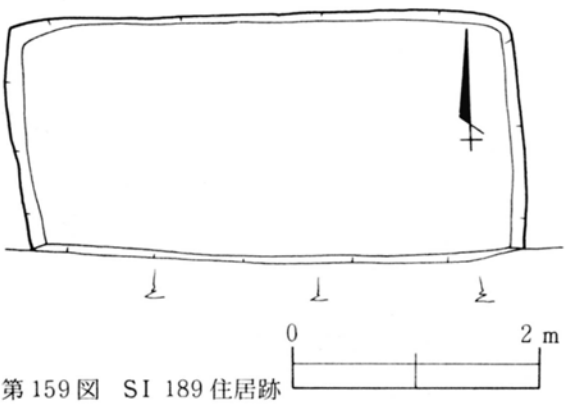
第158図　SI 188 住居跡

SI 189 住居跡（第159図、図版26）

東西約4.16ｍ、南北は不明であるが調査部分から考えて方形を呈すると思われる。カマド、柱穴は検出されず、SD 194溝跡で切られている。方位は西壁がほぼ南北を指している。

SI 189 住居跡出土遺物

須恵器の破片が埋土より数点出土したが、図示しえなかった。



第159図　SI 189 住居跡

SI 190 住居跡（第160図）

SI 191 住居跡を掘り下げていく段階で検出した。カマド両袖が一部残存するのみで遺存状態も良くない。住居跡のプラン等については不明である。

SI 190 住居跡出土遺物（第161図、図版94）

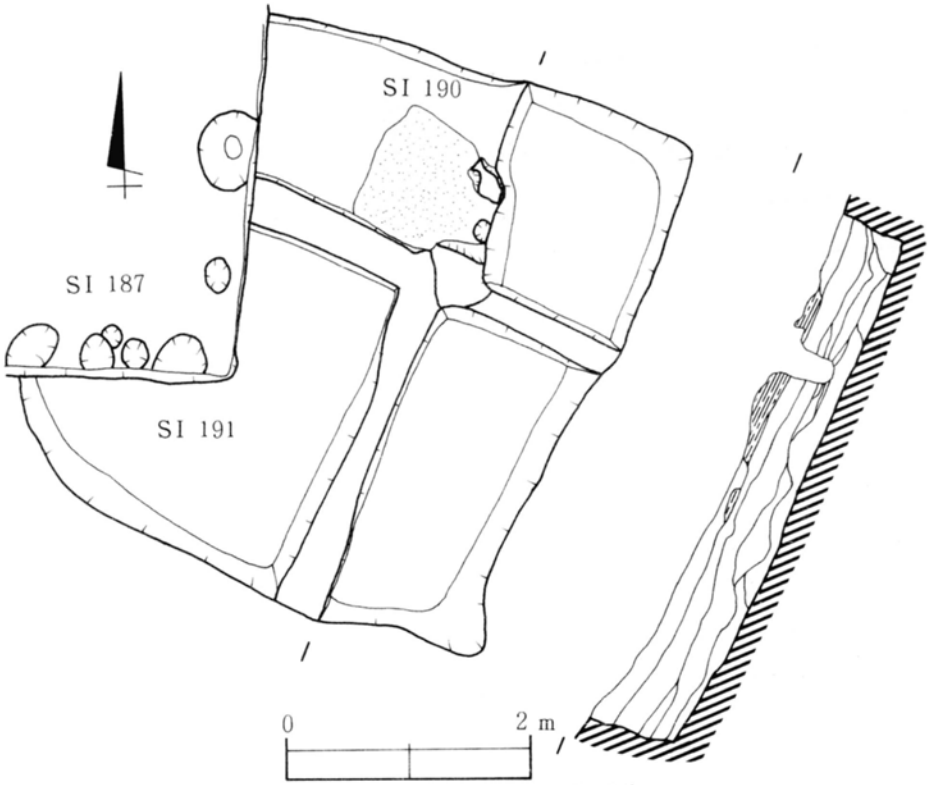
土師器、須恵器等が出土した。

（カマド出土）

E－121は擦文式土器と酷似する遺物で、本遺跡に於いては1点のみの出土である。E－122は口縁部から頸部にかけて段を有する土師器甕である。E－120は須恵器坏の底部で、切り離しは回転糸切り、無調整である。灰色を呈し、胎土に小石粒を少々含み、焼成良好で、火ダスキがみられる。

SI 191 住居跡（第160図）

西壁はSI 187 住居跡で切られており、南北約4.7ｍを計り不整方形を呈する。壁高は約70㎝を計り、上面にはSI 190 住居跡のカマドが検出された。周溝、柱穴、カマドは認められない。方位は、

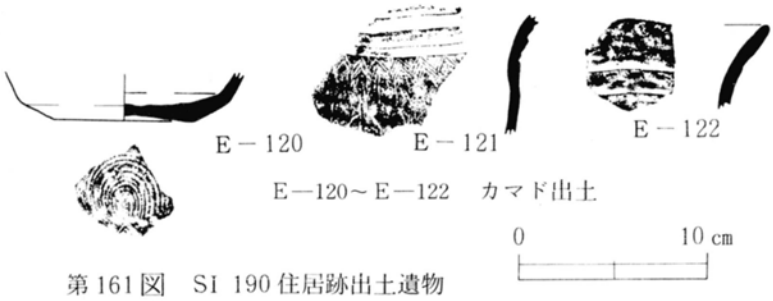


第160図　SI 190・191住居跡

東壁が北で東に約20°傾いている。

SI 191住居跡出土遺物

土師器甕の破片が埋土より数点出土したが、図示しえなかった。



E—120～E—122　カマド出土

第161図　SI 190住居跡出土遺物

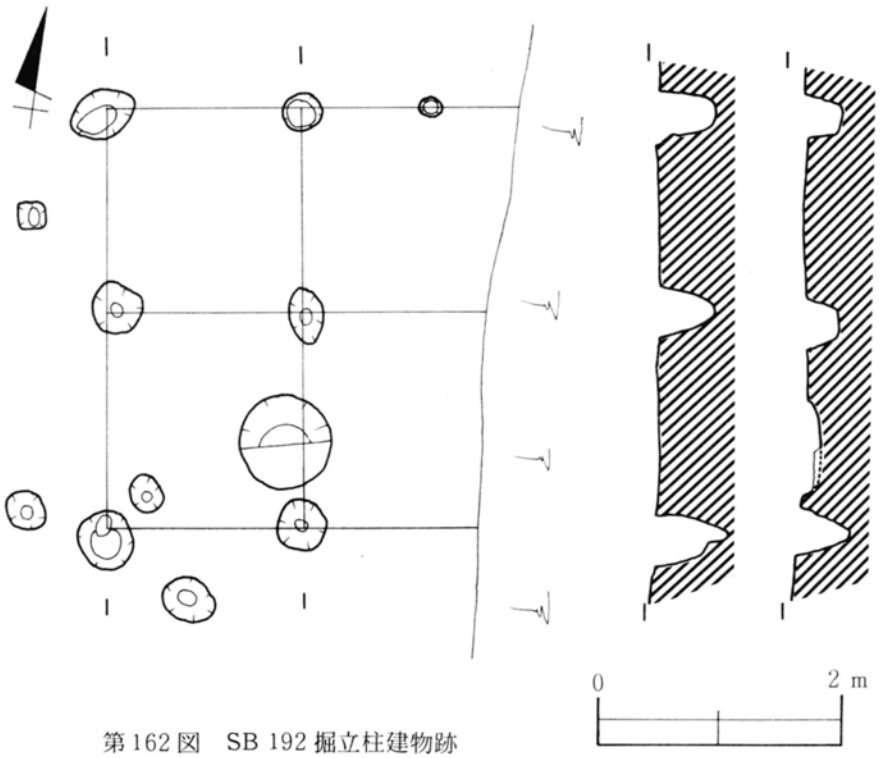
SB 192掘立柱建物跡（第162図、図版41）

東側は調査区外のために、建物規模は不明である。総柱建物跡で、柱穴は径35cm～40cm、深さ30cm～60cmを計る。柱アタリは確認できなかった。SI 183住居跡と重複しており、西面側柱列中間の柱穴は、カマド除去後に検出した。

SD 193・195溝状遺構（第105図、図版40）

SD 193・195溝状遺構は一連のもので、層を掘り下げる段階で若干位置がずれて検出された。幅は約20cm～40cm、深さ20cm～30cmを計り、約2m間隔で柱穴が認められた。柱穴は径約20cm、深さ約40cmを計り、柱アタリはほとんど確認できなかった。本溝状遺構は住居群を取囲むような状態で検出され、調査区外である東側に延びる。

なお、遺構状況から思考して柵列の可能性が強い。



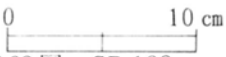
第162図　SB 192 掘立柱建物跡

SD 193 溝状遺構出土遺物（第163図、図版94）

埋土出土の内黒土師器坏である。体部外面中央部に段を有し、対応する内面に軽いくびれが認められ、丸底を呈する。外面は段を境にして上方が横ナデ、下方及び底部はヘラミガキを施す。内面はヘラミガキを施す。胎土、焼成共に良好である。

E－123　SD 193 出土

E－124　SD 194 出土



第163図　SD 193・195 溝状遺構出土遺物

SD 195 溝状遺構出土遺物（第163図）

底部切り離しは回転ヘラ切り、無調整の須恵器坏である。青灰色を呈し、胎土に砂粒、小石粒を多量に含み、焼成良好である。

SD 194 溝状遺構（第105図、図版40）

SD 193 溝状遺構の南側約２ｍを並行して走る。柱穴は部分的にのみ検出された。SD 193・195 溝状遺構と同様の性格をもつと考えられるが、南側を画したかについては判然としない。

SD 196 溝状遺構（第105図）

３条検出され、重複がみられる。幅約20cm～40cm、深さ約20cmを計り、１条には不定間隔に径約20cm、深さ約30cmの柱穴が検出された。

SK 197 土 壙（第164図）

楕円形を呈し、ピット状に２ケ所落ち込む。深さは約30cm、北側が約15cmを計る。

SK 198・199 土 壙（第164図）